

少虜汝作ル所ノ屋汝自ラ居レト劔ヲ按シ弓ヲ  
 彎キ追ツテ屋ニ入ラシム兄猥逃ルルコト能ハ  
 ズ機ヲ踏ンテ壓死ス即チ其屍ヲ戮ス帝遂ニ進  
 ンテ八十梟等ヲ討タントス因ツテ諸神ヲ丹生  
 川上ニ祭り始メテ嚴菑ヲ設ク時ニ道臣ニ命ジ  
 テ曰ク我レ高皇產靈尊ヲ祭り汝ヲ用ヰテ齋主  
 ト爲サントスト授クルニ嚴媛ノ號ヲ以テス帝  
 親ラ兵ヲ勒シテ八十梟帥ヲ國見岳ニ討ツテ之  
 チ斬ル餘黨未ダ平ガズ密ニ道臣ニ命ジ大來目  
 チ帥ヰテ之ヲ討タシメ授クルニ方略ヲ以テス  
 道臣窟室ヲ忍阪ニ穿チ虜ヲ誘ツテ宴ヲ設ケ勇  
 士ヲ撰ンテ虜ト雜居セシメ之ヲ警メテ曰ク酒  
 酣ナルニ及ンデ我起ツテ歌ハン汝等之ヲ機ト  
 シ發セヨト既ニシテ群虜沈醉道臣起ツテ歌フ  
 勇士應ニ應ワテ劔ヲ拔キ一時ニ擊ツテ之ヲ殺

ス復タ遺類ナシ一軍大ニ喜ビ天ヲ仰ギ大笑シ  
 歌ツテ曰ク「伊弉波像、伊弉波像阿阿時夜塙、  
 伊弉儂而毛阿誤豫伊弉儂而毛阿誤豫」、ト後世  
 來目ノ歌ニ大笑ヲ閔スル者ハ之ニ因ツテナリ  
 又歌ツテ曰ク「愛瀨詩鳥儂昆利、毛々那比苦、  
 比苦破易陪廻毛、多牟伽毘毛勢儂」ト其唱フ所  
 ノ諸歌ハ密旨ヲ承ケテ歌フナリ其諷歌例語ヲ  
 用ヰテ其功ヲ濟スヲ得倒語ノ用此ヨリ始マル  
 ト云フ帝位ニ檀原宮ニ即クニ及ンデ道臣來目  
 部ヲ率ヰテ富門ヲ護衛ス明年帝功ヲ論シテ宅  
 地ヲ築阪邑ニ賜ヒ以テ之ヲ寵異ス大來目ヲシ  
 テ畝傍山ノ西ニ居ラシム後來目邑ト號ス詔シ  
 テ道臣ノ忠勇ヲ賞シ世世軍事ヲ掌ラシム。

みつぐりけんぼ 笑作阮甫

津山侯ノ侍醫。名ハ虔儒、字ハ座西、紫川ト

號ス。美作ノ人。著書ハ「外科必讀」、「産科簡  
 明」、「泰西名醫彙講」、「知生鏡原」等、及ビ命ヲ  
 奉ヲテ述ブル所ノ書「海上砲術全書」、「日本風  
 俗備考」等二百六十餘卷又「泰西春秋」、「泰西  
 大事策」、「泰西史影」、「西史外傳」、「八紘通  
 誌」、「八紘勝覽」等ノ諸篇。

みづたにゆうきん 水谷雄琴

儒者。備中ノ人。大坂ニ住シ、易說ヲ以テ教  
 授ス。文化ノ初年歿。著書ハ「周易折衷要削」、  
 「周易衡」、「周易聚象徴」、「周易正字考」、「定本  
 洛新說」、「同國字說」、「非易學啓蒙」、「易占  
 通」、「易占的」、「歷代占例考」、「中華龜卜考」、  
 「日本龜卜考」ナド。

みづのゑぢせんのかみ 水野越前守

徳川幕府ノ老職。名ハ忠邦。人ト爲リ峻嚴、十

二代將軍家慶ニ信任サレ其施爲ヲ專ニシ是ニ  
 於テ越州力ヲ奮ヒ大改革ヲ行ヒ以テ流弊ヲ矯  
 正ス夫ノ將軍家日光社參ノ大禮ノ如キ三世將  
 軍以來ノ廢典ヲ舉ゲ其功ヲ賞セラレテ金鷹ヲ  
 賜ハルニ至ル之ヲ天保年間ノ改革ト謂フ而シ  
 テ其改革多端ノ中或ハ枉ヲ揉メテ直ニ過ギ民  
 ノ之ヲ便トセザル物無キニアラズ是レ一ハ其  
 使役ニ供スル人物ノ阿意逢迎ノ爲メニ誤リシ  
 モノナリト云フ嘗テ烈公ノ水戸ニ在ツテ諸政  
 チ改革セントスルヤ先ツ側用人藤田虎之助チ  
 シテ江戸ニ出テ十三條ノ伺チ爲サシム是ニ於  
 テ虎之助越州ノ邸ニ至リ公命ヲ傳ヘテ謁ヲ請  
 フ越州公務ノ執掌ナレハ暫ク待テヨトテ書院  
 ニ扣ヘシメ暫クアツテ越州來リ見侍臣襖ヲ開  
 ケバ衣裳整然トシテ直ニ虎之助ノ前ニ坐シ相



距ル纒ニ三尺許ニシテ一拜アツテ水戸殿御安  
 泰日出度今日御用ノ由何事ナルヤト問ハレタ  
 レハ虎之助頓首シテ曰ク寡君國政ヲ改正スル  
 ナ以テ豫メ台命ヲ請ケント欲ス越州曰ク善シ  
 之ヲ陳セヨト是ニ於テ虎之助先ツ一案ヲ提シ  
 テ曰ク此事請願ス可キヤ如何越州答ヘズ其次  
 ナ問フ虎之助更ニ一案ヲ陳シテ曰ク此事官家  
 ニ制規アリ哉越州答ヘズ更ニ其次ヲ問フ虎之  
 助又一案ヲ陳ズルニ越州答ヘザル初ノ如ク其  
 次ヲ問ヒ積ンテ十三條ヲ盡スニ至リ越州猶ホ  
 其次ヲ問フ虎之助請フ所此十三條ニ止ルト告  
 ルニ及ビ越州始メテ答ヘテ曰ク第何條ハ請願  
 シ許可ヲ得テ後ヲ從事ス可シ第何條ハ幕府ノ  
 制規ニ觸ル別ニ思考シテ再ビ上申ス可シ第何  
 條ハ請願ヲ煩ハスニ及バズ杯ト虎之助カ陳ヘ

タル十三條初ヨリ次第順序ヲ追ツテ一モ錯ラ  
 ズ明瞭ニ答ヘテ後ヲ曰ク今日ハ好キ折柄旁緩  
 話モ致シタク存ズレドモ公見ノ者重沓シ其暇  
 無ケレバ請フ免サレヨ水戸殿ヘ宜敷ト云放チ  
 俄然坐チ立ツテ入ル其風采實ニ人ナシテ覺エ  
 ズ肅然タラシメ虎之助ト雖モ頓ニ屏息セリト  
 天保十四年閏九月十三日事ヲ以テ職ヲ免セラ  
 ル是ヨリ先キ將家平生ノ膳部ニ養魚ヲ侑ムル  
 ニハ必ズ嫩薑芽ヲ添フルヲ以テ例トセシガ特  
 ニ其美ヲ覺ユル程ニモアラチハ之ヲ嘗ル事モ  
 アリ又嘗メズシテ徹スル事モアリシ一日將軍  
 膳ニ就キ炙魚ヲ御シ俄ニ嫩薑ヲ思出サレ給仕  
 ノ者ニ向ヒ取落セルヤト尋チラレシニ其者答  
 ヘテ何月日ノ發令ニ自今嫩薑禁示ノ目アリシ  
 ニ因リ農家ニテ其令ヲ守リ作り出サザルナリ

ト答ヘタレハ將軍頭ヲ傾ゲ不審シテ蔬菜菓瓜  
 ノ類其時ニ及バザル者ヲ強イテ造ラハ一ハ以  
 テ奢侈ノ漸ヲ開キ一ハ以テ有生ニ益ナケレハ  
 之ヲ禁ズル事然ル可シトノ越前ガ建議ニ因リ  
 其道理ニ當レルヲ以テ之ヲ許可セシト雖モ嫩  
 薑ノ如キ膳味ヲ助クル者マデ禁絶セシトハ思  
 ハザリシト申サレタルヲ姦人輩聞知ツテ此回  
 ノ諸政大改革ハ皆將軍ノ意中ヨリ出デタルニ  
 非ズ中間ニ於テ越州取計ヲヒ將軍知ルニ及バ  
 ザル事柄モアリタルヲ測知シ其隙ニ乘シテ之  
 ナ離間スルヲ得ベキ兆ヲ始メテ發見シ其後ニ  
 代ラントスル人ニ附和スル者陰ニ考案シ將軍  
 日光社參越州扈從不在ノ日ヲ以テ其時トナシ  
 充分ニ之ヲ僞スノ策ヲ構成シ其歸城ニ至ツテモ  
 猶ホ之ヲ發セズ陽ニ其功ヲ褒賞シテ之ヲ懈ラ

シメ然ル後機ヲ相シテ之ヲ行ヒシカハ其計策  
 十分ニ行ハレ遂ニ此ニ至レリ十五年六月廿一  
 日復タ老職トナル世或ハ水戸烈公ノ譴責ヲ幕  
 府ニ得タルハ越州在勤ノ日ニ在リトセリ然レ  
 共是レ誤謬ノ說ナリ越州ハ前ニ掲グル如ク天  
 保十四年ニ職ヲ免セラレ而シテ烈公隱居ノ年  
 ハ其翌十五年五月六日ニ在レハ越州ノ後職ヲ  
 襲ゲル阿部伊勢守ノ時ニ在ルコト知ルベキナ  
 リ。

みながはきん 皆川淇園

儒者。名ハ愿、字ハ伯恭。又有斐齋、筠齋ノ號  
 アリ、文藏ト稱ス。京師ノ人。生レテ穎異四  
 五歳ニシテ能ク字ヲ識ル其父試ミニ杜甫秋興  
 ノ詩八首ヲ書シテ之ヲ授ク日ナラズシテ誦チ  
 成ス父之ヲ異トシテ書ヲ讀マシム一過スレハ



即チ記ス父其學ヲシテ大成セシメント欲シ經史百家ノ書其需メニ隨ツテ之ヲ給ス又當時ノ廻儒耆老ト交通往來セシム年甫メテ十五韓客ヲ見テ席上倡和ス詩句甚ダ工ナリ韓人歎異遂ニ名ヲ揚シ長ズルニ及ンデ恒ニ謂フ字義ヲ知ラザレハ則チ文、作ルベカラズ書解スベカラズト是ヨリ思ヒテ字書ニ潛メ又古人用字ノ例ヲ類集シ之ヲ象形ニ求メ或ハ聲音ニ徵シ始メテ名物ノ義ハ聲音ニ生シ聲音ハ易經ニ本ツクヲ知ル乃音記衆式ノ法ヲ定メテ曰ク此ヲ以テ名物ノ義ヲ聞カバ則チ精微ノ極ト雖モ亦以テ通曉シ得ベシ字義既ニ通シ天理始メテ明ラカニシテ然ル後古人ノ書ヲ讀メバ則チ明白ナルコト日ヲ揭グルガ如シト是ニ於テ心ヲ著述ニ用フ或ハ義ヲ思ヒテ得ザレハ則チ終宵寢チズ

之ヲ六語經孟左國等ノ書ニ徵シテ旁引曲證以テ孝悌忠信仁義道德ノ諸名物ヲ審釋シテ名疇六篇ヲ作ル又字義ヲ推シテ文理ヲ晰カニシ章句ヲ追ツテ篇次ヲ釋チ述作ノ本旨ヲ原チテ易、詩、書、儀禮、周禮、學、庸、語、孟ノ釋解ヲ作ル遂ニ以テ一家ノ學ヲ立ツ弟子門籍ニ登ルモノ凡ソ三千餘名平日人ヲ待ツニ貴賤一ノ如ク一室ノ内ニ在ツテ迎ヘズ送ラズ臺閣公卿諸侯中弟子ノ禮ヲ執ルモノ衆シ而シテ平戶侯最モ敬重スト云フ淇園傍ヲ書畫ヲ能クヌ畫ハ圓山應舉ニ學ンデ洛ニ其妙所ヲ得山水人物花鳥ニ長シ特ニ設色ヲ工ミニス其山水ノ密ナル物ハ應舉ニ劣ラズ世人甚ダ稱譽ス文化二年學堂ヲ建テ弘道館ト云フ晚年書畫大ニ進ム同四年五月十六日歿。年七十四。京都京極阿彌陀寺ニ葬

ル。私置シテ弘道先生ト云フ。淇園人ト爲リ温厚沈毅物ヲ容ルルニ寛ニシテ事ヲ行フニ敏ナリ名節ヲ立テズ矜飾ヲ事トセズ父母ニ事ヘ弟妹ヲ待ツ皆ソノ歡心ヲ得博學淹通經學文章ヲ以テ名海内ニ振ルフ然レドモ晩年ニ迄ソテ豪奢ヲ事トシ甚ダ酒食ヲ嗜ミ絲竹ヲ愛シ時ニ歌妓ヲ携ヘテ鴨河ノ上ニ縱飲シ又詩文書畫ヲ乞フ者アレハ則チ其人ヲ擇マズ貨賂ニ隨ツテ之ニ應ズ故チ以テ時論或ハ之ヲ卑シム。著書ハ前ニ舉グル所ノ外「易原」、「易學開物」、「耆卜著誤辨正」、「詩經助字法」、「左傳助字法」、「史記助字法」、「老子釋解」、「莊子釋解」、「列子釋解」、「荀子篇旨」、「學問舉要」、「虛字解」、「同後篇」、「實字解」、「習文錄」、「同後篇」、「同三篇」、「唐詩通解」、「唐詩所絕句選」、「杜律評註」、「淇

園詩話」、「同詩集」、「同文集」、「同文訣」、「同答要」、「唱和吟」、「醫案類語」、「歐蘇文彈」、「王道毘尺牘注」、及ビ「虛字證解」ナド。  
**みなののあきい 源顯家**  
 大納言親房ノ長子。元應嘉曆ノ間從五位上ニ叙シ、累進シテ侍從左近衛少將ヲ兼ヌ。元弘元年參議ニ任シ左近衛中將ト爲ル時ニ年十四是春後醍醐帝藤原公宗ノ北山莊ニ幸ス顯家陵王ヲ舞フ容貌閑雅俯仰節ニ中ル帝物ヲ賜フテコレヲ賞ス三年彈正大弼ヲ兼ヌ帝天下ノ新ニ定マレルヲ以テ東陞ヲ鎮撫セシコトヲ思ヒ顯家ヲ以テ陸奥守ト爲シ出テテ陸奥出羽ヲ鎮セシム辭スルニ吏途將率ノ事ニ慣レザルヲ以テス許サレズ顯家乃チ義良親王ヲ奉シテ行ク居ルコト二月兩國率服ス建武元年功ヲ以テ從二



位ニ叙シ二年鎮守府將軍ヲ兼ヌ詔シテ義良親王ヲ奉ジテ新田義貞ト足利尊氏ヲ鎌倉ニ攻メシム顯家兵ヲ國內ニ集ム時ニ發スルコト能ハズ乃チ見兵ヲ率キ轉戦シテ前ム延元元年鎌倉ニ抵ル尊氏既ニ己ニ西上ス時ニ東北ノ諸將多ク來リ屬ス兵凡ソ五萬尊氏ヲ尾シ晝夜兼行シテ近江ニ至ル帝船七百隻ヲ遣ハシテ顯家ヲ迎フ顯家湖ニ泛ンテ延曆寺ニ至リ新田義貞ト園城寺ヲ攻メテ之ニ克チ遂ニ諸將ト道ヲ分ツテ尊氏ヲ攻ム顯家二萬人ヲ率キテ栗田口ヨリ火ヲ放ツテ進ム尊氏十數萬人ヲ率キテ之ヲ禦ク戰數合顯家ノ兵善ク戰フ尊氏破ル能ハズ竝ビニ解イテ憩フ義貞因ツテ兵ヲ縱ツテ突撃ス尊氏敗走ス又兵ヲ豐島河原ニ出シ再ビ尊氏ヲ攻ム顯家先登ス諸將繼イテ進ミ大イニ之ヲ敗ル

尊氏西走ス乃チ義貞ト振旅シテ京師ニ旋ル右衛門督檢非違使別當ヲ兼ヌ時ニ尊氏ノ黨與四方ニ蜂起ス是ニ於テ顯家義良親王ヲ奉ジテ復タ陸奥ニ如ク詔シテ常陸下野二國ヲ併セ管セシム尋イテ鎮守府將軍ニ任シ權中納言ニ拜セラル進ンテ相馬胤顯ヲ法華堂ニ相馬光胤ヲ小高城ニ攻メテ之ヲ斬ル二年春陸奥ノ將士多ク尊氏ニ應ジテ顯家ヲ攻ム顯家戰ツテ利アラズ結城宗廣ト義良親王ヲ奉ジテ靈山城ヲ保ツ敵又來リ圍ム時ニ帝顯家ヲシテ京師ニ赴キ足利直義ヲ討タシム詔書到ル詞辭甚ダ懇篤顯家之ヲ衆ニ示ス衆ミナ感激ス因ツテ靈山ヲ發シテ白川關ニ至ル管内ノ兵士來リ赴ク者幾十萬進ンテ宇津宮ニ至リ兵ヲ駐ムルコト數日ニシテ發ス足利義詮ノ兵利根川ヲ扼ス會霖雨水漲ル

衆涉ルコト能ハズ顯家ノ部下齋藤實永及ビ弟豐後次郎流レテ亂ツテ進ム餘衆隨ヒ進ム敵之ヲ中流ニ防ガントシテ溺死スル者算ナシ顯家進ンテ相模ニ入り北條時行新田義貞ト鎌倉ヲ攻メテ義詮ヲ走ラス三年兵ヲ率キテ京師ニ赴ク沿道ノ敵軍往往起ツテ後ヲ躡ム顯家乃チ陣ヲ青野原ニ駐ム會尊氏高師泰ヲ遣ハシテ黒地川ニ拒ガシム土岐頼遠等又至ル顯家前後ニ敵ヲ受ケ道ヲ伊勢ニ取ツテ將ニ吉野ニ赴カントス師泰追ツテ雲津河ニ至ル擊ツテ之ヲ卻ケ兵ヲ奈良ニ休ム尊氏桃井直常ヲ遣ハシテ之ヲ邀フ顯家ノ兵疲レテ戰フコト能ハズ潰エ走ル顯家河内ニ逃レ散卒ヲ收メテ男山ニ據ル軍勢復タ振フ尊氏高師直ヲ遣ハシテ之ヲ攻メシム敵軍利アラズ師直河内攝津ノ官軍顯家ト犄角ノ

勢ヲ爲サンコトヲ慮リ重兵ヲ留メテ城ヲ圍マシメ身天王寺ニ陣シテ援路ヲ絶ツ顯家城ヲ出デテ與ニ戰ツテ大ニ敗レ二十餘騎ヲ從ヘテ將ニ圍ヲ突キ吉野ニ奔ラントシテ自ラ接戦シ竟ニ陣ニ歿ス。時ニ年二十一。從一位右大臣ヲ贈ラル。

みなもとのかねなが 源兼長  
元ノ名重成。備後守長成ノ子。和歌ヲ以テ源頼家源頼實等六人ヲ稱シテ和歌六黨ト爲ス。

みなもとのさねとも 源實朝  
頼朝ノ次子。頼家ノ同母弟。小字ハ千幡。建仁三年九月從五位下ニ叙シ征夷大將軍ニ拜セラル十一月元服ヲ加フ時ニ年十二朝廷名ヲ實朝ト賜フ武藏守平賀朝雅ヲ遣ハシテ京師ヲ衛ラシム家人ニ西國ノ地頭ヲ帶ブル者ハ皆之ニ



從フ使ヲ遣ハシテ家人ノ京畿ニ在ル者ヲ安撫  
シ諫スニ忠貞ヲ效シテ貳心ヲ懷カザルヲ以テ  
シテ誓書ヲ徵ス是月右兵衛佐ニ任ズ十一月關  
東諸國ニ今年ノ租ヲ減シテ民戸ヲ休息セシム  
十二月令ヲ下メシテ土庶ノ訴訟ハ狀ヲ獻ズル  
ノ後十三日ヲ過ギテ裁斷ヲ加ヘザレバ吏ヲ緩  
怠ニ坐セシム元久元年二月令ヲ莊園ニ下シテ  
諸務ハ悉ク賴朝ノ舊規ニ遵ハシム三月右近衛  
少將ニ任ズ是月平盛時等伊賀伊勢ノ間ニ起リ  
鈴鹿ノ關ヲ塞ギテ行旅ヲ遏絶ス守護首藤經俊  
逃亡ス平賀朝雅討ツテ之ヲ滅ボス朝雅伊勢守  
護ニ補セラル七月賴家伊豆ニ薨ズ家人密カニ  
亂ヲ起サンコトヲ謀ル北條義時金窪行親等ヲ  
遣ハシテ盡ク之ヲ殺サシム二年正月右近衛權  
中將兼加賀介ニ遷ル六月北條時政畠山重忠ヲ

讒シ兵ヲ遣ハシテ討ツテ之ヲ殺ス六月重忠ノ  
親黨ノ鄉邑ヲ以テ功臣ニ分與ス是ヨリサキ實  
朝時政ノ家ニ在リ時政ノ妻牧氏實朝ヲ弑シテ  
婿平賀朝雅ヲ立テント圖ル政子諸將ヲ遣ハシ  
實朝ヲ取ツテ義時ノ宅ニ遷ス時政聚ムル所ノ  
兵士皆去ツテ實朝ニ從フ翌日時政ヲ北條ニ幽  
シ義時ニ命ジ代ツテ軍政ヲ輔ケシメ在京ノ諸  
將ニ令シテ就イテ朝雅ヲ京師ニ殺サシム建永  
元年正月令ヲ諸將ニ下シテ賴朝ノ時ニ在ツテ  
地頭職ヲ授クル者ハ大罪ヲ犯スニ非ザレハ輒  
ヲ奪フコトヲ得ザラシム七月是ヨリ先朝雅伊  
勢ノ亂ヲ平グルヤ近境ノ將士ニシテ徵ニ赴ム  
カザル者ハ皆地頭職ヲ褫フ此ニ至ツテ各緣由  
ヲ訴フ徵驗アル者ハ還付ス正元元年正月從四  
位上ニ叙セラル三月武藏ノ地頭ヲシテ草莽ヲ

開墾セシム三年四月從三位ニ進ム建曆元年正  
月正三位ニ叙セラレ美作權守ヲ兼ヌ二年十二  
月從二位ニ進ム建保二年閑院ノ宮ヲ修スルノ  
勞ヲ以テ正二位ニ至ル泉親衡北條義時ヲ誅セ  
ント圖ル事覺レテ逃亡ス五月和田義盛義時ヲ  
滅ボサント圖リ兵ヲ舉グテ幕府ヲ圍ム義時大  
江廣元ト實朝ヲ奉シテ法華堂ニ避ケ北條泰時  
足利義氏ヲシテ之ヲ禦ガシム義盛敗死シ黨與  
悉ク平ラグ二年夏早ス實朝齋戒シテ法華經ヲ  
轉讀ス既ニシテ雨フル十一月賴家ノ子僧榮實  
ヲ殺ス三年七月鎌倉商賈ノ員ヲ定ム四年六月  
權中納言ニ任ゼラル七月兼左近衛中將ニ轉ズ  
六年正月權大納言ニ遷ル平正重潛ニ白河ニ居  
テ亂ヲ起コサンコトヲ謀ル後藤基清擊ツテ之  
ヲ斬ル二月實朝屢使ヲ京ニ遣ハシテ左近衛大

將ヲ兼テノ事ヲ請フ廷議賴朝ノ故事ニ遵ツテ  
右ニ擬ス而レドモ其強請セルヲ以テ藤原道家  
ヲシテ左近衛大將ヲ辭セシメ實朝ヲ以テ之ヲ  
兼テシム家臣官ヲ授ケラル差アリ即日使ヲ遣  
ハシ敕シテ左馬寮御監ヲ兼テシム後鳥羽上皇  
常ニ關東ノ權重クシテ制シ難キヲ惡ミ其驕泰  
シテ自ラ斃レンコトヲ冀フ故ニ官階ヲ請フ每  
ニ崇班ヲ授ク多クハ其望ミニ過ク初メ實朝ノ  
大將ヲ求ムルヤ北條義時大江廣元ニ謂ツテ曰  
ク故幕下ハ叙任ニ値フ毎ニ戰兢トシテ辭讓シ  
將ニ以テ慶ヲ子孫ニ延カントス今將軍ハ齡未  
ダ壯ニ至ラズシテ榮進スルコト甚ダ速カナリ  
之ニ加フルニ諸將モ亦京師ニ赴カズシテ坐ナ  
ガラ品階ヲ受ク借ト謂フ可シ僕之ヲ言ハント  
欲スレ共自ラ榮味ニシテ回移スル能ハザルヲ



探ル君何ツ之ヲ言ハザルト廣元曰ク然リ之ヲ  
思フコト日久シ徒マ心ヲ疚マシムルノミ故幕  
下ハ事ニ臨ンテ諮詢ス今ハ即チ然ラズ誠ヲ輸  
スニ由ナシ將軍身ニ勳功ナシ獨リ緒餘ヲ承ケ  
テ諸國ヲ管領スルニ止マラズ中納言中將ニ陞  
ル攝籙ノ子胤ニ非ザレバ此ニ至ル能ハズ崇班  
榮爵ハ盈溢ノ殃ヲ免レズ請フ試ニ從容開陳セ  
ント既ニシテ諫メテ曰ク慶チ子孫ニ延クニハ  
由ツテ來ル所アリ宜シク他官ヲ辭シテ單ニ征  
夷大將軍ヲ庶フベシ稍高年ニ及ババ希クハ大  
將ヲ求メヨト實朝聽カズシテ曰ク言フ所誠ニ  
當レリ然レドモ源氏ノ正統孤危今日ニ極マル  
豈ニ子孫ノ繼承ヲ望ムコトヲ得ンヤ故ニ身崇  
高チ極メテ以テ家聲ヲ顯著セント欲スルノミ  
ト廣元言無クシテ退ク六月拜賀ノ禮ヲ鶴岡社

ニ行フ七月北條泰時、山城行村、三浦義村、  
大江能範、伊賀光宗ヲ以テ待所司ト爲ス十月  
内大臣ニ拜セラル大將ハ故ノ如シ十二月右大  
臣ニ轉ズ承久元年正月大饗ヲ設ク權大納言藤  
原忠信、權中納言藤原實氏等凡ソ姻好アル者  
ハ皆鎌倉ニ來ル拜賀ノ禮ヲ鶴岡社ニ行フ廷臣  
扈從ス隨兵一千騎警衛甚メ盛ンナリ社ノ樓門  
ニ至ツテ隨兵ヲ屏ク獨リ文章博士源仲章劔ヲ  
持シテ從フ禮畢ツテ廷臣ニ揖シテ石階ヲ降リ  
姪公曉ノ爲メニ殺サル年二十八明日勝長壽院  
ノ側ニ葬ル公曉首ヲ持シテ遁ルヲ以テ秦公氏  
ニ賜フ所ノ髮ヲ以テ併セ藏ム家臣悲傷シテ披  
剃スル者百餘人初メ拜賀ノ時日ヲ擇ムヤ二十  
七日戌ノ刻ヲ以テ期ト爲ス廣元曰ク暮夜ハ虞  
ナキニ非ズ宜シク白晝ヲ以テ儀ヲ行フベシト

仲章曰ク故事必ズ皆夜ヲ用ユト將ニ出デント  
ス廣元前ニ諫メテ曰ク某平生未ダ涙ノ下ダル  
コトアラザルニ今日進ミ謁シテ覺エズ潜然タ  
リ是必ラズ由アラン在昔先將軍東大寺ノ落慶  
ニ臨ムニ甲ヲ衷ニシテ變ニ備フ宜シク其故事  
ニ倣フベシト仲章曰ク大臣大將ノ重キニ登ル  
未ダ甲ヲ衷ニスル例アルヲ聞カズト實朝遂ニ  
廣元ノ言ヲ用ヰズ秦公氏ヲシテ髮ヲ梳ラシメ  
自カヲ髮ヲ抜イテ之ニ與ヘ戯レテ曰ク是ヲ以  
テ紀念トナセト又庭梅ヲ見テ和歌ヲ作ツテ曰  
ク「出でていなばぬし無さやとどなりぬとモ  
のさばの梅よ春をわするな」ト既ニシテ南門  
ニ至ル鳩鳴ク異常ナリ車ヨリ下ル誤ツテ劍柄  
ヲ折ル人以テ不祥ト爲ス實朝子ナシ義時政子  
ノ意ヲ承ケ諸將ト議シテ左大臣道家ノ子頼經

ヲ奏請シテ主帥ト爲ス實朝資性温雅頼朝猜猜  
ノ後チ承ケテ事實簡ニ從フ故チ以テ將士親  
愛ス然レドモ優柔不斷ニシテ衆心ヲ收執スル  
コト能ハズ常ニ文學ヲノミ好ミテ武事ヲ習ハ  
ズ仲章チシテ史書ヲ講ゼシム又近侍ニ才藝ア  
ル者ヲ選ミ番ヲ結ビテ學問所ニ直シ古昔ノ事  
ヲ語ツテ之ヲ聽カシム和歌ヲ藤原定家ニ學ブ  
著ス所「金塊和歌集」アリ又蹴鞠ヲ好ム實朝少  
ニシテ眞氏ニ依ル請フ所アレバ意チ枉ゲテ之  
ニ從フ是チ以テ義時イヨイヨ政チ擅ニスルチ  
得威權下移シテ禍其端ニ起リ身家保タズシテ  
頼朝ノ業遂ニ衰フ。

みなもとのしたかふ 源順

字ハ具齋。大納言定ノ曾孫。天曆五年順及ビ  
大中臣能宣等五人ニ敕シ昭陽舍ニ就イテ「後



撰和歌集」ヲ撰セシム。世之ヲ梨壺五人ト謂フ。進士ニ第シ勘解由判官ニ任セラル。應和天元ノ間民部大丞下總權守和泉守ヲ歴テ能登守ニ遷ル。嘗テ勤子内親王ノ爲メニ「和名類聚鈔」十卷ヲ著シ、能宣等ト敕ヲ奉シテ「萬葉集訓點」ヲ作ル。永觀元年卒。年七十二。

みなもとのたまたみ 源忠顯

内大臣有房ノ孫。權中納言有忠ノ子ナリ家ヲ六條或ハ千種又禪林寺ト稱ス弱冠ニシテ騎射ヲ好ミ賭博酒色ヲ以テ事ト爲ス有忠絶ツテ子ト爲サズ仕ヘテ左近衛少將ト爲ル後醍醐帝潛ニ笠置ニ幸ス忠顯之ニ從フ笠置陷ルニ及ンテ擒ニセラル帝六波羅ノ南方ニ御ス敵忠顯藤原藤房ヲ放ツテ左右ニ給仕セシム既ニシテ帝ニ從ツテ隱岐ニ適シ帝逃レテ出雲ニ往カントシ

夜行在ヲ出ヅ忠顯從フ路傍ノ民家ヲ叩イテ千波湊ヲ問フ主人帝ヲ熟視シテ對ヘテ曰ク湊ハ此ヲ去ル五十町計リ路多岐ニシテ迷ヒ易シ請フ郷導ヲ爲サント帝ヲ負ヒテ湊ニ到リ舟ヲ求メテ之ニ御セシム舟人モ亦以爲ラク常人ニ非ズト忠顯密ニ之ニ謂ツテ曰ク是ハ乃天下ノ主ナリ急ニ出雲伯耆ノ間ニ至リ形便ノ地ヲ得ント欲スルナリ事成ラハ賞スルニ邑土ヲ以テセント舟人喜ンテ纜ヲ解ク佐佐木清高舸ヲ發シテ進及ス人皆驚愕シテ爲ス所ヲ知ラズ帝舟人ニ謂ツテ曰ク怖ルル勿レ第メ釣ヲ垂レヨ舟人乃チ帝及ビ忠顯ヲ船底ニ匿シ覆フニ乾魚ヲ以テシ柁工水手ヲシテ其上ニ列立セシメ身ハ坐シテ釣リス賊御船ニ上ツテ遍ク索ム舟人徐ムロニ問フテ曰ク公等何チカ索ム賊曰ク主上逃

レ去ル必ズ海中ニ在ラント舟人詒イテ曰ク今夜子ノ刻ニ船アリ港ヲ出ヅ一人ハ冠シ一人ハ烏帽ス管纓ノ客ナリ今行クコト五六里ハカリト乃チ遙カニ指シテ曰ク船猶ホ彼シコニ在リト追兵柁ヲ轉シテ去ル數日ニシテ出雲ヲ經テ伯耆大坂湊ニ到ル忠顯岸ニ登ツテ路人ニ問フテ曰ク此地ニ名ヲ知ラレタル武人アルカト答フルニ名和長年ヲ以テス忠顯使ヲ遣ハシテ其家ニ造リ宣旨シテ委託ス長年即チ兵ヲ起シ帝ヲ奉シテ船上山ニ幸ス軍勢大ニ震フ忠顯功ヲ以テ藏人頭左近衛中將ト爲ル赤松則村六波羅ヲ攻メテ利アラズ忠顯命ヲ奉シテ往イテ援ク路ニ來屬スル者衆シ忠顯衆ヲ特ニ功ヲ專ラニセント欲シテ孤軍進ンテ京師ニ入リ六波羅ノ兵ト戦ツテ利アラズ忠顯兵ヲ率井テ峯堂ニ議

シテ軍ヲ退ケント欲ス兒島高德苦諫シテ之ヲ止ム忠顯怯懼即夜恒良親王ヲ奉シテ男山ニ奔ル時ニ足利尊氏内野ヨリ赤松則村東寺ヨリ京師ニ入ル忠顯亦竹田ヨリ入ッテ戰フ北條仲時時益遂ニ光嚴帝ヲ挾ミテ東ニ奔ル忠顯神鏡ヲ北山莊ニ得テ禁中ニ奉ズ車駕闕ニ歸ル忠顯功ヲ以テ三大國及ビ邑數十所ヲ賜ヒ以テ食邑ト爲シ彈正大弼ト爲リ從三位ニ叙シ參議ニ拜セラル寵渥比ヒ無シ忠顯是ヨリ奢侈度ナシ足利尊氏ノ闕ヲ犯ス忠顯結城親光名和長年等ト之ヲ拒ギテ大ニ勢多ニ戰フ延元元年髪ヲ削ル尊イテ藤原雅忠ト足利尊氏ヲ西坂ニ拒ギ戰ヒ敗レテ死ス。

みなもとのたまたみ 源爲朝

爲義ノ八子。人ト爲リ魁岸奇偉、意氣豪逸、



膂力人ニ過ク。身長七尺バカリ、左手長キコト  
 四寸。最モ射ヲ善クヌ幼ヨリ勇ヲ特ニデ人ヲ  
 凌少年甫メテ十三爲義誨フベカラザルヲ知ツ  
 テ之ヲ鎮西ニ逐フ爲朝豊後ニ居テ鎮西八郎ト  
 稱シ自ラ九國總追捕使トナリ將ニ筑紫ヲ徇ヘ  
 ントス菊地原田ノ諸族兵ヲ聚メテ之ヲ拒ク爲  
 朝婦翁阿曾三郎平忠國ヲ以テ郷導ト爲シ大小  
 二十餘戰シテ城若干ヲ陷ル年十五ニ至ツテ九  
 國ヲ掠奪シ多ク不法ヲ行フ國ヲ擧ゲテ來リ訴  
 フ朝廷爲義ヲシテ之ヲ召サシム至ラズ久壽二  
 年爲義坐セラレテ官ヲ解カル二年太宰府ニ敕  
 シテ爲朝ヲ捕ヘ其黨與ヲ治メシム爲朝既ニ父  
 ノ解官ヲ聞キ曰ク家君我ノ故ヲ以テ罪ヲ獲豈  
 ニ坐シテ開クニ忍ビンヤ我當ニ歸ツテ罪ヲ乞  
 フベシト鎮西ノ兵士從ハント願フ者多シ爲朝

許サズ遂ニ驍勇廿八人ヲ率キテ京師ニ至ル保  
 元ノ亂ニ父ニ從ツテ白河殿ニ至ル左大臣賴長  
 召シテ謀ヲ諮フ爲朝對ヘテ曰ク戰ハ夜戰ニ若  
 カズ臣請フ今夜高松殿ヲ襲ハント賴長用キズ  
 既ニシテ義朝清盛等夜ニ乘シテ來リ襲フ爲朝  
 怒ツテ曰ク臣之ヲ累言ス今果シテ然リト上皇  
 遽ニ爲朝ヲ進メテ藏人ト爲シ以テ之ヲ獎勵セ  
 ントス爲朝曰ク敵兵來リ逼ル當ニ方容ヲ施ス  
 ベシ豈ニ除目ノ時ナラン耶吾ハ鎮西八郎ニシ  
 テ可ナリ何ツ藏人ヲ以テセント遂ニ進シテ大  
 ニ戰ヒ射テ數人ヲ殪ス義朝大呼シテ曰ク我ハ  
 宣旨使ナリ且汝ガ兄タリ汝我ニ向ツテ矢ヲ放  
 タハ天譴追レ難シ宜シク弓矢ヲ棄テテ降ヲ乞  
 フ可シト爲朝曰ク兄ニ向ツテ矢ヲ放ツト父ニ  
 抗シテ兵ヲ執ルト天譴孰レカ重キ義朝語塞ル

既ニシテ兩軍交戦フ爲朝ノ矢虛發ナシ弦ニ應  
 シテ倒ル義朝進ンテ戰ヲ決ス爲朝首藤家季ニ  
 謂ツテ曰ク敵兵甚ダ衆シ若シ吾軍矢竭キ短兵  
 相接セハ一以テ百ニ當ルモ亦敵スベカラズ我  
 一箭ヲ發シ軍將ヲ懾サントス如何ト家季曰ク  
 然リ唯誤ツテ之ヲ傷クル勿レト爲朝乃チ射ル  
 鏃義朝ノ蓋ヲ斷リテ資莊殿院ノ門楔ニ着ク義  
 朝曰ク汝モト射ヲ善クヌ今何ツ精ナラザルト  
 爲朝曰ク家兄ヲ憚ツテ敢テセズ若シ假借セラ  
 レバ請フ中ル所ヲ命ゼヨト矢ヲ注ギテ將ニ發  
 セントス事己ニ急ナリ深巢清國進ミテ義朝ノ  
 馬前ヲ遮ル爲朝射テ之ヲ斃ス兩軍格闘互ニ勝  
 敗アリ義朝風ニ乘シテ火ヲ縱ツ軍遂ニ敗績ス  
 爲朝逸去シテ近江輪田ニ匿レ將ニ筑紫ニ奔ツ  
 テ恢復ヲ謀ラントス而シテ平家貞衆ヲ率キテ

京師ニ入ルト聞キ果サズ既ニシテ源重貞ノ爲  
 メニ擒ヘラレ京師ニ傳送セラル帝北陣ニ御シ  
 テ之ヲ觀ル廷議斬ニ處セントス而シテ其非常  
 ノ壯士ナルヲ以テ死一等ヲ減シ臂筋ヲ斷ツテ  
 伊豆大島ニ流ス爲朝自ラ謂フ我先ハ清和天皇  
 ヨリ出デテ八幡太郎ノ胤ナリ祖先ノ業失フベ  
 カラズ此地ハ是レ朝廷ノ我ニ賜フ所ナリト是  
 ニ於テ自ラ大島及ビ三宅八丈美計澳ノ五島ヲ  
 領シテ其租稅ヲ奪フ而シテ島中ノ己ニ從ハザ  
 ル者ハ皆其弓箭ヲ奪ツテ之ヲ焚ク舊臣亦稍來  
 リ屬シ勢日ニ熾ンナリ居ルコト十年偶海上ニ  
 鷺ノ飛ブヲ見其島アルヲ意ヒ海ニ航スル一晝  
 夜ニシテ遂ニ一島ニ至ルヲ得傳ヘ言ツテ鬼島  
 トナス爲朝土人ヲ威服シ島ヲ名ツケテ葦島ト  
 曰フ一人ヲ以テ大島ニ歸ル因ツテ伊豆人民ヲ



嚇サント欲シ常ニ之ヲシテ國府ニ往來セシメ  
 暴横甚ダシキヲ加フ土人之ヲ患フ嘉應二年伊  
 豆介工藤茂光京師ニ至ツテ狀ヲ奏ス朝廷茂光  
 ニ詔シ兵五百ヲ率テ之ヲ討タシム戰艦大島  
 ニ抵ル爲朝其從士ニ謂ツテ曰ク吾若シ通レン  
 ト欲セハ敵萬數ヲ縱ツトモ輒シ撃ツテ之ヲ敗  
 ルベシ然レドモ今縱ニ射テ官軍ヲ卻ケハ違敕  
 ノ誹リ終ニ免ルベカラズ吾志ハ決シタリ汝ガ  
 曹當ニ悉ク離散スベシト乃チ弓ヲ執ツテ海濱  
 ニ出デ大箭ヲ注イデ遙ニ一艦ヲ射テ之ヲ洞ス  
 艦沈ミ人没ス軍ヲ擧ゲテ大ニ懼レ敢テ艦ヲ進  
 メズ爲朝家ニ歸リ腹ヲ刳イテ死ス年三十二加  
 藤景廉進ンテ其首ヲ斬リ京師ニ傳ヘテ之ヲ梟  
 ス爲朝射藝絶倫ニシテ彊弓長箭世ノ及ハザル  
 所後世其鏃ヲ傳ヘテ槍トナス相傳フ爲朝至ル

所ノ諸島今ニ至ルマデ祠ヲ立テテ之ヲ祭ル  
 ト。

みなもとのためよし 源爲義

義親ノ子。陸奥四郎又六條判官ト稱ス。康和  
 四年父義親隱岐ニ流サル義家意爲義ヲシテ其  
 叔父義忠ノ後ヲ嗣ガシメント欲ス義忠從者ノ  
 爲メニ殺サル事從叔義綱ニ連ル義綱逃レテ近  
 江甲賀山ニ走ル爲義時ニ年十四敕ヲ奉シテ之  
 ナ討ツ義綱薙髮シテ出デ降ル爲義義綱ヲ以テ  
 歸ル擢テラレテ左兵衛尉トナリ遂ニ祖父義家  
 ノ嗣タルヲ得尋テ左兵衛門大尉トナリ永久元  
 年興福寺ノ僧徒マサニ延曆寺ヲ攻メントス爲  
 義敕ヲ奉シテ之ヲ拒ク從者僅ニ十七騎粟子山  
 ニ戰ツテ之ヲ走ラス保安四年檢非違使ニ任シ  
 從五位下ニ叙セララル久壽元年子爲朝豐後ニ在

ツテ暴横鎮西ヲ侵擾ス爲義坐シテ罷メラル保  
 元元年鳥羽法皇崩ス崇徳上皇左大臣藤原賴長  
 ト謀ツテ將ニ再ビ踐祚セントシ數爲義ヲ召ス  
 爲義猶豫シテ至ラズ上皇使ヲ遣ハシテ旨ヲ諭  
 ス爲義辭ス上皇聽カズ爲義已ムヲ得ズ子賴賢  
 賴仲爲宗爲成爲朝爲仲ト俱ニ白河殿ニ詣ル上  
 皇大ニ喜ビ乃チ爲義ヲ以テ判官代ニ補シ莊園  
 及ビ寶劔ヲ賜フ遂ニ諸子ヲ率テ南西門ヲ守  
 ル兵百騎許リ獨リ爲朝二十八騎ニ將トシテ西  
 門ヲ守ル既ニシテ帝源義朝及ビ平清盛等ヲシ  
 テ夜ニ乘シテ來リ攻メシム爲義等奮戰シテ之  
 ナ防ク義朝火ヲ上風ニ縱ツ宮中擾亂ス上皇騎  
 シテ宮ヲ出ツ爲義等歩從シテ如意山ニ至ル上  
 皇諸將ニ謂ツテ曰ク汝曹速ニ去レ朕當ニ出デ  
 テ降ラントス爲義等曰ク臣死ヲ以テ奉セント

上皇固ク止ム諸將涕泣シテ去ル爲義乃チ木工  
 神主ノ家ニ匿ル清盛敕ヲ奉シ兵ヲ率キテ來リ  
 索ム去ツテ三河尻五郎大夫景俊ノ家ニ匿レ將  
 ニ東國ニ遁レントシテ病ミテ行ク能ハズ僅ニ  
 箕浦ニ至ル追兵來リ迫ル復々俊景ノ家ニ入り  
 遂ニ黒谷佛寺ニ抵ツテ薙髮シ名ヲ善法ト更ム  
 義朝之ヲ迎ヘテ其家ニ居ラシメ累奏シテ死ヲ  
 減センコトヲ請フ許サズ義朝已ムヲ得ズ遂ニ  
 之ヲ弑ス時ニ年六十一義朝首ヲ朝廷ニ奉ズ朝  
 廷又義朝ニ賜フ因ツテ北白河圓覺寺ニ葬ル爲  
 義六條堀河ニ家ス故ニ世稱シテ六條判官ト曰  
 フ。

みなもとのちかふさ 源親房

具平親王ノ後。權大納言師重ノ子。家ヲ北島、  
 或ハ中院ト稱ス。永仁延慶ノ間累進シテ從四



位下ニ叙セラレ、右近衛中將左少辨ヲ歴參議ニ任ゼラル。元慶元年中納言ト爲リ正二位ニ進ミ淳和契學兩院別當ヲ兼ヌ元亨三年大納言ニ陞リ世良親王ノ傅トナル元徳二年世良親王薨ズ親房痛悼スルコト甚シ因ツテ剃髮シテ宗玄ト號ス親房五朝ニ歷事シテ素ヨリ時望アリ其官ヲ罷メテ退居スルヤ皆朝家ノ爲メニ之ヲ惜シム元弘三年車駕隱岐ヨリ還ル親房復々出仕ス因ツテ從一位ヲ授ケ大臣ニ准ゼラル冬親房ノ子顯家陸奥守ト爲リ義良親王ヲ奉シ出デテ陸奥出羽ヲ鎮ス親房之ニ輔タリ後京師ニ還ル足利尊氏北條時行ヲ討ツニ及ンデ或人其異志ヲ懷クテ告グ帝始メテ尊氏ヲ疑ヒ將ニ之ヲ誅セントス親房藤原公明ト諫メテ曰ク尊氏功大ニシテ罪未ダ著レズニハカニ顯誅ヲ加フベ

カラズ請フ姑ラク其動靜ヲ察セント帝之ニ從ヒ使ヲ遣ハシテ詰問セント欲ス使未ダ發セザルニ尊氏遂ニ反ス延元元年尊氏京師ヲ犯ス親房駕ニ從ツテ延曆寺ニ赴ク既ニシテ帝尊氏ノ降ヲ納レテ京師ニ還ル親房尊氏ニ屬スルヲ欲セズ伊勢ニ走ル三年子顯信陸奥介鎮守府將軍トナル親房又之ガ輔ト爲ツテ任ニ赴ク海上大風ニ遭ヒ親房常陸東條浦ニ漂着ス乃チ阿波崎神宮寺ニ城ニ據ル敵兵來リ攻ムニ城尋テ陷ル親房走ツテ小田治久ニ小田城ニ依ル四年高師冬兵ヲ率ヰテ來リ攻ム與國二年親房陸良親王ヲ小田城ニ迎ヘテ之ヲ奉ズ師冬再ヒ兵ヲ率ヰテ來リ攻ム治久叛シテ師冬ニ降ル親房乃チ退イテ關城ヲ保ツ師冬兵七千ヲ率ヰテ來リ圍ム親房數援ヲ結城親朝ニ請フ親朝果サズ城中益

困ム明年春又書ヲ贈ル詞辭懇到ニ曉諭百端親

朝又辭スルニ兵ノ寡キヲ以テス親房僧宜宗ヲ遣ハシ往イテ顯信ニ來リ救ハンコトヲ命シ且親房ヲ諭サシム親房聽カズ既ニシテ遂ニ叛シテ足利氏ニ降ル親房城ヲ棄テ走ツテ吉野ニ歸ル正平五年足利直義降ヲ乞フ廷議決セズ親房曰ク權宣ヲ以テ之ヲ納レント帝其言ニ從フ明年敕シテ三宮ニ准シ輦車宮ニ入ルヲ聽サル七年帝男山ニ御シ兵ヲ遣シ討ツテ足利義詮ヲ走ラシ親房及ビ子顯能ヲシテ先ヅ京師ニ入ツテ諸事ヲ總決セシム。九年賀名生ニ薨ズ。著書ハ「職原鈔」、「古今集註」、「東家秘傳」、「元元集」、「二十一社記」等アリ世其博洽ナルヲ以テ藤原宣房源定房ト併セ稱シテ後三房トナス帝位ニ行在ニ即クニ方ツテ親房深ク中興ノ全カラザ

ルヲ歎ジ「神皇正統記」ヲ著ス。

みなもとのつねもと 源經基

貞純親王ノ長子。親王ハ清和帝第六ノ皇子。故ヲ以テ經基ヲ稱シテ六孫王ト爲ス。後姓ヲ源朝臣ト賜フ武畧アリ弓馬ニ長シ和歌ヲ善クス承平年中武藏介ト爲リ豫メ平將門ノ異謀ヲ蓄フヲ知リ密ニ京師ニ至ツテ之ヲ奏ス朝廷疑ツテ納レズ幾クモナシテ將門果シテ反ス是ニ於テ嘉賞シテ從五位下ヲ授ケラレ藤原忠文ニ從ツテ將門ヲ討ツ途ニ將門誅ニ伏スト聞イテ還ル尋テ太宰權少貳ニ任シ追捕凶賊使ト爲リ小野好古ニ從ツテ藤原純友ヲ討ツ好古帥ニ班セラルルニ及ンデ特ニ經基ヲシテ餘黨ヲ搜ラシム時ニ純友ノ股肱佐伯是行桑原成行未ダ誅ニ伏セズ尙ホ殘黨ヲ聚メテ西邊ヲ侵掠ス官



軍是行ト日向ニ戰ツテ之ヲ破ル藤原貞包是行  
ヲ擒ス既ニシテ成行海部郡ニ寇ス經基自ラ兵  
ヲ率ヰテ接戰數合遂ニ之ヲ破リ成行ヲ生獲シ  
又馬船及ヒ器械雜具ヲ獲成行獄中ニ病死ス乃  
チ首ヲ斬リ是行ト併セテ之ヲ京師ニ傳送ス賊  
黨悉ク平ク前後式部丞、左衛門權佐、内藏頭、  
兵部少輔、筑前信濃美濃但馬伊豫武藏等ノ守、  
鎮守府將軍ヲ歷天曆年中上野介ト爲リ正五位  
下ニ進ミ應和元年卒ス。年四十五。

みなもとのことより 源俊賴

大納言經信ノ子。堀河鳥羽崇徳ノ三朝ニ仕ヘ  
テ右近衛少將兼木工權頭、左京權大夫ニ任ジ  
從四位下ニ叙セラル。才藝多シ最モ和歌ヲ善  
クス苦意刻思輒ス少語ヲ下サズ凡ソ感觸シテ  
得ル所アレハ往往書シテ之ヲ藏メ時ニ出シテ

之ヲ用ユ故チ以テ苟且艱難ノ失ナシ造意新奇  
ニシテ體製温雅一時士人推シテ宗師ト爲ス藤  
原實行嘗テ藤原長實ト躬恒貫之ノ優劣ヲ論ズ  
之ヲ久シウシテ決セズ長實之ヲ白河上皇ニ問  
フ上皇曰ク朕何ツ容易ニ之ヲ辨セン宜シク俊  
賴ニ質スベシト長實以テ俊賴ニ告ク俊賴點頭  
シテ曰ク躬恒ハ輕視スベカラズ長實曰ク然ラ  
ハ則チ貫之劣レル乎俊賴又曰ク躬恒ハ輕視ス  
ベカラズト俊賴蓋シ深意アリ表ニ之ヲ言フチ  
欲セザルナリ藤原顯季柿本人麿ヲ祭ル名輩畢  
ク集ル顯季俊賴ニ謂ツテ曰ク卿ハ當世ノ宗匠  
タリ宜シク初獻ニ奠クベシト其推許セラルル  
此ノ如シ凡ソ朝廷及ヒ諸家ノ歌合ハ俊賴ヲ推  
シテ判者ト爲ス俊賴常ニ謂フ和歌ヲ判ズル者  
ハ十徳ヲ備フルニ非ザレハ則チ能ハズト所謂

德望、門地、明辨、強記ノ類ナリ天治ノ初メ  
勅ヲ奉ジテ「金葉和歌集」ヲ撰ス俊賴モト連歌  
ヲ好マズ意ヲク和歌ノ體ヲ害スト而シテ「金  
葉集」ヲ撰スルニ至ツテ多ク之ヲ載ス又高陽  
院ノ命ヲ奉ジテ和歌句於式ヲ纂メテ之ヲ奉ル  
亦連歌ヲ載ス蓋シ人ノ美ヲ遺テザラント欲シ  
テナリ時ニ藤原基俊モ亦和歌ヲ善クス俊賴ト  
能チ争ツテ相能カラズ嘗テ人ニ謂ツテ曰ク俊  
賴ハ文才無クシテ和歌ヲ善クス猶ホ駒兒ノ善  
ク走ルガ如シト俊賴聞イテ曰ク文時朝綱ノ如  
キハ才學博宏然レドモ未ダ秀歌アルヲ聞カズ  
躬恒貫之ハ詩名聞ユルコト無シ然レドモ和歌  
ヲ善クスルヲ害セズ基俊ノ言亦タ誣ヒザル乎  
ト俊賴資性温厚人之ヲ愛スル者多シ故チ以テ  
時譽益歸ス題詠ヲ乞フ者アルゴトニ稍其難チ

覺ユレハ則チ先ツ家人子弟ヲシテ之ヲ作ラシ  
メ其詞意ノ採ル可キ者ヲ擇ミ潤色シテ以テ己  
ガ作ト爲ス故チ以テ俊逸甚マ多シ嘗テ同僚ト  
大原ニ遊ブ中路ニシテ遽ニ馬ヨリ下マル衆怪  
ミテ之ヲ問フ俊賴曰ク是レ良暹法師ノ舊趾ト  
衆皆馬ヨリ下ル良暹ハ蓋シ和歌ヲ以テ聞ユル  
者ナリ其篤志ナルコト此ノ如シ著書ニ「山水  
髓惱無名抄」アリ。

みなもとのことよる 源融

嵯峨帝ノ皇子。母ハ宮人大原全子。第十二源  
氏。仁明帝ノ養子。承和五年皇太子ト共ニ禁  
中ニ加冠シ正四位下ニ叙シ宸筆ノ位記ヲ賜ハ  
ル六年侍從トナル八年相模守ニ任ゼラル十四  
年近江守ニ轉ジ尋デ美作守トナル嘉祥元年右  
近衛中將ヲ兼ヌ三年從三位ニ進ミ右衛門督ニ



任大齊衡元年伊勢守ニ遷ル三年參議ニ拜ス餘官故ノ如シ貞觀ノ初メ正三位ニ進ミ近江守ヲ兼ヌ五年轉シテ左衛門督ヲ兼ヌ六年中納言ニ拜シ陸奥出羽按察使ヲ兼ヌ十二年大納言ニ遷ル十四年左大臣ニ陞ル十五年從二位ニ進ミ皇太子傅ヲ兼ヌ元慶元年陽成帝位ニ即キ正二位ヲ授ク連ニ上表シテ職ヲ辭ス許サレズ八年帝位ヲ遷レテ宮ヲ出ヅルニ及ビ諸親王以下文武百官駕ヲ備ヘテ光孝帝ヲ藩邸ニ奉迎ス太政大臣基經先ツ往イテ起居ヲ候フ劍ヲ解イテ入ル融時ニ兵部卿本康親王ト劍ヲ佩ビテ侍ス相顧ミテ大ニ驚キ各自ラ之ヲ撤ス帝則チ敕シテ三人ニ帶劍ヲ賜フ宇多帝位ニ即クニ及ビ從一位ニ進ム寬平六年輦車ニ乘リテ家中ニ出入スルヲ聽サル七年八月薨ズ年七十四詔シテ正一位

ヲ贈ル融別業ヲ宇治ニ置ク陽成字多朱雀ノ三帝嘗テ此ニ幸ス後攝政道長求メテ之ヲ領ス子頼通ニ至リ捨テテ寺トナシ名ヅケテ平等院ト曰フ又山莊ヲ嵯峨ニ創ム棲霞觀ト曰フ清和帝脫屣ノ後嘗テ遷リテ此ニ御ス融又河原院ヲ東六條ニ營ミテ此ニ居ル臺閣水石巧ニ華麗ヲ窮ム麟介ヲ取ツテ以テ池中ニ致ス毎月難波ノ湖二十斛ヲ汲ミ日ニ鹽ヲ煮サシメ以テ陸奥鹽竈浦ノ勝槩ヲ摸ス世ニ河原左大臣ト稱ス。

みなもとののりより 源範賴

蒲冠者ト稱ス。左馬頭義朝ノ第六子。藤原範季ノ養子。兄頼朝兵ヲ起スニ及ビ往イテ歸ス治承五年小山朝政ヲ援ケテ志田義廣ヲ下野ニ擊ツ壽永二年源義仲反ス明年正月頼朝範賴義經ヲシテ兵六萬ニ將トシテ以テ之ヲ討タシム

範賴二萬五千ヲ帥サテ海道ヨリ進ミ擊ツ義仲今井兼平ヲシテ勢多橋ヲ撤シテ拒ギ守ラシム範賴稻毛重成等ヲシテ供御瀨ヲ濟ツテ大ニ國分寺ノ前ニ戰ヒ敵將山本義弘ヲ斬ル兼平敗走ヌ範賴進ンテ京師ニ入ル義經宇治ヲ破ル兩軍勢ヲ合シテ義仲ヲ攻メテ栗津ニ殺ス二月兵五萬六千餘ニ將トシテ一谷ニ赴ク路ヲ播磨ニ取リ進ンテ昆陽野ニ陣シ義經下期ヲ約スニ七日ヲ以テス五日義經平資盛ヲ三草山ニ擊ツテ之ヲ破ル七日範賴城ノ東門生田森ニ向フ河原高直弟盛直ト柵ヲ踰エテ戰死ス諸將繼ギ進ンテ接戰ス義經鴨越ヨリ進ミ火ヲ放ツテ之ヲ燒ク城中潰亂ス範賴等東西門ヨリ夾擊ツ平氏支フル能ハズ養和帝ヲ奉シテ海ニ泛ブ日中ニ城陷ル敵衆逃散ス範賴之ヲ追フ海ニ瀕レ創ヲ被ム

ル者勝ケテ討フベカカラズ振旅シテ還ル六月從五位下ニ叙シ參河守ニ任セラレ頼朝置酒シテ勞ヲ慰ム八月頼朝再ビ範賴ニ命シテ平氏ヲ西海ニ討タシム範賴先ツ京師ニ入り追討官符ヲ賜ハル九月足利義兼北條義時等兵三萬ヲ帥キテ播磨室津ニ至ル十月安藝ニ至ツテ將士ノ功ヲ賞ス時ニ範賴ノ軍中糧食乏絶シ船艦給セズ士卒東ニ歸ラン事ヲ思フ範賴之ヲ患フ十一月使ヲ鎌倉ニ遣ハシテ狀ヲ告グ頼朝書ヲ報シテ方畧ヲ指示シ戒ムルニ將士ヲシテ前帝太后及ビ二位尼ヲ侵陵セシムルコト勿レト云フヲ以テス文治元年範賴將ニ西海ニ赴カントシテ周防ヨリ赤間關ニ至ル船糧ニ乏シキヲ以テ軍ヲ頓メテ進マズ將士歸ランコトヲ思フコト益甚ダシ乃チ周防ニ還ル豊後ノ人曰ク惟隆緒方



惟能モト源氏ニ應セント欲ス範頼モ亦人ヲ遣  
シテ船ヲ求メシム是ニ於テ惟隆等戰艦八十餘  
艘ヲ發シテ來リ迎フ周防ノ人木上遠隆モ亦糧  
ヲ餉ル範頼乃チ千葉常胤ト謀ツテ曰ク周防ハ  
樞要ノ地ナリ留守ノ任重シ選ミテ之ヲ命ゼザ  
ルヘカラズト常胤曰ク三浦義澄ハ勇敢ニシテ  
兵多シ則チ其人ナリト範頼之ニ從フ乃チ豐後  
ニ至ル二月原田種直ヲ葦屋浦ニ擊ツテ之ヲ破  
ル既ニシテ義經屋島ヲ攻ム平氏海上ニ逃ガル  
然レドモ範頼豐後ニ在リテ西スルヲ得ズ三  
月義經平氏ヲ檀浦ニ滅シ俘獲ヲ以テ京ニ還ル  
範頼猶ホ豐後ニ留ツテ筑紫九國ヲ拊循ス九月  
京師ニ還ル壽永ノ亂ニ平氏鶴丸ノ劍ヲ取ツテ  
奔ル範頼之ヲ鎮西ニ得テ以テ法皇ニ獻ズ尋テ  
鎌倉ニ至ル時ニ賴朝義經ト隙ヲ生シ陰カニ土

佐坊昌俊ヲシテ之ヲ圖ラシム昌俊却ツテ義經  
ノ爲メニ殺サル乃チ範頼ヲシテ之ヲ討タシム  
範頼討ツニ忍ビズ固ク辭ス賴朝聽カズ已ムナ  
獲ズ之ニ從フ賴朝ニ見エテ辭別ス賴朝謂ツテ  
曰ク罷ンナン我レ卿ニ於テ深ク信ズル能ハズ  
卿モ亦九郎ニ繼テ二舞ヲ爲ス者ナラント範頼  
懼レテ自ラ措ク能ハズ屢誓書ヲ奉シテ異志無  
キヲ陳ズ初メ義經ノ西海ニ在ルヤ功ヲ待ミテ  
軍事ヲ專ラニス賴朝積ミテ平ヲカナル能ハズ  
範頼ハ能ク約束ニ遵ツテ事ゴトニ鎌倉ニ諮稟  
ス故チ以テ頗ル親愛セラル然レドモ將領ノ任  
終ニ猜忌ナキ能ハズ建久四年五月賴朝富士野  
ニ獵ス會我兄弟隣工藤祐經ヲ殺ス營中騷擾ス  
鎌倉ニ訛言アリ將軍害ニ遇フト賴朝ノ妻聞イ  
テ大ニ驚悲ス範頼感諭シテ曰ク範頼在リ假シ

大變アリトモ以テ憂ト爲ス勿レト賴朝其言ヲ  
聞テ深ク之ヲ惡ム八月範頼異圖アリト聞キ其  
狀ヲ推問ス範頼又誓書ヲ作り大江廣元ニ就イ  
テ情ヲ陳ズ賴朝自ラ誓書ヲ讀ミ源範頼ト書ス  
ルヲ見テ怒ツテ曰ク範頼我ニ於イテ骨肉ノ分  
アリト謂フ乎何ツ安ニ源姓ヲ稱スルヲ得ント  
乃チ廣元ヲシテ其使重能ヲ讓メシム重能曰ク  
參州ハ實ニ故右馬頭殿ノ子ニシテ幕下ノ弟ナ  
リ嚮ニ參州追討使ト爲リ西海ニ赴クヤ幕下  
弟ト云フチ以テ朝廷ニ聞ス既ニ之ヲ官府ニ戴  
ク豈ニ僭冒ナランヤト廣元以テ白ス賴朝復タ  
言ヲ出サズ重能還ツテ告ク範頼大ニ懼ル未ダ  
幾クナラズ賴朝夜床下ニ人ノ氣息アリト聞キ  
潛ニ結城朝光等ヲ召シテ搜索セシム捕テヘテ  
一人ヲ得推問スレバ乃チ範頼養フ所ノ勇士當

麻太郎ナリ陳ジテ曰ク頃ロ參州屢誓書ヲ奉ツ  
テ未ダ申理ヲ得ズ日夜憂懼ス故ニ臣左右ノ議  
ヲ聞カント欲シテ遂ニ此ニ至ルモト異謀アル  
ニ非ズト考鞠スルコト數次竟ニ異辭ナシ速ニ  
テ範頼ニ問フ固ク知ラズト陳賴朝ズ工藤宗茂  
宇佐美祐茂ニ命ジテ範頼ヲ伊豆ニ逐ヒ修禪寺  
ニ拘置セシム其臣橘太郎左衛門、江瀧日、梓  
刑部等兵ヲ繕ヒテ濱館ニ據ル賴朝結城朝光梶  
原景時仁田忠常等ヲ遣ハシ之ヲ誅セシム景時  
範頼ヲ殺サンコトヲ勸ム乃チ景時及ビ子景季  
景高ヲ遣ハシ騎五百ヲ率井テ範頼ヲ修禪寺ニ  
攻ム事不意ニ出ヅ範頼中ヲ擐スルニ及ハズ弓  
ヲ彎キ之ヲ射テ殺傷スルコト頗ル多シ既ニシ  
テ矢盡ク火ヲ放チ自屠シテ死ス景時首ヲ灰燼  
中ニ獲ニ子アリ範圓源昭共ニ僧ト爲ル。



みなもとのみつなか 源満仲

鎮守府將軍經基ノ長子。村上、冷泉、圓融、華山ノ四朝ニ仕フ。人トナリ勇畧アリ、和歌ヲ善クシス。常陸介武藏攝津越前伊豫陸奥等ノ守左馬權頭治部大輔ヲ累歷シテ鎮守府將軍ニ拜セラレ正四位下ニ至リ内昇殿ヲ聽サル天徳中賊倉橋弘重等夜其家ニ入ツテ資財ヲ掠ム滿仲射テ弘重ヲ獲救シテ其黨中臣良材紀近輔等ヲ捕ヘシム後賊復タ其家ヲ圍シテ火ヲ放ツ煙焰甚ダ熾シナリ三百餘家ニ及ビ越後守宮道弘氏來ツテ之ヲ救フ賊矢ニ中ツテ死ス滿仲拒ギテ之ヲ卻シ安和二年橘繁延藤原千晴僧連茂等爲平親王ヲ奉シテ亂ヲ作サンコトヲ謀ル滿仲モ亦其謀ニ預カル既ニシテ繁延ニ憾ミアリ遂ニ武藏介藤原善時ト變テ上ツテ之ヲ告グ救シ

テ滿仲及ビ弟檢非違使滿季ヲシテ其黨ヲ搜捕セシメ繁延千晴等ヲ流ス功ヲ賞シテ滿仲善時ノ階ヲ進ム滿仲性漁獵ヲ好ミ殺生ヲ忍ブ其子僧源賢深ク之ヲ患ヒ惠心院僧都源信ト之ヲ誘道ス滿仲大ニ感悟ス乃チ從士ヲ召シテ謂ツテ曰ク我久シク戎事ニ從ツテ未ダ嘗テ一日モ懈緩セズ明日當ニ髮ヲ剃ルベシ我武人タル今夕ニ止ル汝等善ク衛護ヲ爲セト即チ兵五百ヲシテ甲ヲ振キ弓矢ヲ負ツテ館ヲ環ツテ且ニ達セシム明日遂ニ髮ヲ剃リ滿慶ト更メ多田新發意ト號シ悉ク鷹鷄ヲ放チ網罟ヲ燒ク從者五十餘人モ亦從ヒ髮ヲ剔ル受戒ノ日殺生戒ニ至ツテ伴リ睡ツテ聽カズ後陰カニ源信ニ造ツテ曰クサキニ弟子戒ヲ受クル心深ク殺ヲ戒ム然レ共家人チシテ之ヲ知ラシメハ恐ラクハ輕侮ノ心

ヲ生セント故ニ輒チ教ヲ奉セザリシナリ師ノ悦ハサルヲ恐レテ來謝スト遂ニ佛乘ニ歸ス頗ル止觀ノ旨ニ通ズ滿仲嘗テ攝津多田ニ居ル故ニ家ヲ多田ト號ス天祿元年多田院ヲ創ス長徳三年卒ス年八十六即チ多田院ニ葬リ其像ヲ安

みなもとのよしへ 源義家

ンズ後土御門帝文明四年敕シテ從二位ヲ贈ル初メ滿仲以爲ラシ鎮護ノ任ハ利劍有ルニ非ザレハ以テ威ヲ示スニ足ラズト數治工ヲ鳩メテ多ク刀劍ヲ作ル皆其意ニ愜ハズ筑前ニ良工アリト聞キ因ツテ召シテ作ラシム亦意ノ如クナラズ工之ヲ愛ヒ神ニ祈ルコト七日精練スルコト六十餘日乃チ二刀ヲ得滿仲大ニ悦ビ試ミニ死囚ヲ斬ル其餘勢一ハ鬚ヲ截リ一ハ其膝ヲ斷ツ因ツテ名ヅケテ鬚切膝丸ト曰フ源氏ノ傳寶トス。

頼義ノ長子。小字ハ源太。初メ頼義八幡神劍ヲ賜フト夢ム覺メテ之ヲ異ナリトシ既ニシテ其妻姪ミテ義家ヲ生ム年甫ソテ七歳元服ヲ石清水宮ニ加フ因ツテ八幡太郎ト號ス人ト爲リ勇武明決最モ騎射ニ妙ナリ永承中頼義ニ從ツテ安倍貞任ヲ陸奥ニ擊チ鳥海柵ニ戰ツテ大ニ敗ル義家ノ馬矢ニ中ル藤原則明賊ノ馬ヲ奪ツテ之ニ授ク義家奮戰連射ス向フ所披靡ス賊其驍勇ヲ嘆ク以テ神ト爲ス康平五年衣川ノ關ヲ攻メテ大ニ之ヲ敗ル貞任誅ニ伏ス東陞兵ヲ用キル凡ソ十餘年陸奥ノ平定セルハ義家ノ功多キニ居ル六年功ヲ以テ從五位下ニ叙セラレ出羽守トナル嘗テ關白頼通ノ第ニ到リ陸奥ノ軍事ヲ談ズ大江匡房坐チ隔テテ之ヲ聞イテ曰ク



彼ハ將才アリ惜ムラシハ兵法ヲ知ラズト從者  
 之ヲ義家ニ告グ義家謂ヘラソソレ或ハ之アラ  
 ノト匡房ノ出ヅルヲ見テ車ニ就イテ之ヲ拜ス  
 禮甚ダ恭シ遂ニ之ヲ師トシ兵書ヲ學ブ承暦三  
 年右兵衛尉源重宗散位源國房ト兵ヲ美濃ニ構  
 フ義家ニ詔シテ之ヲ討タシム重宗之ヲ聞イテ  
 遁匿ス既ニシテ重宗國房ト兵ヲ合シテ義家ヲ  
 拒グ義家遂ニ重宗ヲ誅ス永保元年園城寺ノ僧  
 徒延曆寺ヲ攻ム義家又詔ヲ奉シテ之ヲ逮捕ス  
 三年陸奥守兼鎮守府將軍ト爲ル時ニ藤原清衡  
 家衡清原眞衡ト兵ヲ構ヘテ相戰フ義家急ニ陸  
 奥ニ赴キ眞衡ヲ助ケテ家衡ヲ出羽ニ攻ム利ア  
 ラズシテ還ル家衡ノ叔父武衡義家ノ敗ヲ聞キ  
 兵ヲ起シテ家衡ニ應ジ謀ヲ合セテ金澤柵ニ據  
 ル寛治元年九月義家又自ラ數萬騎ニ將トシテ

金澤柵ヲ攻ム敵伏ヲ設ケテ之ヲ待ツ義家遙ニ  
 雁行ノ亂ルルヲ見テ其伏アルヲ覺リ兵士ヲシ  
 テ之ヲ偵ハシム果シテ伏兵ヲ得撃ツテ之ヲ殲  
 シ遂ニ進ンテ柵ヲ圍ム會弟義光京師ヨリ來ル  
 カヲ戮セテ之ヲ攻ム柵固クシテ拔ケズ既ニシ  
 テ食乏シ武衡義光ニ就イテ降ヲ乞フ義家聽カ  
 ズ武衡家衡柵ヲ燒イテ遁ル義家追撃シテ武衡  
 家衡ヲ獲テコレヲ斬ル陸奥出羽平定ス五年藤  
 原實清清原則清ト河内ノ田園ヲ爭フ義家義綱  
 各之ヲ左右シ以テ相下ラズ是ニ由ツテ將ニ相  
 攻伐セントス廷議謂ラク恐ラツハ天下ノ變ヲ  
 生ゼント詔シテ義家ノ兵士ノ京師ニ入ルヲ禁  
 シ又諸國ノ百姓ガ田園ノ公驗ヲ義家ニ托スル  
 ナ制止ス事遂ニ寢ム義家左近衛將監檢非違使  
 左衛門尉左兵衛權頭河内相摸武藏信濃下野伊

豫等ヲ守ニ歷任シ正四位下ニ叙セラル嘉承元  
 年病ヲ以テ制薙ス天仁元年卒ス年六十八義家  
 英略世ヲ蓋ヒ機智神ノ如ク極捷絶倫ナリ又和  
 歌ヲ善クス後世源氏ノ起ル實ニ義家ノ士民ヲ  
 撫スルニ因ルト云フ。

みなもとのよし 源義賢

爲義ノ子。近衛帝ノ東宮ニ在ルヤ仕ヘテ帶刀  
 長タリ秩父重降養ツテ以テ子ト爲ス故ヲ以テ  
 屢武藏比企郡ニ往來ス士卒多ク來歸ス源義平  
 ト隙ヲ生シ久壽二年兵ヲ構ヘテ大藏館ニ闘ヒ  
 敗レテ死ス。

みなもとのよし 源義高

義仲ノ長子。志水冠者ト稱ス。鎌倉ニ質タリ  
 義仲誠メテ曰ク汝善ク頼朝ニ侍シテ疎斥セラ  
 ル勿レ能ク自ラ成立シ期スルニ方面ノ任ヲ

以テセヨト乃チ頼朝ノ使ニ附シテ之ヲ遣ル其  
 臣海野幸氏義高ト甲子ヲ同シクスルヲ以テ特  
 ニ命ジテ從行セシム頼朝女ヲ以テ之ニ妻ハス  
 義仲誅セララルニ及ンテ頼朝之ヲ殺サント欲  
 ス侍婢伺ヒ知ツテ其妻ニ告グ故ヲ以テ義高營  
 ナ出テテ遁ルルヲ得タリ義高雙六ヲ好ム幸氏  
 敵手タリ是夕幸氏義高ノ臥内ニ入り衾ヲ引イ  
 テ臥シ明日獨リ雙六ス外人覺ラズ既ニシテ頼  
 朝其走ルヲ聞キ大ニ怒リ堀親家ニ命ジテ之ヲ  
 追ハシム入間河原ニ至リ捕ヘテ之ヲ斬ル。

みなもとのよし 源義經

小字ハ牛若。左馬頭義朝ノ第九子。人ト爲リ  
 軀幹短小ニシテ白晳反齒神彩秀發ニシテ極捷  
 人ニ軼グ母ヲ常盤ト曰フ舊ト近衛藤原皇后ニ  
 仕フ後義朝ニ歸シテ三子ヲ生ム長ハ今若次ハ



乙若次ハ即チ牛若ナリ平治元年ヲ以テ生ル是  
 歲義朝藤原信賴ニ黨シテ敗死ス常盤三兒ヲ携  
 ヘテ大和ニ匿ル平清盛其母ヲ收ム常盤之ヲ聞  
 キ自ラ六波羅ニ抵リ陳情シテ其母ヲ救フ清盛  
 其容色ヲ悦ビ併セテ三兒ノ死ヲ宥ム常盤即チ  
 牛若ヲ以テ鞍馬寺ノ僧覺日ニ付シ名ヲ遮那王  
 ト改メシム年甫メテ十一諸家ノ譜ヲ閱ミシ慨  
 然トシテ以爲ラシ我ハ世將ノ種ニシテ覆壓此  
 ニ至ル必ズ當ニ平氏ヲ翦滅シ以テ父祖ノ耻ヲ  
 雪クベシト是ニ於テ晝ハ書策ヲ讀ミ夜ハ武技  
 ヲ習フ覺日之ニ制度センコトヲ勸ム肯ンゼズ  
 シテ曰ク二兄僧ト爲ル我ノ耻ヅル所ナリ何ツ  
 之ニ做フコトヲ爲サント覺日屢之ヲ勸ム則チ  
 竊ニ謂ツテ曰ク若シ之ヲ強ヒハ我マサニ刀ヲ  
 師ノ腹ニ加ヘントスト常盤居常憂懼スレドモ

之ヲ奈何ントモスルコト無シ遮那王常ニ陸奥  
 ニ往イテ藤原秀衡ニ依リ其資ニ籍ツテ以テ宿  
 志ヲ成サントス然レドモ道路遼遠與ニ俱ニス  
 ル者無シ時ニ金商吉次ト云フ者アリ陸奥ニ往  
 來ス毎ニ京師ニ詣レハ鞍馬寺ニ詣ル遮那王因  
 ツテ密ニ語ツテ曰ク汝與ニ往カハ我ヲ以テ行  
 ケ我レ與ニ詣ラハ必ズ當ニ重ク酬ユベシ吉次  
 曰ク君ヲ奉ツテ行ク事難カラザルナリ第々恐  
 ラクハ大衆ノ怒ヲ取ランコトヲ遮那王笑ツテ  
 曰ク是驕兒ヲ失スルモ亦苦ム所ナシ譬ハハ夏  
 日ニ炭ヲ棄ツルガ如シ人之ヲ竊ミ去ル誰カ復  
 タ之ヲ追ハント吉次乃チ諾ス又下總人ニ深栖  
 頼重ト云フ者アリ源頼政ノ從子ナリ鞍馬ニ至  
 ル遮那王相見テ之ヲ欵曲シ三人相約ス承安四  
 年三月遂ニ俱ニ關東ニ赴ク行イテ近江鏡宿ニ

至リ自ラ元服ヲ加ヘテ名ヲ義經ト更メ源九郎  
 ト稱ス時ニ年十六下總ニ抵リ居ルコト數月會  
 盜ノ馬ヲ盜ム者アリ土人之ニ迫ル盜健ナルコ  
 ト甚シ樹ニ靠テ自ラ捍シ衆捕フル能ハズ圍  
 ンデ之ヲ守ル義經赤手ニシテ之ヲ縛ヌ又群盜  
 アリ民家ニ入ル義經之ニ赴キ立ドコロニ四人  
 ヲ斬ル餘ハ創ヲ被ツテ迸散ス頼重其勇ニ服ス  
 ト雖モ平氏ノ之ヲ聞カンコトヲ懼レテ頗ル之  
 ヲ戒ム義經乃チ陸奥ニ赴ク吉次之ヲ秀衡ニ告  
 シ秀衡平泉館ニ邀ヘテ厚ク之ヲ遇ス義經金ヲ  
 秀衡ニ乞ヒテ之ヲ吉次ニ與ヘテ前約ヲ踐ム治  
 承四年兄頼朝兵ヲ起ス義經聞イテ之ニ趣カン  
 ト欲ス秀衡時勢ヲ觀望シ留メテ遣ラズ義經潛  
 カニ平泉館ヲ出ツ秀衡壯士佐藤繼信及ビ弟忠  
 信ヲ遣ハシ追ツテ之ニ從ハシム十月頼朝平氏

ヲ富士川ニ破ツテ黃瀬川ニ陣ス義經二十餘騎  
 ヲ率テ營ニ詣ル部將土肥實平怪ミテ爲メニ  
 通ゼズ頼朝問フテ其年齡ヲ知リ曰ク是レ必ズ  
 奥州ノ九郎ナラント速ニ召シテ幕ニ入ラシム  
 實平之ヲ導イテ謁ヲ執ル頼朝相見テ大ニ喜ビ  
 テ曰ク昔八幡殿ノ清原武衡ヲ討ツ新羅三郎宿  
 衛ニ在リ官ヲ解イテ軍ニ趣カント請フ許サズ  
 弦袋ヲ本陣ニ掛ケ間行シテ陸奥ニ抵ル八幡殿  
 喜ビテ以テ故將軍ノ再生トナス今吾子ニ此處  
 ニ遇フ亦尚ホ頭殿ノ顔ヲ見ルガ如シト相俱ニ  
 感泣ス壽永二年七月平氏養和帝ヲ奉マテ西海  
 ニ奔ル從兄義仲先ツ京師ニ入ル功ニ矜ツテ驕  
 敖上下厭苦ス頼朝義經等ヲ遣ハシ租稅ヲ監送  
 シテ京師ニ入ラシム義仲悚懼シテ之ヲ抑拒セ  
 ント欲ス法皇敕諭シテ他無キヲ保ス十一月義



仲反ス時ニ義經熱田ニ在リ橘公朝往イテ狀ヲ告グ是ヨリ先義經使ヲ鎌倉ニ遣ハシテ變ヲ告グ軍ヲ駐メテ報ヲ俟ツ此ニ至ツテ復タ公朝ヲシテ往カシム三年正月頼朝兵六萬ヲ發シ範頼義經ヲシテ義仲ヲ討タシム範頼勢多ヨリ義經宇治ヨリ路ヲ分ツテ京師ニ入ル義經ノ兵無慮二萬五千餘鈴鹿山ヨリ進ンテ伊賀ニ至リ射手神社ノ前ヨリ進ム義仲之ヲ聞イテ根井幸親等ヲシテ兵二百ヲ率井宇治橋ヲ撤シテ拒ギ守ラシム義經民舍ニ火ヲ縱ツテ之ヲ燒キ河上ニ高櫓ヲ構ヘ身櫓上ニ在リ俯シテ四方ヲ臨ンデ將士ニ號令シテ筆ヲ執リ呼ンデ曰ク衆ニ先ツ者又勇闘スル者ハ悉ク之ヲ鎌倉ニ注報セント衆氣之ガ爲メニ百倍ニ奮躍シテ効アラソコト思フ義經軍中ニ號令ス時ニ諸部喧噪シテ號令辨

ズベカラズ乃チ平等院ノ法鼓ヲ取ツテ之ヲ擊タシム軍士皆耳ヲ屬ス是ニ於テ令シテ曰ク難ニ臨ンデ功ヲ立ツルハ正ニ今日ニアリ見兵二萬餘必ズ善ク泗少者アラン先ツ涉ツテ以テ淺深ヲ測レ敵ノ控弦四五百鏃ヲ岸上ニ鑽ム涉ル比ヒニハ必ズ射ン汝等壯士橋架ニ上ツテ之ヲ禦ギ泗少者ヲシテ射サシムル勿レト是ニ於テ平山季重佐佐木定綱等橋架ニ上ツテ頻ニコレテ射ル殺傷頗ル多シ佐佐木高綱梶原景季橘小島ヨリ單騎ニシテ先ツ濟ル畠山重忠五百騎ヲ率井橋ニ傍フテ濟リ幸親等ト戰ツテ之ヲ破ル義經曰ク大將進ミ戰フハ偏裨ノ轍ニ由ルベカラズト乃チ道ヲ易ヘテ橘小島ニ至リ令シテ曰ク流レ迅ナリト雖モ水淺シ汝等此ヨリ涉リ衆ニ先ンマテ進メト兵相繼テ濟リ北ヅルヲ追ッ

テ京師ニ至ル義仲敗走ス時ニ法皇大江業忠ノ六條第二居ス義經重忠高綱等ヲ帥キテ六條ニ詣ル法皇大ニ喜ビ中門ニ御シテ之ヲ觀藤原定長ヲシテ之ヲ勞シ義經以下ノ姓名本貫年齢ヲ問ハシメ歎シテ曰ク眞ニ英雄ナリト乃義經ニ敕シテ宮中ヲ宿衛セシメ兵ヲ分ツテ義仲ヲ逐ハシム義仲遁レテ粟津ニ至リ範頼ト戰ツテ死ス是日平氏屋島ヨリ遷ツテ一谷城ニ據ル衆十餘萬聲勢甚マ熾ナリ法皇範頼義經ヲシテ之ヲ討タシム範頼義經將ニ平氏ヲ一谷城ニ討タンナシテ先ツ攻期ヲ刻ス二月四日ハ清盛ノ小祥五日六日ハ兵忌ナルヲ以テ定メテ七日ト爲ス二十九日範頼播磨ヨリ一谷ニ赴キ義經丹波路ヨリ程ヲ兼テ之ニ會ス範頼毘陽野ニ陣シ義經三草山ノ東ニ陣ス平資盛等之ヲ山西ニ逆フ

相距ルコト三里許リ二月五日衆ヲ勒シテ敵ニ赴ク夜黒クシテ路險ナリ人馬進ムコト能ハズ義經武藏坊辨慶ヲ呼ンデ曰ク汝大炬ヲ舉ゲヨト衆未ダ其意ヲ解セズ辨慶即チ馳セテ火ヲ所在ノ民舍ニ縱ツ路明ラカナルコト盡ノ如シ夜半ニ西ノ麓ニ至リ謹諫シテ襲撃ス資盛等狼狽シ器仗ヲ棄テテ走ル首ヲ斬ルコト一百八十級六日信綱實平ヲシテ別ニ七千騎ニ將トシテ一谷城ノ西門ヲ攻メシメ自ラ熊谷直實平山季重等以下精銳三千騎ヲ帥キテ鉢伏峯ニ登リ進ンテ蟻戸ニ至ル日既ニ暮ル徑路險惡ニシテ前ムコト能ハズ乃チ辨慶ヲシテ嚮導ヲ訪求セシメ辨慶遙ニ火光ヲ認メテ之ニ趣キ翁媪ノ相對シテ坐スルヲ見テ翁ニ嚮導ヲ命ズ翁曰ク吾ハ此山ニ住シテ射獵ヲ業トシ攝丹ノ山岳ヲ踏熟ス



今老イタリ用ニベカラズ兒アリ頗ル健ナリ驅  
 役ニ充ツルニ堪ヘント辨慶乃チ其子ヲ拉ツテ  
 歸リ見エシム義經其居ル所ノ山鷲尾ト名ツク  
 ルヲ以テ名ヲ鷲尾經春ト命マテ之ニ刀馬甲冑  
 ナ賜ヒ路ノ險易ヲ問フ經春曰ク此所ハ鷲越ト  
 名ツケテ山中第一ノ絶險ナリ土七八段ハ石礫  
 沙池ニシテ草木生セズ下五六段ハ峭壁截然ト  
 シテ人馬ノ能ク過グル所ニ非ズ義經曰ク麋鹿  
 モ亦過グルコト能ハザル乎曰ク唯鹿ハ之ヲ過  
 ク義經又問フ崖下ニ陷穿ヲ設ケ茨藜ヲ敷ク乎  
 經春曰ク敵險ヲ特ニテ未ダ此備ヲ設クルヲ聞  
 カズト義經是ニ於テ將士ニ令シテ曰ク鹿ハ四  
 足アリ馬又四足其異ナル所ハ鼠ノ有無ト蹄ノ  
 圓折耳西國ノ馬ハ我之ヲ知ラズ東國ノ如キハ  
 則チ鹿ノ過グル所馬亦能ク行シト乃チ經春ヲ

シテ前引セシム時ニ天未ダ曙ナラズ暫時山中  
 ニ休ム實平己ニ西門ニ向ヒ範頼東門ヲ攻ム七  
 日義經晨チ侵シテ鷲越ヲ下ラントシ先ツ鞍馬  
 數匹ヲ下シテ之ヲ試ム或ハ傷キ或恙ナシ義經  
 之ヲ視テ曰ク馬ヲシテ自ラ下ラシム猶ホ是如  
 シ騎スル者意ヲ加ヘハ何ツ墮傷スルヲ慮ラン  
 凡馬ヲ險惡ニ馳スルニ四術アリ而シテ其要ハ  
 專ラ心ニ在リ汝等我騎スルヲ以テ準ト爲セヨ  
 ト衆ニ先ツテ進ム衆皆魚貫シテ下ル一人ノ傷  
 損スル者ナシ是ニ於テ兵ヲ整ヘ旗ヲ揚ケ大ニ  
 呼ンテ直ニ衝ク時ニ敵專ラ東西二門ヲ禦ギ城  
 後ハ險ヲ特ニテ備ヘテ設ケズ義經至ルニ及ン  
 テ驚キ潰エテ度ヲ失ヒ自ラ相殺傷ス義經乃火  
 チ敵營ニ放ツ風怒リ火熾ンニ煙塵晦冥城兵大  
 ニ擾レ東西門守チ失ヌ範頼實平ノ兵城中ニ攻

ヲ入ル宗盛養和帝ヲ奉シテ海ニ泛ブ餘衆潰走  
 ス追ツテ之ヲ海濱ニ擊チ首ヲ斬ル二千餘級俘  
 獲溺死勝ゲテ計フベカラズ九日凱旋範頼義經  
 獲ル所ノ首級ヲ京師ニ梟セント請フ法皇公卿  
 ナシテ之ヲ議セシム皆曰ク古公卿ヲ戮シテ路  
 ニ徇ラル者ナシ况ンヤ平氏ハ先朝ノ勳戚徇フ  
 ベカラズト義經保元ノ故事ヲ引イテ復ビ奏請  
 ス法皇已ムチ得ズシテ之ヲ許ス八月義經ヲ以  
 テ左衛門少尉ニ任シ檢非違使ニ補ス義經嘗テ  
 頼朝ニ就キ廷奏シテ一官ニ補セラレシコトヲ  
 請フ頼朝義經ノ軍中ニ在ツテ自ラ專ラニスル  
 ナ惡ミ押ヘテ奏セズ先ツ範頼ヲ奏シテ參河守  
 ト爲ス義經官ヲ拜スルニ及ビ使ヲ馳セテ之ヲ  
 頼朝ニ告ゲ自ラ朝廷ノ賜ヲ所以テ辭スベカラ  
 ザルヲ陳ブ頼朝其自請ナルヲ疑ヒ益悦ハズ九

月義經從五位下ニ叙セラレ檢非違使ハ故ノ如  
 シ尋テ院ノ昇殿ヲ聽サル文治元年正月義經平  
 氏ヲ討テント請フ廷議遂巡シテ決セズ義經復  
 タ奏ス法皇遂ニ之ヲ許ス義經發スルニ臨ミ法  
 皇ニ奏シテ曰ク平氏西ニ奔ツテ今ニ三年郡國  
 ナ侵掠シ人民ヲ虐使ス亟ニ之ヲ除カズンハア  
 ルベカラズ臣此賊ヲ滅ボサザレハ生キテ皇都  
 ニ入ラズト兵ヲ帥キテ將ニ南海道ニ由ラント  
 シテ舟師ヲ渡邊福島ニ治ム將佐ハ多ク東國人  
 ニシテ水闘ニ習ハズ羣議嗷嗷タリ梶原景時ハ  
 軍事ヲ監スルヲ以テ從フ逆櫓ヲ船ニ設ケント  
 欲ス義經問フ何チカ逆櫓ト謂フ景時曰ク艦ニ  
 櫓ヲ設クル之ヲ逆櫓ト謂フ陸戰ハ騎馬ナリ進  
 退意ニ從フ舟師ノ如キハ則チ然ラズ進ムニ易  
 クシテ退クニ難シ今逆櫓ヲ設クル所以ハ敵



堅ナレバ則チ艦ヲ以テ退キ敵獲マハ則チ船ヲ以テ進ムナリト義經曰ク凡ソ戰ニ臨ム者ハ主將勇銳ニシテ衆ヲ勵マズモ猶ホ退カント欲ス况シヤ未ダ戰ハズシテ預メ逃計ヲ設クル何ヲ以テカ利ヲ得ン景時曰ク進ムヲ知ツテ退クヲ知ラザル是ヲ豕武者ト謂フ危キヲ取ル所以ナリ將軍ハ年少ニシテ氣盛ナリ故ニ此ノ如シト義經色ヲ作シテ曰ク我レ自カラ豕カ鹿カヲ知ラズ惟奮戰シテ敵ヲ殄ボスヲ以テ快ト爲ス敵ニ赴ク者ハ期スルニ必死ヲ以テス軀身ヲ愛スルガ若キハ則チ軍ニ臨マザルニ若カズ卿若シ大將ノ任ヲ受ケハ逆櫓千百ヲ設クト雖モ可ナリ我ハ則チ敢テセズト景時はニ由ツテ義經ヲ怨ム二月十六日義經マサニ屋島ニ赴カントス法皇以爲ク義經畿甸ヲ離ルレバ京師益空虚

ナラント親臣大藏卿高階泰經ヲ遣ハシ説イテ之ヲ留メシム泰經旅次ニテ語ツテ曰ク我ハ兵法ヲ曉ラズ然レモ足下ノ爲メニ一言セン夫將ハ宜シク重キヲ持シテ衆ヲ總ブ可シ先鋒ノ如キハ之ヲ偏裨ニ命シテ可ナラシ義經曰ク吾ニ志願アリ士卒ニ先ツテ命ヲ殞サハ則チ足ラント時ニ南風ニハガニ發シテ兩日歌マズ船艦多ク破ル乃チ軍ヲ駐メテ修繕ス夜ニ至ツテ天風ヲ返ス風益烈シ義經曰ク舟ヲ發セヨト舟子風ノ定マルヲ俟タント請フ義經曰ク風急ナリト雖モ順ナリ若シ風靜マリ海平ラカナラハ則チ敵必ズ警備セン今ソノ不意ヲ襲ハハ必ズ捷タント因ツテ命シテ曰ク舟子命ヲ聽カザル者ハ之ヲ殺サント伊勢義盛等矢ヲ注イテ舟子ヲ脅カス舟子大ニ警レテ乃チ舟ヲ發ス從テ所

唯田代信綱等舟五艘兵纒ニ百五十騎義經令シテ曰ク獨リ我舟ニ篝火シテ自餘ハ用キル勿レ恐ラズハ敵ヲシテ我兵ノ多寡ヲ知ラシメント舟駛キコト飛ブガ如シ常行ノ三日程ヲ丑ヨリ卯ニ至ツテ遙ニ阿波ノ尼子浦ニ抵ル義經海岸旗幟皆赤キヲ望ミ見テ從者ニ謂ツテ曰ク敵已ニ備フ卿等裝ヲ治メヨ船中馬足縮立ス恐ラシクハ急ニ用キ難カラシ宜シク先ツ馬ヲシテ舟ヨリ下シテ游ガシムベシト衆皆之ニ從フ義經衆ニ先ツテ岸ニ上リ士卒ヲ督シテ力戰シ其守將櫻間良連ヲ虜ニシ進ンデ一寨ニ抵リ守將櫻間良遠ヲ襲フ良遠衆ヲ棄テテ走ル乃チ土人ヲ召シテ地名ヲ問フ對ヘテ曰ク勝浦ト義經悦ビテ曰ク是レ吉兆ナリ軍必ズ大イニ利アラント踊躍シテ進ム路ニ甲士一百餘ノ來ルヲ見ル皆旗

幟ナシ義經以爲ラク敵軍奇チ出スト伊勢義盛チシテ馳セテ問ハシム義盛其將ト俱ニ來ル義經問フテ曰ク汝ヲ誰トカ爲ス曰ク臣ハ是レ州人近藤親家ナリ比年天下擾亂シテ未ダ屬スル所チ知ラズ竊ニ聞ク義旗本州ニ向ツテ來ルト願ハクハ麾下ニ在ツテ驅役ニ充テント義經之ヲ用キテ嚮導ト爲シ田口成直ノ兵ヲ勝宮ニ破リ即夜兵ヲ進メテ中山ニ至ル會一卒アリ書チ齋ラシテ過ク義經問フテ曰ク子何處ニカ往ク曰ク京師ヨリ屋島ニ趣ク又問フ齋ラズ所ハ何人ノ書ク匿シテ告ケズ義經給イテ曰ク我ハ是レ阿波ノ人徵ニ應ジテ屋島ニ趣クナリ聞ク九郎判官淀河尻ニ織シ日暮ニ將ニ屋島内裏チ犯サントスト子京ヨリ來ラハ必ズ其軍ヲ觀ム兵數幾ハクカアル卒義經タルチ知ラズ告グルニ



實ヲ以テシテ曰ク齋ヲス所ハ六條攝政ノ北政  
所ノ屋島内府ニ寄スル書ナリ義經曰ク書言何  
事ゾ曰ク安ソフ之ヲ知ルヲ得ン但マ囑シテ云  
フ九郎判官己ニ京師ヲ發ス九郎ハ銳將ナリ木  
曾ノ勇猛鬼神ノ如キモ一戰ニシテ之ヲ殲ス兎  
威畏ル可シ公能ク壘壁ヲ修メ徒衆ヲ聚メテ之  
ニ備ヘト意フニ書詞モ亦然ラン我ガキニ淀川  
尻ヲ過ク兵雲ヲ連ヌガ如シ君速ニ屋島ニ趣  
ケ義經又問フテ曰ク子始メテ屋島ニ赴ク乎曰  
ク政所ハ内府ノ妹ナリ平氏西奔ノ後ハ毎ニ京  
師ノ消息ヲ報ズ我屢其使ヲ爲スト曰ク然ラバ  
則チ子屋島ノ形勢ヲ審ラカニセシ我レ聞ク其  
地ニ要害アリト實ニ然ルカ否ヤ曰ク城下潮盈  
ツルトキハ則チ舟ニ非ザレバ至ル能ハズ潮退  
クハ則チ水縦ニ馬卒ノ腹ニ及ブノ其險ハ侍

ハニ足ラズト義經乃チソノ書ヲ奪ヒ卒夫樹ニ  
縛シテ去ル明日進ンテ屋島ニ至リ火ヲ奉禮高  
松ノ民家ニ放ツ宗盛兵ヲ留メテ之ヲ禦ガシメ  
帝及ビ女院ヲ奉ジテ海ニ泛フ義經城ニ薄マル  
城兵防ギ戰フ義經曰ク敵ハ衆我ハ寡利ハ火ヲ  
城外ニ縱ツテ一面ヨリ進ニ攻ムルニ在リト兵  
士ヲシテ民家ヲ燒カシム時ニ西風甚ダ急ナリ  
火延イテ城ニ及ビ煙焰天ニ漲ル城兵駭走シテ  
争ツテ舟ニ登ル義經重忠等ト六騎之ヲ追フ兵  
衆踵ギ至ル勢ヒ陪陪奮フ敵曰ク書クノ扇ヲ船  
首ニ植テ美人ヲ出シテ麾シテ以テ之ヲ射サシ  
ム船岸ヲ離ルルコト七段計リ義經重忠ニ謂ツ  
テ曰ク是レ敵我ヲ誘フナリ卿我ガ爲メニ之ヲ  
射ヨ重忠辭シ奈須與ニ宗隆ヲ以テ對フ義經  
ヲニ宗隆ニ命ズ時ニ風起ツテ船殿ス宗隆滿

持シ定マルヲ待ツ兩軍戰ヲ休メテ目ヲ注ク宗  
隆一發其柄ヲ斷ツ海陸翕然トシテ嗟賞シ謹呼  
ノ聲已マズ既ニシテ平氏船ヲ進メテ發ガリ射  
ル我兵奮戰シテ之ニ當ル敵軍稍退ク諸軍勝ニ  
乘シ竝ビ驅ツテ海ニ入ル時ニ義經數裝ヲ易ヘ  
テ鮮甲ヲ着シ人ヲシテ識別スルヲ得ザラシム  
而シテ上總景清等目ヲ注イテ相搏セント欲ス  
越中監嗣モ長鈎ヲ以テ義經ヲ鈎ラント欲ス義  
經刀ヲ揮ツテ之ヲ禦ク誤ツテ執ル所ノ弓ヲ墜  
ス將ニ之ヲ收メントス敵益迫ル後騎連呼シテ  
曰ク將軍乃チ舍テヨト義經右手ニ捍ギ蔽ヒ左  
手ニ弓ヲ取ツテ之ヲ收ム將佐皆曰ク將軍奈何  
ツ一弓ノ爲メニ不賞ノ軀ヲ輕ンズ義經曰ク吾  
何ゾ弓ヲ愛ムコトヲ爲ン我ガ弓ヲシテ叔父爲  
朝ノ執ル所ノ如クナラシメバ則チ故ヲ遺シ

テ以テ敵ニ示スモ亦可ナリ我弓ハ弱シ之ヲ遺  
サバ侮ヲ受ケン是レ我ガ危ヲ冒シテ取ル所以  
ナリト將佐歎服ス宗盛平致經ヲシテ義經ヲ狙  
撃セシム致經陸ニ上ツテ戰ヲ挑ム麾下ノ銳兵  
多ク箭ニ中ツテ死ス是夜義經牟禮高松ニ陣ス  
敵屋島城ノ遺趾ニ陣ス相距ルコト里計翌日義  
經壯士七八十騎ヲ率キテ營ニ迫ツテ力戰ス平  
氏遂ニ志度浦ニ逃ル義經追ツテ之ヲ撃ツ筑前  
箱崎ニ逃ル州人拒ンテ入レズ舟ヲ檀浦赤間關  
等ノ海上ニ遷ス熊野別當湛増軍艦二百ヲ帥キ  
來リテ義經ニ屬ス河野通信モ亦來歸ス是ニ於  
テ南海道零平ク唯田口成良阿波ヲ以テ平氏ニ  
屬ス義經其子良直ヲシテ手書シテ成良ニ降ヲ  
勸メシム成良歎キ義經ニ通ス是ニ於テ阿波ノ  
兵士皆降ル二十二日梶原景時以下舟師悉ク至



ル景時先鋒ヲラント請フ義經曰ク我在ラザレバ則チ可ナリ我豈ニ卿ニ後レシ哉景時曰ク公是レ大將軍偏裨ト先チ争フベカラズ義經曰ク所謂大將軍ハ鎌倉殿我ハ是レ軍奉行ナリ初ハ卿等ト異ナラズ嚮ニ一谷ノ役ニ鶴越ノ險ヲ侵シテ十萬ノ衆ヲ瞬間ニ破リ渡邊ヲ殺スルニ及ンデ諸將皆風濤ヲ畏レテ從ハズ我レ五艘ノ舟兵ヲ率キテ直ニ屋島ニ至リ頃刻ニシテ壘壁ヲ攻陷ス今敵亡ブルニ垂ントシテ卿ヲシテ先鋒ヲラシム可ケンヤ我レ當ニ諸將ニ先ンシテ唯雄チ一戰ニ決シ鎌倉殿ノ爲メニ報效ヲ致スベシト景時諄語シテ曰ク是人ハ將帥ノ器ニアラズト義經大ニ怒ツテ將ニ手ツカラ之ヲ亦セントス三浦義澄土肥實平等遮リ其間ヲ隔テテ極言切諫ス義經怒ヲ抑ヘテ止ム三月廿四日黎明

義經戰艦八百餘艘ヲ浮ベ進ンデ平氏ヲ海ニ攻ム山峨秀遠及ビ菊地隆直原田種直五百餘艘連射ス我兵少シク沮ム時ニ空中ニ氣アリ白旗ノ如シ我ガ舟上ニ見ハル又二ツノ白鳩アリ飛ンテ旗竿ニ集マル義經以爲テク神呪ト鹽激シテ之ヲ拜ス兵士皆悦ブ義經衆ヲ勵マシテ血戰セシム田口成良竊カニ人ヲ遣ハシ義經ニ告ゲテ曰ク御船ニ乗ル者ハ皆賤卒貴族ハ悉ク戰艦ニ在リト義經兵ヲ進メテ之ニ盛ル成良三百餘艘ヲ帥キテ之ニ應ズ敵軍大敗ス兵士勝ニ乘シテ敵船ニ亂入ス是ニ於テ二位尼按察局ト神璽寶劍ヲ挾ミ帝ヲ抱イテ海ニ投ズ母后モ亦繼テ投ズ渡邊脆長鈎ヲ以テ之ヲ鈎ス大納言典侍脆ニ謂ツテ曰ク是レ女院ナリ爾等之ヲ慎メト脆奉シテ之ヲ義經ノ船ニ送ル典侍乃チ内侍所ノ唐

櫃ヲ持ツテ將ニ海ニ入ラントス兵士船ニ入ツテ之ヲ止ム神璽モ亦浮ミ出ツ片岡經春之ヲ收ム平氏闔族海ニ投ジテ死シ宗盛及ビ子清宗能宗其他ヲ虜ニス西海平定ス義經乃チ捷ヲ京師ニ奏ス法皇大ニ悦ビ使ヲ遣ハシテ慰勞ス四月京ニ還ル朝廷靡然トシテ皆其功ヲ稱ス頼朝陰ニ之ヲ惡ム初メ頼朝範頼義經ヲ遣ハシ兵ニ將トシテ西上セシムルヤ其態度ヲ試ミノト欲シテ熱盟ヲ執ラシム範頼執ル能ハズ義經進ンデ之ヲ持テ神色自若タリ頼朝意ニコレヲ憚ル既ニシテ義經四國ノ軍事ヲ督ス梶原景時之ニ監タリ義經ツチニ景時ノ議ヲ卻ケテ自カラ專ラニス景時忿チ畜ヘ竊カニ之ヲ頼朝ニ讒ス頼朝怒ツテ書ヲ景時等ニ與ヘ密ニ將士ヲシテ義經ノ號令ヲ稟クル勿カラシム義經龜井六郎ヲ鎌

倉ニ遣シ誓書ヲ送ツテ異志無キヲ陳ス頼朝之ヲ卻ク五月義經自ラ宗盛以下ノ生虜ヲ鎌倉ニ押送ス行イテ尾張内海ニ至リ宗盛父子ヲシテ馬ヨリ下シテ七度義朝ノ墓ヲ匝ラサシメ拜泣シテ之ヲ過ク義經先ツ使ヲ遣シテ明日將ニ鎌倉ニ入ラントスルヲ報ズ頼朝北條時政ヲシテ酒勾驛ニ至ツテ俘獲ヲ受ケシム義經府ニ入ルヲ得ズ腰越驛ニ留ル景時頼朝ニ告ゲテ曰ク臣判官殿ノ舉措ヲ視ルニ終ニ人ノ下風ニ立ツ者ニ非ズト頼朝之ヲ聞イテ頗ル戒心アリ是ニ於テ義經狀ヲ作り大江廣元ニ依ツテ陳情ス頼朝遂ニ見エズ六月俘獲ヲ監シテ京師ニ歸ラシム義經大ニ望ヲ失ヒ怏怏トシテ去ル頼朝其頗ル怨言ヲ出スヲ聞イテ采地二十四所ヲ收ム八月伊豫守兼院院別當ニ任セラル頼朝地頭ヲ伊豫



ニ置キテ國務ニ預ルコトヲ得ザラシム時ニ叔父行家頼朝ト協ハズ頼朝コレヲ除カント欲ス行家匿レテ京師ニ居リ義經ト密ニ相往來ス九月頼朝梶原景季ヲ京師ニ遣ハシ義經ノ第二至リテ面ダリ行家ヲ撃ツノ命ヲ傳ヘ且ツ其形迹ヲ訶ハシム適義經病ミテ見エズ一兩日ヲ隔テテ之ニ面ス景季悉ク其意ヲ言フ義經曰ク縱ヒ強竊犯人ト雖モ義經當ニ自カラ逮捕スベシ況ンヤ行家ヲヤコレ偏裨ノ得テ制ス可キモノニアラズ我レ病ノ癒ユルヲ待ツテ徐ニ之ヲ圖ラシテ卿宜シク此意ヲ以テ歸リ報ズベシト頼朝其報ヲ聞キ益怒ツテ謂ヘラク行家ニ黨スル疑ヒナシト景時從ツテ構ヘ成シテ曰ク檀浦ノ戰ニ建禮門院義經ノ舟ニ在リト頼朝之ト姦スルヲ疑フ初メ頼朝河越重頼ノ女ヲ以テ義經ニ配ス

而シテ義經又平時忠ノ女ヲ納ル且其左衛門尉ニ任セラレ檢非違使ニ補セラル皆頼朝ノ意ニ非ズ是ニ至ツテ怨隙益甚ダシク銳意之ヲ除カント謀リ重忠等ニ謂ツテ曰ク孰カ往イテ之ヲ撃ツ者アト諸將默シテ敢テ對フル無シ頼朝乃チ土佐坊昌俊ニ命シ京師ニ往イテ密ニ之ヲ圖ラシム時ニ關東ノ將士ニ嘗テ頼朝ヲ怨ムモノアリ往往密ニ意ヲ義經ニ通ズ而シテ頼朝勢ヲ恃ミテ漸ク朝廷ヲ凌侮シ大ニ法皇ノ意ヲ失フ義經コレヲ播知シ嘗テ密奏スル所アリ法皇多ク之ヲ許可ス是ニ至ツテ義經法皇ノ宮ニ詣リ奏シテ曰ク臣嚮ニ頼朝ニ代ハリ勅ヲ奉シテ賊ヲ討チ奮ツテ身ヲ願ミズ遂ニ大功ヲ立ツ而シテ頼朝臣ヲ處スル此ノ如シ臣免レザルヲ知ル當ニ洲股ニ赴キ死チ一戰ニ決センノミ願ハク

ハ宣旨ヲ賜ヒテ頼朝ヲ討タント法皇慰諭シテ許サズ既ニシテ昌俊京師ニ至ツテ義經ニ謁セズ義經頗ル之ヲ疑ヒ使テ遣ハシテ之ヲ召ス昌俊即チ至ル義經曰ク卿何ノ故ヲ以テ來ルト昌俊伴リ云フ昌俊ハモト奈良ノ僧七大寺ニ詣ルノ宿願アリ故ニ來ルト義經晒ツテ曰ク汝ハ七大寺ニ詣ル者ニ非ズ二位ノ命ヲ奉シ來ツテ余ヲ圖ルナラン今我レ汝ヲ拘ヘント欲ス然レドモ汝ハ家兄ノ使我レ汝ニ先ゾズルヲ欲セズ是ヲ以テ敢テセズト昌俊固ク之ヲキチ陳シテ自ラ誓書ヲ書キ焚イテ之ヲ飲ム其夜昌俊兒玉黨六十餘騎ヲ率キテ六條堀河館ヲ襲フ會帳下出遊シテ在ラズ兵在ル者ハ止マ七騎義經即チ門ヲ開キ突出シテ縱橫奮撃ス敵兵披靡ス既ニシテ帳下稍來リ集リ行家モ亦來リ救フ昌俊敗走

シテ鞍馬山ニ匿ル山僧嘗テ義經ト好ミアリ故チ以テ搜索シテ義經ニ縛送ス義經責メテ曰ク汝誓詞ニ背ク何ツ神罰ヲ蒙ルノ速カナル昌俊曰ク我唯二位家ノ命ヲ奉ズ何ノ神罰カコレアラント罵言シテ已マズ義經其類ヲ批ツ昌俊神色變ゼズシテ曰ク此面ハ我面ニ非ズ二位家ノ面ナリト義經其言ヲ壯トシ意コレヲ活サント欲シテ曰ク汝鎌倉ニ還ラント欲スル乎昌俊曰ク我レ鎌倉ヲ發シテヨリ生キテ還ルヲ期セズ今不幸ニシテ囚虜タリ過カニ死スルヲ以テ榮ト爲ス亟カニ斬レト義經遂ニ之ヲ殺シ左右ニ謂ツテ曰ク人其主者ノ爲メニスル宜シク此ノ如クナルベシト兵士皆之ヲ嗟賞ス義經遂ニ行家ト宣旨ヲ苦請ス法皇已ムヲ得ズシテ之ヲ許ス初メ頼朝安達清經ヲ以テ義經ニ屬シ以テ之



ヲ用シシム其實ハ則チ間者ナリ昌俊敗ルルニ  
 及ビ清經鎌倉ニ走ツテ之ヲ報ズ是ニ於テ賴朝  
 親ラ諸將ヲ將テ行家義經ヲ擊タントシ兵ヲ進  
 メテ黄瀬川ニ至ル義經將ニ鎮西ニ避ケントシ  
 高階泰經ニ就キ法皇ニ奏シテ曰ク臣今留ツテ  
 東兵ヲ禦ガバ則チ京師ヲ騷擾セシム是ヲ以テ之  
 ナ鎮西ニ避ク願クハ請フ院宣ヲ賜フテ以テ九  
 州ノ人ニ視サント法皇又之ヲ許ス十一月三日  
 行家等ト遂ニ鎮西ニ如ク賴朝義經既ニ京師ヲ  
 離ルト聞イテ鎌倉ニ還ル義經ノ京師ヲ宿衛ス  
 ル專ラ循謹上ニ奉シ威恩兼行ハルヲ以テ士民  
 之ヲ稱ス京師ヲ去ルニ及ビテ人皆惜シム往イ  
 テ攝津河尻ニ至ル州人多田行綱兵ヲ帥シテ之  
 ナ要ス義經擊ツテ之ヲ破リ進ンデ大物浦ニ至  
 ヲテ船ヲ發ス會大風暴ニ起ツテ舟船漂蕩シ行

家ト相失ス從フ所ノ者源有綱及ビ堀景光辨慶  
 妾靜ヲシ法皇賴朝ノ憤リヲ懼レテ美作ノ國司  
 ニ令シテ行家義經ヲ討タシム官符義經ノ名右  
 大臣藤原兼實ノ子良經ニ嫌アルヲ以テ改メテ  
 義行ト爲シ又義顯ト改メテ所在ニ逮捕セシム  
 義經途ニ颯風ニ遇フテ西海ニ赴クヲ得ズ大和  
 ニ走ツテ吉野山ニ匿ル執行覺範之ヲ覺リ惡僧  
 ナ率シテ搜索ス義經留ルコト五日遂ニ多武峰  
 ニ走リ十字坊ニ投ズ主僧之ヲ待スル甚ダ厚シ  
 乃チ義經ニ謂ツテ曰ク此山ハ狹隘ニシテ僧徒  
 亦寡シ恐ラクハ君跡ヲ秘シ難カラシム津河ノ  
 地ハ險ニシテ人馬輒ク通ズルヲ得ズ君ツレ行  
 ケト乃其徒八人ヲシテ之ヲ護送セシム義經又  
 京師ニ還ツテ竄匿スルコト數月三年二月妻河  
 越氏及ビ從者ト修驗者ト爲ツテ北陸道ヲ經テ

陸奥ニ至リ又秀衡ニ依ル秀衡之ヲ衣川ニ館ス  
 其冬秀衡卒ス終ニ臨ミ長子泰衡等ニ遺言シ義  
 經ヲ推戴シテ大將軍ト爲シ專ラ國事ヲ聽カシ  
 ム五年賴朝密ニ泰衡ヲシテ義經ヲ圖ラシム閏  
 四月晦泰衡兵ヲ遣ハシテ衣川ヲ襲フ鷲尾經春  
 等力戰シテ死ス是ニ於テ義經妻子ヲ刺殺シテ  
 自殺ス。時ニ年二十一。泰衡首ヲ鎌倉ニ傳フ。  
 見ル者皆涙ヲ墮ス。義經兵ヲ用サル神速人能  
 シ及フコト莫シ故ニ義仲ヲ翦シ平氏ヲ殄スル  
 功效ハナハダ亟ナリ而シテ賴朝ノ爲メニ忌マ  
 レテ終ニ軀ヲ喪フニ至ル世皆傳ヘテ其兵略ヲ  
 稱ス或ハ云フ義經蝦夷ニ逃レ支那ニ渡リ清帝  
 ノ始祖トナルト此事ニ就キ或古老ノ談ニ曰ク  
 德川氏ノ初ニ當リ鄭成功ガ支那ノ南方ニ據リ  
 大ニ清廷ヲ惱メタル折リ鄭氏ノ母ハ日本人ナ

レハ其縁ニ依リ日本政府ノ鄭氏ヲ援ケンモ測  
 リ難シト清廷ノ有司ハ懼テ懷キ爲ニ一介使ヲ  
 走テ我皇ノ祖先ハ貴國ノ人ニテ我皇ハ實ニ其  
 後裔ナレハ爾後ハ隣交ヲ結ビ名ハ兩國ノ帝ナ  
 レドモ誼ハ兄弟ノ如クナルベシト文書禮物ヲ  
 供ヘテ幕府ニ贈リ且ツ此ハ我が祖先ノ着用セ  
 シモノニシテ傳家ノ重寶ナリ然レドモ今前言  
 ナ證スル爲メ之ヲ贈ルト古キ日本製ノ鎧ノ草  
 摺一片ヲ添越タルヨシ其草摺并ニ文書ハ久シ  
 ク幕府ノ庫中ニ秘メ置カレシガ此程德川家ヨ  
 リ宮内省ヘ獻納セラレタリトカ聞ク果タシテ  
 然ラハ奇談ト云フベシ又小松弘毅ト云ヘル儒  
 者ノ言ニ曰ク嘗テ古書ヲ閱シテ森助右衛門著  
 ノ國學具忘ナルアリ清所編ノ圖書集成全部一  
 萬卷アリ寶曆十庚辰清人汪繩武齋來リシナ明



和元甲申官庫ニ納ム其書中國書輯勘ト云ヘル書百三十卷アツテ清帝ノ自序ヲ載セタリ其文ニ朕姓源、義經之裔、其先出清和、故號清國ト記セルヲ東都ノ中良虞臣父ト云フ人見テ圖書集成ヲ檢シ初卷ニ雍成帝御序アリ次ニ蔣廷錫ガ表文アリ總目ヲ閱スレドモ輯勘ト云フ書名モ無シ大ニ望ヲ失フト桂林漫錄ニ記セリ是ヨリ先ニ伊藤蘭嶋僧智景耀ノ記ニ明命三丙戌五月新渡圖書集成六百套九千九百九十六卷中有輯勘錄三十卷、第二十序云乾隆皇帝述、我姓源、義經裔其先清和、姓源、故國號清、トアルヲ寫シテ斯文學會諸先生ニ質シテ曰ク方今清朝ト交際ノ一助ニモ成ルベシ確乎タル明證ヲ請フト蒲生重章君ノ尊報ニ云余質之清國公使黎庶昌、云我皇上之先出金源之後、與貴邦源氏

無涉ト疑疑團猶々解ケズ森氏伊藤氏智景耀三人見テ同シシテ只庚辰ト丙戌トノ年歴異ノ圖書集成ノ書アツテ輯勘ノ篇無キ不審ナリ然ルニ近頃金史列將傳ニ據ツテ清祖ハ義經ノ裔ナルコトヲ發見ス黎庶昌ノ所謂ル金源モ符合セリ其傳ニ云ク範車大將軍源光録者、日東陸華山、權冠者源義經之子也、其先義經奔于蝦夷、領土人、至于金而事帝宗、帝宗詔命光録太夫、累任大將軍、久守範車城、鎮北方云、ト然レ其果ヨシテ然ルヤ否ヤ未ダ判然セズ。

みなものよとも 源義朝

左衛門大尉爲義ノ長子。板東ニ成長ス。驍武ニシテ勇畧アリ下野守ニ任ゼラル保元元年鳥羽法皇崩ズ崇徳上皇兵ヲ白河殿ニ集メ以テ再ヒ天位ニ登ランコトヲ圖ル是ヨリサキ法皇像

ヲ亂ノ起ランコトヲ知リ手ツカテ將帥十人ノ名ヲ録シテ之ヲ美福門院ニ付ス義朝其首ニ居ル難起ルニ及ビテ爲義諸子ヲ帥キテ白河殿ニ赴ク義朝獨リ禁内ニ赴ク後白河帝義朝ヲ召シテ謀ヲ諮フ義朝奏シテ曰ク勝ヲ一時ニ取ルハ夜戰ニ若カズ帝之ニ從ヒ授クルニ大將ノ任ヲ以テシ且ツ曰フ他日汝ニ昇殿ヲ聽サント義朝曰ク士ノ戰場ニ赴ク何ゾ餘命ヲ期センヤ若シ敕許ヲ蒙ラバ即チ今昇殿シテ以テ素願ヲ遂ゲンノミト戎服シテ殿階ニ昇進ス少納言信西曰ク父爲義見ニ檢非違使タリ而シテ今其子ヲ以テ昇殿ヲ聽ス恐ラクハ國典ヲ虧カン帝曰ク亂ヲササメ難ヲ靖ンズルハ武將ニアラズシテ誰ト與ニカセン必ズ常制ニ拘ハルナカレト義朝感喜シテ出ツ乃チ執ル所ノ鞭ヲ以テ命シテ之

ヲ階下止車ノ所ニ擊ガシム兵士之ヲ怪シム義朝曰ク我レ今日昇殿ヲ得若シ命ヲ敵鋒ニ損カハ誰レカ此賞アルヲ知ラン故ニ此クノ如クスト乃チ精騎四百餘ヲ率キテ大炊御門河原ニ陣シ平清盛ト夜ニ乘シ並ビ進ンテ之ヲ攻ム賴賢爲朝激ヘ戰フ義朝兵ヲ縱ツテ急ニ擊ツ爲朝等退イテ白河殿ヲ守ル既ニシテ天曙ク義朝火ヲ上風ニ縱ツテ之ヲ燒ク白河殿遂ニ陷ル上皇倉皇宮ヲ出ツ義朝之ヲ追ツテ及バズ逃兵法勝寺ニ匿ルト聞キ就イテ之ヲ索ム復タ得ズ之ヲ焚カント請フ許サズ義朝闕ニ詣ツテ捷ヲ奏ス帝功ヲ賞シテ左馬權頭トナス義朝コレヲ欲セズ乃チ陳情シテ正チ臨ム帝之ヲ然リトシテ左馬頭ニ遷ス既ニシテ帝平清盛ヲシテ爲義等ヲ捜索セシム爲義病ミテ遠ク遁ルルコト能ハズ潛



ニ義朝ノ所ニ來ツテ生ヲ祈ル是時清盛ノ叔父忠正等上皇ノ徵ニ應シ軍敗ルルニ及ンデ清盛ニ就イテ降ヲ請フ清盛雅ニ忠正ト協ハズ且ツ義朝ヲシテ爲義ヲ殺サシメント欲シ遂ニ忠正ヲ斬ル帝義朝ニ命シテ爲義ヲ誅セシム義朝屢コレヲ宥サンコトヲ請フ帝怒ツテ曰ク清盛既ニ叔父ヲ殺ス汝何ツ命ヲ拒ム若シ遲回セハ朕清盛ニ命シテ之ヲ誅セシメント義朝悲懼シテナス所ヲ知ラズ其臣鎌田政家ヲ召シテ之ヲ謀ル政家曰ク判官殿既ニ朝敵タリ終ニ戮ヲ免ル可カラズ其他人ノ手ニ死ナシメントヨリハ自カラ之ヲナスニ如カズト義朝意決ス乃チ政家ヲシテ爲義ヲ給カシメテ曰ク義朝清盛ノ功ニ何ノ優劣アラント意ハザリキ朝議覺カニ清盛ノ下ニ出ツ義朝亦何ノ顔アツテ之ニ堪ヘン將

ニ大人ヲ奉シテ關東ニ奔ラントス恐ラシハ道路梗澁シテ群行スベカラズ義朝當ニ驛路ニ由ツテ去ラン大人宜シク紀伊ヨリ舟行スベシト爲義之ヲ信シ車ニ乗テ出ツ七條朱雀ニ至ツテ政家之ヲ斬ル義朝首ヲ奉シテ關ニ詣ル尋イテ其弟五人ヲ殺ス清盛族ヲ擧ツテ重賞ヲ受ケテ其親臣信西ニ因縁シテ羽翼漸ク成ル義朝嘗テ信西ノ子是憲ヲ以テ婿ト爲サント欲ス信西肯セズ義朝之ヲ銜ム帝位ヲ二條帝ニ禪ルコ及ンデ仍ホ機務ヲ躬ラシ寵臣藤原信賴雅ニ信西ト隙アリ義朝ノ内ニ不平ヲ懷ク知リ引イテ己ガ黨ト爲シ謀ツテ信西ヲ除カント欲シ毎ニ義朝ニ遇ヘハ好言之ヲ遇ス義朝悅ビテ深ク相結約ス平治元年十二月清盛熊野ニ如ク信賴以爲ラク時ヲ得タリト乃チ義朝ニ説キ兵ヲ擧ゲ

シム義朝許諾シ且ツ曰ク吾ガ族賴政光基等モ亦々常ニ此隙ヲ窺フ明公宜シク此輩ヲ招イテ相謀ルベシト信賴大ニ悅ビ即チ贈クルニ寶刀駿馬ヲ以テス義朝厚ク謝シ遂ニ謀ヲ合シテ兵ヲ擧グ義朝信賴ト五百餘騎ヲ帥キ直ニ進ンデ三條殿ヲ犯シ火ヲ上風ニ縱ツ百司宮女死傷奔竄ス信西ノ西洞院ノ宅ヲ焚キ信西ノ服ヲ變シテ逃出センコトヲ恐レ多ク婢妾ヲ殺シ帝及ヒ上皇ヲ宮中ニ幽ス信賴乃チ禁内ニ據ル自ラ大臣大將ト爲リ義朝ヲ從四位下ニ叙シ之ニ播磨ヲ與ヘ仍ツテ守ニ任ズ清盛途ニ變ヲ聞キ急ニ京師ニ還ル藤原經宗藤原惟方ト謀ヲ合シ帝ヲ奉シテ清盛ノ六波羅第ニ潛幸ス上皇モ亦仁和寺ニ幸ス信賴大イニ懼レテ將士ノ亡去センヲ疑ヒ見兵ヲ檢籍スルニ猶ホ二千餘騎アリ義朝

又賴政光基ノ貳心ヲ懷揣スルヲ察シ殺シテ之ヲ除カント欲ス然レドモ内亂ヲ致サンコトヲ恐レテ止ム既ニシテ清盛子重盛弟賴盛ヲシテ兵三千ニ將トシテ來リ攻メシム重盛待賢門ニ向フ信賴人ト爲リ恇懦一矢ヲ發セズ守ヲ棄テテ走ル重盛進ンデ大庭ノ棕樹下ニ至ル義朝呼ンデ曰ク惡源太ハ在ラザル乎信賴ノ怯弱既ニ既ニ敗ル汝速カニ擊ツテ之ヲ卻ケト義平等乃チ精銳十六騎ヲ率キ力戰シテ之ヲ卻ク賴盛郁芳門ヲ攻ム義朝縱橫奮戰ス賴盛引イテ去ル勢ニ乗シテ追撃ス官軍間ヲ窺ツテ禁内ニ突入ス義朝還ル能ハズ進ンテ六波羅ヲ攻ム會賴政官軍ニ屬シ義平敗レテ退ク義朝士馬俱ニ疲レテ進退措テ失シ死ヲ一戰ニ決セントス政家固ク諫ム義朝兵ヲ引イテ退ク官軍後ヲ躡ミテ三條



河原ニ至ル政家軍士ニ謂ツテ曰ク頭殿今思フ所アルガ爲メニ故ラニ避ク卿曹暫ラシ後拒チ爲セト平賀義信等馬ヲ旋シテ力戦ス義朝間チ得テ去ル千束ニ至ル比ヒニ比叡山西塔ノ僧兵群聚シテ遮ギル義朝齋藤實盛ノ奇策ヲ以テ僅ニ脱去スルヲ得タリ信賴モ亦奔逃シテ來リ與ニ俱ニ東行セント欲ス義朝怒ツテ之ヲ毆辱ス會横川ノ僧兵皆ヲ龍華越ニ設ケテ之ヲ要ス從士皆馬ヨリ下リ鹿角ヲ破ツテ過ク僧兵注射スルコト雨ノ如シ義朝大ニ怒リ衆ヲ屬マシテ奮撃ス殺傷頗ル衆シ僧兵潰走ス進ンテ堅田浦ニ至リ直ニ湖ヲ渡ラント欲ス風濤大イニ起ル因ツテ轉シテ路ヲ勢多ニ取ル義朝從士ヲシテ道ヲ分ツテ去ラシム衆皆從ハシコトヲ請フ許サズ實盛等二十餘人コレヨリ辭シテ去ル唯ダ義

平朝長賴朝及ビ源重成平賀義信鎌田政家及ヒ金王從ヒ行イテ鏡驛ニ至リ敵不破關ヲ守ルト聞キ更ニ小關ヨリ小野ニ抵ル時ニ大ニ雨雪シ馬縮慄シテ前マズ義朝及ビ從士甲ヲ脱シテ徒歩ス艱苦辛楚纒ニ美濃青墓驛ニ至リ富姫大炊ノ家ニ投ズ再ビ兵ヲ舉ゲテ平氏ヲ撃タント欲シ義平朝長ニ各道ニ分遣シテ兵ヲ募ル義朝嘗テ大炊ノ女延壽ト嬖シテ一女ヲ生ム故チ以テ大炊供給スルコト甚ダ厚シ邑人之ヲ聞キ群起シテ之ヲ圍ム重成義朝ニ謂ツテ曰ク我レ當ニ此ニ死シテ公ノ爲メニ圍ヲ潰エント乃チ單騎ニシテ衝突シ遂ニ林中ニ入り詐ツテ義朝ト稱シ射テ十餘人ヲ殺シ自ラ其面ヲ劊ギ腹ヲ劊イテ死ス是ニ縊ツテ義朝脱スルコトヲ得尾張野間ノ長田莊司平忠致ニ就キ鎧馬ヲ乞フテ關東

ニ赴カント欲シ又義信ヲ遣ハシテ兵ヲ募ラシム義信曰ク忠致ハ資力多シト雖モ其人時ニ趨リ勢ニ附ク情偽保スベカラズト義朝從ハズシテ曰ク忠致ハ政家ノ婦翁ナリ我レ其他無キヲ保ス汝深ク猜疑スル莫レト遂ニ意ヲ決シテ赴ク然レドモ道路梗塞ス義朝之ヲ患フ大炊ノ兄平三眞遠素ト俟チ以テ聞ユ政家ノ計ヲ以テ金王ヲ遣ハシテ之ト相謀ル源光悅ビテ身ヲ具ヘ義朝政家ヲ載セ之ヲ覆フニ柴ヲ以テシ河ニ浮ブ津吏疑ツテ之ヲ止ム源光聞カザル爲チシテ過ク津吏益怪ミ船中ヲ索搜ス源光窘迫シテ義朝ニ自裁ヲ諷ス義朝政家ニ耳語シテ曰ク源光我ニ死ヲ勸ムト政家曰ク姑ラク之ヲ待テト津吏モ亦探究セズシテ去ル明日内海ニ至ル忠致之ヲ侍スルハナハダ厚シ義朝夙ニ發セント欲

ス忠致固ク留メテ曰ク明日ハ元旦請フ三日ヲ過ギテ發セヨト義朝其意ニ違フコト能ハズ遂ニ信宿ス忠致其子景宗ト密カニ義朝ヲ殺サシコトヲ謀リ三日ノ夕ニ及ビテ爲メニ湯沐ヲ具ヘ壯士三人ヲ浴室ニ伏セ隙ヲ窺ツテ之ヲ刺サントス時ニ金王兵ヲ執ツテ浴ニ侍ス故チ以テ發スルコトヲ得ズ義朝浴衣ヲ求ム久シウシテ進メズ金王往イテ之ヲ取ル壯士間チ得テ入ル義朝曳イテ其一人ヲ倒ス二人左右ヨリ刺シテ之ヲ殺ス時ニ年三十八金王走り還リ立所ニ二人ヲ斬ル源光金王忠致父子ヲ覓メテ獲ズ乃チ數人ヲ殺傷シテ去ル忠致首ヲ京師ニ傳ヘ之ヲ左獄ノ樗樹ニ梟ス染工五郎ト云フ者嘗テ義朝ノ思願ヲ蒙ル因ツテ請フテ之ヲ左獄ノ門側ニ瘞ム後チ賴朝之ヲ迎ヘテ勝長壽院ヲ創シ之ヲ



收葬ス。子義平、朝長、頼朝、義門、希義、範頼、全成、義圓、義經。

みなもこのよしなか 源義仲

木曾冠者ト稱ス。小字ハ駒王丸、左衛門大尉爲義ノ孫、父ハ義賢久壽二年姪義平ノ爲メニ殺サル義仲ハ其第二子ナリ時ニ僅カニ二歳義平其後患ヲ爲サンコトヲ慮リ畠山重能ニ囑シ搜捕シテ之ヲ殺サントス重能其孤弱ヲ憐ミ之ヲ殺スニ忍ビズ會齋藤實盛武藏ニ來ル重能密ニ其情ヲ告ケ駒王ヲ以テ之ニ託ス實盛之ヲ匿スコト七日是時東國ノ人士ハ多ク義朝ノ部下ナリ實盛終ニ免ルヘカラザルヲ度リ之ヲ信濃ニ送ツテ其乳母ノ夫中原兼遠ニ託ス兼遠心ヲ傾ケテ鞠育シ木曾山ノ下ニ居ラシム保元平治ノ亂ニ源氏ノ門族死亡シテ畧盡キ兵馬ノ權悉ク平氏ニ歸ス義仲幼ナリト雖モ心ニ深ク家門ノ衰弊ヲ痛ミ慨然トシテ宗黨ノ爲メニ復讐スルノ志アリ遊戯常ニ武技ヲ肆ヒ起居應對群兒ニ異ナリ郷里目ヲ屬ズ長ズルニ及ンテ軀幹魁偉膂力衆ニ過ギ兼テ騎射ヲ善クシ飛鳥走獸射テ中ラザルナシ兼遠意ラク天授ナリト年十三高祖義家ノ故事ヲ襲ギ石清水ニ詣ツテ自ラ元服ヲ加ヘ更メテ義仲ト名ヅケ木曾次郎ト稱ス屢京師ニ往來シテ平氏ヲ伺フ治承四年以仁王兵ヲ起シテ平氏ヲ討タントシ令ヲ諸國ノ源氏ニ下ス義仲從父兄頼朝ト之ニ應ジ兵ヲ信濃ニ集ム一旬ニシテ一千餘ニ至ル平宗盛聞イテ大ニ懼レ中原兼遠ヲ召シ之ヲ責メ命ヲテ義仲ヲ縛セシム兼遠詐ツテ之ヲ許シ信濃ニ還ツテ義仲ヲシテ根井幸親ニ依リ檄ヲ四境ニ移シテ

衆ヲ募ラシム屬スル者頗ル多ク聲勢日ニ振ルフ九月頼朝兵ヲ石橋山ニ舉グ義仲之ニ應ゼント欲ス時ニ笠原頼直將ニ義仲ヲ攻メントス義仲ノ黨村上義直等之ヲ市原ニ邀ヘテ利ヲ失フ義仲兵ヲ發シテ赴キ援ク頼直戰ハズシテ走ル義和元年六月城長茂來リ擊ツ義仲族人井上光盛等ト夾ミ擊ツテ大ニ之ヲ破ル長茂奔ツテ越後ニ還ル義仲追ツテ國府ニ到ル州兵降ル者相屬ス九月平通盛平經正兵ヲ率キテ來リ攻ム義仲大ニ之ヲ越前ニ敗ル越前越中加賀ノ豪傑之ヲ聞イテ大ニ懼レ相率キテ來リ附ク義仲其詐アルヲ疑フ新附ノ兵乃チ誓書ヲ進ム義仲大ニ悅ンテ良馬ヲ與フ人各一匹是ヨリ北陸道悉ク義仲ニ歸ス兵勢益張ル武田信光ハ義仲ノ疎族ナリ女ヲ以テ義仲ノ子義高ニ妻ハシ以テ其歡

心ヲ結ハント欲シ使テ遣ハシテ意ヲ致ス義仲喜バズ答ヘテ曰ク女アラハ將ニ之ヲ志水冠者ニ與ヘテ巾櫛ヲ執ラシメントス定メテ匹敵トナス如キハ則チ我願ハザル所ナリト信光怒ツテ遂ニ義仲ヲ頼朝ニ問ス曰ク故小松殿ニ女アリ宗盛之ヲ子トス以テ義仲ニ妻ハサント欲シ潜ニ書信ヲ通ズ義仲既ニ之ヲ許スト頼朝聞イテ大ニ怒ル時ニ叔父行家頼朝ト隙アリ奔ツテ義仲ニ依ル頼朝愈怒リ兵ヲ率キテ信濃ニ赴ク義仲將士ヲ召シテ之ヲ議ス樋口兼光等曰ク事既ニ此ノ如シ宜シク富部大井ニ據リ壘ヲ固クシテ之ヲ拒グベシト義仲沈思之ヲ久シウシテ曰ク保元以來我宗族動モスレハ骨肉相食ミ笑チ人ニ取ル今平氏未ダ滅セザルモ兵衛佐ト怨ヲ結ブハ計ノ得タル物ニアラズ我暫テ之ヲ



避ケント乃チ越後ニ往ク頼朝義仲ノ去ルヲ聞  
キ亦兵ヲ引イテ武藏ニ還リ使チ義仲ニ遣ハシ  
テ曰ク頃口聞ク藏人身ヲ足下ニ託シ足下之ヲ  
庇ヒテ疑ハズト未ダ足下ノ意如何ヲ審ニセズ  
若シ貳心無クンハ捕ヘテ藏人ヲ送レ然ラザレ  
ハ志水冠者ヲシテ來ラシメ吾レ之ヲ子トシ養  
ハシ二者聽レズンハ當ニ足下ト獵ニ會セント  
義仲又之ヲ議シ遂ニ小室忠兼ノ言ヲ用キテ義  
高ヲ遣シ任子ト爲ス義仲悉ク兵士ノ妻ヲ召シ  
謂ツテ曰ク右兵衛佐質ヲ我ニ徵ス拒ミテ致サ  
ザレハ必ズ來リ撃タシ然ラハ則チ汝曹夫婦命  
ヲ鉾鏑ニ損サン故ニ我愛チ割イテ兒ヲ鎌倉ニ  
質トスト衆婦皆泣イテ謝ス壽永二年四月平維  
盛等大舉シテ來リ撃ツ義仲其將仁科守弘林光  
明等ヲ越前ニ遣シ燈山城ニ據ラシム平泉寺ノ

長吏齊明徒屬ヲ率キテ來リ屬ス城ハ北陸第一  
ノ要害タリ木石ヲ填メテ日野河ニ塞ス敵進ム  
コト能ハズ相持スルコト數日齊明我兵寡少ニ  
シテ遂ニ保ツベカラザルヲ度リ乃チ箭書ヲ敵  
軍ニ射テ其竊ニ堤ヲ決センコトヲ教ヘテ其兵  
ヲ導ク敵軍競ヒ進ンテ之ヲ攻ム城陷ル敵軍勝  
ニ乘ジテ遂ニ諸城ヲ陷ル五月維盛平盛俊ヲ遣  
ハシテ般若野ニ屯セシム義仲今井兼平ヲシテ  
撃ツテ之ヲ走ラス義仲越後ヲ發シテ越中ニ入  
リ衆五萬ヲ得テ無効寺ニ至リ兵器ヲ簡ミ軍士  
ヲ勒シテ白山社ニ詣リ僧覺明ヲシテ文ヲ作ツ  
テ大捷ヲ禱ラシメ進メテ般若野ニ至ル維盛等  
猿馬場ニ陣シ兵十萬ヲ分ツテ蠣波志雄二道ヨ  
リ並ビ進ンテ將ニ越中ニ入ラントス義仲兼平  
ニ謂ツテ曰ク敵軍遠ク來ツテ疲弊ス逸キ以テ

勞ヲ待ツ一戰シテ破ルベシト乃チ兵ヲ分ツテ  
七隊ト爲シ自ラ精兵三萬ニ將トシテ小矢部河  
ヲ渡ツテ埴生ニ屯ス傍ニ神祠アリ州人ニ問フ  
曰ク八幡ノ社ナリト亦覺明ヲシテ文ヲ作ツテ  
捷ヲ禱ラシム時ニ白鳩アリ旗竿ノ上ヲ翔ル義  
仲馬ヨリ下ツテ拜伏シ進ンテ黒阪ニ陣ス敵ト  
相距ルコト百餘步射戰スルコト終日義仲夜ニ  
乘シテ之ヲ襲ハント欲シ故サラニ其期ヲ緩ク  
ス昏ニ及ンテ樋口兼光ヲシテ中山ヨリ鼓噪シ  
テ進マシメ又兼平幸親ヲシテ南北黒阪ヲ繞ツ  
テ進マシメ義仲近村ノ牛四五百ヲ驅リ炬ヲ角  
ニ縛シ策ツテ之ヲ縱チ軍士其後ニ隨ヒ鼓噪衝  
突シテ山谷ヲ震動ス敵軍擾亂シ争ツテ南壑ニ  
赴キ崖谷ニ投ジテ死スルモノ一萬八千餘人  
馬相踐ニ屍ヲ積ンテ山ヲ成ス維盛ワヅカニ免

レ敵卒ヲ收メテ加賀ニ走リ宮腰佐良嶽ヲ保ツ  
源行家志雄山ニ向ツテ軍利アラズ義仲自ラ騎  
四萬ヲ率キテ之ニ赴ク敵將平盛俊維盛敗ルト  
聞キ佐良嶽ニ奔ル義仲北ルヲ追ツテ加賀ニ至  
リ平岳野ニ陣ス兩軍兵馬ヲ休メ相持シテ戰ハ  
ズ會義仲ノ芻者敵ノ偵人ノ爲メニ獲ラル者  
給テ曰ク今夜將ニ來リ襲ハントスト敵軍大ニ  
懼レ兵ヲ收メテ宵遁レ安宅ニ至ル河水大ニ漲  
ル溺死スル者千餘人翌日橋ヲ斷ツテ據守ス六  
月義仲行家ノ軍ヲ合シ進ンテ安宅渡ニ至ル時  
ニ水濁ツテ底ヲ見ズ衆濟ルコトヲ得ズ林光明  
馬十匹ヲ放ツテ之ヲ試ム水僅ニ馬腹ニ及ブ義  
仲衆ヲ麾イテ濟リ大ニ篠原ニ戰ツテ瀨尾兼康  
等ヲ獲敵軍敗走ス義仲長驅シテ成合並松ニ至  
リ連ニ之ヲ破ル敵大ニ潰ニ間道ヨリ京師ニ遁



レ還ル義仲虜囚齊明ヲ斬リ兼康ヲ釋ス兼平諫  
 メテ曰ク兼康瞻視常ニ異ナリ殺サザレハ必ズ  
 後患ヲ爲サント義仲聽カズ既ニシテ義仲行家  
 將ニ京師ニ入ラントシテ越前國府ニ至リ諸將  
 ト議シテ曰ク聞ク叡山ノ僧兵險ニ據ツテ備ヲ  
 設クト我レ輒ク京師ニ入ルヲ得ズ如何シテ可  
 ナラント覺明日ク設令平氏山徒ヲ誘ヒ啗ハシ  
 ムルニ厚利ヲ以テスルモ三千ノ衆徒豈ニ一ニ  
 心ヲ悉サン乎其間志ヲ我ニ通ズル者未ダ必ズ  
 シモ之無クンハアラズ請フ牒シテ之ヲ誘ハン  
 ト義仲之ニ從ヒ進ンデ近江蒲生ニ至リ山徒ノ  
 報ヲ待ツ延曆寺ノ僧幸明雅ニ覺明ト善シ來ッ  
 テ覺明ヲ見ル義仲之ニ謂ツテ曰ク請フ子急ニ  
 去ツテ我が爲ニ衆徒ヲ曉諭セヨ衆徒我ニ從ハ  
 ハ火ヲ山上ニ舉ケ以テ信ト爲セト幸明還ツテ

義仲ノ意ヲ諭ス衆徒悉ク應ズ義仲大ニ喜ビ湖  
 ヲ渡リ山ニ登ツテ總持院ニ次ス平氏大ニ懼レ  
 義和帝ヲ奉シテ西海ニ出奔ス義仲行家京師ニ  
 入ツテ法皇ニ蓮華王院ニ謁シ面タリ平氏ヲ討  
 ツノ宣旨ヲ奉ズ是ヨリサキ源賴朝鎌倉ニ居テ  
 關東ヲ畧定ス法皇功ヲ論シテ賴朝ヲ第一トシ  
 義仲ヲ第二トシテ從五位下ニ叙シ左馬頭ニ任  
 シ越後守ト爲ス義仲悅ハズ乃チ改メテ伊豫守  
 ニ任シ院ノ昇殿ヲ聽ス法皇諸平ノ故地五百餘  
 所ヲ籍シ共一百四十所ヲ以テ義仲ニ賜フ行家  
 將士ヲ賞センコトヲ請フ義仲聽カズ八月法皇  
 義和帝ノ西海ニ播遷セルヲ以テ更ニ立ツ所ヲ  
 議セシム議スル者或ハ謂フ故三條宮ノ子北陸  
 宮宜シク大位ニ即クベシト北陸宮嘗テ僧ト爲  
 ツテ亂チ北國ニ避ク義兵起ルニ及ンデ義仲之

ヲ奉シテ京師ニ入ル是ニ至ツテ義仲モ亦其ヲ  
 シテ帝位ヲ踐マシメント欲シ大藏卿高階泰經  
 ニ因ツテ之ヲ啓ス法皇モト高倉帝ノ二皇子ヲ  
 擇ンデ之ヲ立テント欲ス而シテ其妻ニ違フヲ  
 難ンシ乃チ僧俊堯ニ命ジ義仲ノ意ヲ揣ツテ之  
 ヲ諭サシム義仲復奏シテ曰ク故三條宮ハ義ヲ  
 唱ヘ功業成ラズト雖モ大義己ニ天下ニ伸ブ今  
 ツノ胤子ヲ棄テテ更ニ立ツル所ヲ議セハ義ニ  
 赴クノ將士將ニ何ノ所ニカ望マントスト法皇  
 廷臣ニ下シテ議セシム議決セズ官僚ニ命ジテ  
 高倉ノ二皇子及ビ北陸宮ヲトセシム四宮吉ナ  
 リ遂ニ四宮ヲ立ツ義仲大ニ怒ツテ曰ク事既ニ  
 此ノ如シ三條宮ノ爲メニ痛恨セザルベケンヤ  
 ト既ニシテ義仲漸ク驕恣部下ノ兵京師ニ縱橫  
 シテ院御領以下公卿ノ莊田ヲ損害シ民家ノ資

財ヲ掠奪ス京師騷然タリ法皇將ニ賴朝ヲ召サ  
 ントス義仲悅ハズ邀ヘテ之ヲ拒ガント欲ス賴  
 朝使ヲ遣ハシテ義仲ノ己ヲ討タント欲スルヲ  
 訴ヘ且ツ身ノ京師ニ入ルベカラザル便宜ヲ陳  
 ブ是ニ於テ法皇義仲ニ上野信濃二國ヲ賜ヒ其  
 掠暴ヲ弭メシメ賴朝義仲ヲシテ和解セシメン  
 ト欲シ乃チ其意ヲ賴朝ニ諭ス時ニ平氏屋島ヲ  
 保ツ行家之ヲ討タント請フ法皇之ヲ許ス義仲  
 奏シテ曰ク行家勇ハ則チ勇ナリ然レドモ屢敗  
 屢ヲ取レリ宜シク更ニ其人ヲ選ムベシト法皇  
 改メテ義仲ニ命ジ手ヅカラ御劔ヲ取ツテ之ヲ  
 賜フ義仲京師ヲ發シテ播磨ニ至リ先ヅ足利義  
 清等ヲ遣ハシテ之ヲ擊タシム十月義仲播磨ヨ  
 リ將ニ備中ニ赴カント瀬尾兼康ヲ以テ嚮導ト  
 爲ス兼康畔キ板倉ニ據ツテ拒守ス義仲大ニ怒



リ急ニ攻メテ之ヲ殺シ進ンテ屋島ヲ攻メント  
 ス適頼朝弟義經ヲ遣ハシ兵數萬ヲ帥キテ京師  
 ニ入ラシムト聞キ兵ヲ引イテ還ル法皇使ヲ遣  
 ハシテ之ヲ止ム義仲詔ヲ奉セズ遂ニ京師ニ還  
 リ以テ義經ニ備フ乃チ法皇ニ奏シテ曰ク水島  
 ノ戰ニ平氏一旦利ヲ獲ルト雖モ勢ヒ久シキコ  
 ト能ハズ山陰道ノ兵士多ク備中ニ在リ以テ之  
 チ禦グニ足ラン陛下復タ之ヲ憂フル勿レト義  
 仲行家ト竊ニ法皇ヲ奉シテ北國ニ赴カント謀  
 ル行家從ハズシテ密ニ之ヲ告ク法皇驚イテ法  
 印靜賢ヲ遣ハシテ義仲ヲ諭サシム義仲以爲ラ  
 ク行家之ヲ泄ラスト乃チ法皇宮ニ詣ツテ誓書  
 チ奉シ且ツ奏シテ曰ク讒構ノ臣ハカナラズ臣  
 ノ親屬ナラン請フ其人ヲ得テ甘心セント法皇  
 慰諭ス義仲又奏ス向ニ頼朝ニ下ダヌ宣旨暨ビ

御教書アリ若シ聖旨ニ出ヅルニ非ザレバ請フ  
 奉行ノ人ヲ推按セント聽カズ義仲ノ兵士劫剽  
 滋滋甚シク人民愁苦ス法皇モ亦密ニ之ニ備フ  
 十一月法皇主典代景宗ヲ遣ハシ譴責シテ曰ク  
 卿固ク反セズト陳ズト雖モ人既ニ之ヲ證ス何  
 チ以テカ自ラ明キラカニセント義仲對ヘテ曰  
 ク臣異志ナシ既ニ之ヲ誓書ニ明カニス復タ何  
 ノ陳ズル所アラン西征ノ命ヲ承ケテ未ダ發セ  
 ザル者ハ實ニ頼朝ノ代官京師ニ入ランヲ恐レ  
 テナリ……法皇義仲ニ申救シテ曰ク頼朝將ニ  
 奉獻スル所アラントス是ヲ以テ人ヲ遣ハシテ  
 京師ニ入ラシム率キル所モ亦多カラズ明キラ  
 カニ他故ナシ卿猜疑スル勿レト義仲心悅ハズ  
 ト雖モ敢テ枝梧セズ又檢非違使平知康ヲ遣ハ  
 シ諭スニ部下ヲ戡ムルヲ以テス義仲待接倨傲

ニシテ言辭不遜ナリ知康ヲ調シテ曰ク蓋下ノ  
 兒童卿ヲ呼ンテ裁判官ト稱ス卿豈ニ人ノ爲メ  
 ニ搦レシ乎ト知康忿恚シ還ツテ其狀ヲ具奏シ  
 遂ニ法皇ニ勸メテ義仲ヲ討タシム法皇乃チ延  
 曆園城兩寺ニ詔シ僧兵ヲ召シテ法住寺ヲ守ラ  
 シメ知康ヲ以テ軍事ヲ董督セシム義仲之ヲ聞  
 キ怒ツテ將士ニ謂ツテ曰ク吾レ首トシテ義舉  
 ニ應ジ逆臣ヲ西海ニ攘フ豈ニ曠世ノ功ニアラ  
 ズヤ然ルニ何ノ罪アツテ俄ニ誅罰セラルルヤ  
 是レ皆鼓ノ爲ス所ナリ我レ將ニ往イテ彼ノ鼓  
 チ擊チ破ラントス汝等速ニ之ガ備ヲ爲セト兼  
 光兼平苦諫ス義仲性剛愎ニシテ欲スル所ハ必  
 ズ遂ク兼光等ニ謂ツテ曰ク吾レ兵ヲ起シテヨ  
 リ未ダ嘗テ怯チ人ニ示サズ至尊ト雖モ豈ニ手  
 チ束テ制チ受ケンヤ若シ汝等ノ言ニ從ハバ

反ツテ鼓ノ爲メニ擊殺セラル義仲ノ死生ハ此  
 ニ決ス汝等其匹夫ニ敵センヨリハムシロ國王  
 ニ敵セヨト遂ニ兵ヲ舉ゲテ反ス又兵ヲ分ツテ  
 七隊ト爲シ進ンテ法住寺殿ヲ圍ム知康垣ニ登  
 ツテ大ニ罵ル義仲怒リ風ニ因ツテ火ヲ縱ツ殿  
 堂廬舍悉ク焦土ト爲ル知康一矢ヲ發セズシテ  
 遁レ去リ官軍大ニ敗ル公卿宮人士卒ノ爲メニ  
 辱メラレ座主明雲長吏圓慧法親王モ亦亂兵ノ  
 爲メニ射殺セラル乃チ帝ヲ間院ニ法皇ヲ攝政  
 基通ノ第二徒シ多ク公卿ヲ幽ス義仲既ニ志チ  
 得將士ニ大言シテ曰ク天下ノ事ハ吾ガ爲サン  
 ト欲スル所ノママナリ汝曹公タリ卿タリ各其  
 請フ所ニ從ハン願フニ吾レ帝タランカ則チ帝  
 ハ幼童ナリ吾レ復タ童タルヘカラズ院タラン  
 カ則チ院ハ老法師ナリ亦法師タルチ欲セズ唯



攝政ヲ視ルニ年齒相同シク事體相宜シ吾レ  
 其位ニ居ラント欲ス自今以後汝等宜シク我ヲ  
 稱シテ攝政殿ト曰フベシト兼平諫メテ曰ク夫  
 レ攝籙ハ大織冠ノ裔世世此ニ居ル佗姓ハ斷シ  
 テ之ニ任ズルコトナシト義仲曰ク然ラハ則チ  
 判官代タラン兼平曰ク是レ好官ニ非ズ義仲低  
 回之チ久シウシテ曰ク我之チ得タリ院御所別  
 當ト爲リテ縱ニ良馬ヲ馳ス亦快ナラズヤト遂  
 ニ自ラ別當ト爲ル義仲幼ヨリ北鄙ニ窟匿シ容  
 恣視ルベシト雖モ舉止朴野ナリ時人其事ヲ傳  
 ヘテ以テ笑ト爲ス關白基房ノ女殊色アリ基房  
 之チ鐘愛シ女御皇后ヲ以テ自ラ期ス義仲逼ッ  
 テ之チ娶リ因ツテ妻ノ兄權大納言師家ヲ以テ  
 攝政ト爲サント欲ス然レドモ大臣ニ闕ナシ即  
 チ基房ト謀ツテ基道ノ攝政ヲ視ヒ藤原實定ノ

内大臣ヲ借リ師家ヲ以テ内大臣攝政ト爲シ中  
 納言藤原朝方參議藤原基家等四十餘人ノ官職  
 チ停ム基房事ニ從ツテ開諭シ爲メニ禍福ヲ陳  
 ズ義仲稍兇暴ヲ轍メ録スル所ノ廷臣ノ防禁ヲ  
 弛メ法皇ヲ西洞院ノ第ニ移ス法皇モ亦義仲ヲ  
 シテ諸平ノ故地ヲ總領セシメ以テ其意ヲ悅ハ  
 シ尋イデ左馬頭ニ任シ從五位上ニ叙ス頼朝義  
 仲ノ驕肆ヲ聞キ乃チ其弟範賴義經ヲシテ大ニ  
 兵ヲ發シテ之チ討タシム是時流言ス室山水島  
 ノ戰ニ平氏累捷シ將ニ京師ニ入ラントスト義  
 仲意ラシ背後ニ敵ヲ受ケハ我事復タ濟ラズト  
 乃チ平氏ト講和シテ共ニ頼朝ヲ擊タント欲シ  
 書ヲ作ツテ宗盛及ビ二位尼ニ遺リ且ツ其宗女  
 チ得テ妻ト爲サント請フ宗盛聽カズ三年正月  
 從四位下ニ進ミ尋テ征夷大將軍ニ任ゼラル法

皇義仲ノ暴横ヲ厭ヒ外優獎ヲ視メシ内實ニ義  
 經等ニ因ツテ之チ除カント欲ス故ニ此授アリ  
 義仲悟ラズ大ニ得色アリ宗盛和ヲ請フ義仲可  
 カズ既ニシテ範賴義經大兵ヲ率ヰテ宇治勢多  
 ヨリ鼓ビ進ミ平氏亦大舉シテ將ニ京師ニ入ラ  
 ントスト聞キ惶惑失措ス是月十七日行家義仲  
 ニ叛シテ河内石川城ニ據ル義仲樋口兼光ヲ遣  
 ハシ擊ツテ之チ破ル東兵漸ク逼マル義仲今井  
 兼平源義弘チ勢多ニ根井幸親楯親忠ヲ宇治ニ  
 遣ハシ橋ヲ徹シテ之チ守ラシム東兵既ニシテ  
 河ヲ渡ル幸親等支フル能ハズ兵ヲ引イテ還ル  
 義仲法皇ヲ取ツテ北陸ニ走ラント欲シ壯士二  
 十八チ從ヘテ西洞院ニ至リ法皇ニ奏シテ曰ク  
 東賊既ニ迫ル宜シク之チ醍醐寺ニ避クベシト  
 法皇從ハズ義仲乃チ階下ニ至リ劍ヲ按シ目チ

暝シ駕ヲ備ヘテ頻ニ幸チ趣ス宮中色ヲ失ス法  
 皇已ムチ得ズ將ニ宮チ出デントス時ニ義仲ノ  
 兵馳セテ敵伏見木幡ニ至ルト報ズ義仲乃チ百  
 餘騎ヲ率ヰテ出ヅ東兵既ニ七條八條法性寺柳  
 原ニ滿填シ旌旗空チ蔽フ義仲望見シテ從士ニ  
 謂ツテ曰ク我が命ハ今日ニ在リ汝曹逃レント  
 欲スル者ハ去レト將士皆曰ク人誰レカ死ナカ  
 ラン其祿ヲ食ム者ハ當ニ其事ニ死スベシト義  
 仲悅ビ乃チ將士ヲ督シテ躬自ラ決戰ス從兵僅  
 カニ三百騎畠山重忠等ニ當ツテ縱橫衝突シ陣  
 チ冒シテ出入スルコト數四幸親親忠精銳一百  
 餘騎悉ク皆戰死ス義經兵二百餘騎ヲ縱ツテ攻  
 擊スルコト甚ダ急ナリ義仲遂ニ大イニ敗レ僅  
 ニ七八十騎ヲ率ヰテ法皇宮ニ赴ク藤原成經門  
 チ閉ヂテ内レズ義經猛銳十一騎ヲ率ヰテ連射



ス義仲又敗走ス義經ノ兵躡ミテ之ヲ撃ツ義仲且ツ戦ヒ且ツ走ツテ三條河原ニ至ル勅使河原有直等大ニ呼ンデ曰ク北陸道ノ旭將軍如何ゾ背ヲ敵ニ視スル豈ニ獨リ源氏ノ家聲ヲ墜スナ愧ヂザル乎ト義仲馬ヲ廻ラシテ奮戦ス有直ノ兵潰散ス東兵相踵イテ來リ撃ツ義仲ノ從騎奮闘力戦シテ死スル者亦多シ是ニ至ツテ尙ホ十三騎ヲ餘ス義仲乃チ勢多ニ赴カント欲ス途ニ畠山重忠ト射戦ス既ニシテ範頼三萬騎ヲ率ヒテ勢多ヨリ進ム今井兼平與ニ戦ツテ捷ヲズ兵ヲ引イテ還ラントシ義仲ニ粟津ニ逢フ義仲悦ビ兼平ノ手ヲ握ツテ曰ク吾レ嚮ニ京師ニ自裁セント欲ス然レドモ卿ト一面セント欲ス故ニ崎嶇シテ此ニ至ル今兵敗レ力竭キ身亦重創ヲ被ル若シ虜トナラハ耻ナリ若カズ自殺センニ

ハト兼平曰ク將軍宜シク越前ニ歸ツテ再舉ヲ圖ルベシ兼平當ニ留ツテ之ヲ拒グベシト即チ散兵ヲ收メテ四五百騎ヲ得既ニシテ東兵大ニ至ル義仲殘兵ヲ勵マシ馳突シテ圍ヲ潰ユルコト數次範頼兵ヲ進メテ奄撃ス是ニ於テ義仲ノ兵戦死シテ皆盡ク從フ所止マ兼平一人ノミ義仲之ニ謂ツテ曰ク我常ニ薄鎧ヲ撰シテ甚ダ輕シ今日更ニ重キヲ覺ユ兼平曰ク鎧何ゾ遽ニ重ラン豈ニ將軍ノ銳氣摧折シテ孱弱此ニ至ルニアザルヲ得ンヤト顧ミテ粟津松原ヲ指シテ曰ク將軍彼ニ至ツテ決セヨ兼平當ニ追フ者ヲ拒グベシト義仲曰ク我レ汝ト死チ同シウセント欲スト將ニ馬ニ策ツテ俱ニ進マントス兼平馬ヲ扣ヘ諫メテ曰ク將軍體疲レ馬羸ル若シ命ヲ卒伍ニ損サハ豈ニ耻ヲ貽スニアラザランヤト

乃チ義仲單騎前林ニ向ツテ馳ス日暮ルルニ垂ントシテ横ニ水田ヲ截ツ長鷲ス之ヲ鞭テドモ進マズ義仲窘迫ス石田爲久射テ其面ニ中ツ暝眩シテ馬蹶ニ伏ス遂ニ追騎ノ爲メニ殺サル時ニ年三十一。

みなもとのよしひら 源義平

義朝ノ長子。年甫メテ十五叔父春宮帶刀義賢ト武藏大倉ニ戦ツテ之ヲ斬ル世呼ンデ鎌倉惡源太ト曰フ平治ノ亂起ルヤ義平鎌倉ヨリ馳セテ京師ニ赴ク時ニ藤原信賴諸將士ヲ署シ義平ニ官ヲ授ケント欲ス重盛攻メテ待賢門ニ入ル信賴惶怖シ未ダ陣ヲ排スルニ及バズ出デテ走ル義朝怒リ義平ヲシテ之ヲ防ガシム義平鎌田政家後藤實基佐佐木秀義等十六騎ト俱ニ進ム義平左右ニ謂ツテ曰ク櫛句鎧ヲ撰キ黃赭色ノ

馬ニ乗ル者ハ重盛ナリ卿等之ヲ認メヨト馬ヲ躍ラシテ出デテ縱横馳突シ直チニ重盛ニ赴キ大庭ノ棕樹下ニ戦ヒ右近ノ櫻左近ノ橋ヲ環ツテ之ヲ追フコト七八匝勢甚ダ厲ケシ重盛退イテ大宮巷ニ至リ再ビ新兵五百騎ヲ率ヒ復々攻メテ大庭ニ入ル義平呼ンデ曰ク我ト子トハ源平ノ嫡胄タリ二人匹敵ニ慚ヅルコトナシ請フ與ニ死チ決セント又驅ケテ逐フコト五六匝重盛又兵ヲ引イテ大宮ノ巷ニ退ク義朝敵兵ノ累リニ至ルヲ以テ之ヲ遣ハシ激勵シテ過ニ撃ツテ之ヲ卻ケシム義平又九十六騎ト大宮街ヲ出デ衝イテ之ヲ撃ツ敵兵奔潰シ重盛從兵ト走ル義平政家ト之ヲ追ツテ二條堀河ニ至リ將ニ之ニ及ハントス義平ノ馬墮イテ伏ス政家重盛ヲ射ル甲堅クシテ入ラズ義平曰ク馬ヲ射ヨト政



家之ヲ射ル重盛馬ヨリ墜ツ政家之ニ迫ル三左衛門景安遮ツテ之ニ當ル義平馳セ至ツテ景安ヲ刺ス重盛將ニ義平ト相當ラントス新藤左衛門家泰馬ヲ進メテ義平ト搏ツ政家乃チ家泰ヲ刺ス重盛間ヲ得テ走ツテ六波羅ニ歸ル時ニ窮除瓦寒ニシテ兩鞍ヲ氷ラス政家手凍エテ攀ルコトヲ得ズ義平之ニ救フルニ鞍ヲ刻ンテ上ラシム鞍ニ手形ヲ設クルハ此ヨリ始マル義朝既ニ賴盛ヲ卻ケ前ンデ六波羅ヲ攻ム義平マサニ之ニ赴ムカントス時ニ賴政騎三百餘ヲ六條河原ニ頓メ望觀シテ進マズ義平怒ツテ曰ク賴政ハ首鼠兩端ニシテ勝敗ヲ望觀ス先ヅ之ヲ擊マズンハアルベカラズト五十餘騎ヲ率ヰテ搏撃ス賴政敗績シテ遂ニ清盛ニ奔ル義平攻メテ六波羅門内ニ入ル清盛親ヲ兵ヲ督シテ出デテ戰

フ交戰屠ヲ移ス義平ノ兵且ヨリ數戰ヲ經テ銳氣ヤヤ衰フ平軍交進ンデ之ヲ防ク義平遂ニ兵ヲ斂メテ退ク義朝敗走スルニ及ンデ從ツテ美濃青墓ニ至ル義朝義平朝長ニ命シテ兵ヲ諸州ニ募ラシム義平北國ニ赴キ招募ス飛驒ニ至ル頃ヒニ來リ屬スルモノ稍多シ義朝ノ死聞至ルニ及ンデ衆皆離散ス義平モ亦將ニ自殺セントス既ニシテ以爲ラク雖未ダ復セザルニ大丈夫豈ニ徒ニ死センヤトヒソカニ京師ニ還ツテ平氏ヲ規視ス義朝ノ舊臣ニ志内景澄ト云フモノアリモト賤シクシテ人ノ爲メニ識ラレズ故ヲ以テ義朝ノ敗後質ヲ平氏ニ委テ以テ時變ヲ俟ツ適義平ニ逢ヒ與ニ語ツテ大ニ喜ビ詐ツテ義平ヲ以テ己ノ奴ト爲シテ六波羅ニ出入シ義平躬ヲ厮役ヲ執ル景澄三條鳥丸ニ僦舍ス居亭ノ

主人義平ノ舉動ヲ熟視シテ以爲ラク非常ノ人ナリト景澄又食スル毎ニ人ヲシテ視セシメズ主人益疑ヒ竊ニ障間ヨリコレヲ窺ヘハ則チ景澄膳ヲ易ヘテ食ス主人之ヲ六波羅ニ告グ清盛難波經房ヲ遣ハシ兵三百ヲ率ヰテ之ヲ圍マシム義平刀ヲ抜イテ立ドコロニ數人ヲ斬リ跳ツテ屋上ニ登リ忽爾トシテ見エズ經房獨リ景澄ヲ獲テ歸ル清盛其貳心ヲ懷クヲ嘲ル景澄屈セズ清盛怒ツテ之ヲ斬ル義平草次露宿シテ平氏ヲ規ヒツブサニ艱苦ヲ嘗ム故舊ヲ東近江ニ覓メマサニ其家ニ投ゼントシ途ニ逢坂ニ過ギ山中ニ困臥ス會經房關明神ニ詣ツテ之ヲ聞キ兵五十騎ヲ分ツテ搜索セシム義平蹙然起ツテ之ニ應ズ經房射テ其腕ニ中ツ義平刀ヲ揮フ能ハズ兵衆梁堆シテ遂ニ之ヲ虜ニシ以テ六波羅ニ

歸リ之ヲ庶下ニ坐セシム義平怒ツテ曰ク我レ命窮シテ虜ニ就クト雖モ何グ庶下ニ居ルコトヲ爲サンヤト即チ自ラ起ツテ坐ニ入ル清盛出デテ之ニ面シテ曰ク向ニ卿鳥丸ニ圍マルヤ能ク三百餘騎ヲ潰エテ出ヅ今五十騎ノ爲メニ虜ヘラルルハ何グヤ義平笑ツテ曰ク是レ命ナリ卿モ亦命窮セハ遂ニ此ニ至ラン吾ハ勅敵タリ宜シク久シク活カスベカラズ疾ク斫レト即チ之ヲ六條河原ニ斬ル。時ニ年二十。

みなもとのよみつ 源義光

伊豫守賴義ノ子。元服チ新羅明神社ニ加フ。因ツテ新羅三郎又館三郎ト稱ス。幼ニシテ弓馬ヲ善クス長ズルニ及ンデ勇ニシテ智謀アリ左兵衛佐ト爲リ京師ニ宿衛ス兄義家清原武衡及ビ家衡ヲ擊ツテ利アラズト聞キ奏シテ之ヲ



援ハンコトヲ請フ許サズ遂ニ官ヲ辭シテ陸奥ニ赴ク義家大ニ悦ビ感泣シテ曰ク今日汝ヲ見ル尙先大人ノ再生スルガゴトシ力ヲ戮セテ賊ヲ討ツ之ヲ破ルハ必セリト遂ニ義家ニ從ツテ金澤柵ヲ圍ム武衡義光ニ就イテ降ヲ乞フ聽サズ再ビス義光義家ニ告ゲテ將ニ入ツテ降ヲ受ケントス義家固ク之ヲ止メテ藤原季方ヲ遣ル武衡之ニ賂フ季方受ケズ怒ツテ出ヅ城陷ル義光武衡ヲ庇フテ其死ヲ貸サンコトヲ請フ義家聽カズ尋テ義家ニ從ツテ京師ニ歸ル刑部丞ニ任ゼラレ常陸介甲斐守ヲ歴テ從五位上ニ叙セラレ刑部少輔ニ至ル大治二年卒義光幼ニシテ音律ヲ好ミ其精妙ヲ究ム嘗テ笙ヲ豐原時元ニ學ブ時元卒スル時其子時秋尙ホ幼ニシテ秘曲ヲ傳フルコトヲ得ズ乃チ義光ニ大食入調ヲ授

ク義光陸奥ニ赴クニ及ンデ時秋追ツテ近江鏡驛ニ至リ乃リ與ニ俱ニセンコトヲ請フ義光之ヲ止ムル數次可カズ行イテ足柄山ニ至ル乃チ馬ヨリ下リ二楯ヲ布イテ俱ニ坐ス因ツテ胡籙中ヨリ時元ガ傳フル所ノ大食入調ノ譜ヲ出シテ之ヲ示ス又問フ笙ヲ齎ラシタルヤ否ヤト時秋乃チ懷中ヲ探ツテ笙ヲ出ス義光乃チ悉ク秘曲ヲ以テ之ニ傳フ。

みなもとのよひへ 源頼家

小字一萬。初メ萬壽ト稱ス。頼朝ノ長子。建久六年頼朝ニ從ツテ京師ニ朝ス八年從五位下ニ叙シ右近衛權少將ト爲ル九年讃岐權介ヲ兼テ正治元年正月頼朝薨ズ是月左近衛權中將ニ轉シ詔シテ守護地頭ヲ總ヘシム一ニ頼朝ノ如シ三月後藤基清罪アリ讃岐守ヲ罷メ近藤藤國

ヲ以テ之ニ代フ四月問注所ヲ郭外ニ移ス頼家ノ母政子頼家ヲ禁シテ親ヲ訟ヲ聽クコトヲ許サズ北條時政、義時、大江廣元、三善康信、中原親能、三浦義澄、八田知家、和田義盛、比企能員、安達盛長、遠元、梶原景時、藤原行政、十三人ニ命ジテ大小ト無ク參決セシム時ニ小笠原長經、比企三郎、和田朝盛、中野能成、細野四郎、皆佞便ヲ以テ寵ゼラル頼家梶原景時等ヲシテ令ナサシメテ曰ク五人ノ家屬ハ暴ヲ爲スト雖モ士庶之ニ抗スルヲ得ズ違フ者ハ名ヲ疏シテ罪ニ處セン且言フ五人ノ外ハ命アルニ非ザレバ入ツテ見ユルコト勿レト七月安達景盛ヲ遣ハシテ參河ノ賊室平重廣ヲ討タシム重廣遁レ走ル初メ頼家景盛ノ妾美ナリト聞キ數書ヲ贈ツテ之ヲ挑ム從ハズ是ニ至ツテ景

盛ノ出ヅルヲ伺ヒ成能ヲ遣ハシテ之ヲ奪ヒ長經ノ家ニ居ラシメ尋テ北向御所ニ徙ス寵一時ヲ傾ク唯ダ長經等五人出入スルヲ得八月景盛歸ル景時景盛ヲ讒スルニ妾ノ故ヲ以テス頼家五人ヲ召シテ景盛ヲ誅センコトヲ謀ル府下騷擾ス政子遽ニ景盛ノ父盛長ノ宅ニ至リ人ヲシテ頼家ヲ誚メシメテ曰ク先君即世シ三幡モ亦繼イテ歿ス而シテ哀ヲ忘レ兵ヲ弄ス是レ禍亂ノ源ナリ景盛素ト契分アリ先君特ニ優待ヲ加フ儻シ犯ス所迹アレバ我當ニ親ヲ鞠問シテ罪名ヲ定ムベシ今虛實ヲ審カニセズシテ妄ニ誅殺ヲ行ハント欲ス事若シ實無ケレバ之ヲ悔ユトモ何ツ及バン而シテ猶ホ之ニ兵ヲ加ヘバ我將ニ先ヅ其矢ヲ受ケントスト頼家乃止ム政子其再ビ嫌疑ヲ生ゼンコトヲ懼レテ翌日景盛ニ



誓書ヲ徴シテ之ヲ頼家ニ送り且ツ戒メテ曰ク  
 昨日ノ輕躁此ヨリ甚メシキハ莫シ凡テ汝ガ所  
 爲ヲ視ルニ政事ニ倦ミテ民庶ヲ恤マズ聲妓ニ  
 耽ツテ譏議ヲ畏レズ忠良ヲ擯斥シ佞邪ヲ褻愛  
 ス舉動此ノ如シ豈ニ海内ヲ鎮スルヲ得ンヤ先  
 君ハ親屬ニ敦睦ニ姻黨ニ波及シ諸源北條常ニ  
 眷遇ヲ被ル汝ガ世ニ及ビテ恩禮大ニ衰ヘ人ノ  
 之ヲ怨ムモノ少シトセズ汝能ク心ヲ此ニ存セ  
 ハ禍難ヲ免ルルニ庶カランカト頼家悛メズ二  
 年頼家從四位上ニ進ミ禁色ヲ聽サル景時亂ヲ  
 起シ將ニ京師ニ赴カントス頼家三浦義村精谷  
 有季等ヲ遣ハシテ之ヲ誅セシム景時行イテ駿  
 河ニ至リ國人ノ爲メニ殺サル十月左衛門督ニ  
 遷リ從三位ニ叙セレ建仁二年七月從二位ニ進  
 ミ征夷大將軍ヲ兼ヌ閏十月諸國ノ守護ニ職

ヲ越エテ務吏ニ預カルコトヲ申禁シ違フ者ハ  
 之ヲ罷ム三年五月叔父僧全成ヲ常陸ニ流シ尋  
 テ之ヲ殺サシム又其子頼全ヲ京師ニ殺ス八月  
 頼家病劇シ政子頼家ヲシテ關西三十八國ノ地  
 頭ヲ割イテ弟千幡ニ傳ヘ關東二十八國ノ地頭  
 天下總守護ヲ子一幡ニ讓ラシム處分既ニ定マ  
 ル一幡ノ外祖比企能員一幡ノ母ヲシテ頼家ニ  
 告ゲシメテ曰ク今地頭職ヲ割イテ千幡君ニ傳  
 フ叔姪相並ラバハ無事ヲ保ツベキニ似タリ然  
 レドモ威權兩屬セハ適爭端ヲ啓クニ足ラン北  
 條氏ヲ滅シテ其禍ヲ除クニアラザルヨリハ嗣  
 君ノ安全ヲ期スルヲ得ズト頼家驚愕シ能員ヲ  
 寐室ニ召シテ密ニ議ヲ決ス政子其謀ヲ知ツテ  
 潜ニ時政ニ報ジテ能員ヲ誘殺セシム能員ノ族  
 人一幡ヲ擁シテ小御所ニ據ル政子義時ヲシテ

之ヲ攻メシム和田義盛島山重忠以下諸將皆從  
 フ能員ノ子姪奮死シテ拒ギ戰フ諸將稍卻ク重  
 忠代ツテ之ヲ攻ム守者支フルアタハズ火ヲ縱  
 ツテ自殺ス一幡モ亦焚死ス姻黨交友多ク死亡  
 シ或ハ流竄セラル頼家病間ニ一幡能員ノ死ヲ  
 聞イテ大ニ恚リ堀親家ヲシテ書ヲ和田義盛仁  
 田忠常ニ與ヘテ時政ヲ誅セシム義盛陽ニ承受  
 スル爲ヲシテ之ヲ時政ニ示ス時政親家ヲ捕ヘ  
 テ之ヲ殺ス忠常加藤景廉ノ爲メニ殺サル頼家  
 既ニ時政ト隙アリ政子其負荷ニ堪ヘザルヲ以  
 テ逼ツテ髮ヲ削ラシメ伊豆ノ修禪寺ニ幽シ千  
 幡ヲ奉シテ命ヲ朝ニ請フ是ヲ實朝トナス頼家  
 政子實朝ニ書ヲ遺ツテ故ノ左右親狎ヲ得テ幽  
 鬱ヲ消遣シ且ツ安達景盛ヲ得テ甘心セント請  
 フ明年七月時政竊ニ人ヲ遣ハシテ之ヲ殺サシ

ム頼家勁捷ニシテ近ヅクベカラズ其浴室ニ在  
 ルヲ伺ヒ索ヲ飛ハシテ頸ヲ擲メ刺シテ之ヲ殺  
 ス。年二十二。初頼朝意ヲ軍政ニ潜メテ駕馭宜  
 シキヲ得頼家職ヲ襲イテ驕恣昏惰家規ニ違ハ  
 ズ將佐ニ接シ庶務ヲ釐スルニ意ナシ苟シモ情  
 好ニ適セハ盤樂度ナシ最モ蹴鞠ヲ好ム後鳥羽  
 上皇ニ請ヒ紀行景ヲ得テ師トナシ日夜場ニ在  
 リ災變ニ遇フト雖モ警戒スルヲ知ラズ綱紀頓  
 敗人心離散シテ遂ニ其身ヲ喪フ三子アリ長ハ  
 一幡、次ハ公曉、次ハ千壽丸。

みなしものよとも 源頼朝

小字ハ鬼武者。左馬頭義朝ノ弟三子。幼ニシ  
 テ器局アリ、保元二年皇后宮權少進ニ拜セラ  
 ル平治元年右近衛將監上西門院藏人ヲ歷テ藏  
 人ニ改補セラル藤原信賴ノ反スルヤ頼朝ニ從



五位下右兵衛權佐ヲ授ケ父兄ト大内ニ據ル年  
甫メテ十三義朝ニ謂ツテ曰ク敵將ニ至ラント  
ス坐シテ之ヲ待タンヨリ若カシ速ニ六波羅ヲ  
攻メシニハト衆其言ヲ壯トス既ニシテ平頼盛  
郁芳門ヲ攻ム頼朝射テ二人ヲ殪ス軍敗ルルニ  
及ンテ東ニ走ル疲レ甚ダシ行行馬上ニ睡ツテ  
父兄ニ後クル夜近江森山驛ヲ過ク村民群聚シ  
テ將ニ之ヲ執ヘントス頼朝二人ヲ斬ル餘敢テ  
近ヅカズ義朝鎌田政家ヲシテ還リ覓メシム安  
河ニ遇フ時ニ大ニ雪フル衆騎スル能ハズ甲ヲ  
棄テテ徒步ス頼朝甚ダ艱ニ復タ父兄ト相失ス  
嚮フ所ヲ知ラズ適士豪大夫屬定康ニ逢フ定康  
扶ケテ佛寺ニ匿シ僧ニ囑シテ護視ス尋イテ定  
康ノ家ニ居ル明年美濃青墓ニ適キ驛長大炊ノ  
家ニ投リ又去ツテ東國ニ赴ク道ニ平頼盛ノ臣

平宗清ノ爲メニ虜ヘテレ押シテ六波羅ニ至ル  
平清盛之ヲ宗清ノ家ニ拘ヘシム宗清意之ヲ慙  
ニ清盛ノ後母池禪尼ニ就イテ死ヲ宥メンコト  
ヲ請フ尼營救備サニ至ル遂ニ釋サルルコトヲ  
獲テ伊豆蛭島ニ流サル清盛伊東祐親北條時政  
ヲシテ之ヲ監セシム頼朝祐親ノ家ニ居テ其女  
ニ通シ男ヲ生ム祐親怒ツテ之ヲ水ニ沈メ女ヲ  
以テ江間小二郎ニ嫁セシメ將ニ頼朝ヲ殺サン  
トス祐親ノ子祐清竊ニ之ヲ告グ頼朝遁レテ時  
政ニ依リ又其女政子ニ通ズ時政陽ニ知ラザル  
マテシテ女ヲ以テ目代平兼隆ニ嫁セシム政子  
夜亡ケテ頼朝ニ奔ル治承四年以仁王謀ツテ平  
氏ヲ滅サントシ令ヲ州郡ニ下シテ諸源ヲ招ク  
令到ル頼朝大ニ喜ビ密ニ時政ニ示シ共ニ兵ヲ  
舉ゲンコトヲ謀ルイクハクモ無クシテ以仁王

敗死ス頼朝之ヲ聞キ平氏ヲ圖ルコト益急ナリ  
僧文覺亦之ヲ慫慂ス頼朝遂ニ意ヲ決シテ事ヲ  
舉ゲ安達盛長ヲ遣ハシテ兵ヲ東國ニ集メシム  
伊豆相模ノ豪族來リ附ク者多シ頼朝親信ト議  
シテ先ヅ平兼隆ヲ擊タントス兼隆山木ノ要ニ  
據ル頼朝竊ニ京師ノ人藤原邦道ヲ遣ハシテ之  
ト遊ハシム欸好日ヲ累テ悉ク其地形ヲ圖ス頼  
朝勇敢ノ士人ヲ選ミ別ニ之ヲ密室ニ延キ諭シ  
曰ク此事ハ唯ダ卿ト議ス外ニ知ル者ナシ請フ  
我が爲メニ努力セヨト衆悅ンテ皆自ラ奮ハン  
コトヲ思フ而シテ機密ノ事ニ至ツテハ獨リ時  
政ト決ス八月時政ヲシテ夜兼隆ヲ襲ハシム兼  
隆善ク拒グ乃チ佐佐木加藤ノ諸將ヲ遣ハシテ  
時政ヲ助ケシム遂ニ克ツテ兼隆ヲ斬ル明日三  
浦義澄等未ダ至ラザルヲ以テ頼朝出デテ相模

ノ土肥ニ赴ク兵僅カニ三百以仁王ノ令旨ヲ旗  
上ニ繫ギ石橋山ニ陣ス大庭景親兵三千ヲ率キ  
テ來リ攻ム祐親別ニ百人ヲ以テ我軍後ヲ倚ス  
景親暮ニ迫ツテ戰ヲ挑ム頼朝ノ麾下皆殊死シ  
テ戰フ時ニ大風暴雨ニシテ衆寡敵セズ黎明遂  
ニ敗走シ逃レテ杉山ニ入ル景親來リ迫ル加藤  
景員等力ヲ奮ツテ扞ギ闘フ頼朝自ラ射ル人馬  
弦ニ應ジテ倒ル矢己ニ盡ク乃チ土肥實平ト險ヲ  
踰エテ潛行ス景員等六人モ亦來リ從フ既ニシ  
テ頼朝實平ノ謀ヲ用キテ悉ク散セシメ獨實平  
ト匿ル景親兵ヲ率キテ徧ク索ム梶原景時給イ  
テ他ニ之カシム頼朝遂ニ脱スルコトヲ得タリ  
箱根別當行實ハ爲義義朝ト舊アリ弟僧永實ヲ  
遣ハシテ糧ヲ餉リ迎ヘテ永實ノ舍ニ匿サシム  
僧良暹モ亦行實ノ弟ナリ平兼隆ト好ミアリ頼



朝ヲ襲ヒ仇ヲ報イント闖ル永實之ヲ告グ去ッ  
 テ十肥ニ赴キ眞鶴崎ヨリ舸ニ乗ツテ安房瀧島  
 ニ至リ時政及ビ三浦義澄等ト相遇フ聲勢復々  
 震ラ九月檄ヲ移シテ召募シ小山朝政下河邊行  
 平ヲ徵ス將ニ上總ニ赴キ平廣常ニ就カントス  
 行クコト一日民舍ニ次ス長狹常伴圖ツテ不備  
 ナ襲フ義澄逆ヘ撃ツテ之ヲ破ル會從弟義仲兵  
 ナ信濃ニ起シテ平氏ヲ撃ツ頼朝留ルコト數日  
 精兵三萬ヲ得タリ廣常未ダ至ラズ頼朝直ニ下  
 總ニ赴ク三浦常胤三百人ヲ將キテ國府ニ迎フ  
 頼朝隅田川ニ抵ル廣常二萬人ヲ將キテ來會ス  
 頼朝乃土屋宗遠ヲ甲斐ニ遣ハシ諸源ニ告ケテ  
 黃瀬川ニ會セシメ又使ヲ遣ハシテ江戸長重ヲ  
 諭ス十月頼朝兵二萬餘ヲ率キテ武藏ニ赴ク來  
 會スル者多シ遂ニ相模ニ赴ク既ニシテ時政等  
 駿河ノ日代橋遠茂及ビ長田入道ト戰ツテ之ヲ  
 敗リ遠茂ヲ虜ニシ長田父子ヲ梟ス頼朝遂ニ居  
 ナ鎌倉ニ奠メ鶴岡八幡宮ヲ小林郷ニ遷ス是ヨ  
 リ事アルゴトニ禱ル此月平清盛孫維盛等ヲ遣  
 ハシ兵五萬騎ヲ率キテ來リ撃タシメ富士河ニ  
 陣ス頼朝兵二十萬ニ將トシテ之ヲ逆ヘテ蒲瀨  
 川ニ至リ日ヲ刻シテ接戰ス武田信義等二萬騎  
 ナ率キテ來會ス乃チ軍ヲ賀島ニ進メ信義兵ヲ  
 潛メテ夜敵ノ後ニ出ツ維盛ノ軍驚キ擾レテ潰  
 走ス頼朝北グルヲ逐ツテ西セントス廣常義澄  
 等曰ク佐竹朝政ノ叔姪衆ヲ擁シテ常陸ニ在リ  
 其他倔強ノ者尙ホ多シ宜シク東土ヲ定メテ然  
 ル後チ徐ニ進取ヲ曠スベシト頼朝コレニ從ヒ  
 乃信義ニ駿河ヲ安田義定ニ遠江ヲ守ラシメ軍  
 ナ旋シテ相模ノ國府ニ至ル十一月兵二將トシ

常陸ニ如キ佐竹義政ヲ誘殺シ其姪秀義ヲ金沙  
 山ニ攻ム秀義逃レ走ル頼朝其地ヲ割キ將士ニ  
 與ヘテ鎌倉ニ遷ル是月山本義經栢木義兼兵近  
 江ニ起シテ頼朝ニ應ズ養和元年二月菊地隆直  
 緒方惟能兵ヲ鎮西ニ起シテ平氏ヲ拒グ其餘歸  
 嚮スルモノ日ニ衆シ閏二月清盛薨ズ終ニ臨ン  
 テ子孫ニ戒メ銳意東伐セシム子重衡東海道ノ  
 兵ヲ督シテ來リ撃ツ頼朝和田義盛等ヲシテ安  
 田義定ヲ援ケシム朝政ノ叔父義廣鎌倉ヲ襲ハ  
 ントシ兵ヲ率キテ下野ニ到ル小山朝政撃ツテ  
 之ヲ卻ク三月弟僧義圓叔父行家ト重衡ヲ洲股  
 川ニ撃ツテ大ニ敗ル八月平宗盛院宣ヲ藤原秀  
 衡ニ下シ兵ヲ發シテ頼朝ヲ撃クソコトヲ請フ  
 秀衡依違シテ敢テ師ヲ出サズ壽永二年三月行  
 家頼朝ト議協ハズ信濃ニ往キ義仲ニ依ル頼朝  
 謂ヘラク勢合セハ制シ難シト自ラ十萬騎ヲ率  
 キテ義仲ヲ撃ツ義仲之ヲ越後ニ避ク頼朝曰井  
 坂ニ至リ義仲引去ルト聞キ亦退イテ武藏ニ次  
 シ責ムルニ行家ヲ納ルルヲ以テス義仲和ヲ乞  
 ヒ子義高ヲ送ツテ質ト爲ス頼朝之ヲ許シ携ヘ  
 テ鎌倉ニ還リ女ヲ以テ之ニ妻ス七年義仲京ニ  
 入り平氏西ニ奔ル是ヨリサキ法皇中原康定ヲ  
 遣ハシ頼朝ヲ召シテ入朝セシム九月康定京師  
 ニ還ル頼朝因ツテ三事ヲ奏ス其一ニ曰ク平氏  
 横奪スル所ノ神田寺戸ヲ復セン其二ニ曰ク王  
 公卿士ノ莊園ニシテ平氏ニ掠メラルル物安堵  
 故ノ如クセン其三ニ曰ク逆チ棄テテ順ニ歸ス  
 ル者罪宜シク輕減スベシト入ツテ奏ス朝議之  
 ニ從フ時ニ義仲法皇ノ頼朝ヲ召スヲ聞キ悅ハ  
 ズ將ニ兵ヲ發シテ之ヲ拒ガントス十月頼朝使



ヲ遣シテ奏謝シテ曰ク臣若シ衆ヲ引イテ召ニ  
 趣カハ藤原秀衡佐竹隆義必ズ其後ヲ窺ヒ慮ニ  
 乗シテ掩襲セン且ツ數萬ノ衆一旦入京セハ則  
 ナ恐ラクハ都下ヲ擾サント遂ニ朝セズ是月敕  
 シテ本位ヲ復サシム十一月源義仲京師ニ反ス  
 三年正月弟範頼義經ヲ遣ハシ義仲ヲ討ツテ之  
 ナ誅ス二月範頼義經平氏ヲ一谷ニ攻メテ之ヲ  
 破リ平通盛忠度等ヲ斬リ平重衡ヲ擒ニス平宗  
 盛養和帝ヲ奉シテ屋島ニ據ル三月頼朝書ヲ西  
 海四國ニ移シ力ヲ戮ハセテ平氏ヲ勦サシム是  
 月頼朝源義仲ヲ誅スルノ功ヲ以テ正四位下ニ  
 叙セラル頼朝將士ニ約シテ曰ク凡ソ武家ニ仕  
 フルモノ法皇旨アツテ處分セハ事是非ト無ク  
 一ニ遵奉セン若シ枉屈スル者アラハ將ニオモ  
 ムロニ奏請シテ之ヲ申理セントスト四月質子

源義高亡ケ去ル追ツテ之ヲ殺ス五月叔父義廣  
 ナ伊勢ニ殺ス六月一條忠頼ヲ營中ニ召シテ之  
 ナ殺ス八月範頼ヲシテ九州ノ軍事ヲ總督シ以  
 テ平氏ヲ討タシム十月公文所ヲ置キ大江廣元  
 ナ以テ別當ト爲ス又問注所ヲ置キ三善康信ヲ  
 以テ執事ト爲シ獄訟ヲ聽決セシム文治元年正  
 月範頼使ヲ遣ハシテ糧食ノ乏絶戰艦ノ不給ヲ  
 告グ頼朝書ヲ奉シテ方畧ヲ指示シ將士ヲシテ  
 前帝太后及二位尼ヲ侵凌スルナカラントヲ  
 戒ム二月範頼進ンテ豊後ニ至リ原田種直ヲ擊  
 ツテ大イニコレヲ破ル是月中原經久近藤國平  
 ナ京師ニ遣ハシ院宣ヲ乞フテ兵士ノ侵掠ヲ禁  
 シ近畿諸國及ビ西海南海ヲ按檢ス義經京師ヲ  
 發シ四國ノ軍事ヲ總督シ屋島ヲ攻メテコレヲ  
 敗ル平宗盛養和帝ヲ奉シテ長門壇浦ニ走ルニ

月義經兵ヲ進メ撃ツテコレヲ破ル養和帝海ニ  
 崩ズ鏡璽及ビ皇太后一宮ヲ獲平宗盛平時忠等  
 ナ虜ニス平氏ノ族黨殺獲溺没シテ殆ンド了遺  
 ナシ範頼豊後ニ留ツテ筑紫ヲ鎮撫ス時ニ征西  
 將士ニ頼朝ノ奏請ニ由ラズシテ衛府諸司ヲ拜  
 スル者多シ頼朝書ヲ下ダシテ譴責シ各禁廷ニ  
 留直シテ東歸スルヲ許サズ諸國ノ兵軍糧ニ依  
 託シテ莊園ヲ侵掠シ官物ヲ鈔奪ス朝廷嘗テ頼  
 朝ニ敕シテ之ヲ治メシム既ニシテ頼朝土肥實  
 平梶原景時ヲ以テ近畿總追捕使ト爲ス而シテ  
 其置ク所ノ吏侵暴特ニ甚マシ是ニ至ツテ頼朝  
 書ヲ下ダシテ之ヲ請讓ス是月宗盛ヲ虜フルノ  
 功ヲ以テ超エテ從二位ニ叙セラル頼朝義經ノ  
 自ラ專ラニスルヲ惡ミテ嫌隙日ニハナハダシ  
 五月義經平宗盛父子ヲ以テ來ル頼朝義經ヲ卻

ケテ鎌倉ニ入レシメズ時政ヲ酒勾驛ニ遣シテ  
 迎ヘテ之ヲ受ケシメ復タ義經ニ付シテ京師ニ  
 送ラシム義經之ヲ途ニ斬ル七月中原經久等ヲ  
 シテ院廳ノ下文ヲ齎ラシテ太宰府ニ抵リ悉ク  
 兵士侵ス所ノ莊園ヲ復ス十月範頼筑紫ヨリ還  
 ル初メ行家京師ニ匿ル頼朝義經ノ行家ト相倚  
 託シテ己ニ抗センコトヲ疑ヒ梶原景季ヲ遣ハ  
 シ就イテ其動止ヲ伺ハシメ遂ニ土佐坊昌俊ヲ  
 遣ハシテ義經ヲ襲ハシム却ツテ殺サル行家義  
 經遂ニ宣旨ヲ奉シテ頼朝ヲ討タント乞フ議未  
 ダ決セズ左大臣藤原經宗奏シテ曰ク姑ク其請  
 ナ許シテ之ヲ畿外ニ出シ然後使ヲ遣ハシテ意  
 ナ頼朝ニ諭サハ可ナラント公卿皆其議ニ同ズ  
 獨リ右大臣藤原兼實聽カズ然レドモ法皇義經  
 ノ逼マランコトヲ懼レテ卒ニ宣旨ヲ賜フ時ニ



頼朝勝長壽院ヲ慶ス報至ル神色夷然タリ居ル  
コト二日ツヒニ法會ヲ爲ス既ニ歸ツテ將士ニ  
令シテ曰ク明日マサニ京師ニ赴カントスト啓  
行者ヲ擇ム小山朝政及ビ弟朝光等五十餘人直  
ニ發センコトヲ請フ曉ニ及ンデ令シテ曰ク我  
未ダ京師ニ至ラザルニ先ツテ速ニ行家義經ヲ  
誅スベシ若シ二人既ニ京師ヲ出ヅレハ姑ク吾  
至ルヲ俟テト後チ五月頼朝鎌倉ヲ獲シテ書ヲ  
諸道ニ移シ沿道ニ相會セシム十一月黃瀬川ニ  
至リ行家義經西ニ徇ルト聞キ引イテ還ル義經  
ノ姻屬タル故チ以テ河越重頼下河邊政義ノ食  
邑ヲ收ム頼朝行家義經ニ宣旨ヲ賜フテ己ヲ討  
タシムルヲ怨ミ屢冤ヲ朝廷ニ訴フ朝廷窮迫シ  
テ遽ニ院宣ヲ諸國ニ下ダシ行家義經ヲ逮捕セ  
シム頼朝時政ヲ遣ハシテ京師ヲ守護セシム大

江廣元ノ議ヲ用非時政ヲシテ奏セシメテ曰ク  
行家義經逃竄スレハ輒ク搜捕シ難シ若シ開ク  
ニ随ツテ兵ヲ發スレハ則チ國郡虛耗シテ其費  
貲カラズ請フ諸國ニ守護ヲ置キ莊園ニ地頭ヲ  
置キ所在ニ就イテ擒獲セシメバ則チ勞セズシ  
テ自ラ定マラン其兵糧ノ如キハ五畿山陰山陽  
南海西海二十六國ニ段別ニ米五升ヲ課シテ以  
テ之ニ充テント又自ラ總地頭ト爲ラント請フ  
法皇心ニ之ヲ難ズ公卿皆頼朝ノ意ニ違ハソコ  
トヲ憚ツテ遂ニ之ヲ許ス頼朝既ニシテ總地頭  
ト爲リ諸國ノ地頭ハ皆家臣ヲ以テ之ニ充ツ國  
司ノ權守護ニ移ツテ領家ミナ其地ヲ喪フ而シ  
テ朝廷愈衰フ頼朝法皇ニ奏シテ議奏公卿十人  
ヲ置キ併セテ公卿ニ黜陟ヲ行ハント請フ朝廷  
悉ク其請ニ從ヒ叙任黜陟スルコトハナハダ多

シ時ニ藤原基通攝政ス更ニ内覽ヲ置イテ以テ  
其權ヲ分ツ二年二月請フテ藤原親光ヲ對馬守  
ニ復シ源邦業ヲ下總守ニ藤原季光ヲ豐後守ト  
爲シ又家臣ノ久シウシテ京官ヲ帶ブル者八人  
ヲシテ之ヲ辭セシメ右大臣藤原兼實ヲ以テ攝  
政藤原基通ニ代ヘントス朝廷並ニ之ニ從フ三  
月奏シテ諸國ノ賦稅ヲ免センコトヲ請フ既ニ  
シテ時政ヲ鎌倉ニ召還シ北條時定等ヲシテ京  
師ヲ警衛セシム又妹夫左馬頭藤原能保ヲ遣ハ  
シテ京師ニ還リ雜務ヲ知セシメ以テ耳目ヲ廣  
クス五月北條時定源行家及子光家ヲ和泉ニ獲  
テ之ヲ殺ス六月民力ノ虛耗セルヲ以テ相模ニ  
賑給ス十二月天野遠景ヲ以テ筑紫奉行ト爲ス  
コノ歲中原親能ヲ遣ハシテ京師ヲ守護セシム  
六月大江廣元ヲ京師ニ遣ハシ閑院ヲ繕治セシ

ム八月鶴岡ニ詣リ始メテ放生會ヲ修シ流竊馬  
ヲ觀ル是ヨリ例ト爲ス時ニ京師盜賊横行ス頼  
朝ニ敕シ兵士ヲ遣ハシテ之ヲ捕ヘシム頼朝即  
チ千葉常胤下河邊行平ヲ遣ハス行平等盜ヲ執  
ヘテ之ヲ斬ル京師肅然タリ四年二月是ヨリ先  
義經逃レテ陸奥ニ至リ藤原秀衡ニ依ル幾ハソ  
モ無クシテ秀衡死ス是ニ至ツテ頼朝奏請シテ  
秀衡ノ子泰衡ニ敕シテ義經ヲ執致セシム六月  
坂東諸國ニ令シテ春秋ノ放生會ニ屠殺ヲ禁ズ  
因ツテ奏シテ敕ヲ諸州ニ下シ一切此ニ准ゼシ  
メソコトヲ請フ朝廷之ニ從フ是歲天野遠景ヲ  
遣ハシテ鬼界島ヲ擊ツテ之ヲ降ス五年正月正  
二位ニ叙セラル二月奏請シテ曰ク義顯逃竄シ  
テ未ダ搜索ヲ窮メズ恐ラクハ後患ヲ防グ所以  
ニ非ズ藤原泰衡ハ義顯ヲ容レ匿ス臣願クハ敕



ヲ奉シテ以テ天誅ヲ致サント義顯ハ即チ義經  
 ナリ三月大内ヲ修メ閏四月泰衡襲ツテ義經ヲ  
 殺シ首ヲ鎌倉ニ傳フ七月泰衡ヲ討タンコトヲ  
 請ヒ連奏シテ已マズ朝廷義經既ニ死シテ天下  
 畧定マル宜シク民力ヲ休養スベシト云フヲ以  
 テ之ヲ難ンズ頼朝大庭景親ノ策ヲ用シ報ヲ待  
 タズシテ發シ軍ヲ分ツテ三道ヨリ並ビ進ム頼  
 朝自ラ諸將ヲ帥キテ中路ヨリ進ム八月陸奥國  
 見澤ニ至ル泰衡熱借山ニ城ス頼朝ノ將島山重  
 忠等轉戰シテ直ニ敵城ヲ衝シ殺傷過當翌日頼  
 朝衆ヲ帥キテ戰ヲ督ス城堅クシテ拔ケズ諸將  
 殊死シテ戰フ聲山谷ニ震フ適小山朝光宇津宮  
 朝綱ノ兵潛ニ險ヲ踰エテ敵ノ後ニ出デ大ニ喊  
 シテ之ヲ射ル城兵騷擾シテ復ダ岡フヲ得ズ泰  
 衡ノ兄國衡奔ル退ツテ之ヲ斬ル泰衡國衡敗ル

ト聞キ城ヲ棄テテ走ル頼朝進ンテ國府ニ陣ス  
 常胤知家等來會ス時ニ或ハ云フ泰衡物見岡ニ  
 在リト或ハ云フ玉造ニ在リト頼朝自ラ玉造ニ  
 赴キ小山朝政等ヲシテ物見岡ヲ圍マシム泰衡  
 已ニ去ル士卒留ツテ戰フ朝政攻メテ之ヲ破ル  
 頼朝玉造ニ至リ多加波波城ヲ圍ム泰衡又遁レ  
 城兵悉ク降ル頼朝先鋒ノ諸將ニ諭シテ曰ク吾  
 軍津久毛橋ニ到ラハ則チ敵必ズ銳ヲ平泉ニ避  
 ケ完聚シテ以テ待タン慎ンテ寡兵ヲ以テ輕輕  
 シク進取ヲ圖ル勿レ宜シク衆軍ヲ整ヘ以テ殘  
 寇ヲ擊ツベシ深思熟慮シテ安ニ一士ダモ傷フ  
 ベカラズト進ンデ平泉ニ薄ル泰衡ノ將栗原三  
 迫ノ險ヲ扼シテ拒ギ守ル頼朝皆之ヲ破リ遂ニ  
 平泉ニ至ル泰衡已ニ城ヲ焚イテ遁ル乃チ國司  
 藤原基成ヲ召ス基成諸子ト出デ降ル泰衡窮蹙

シテ哀ヲ乞フ頼朝聽カズ九月追ツテ志波郡ニ  
 至ル泰衡從叔樋爪俊衡ト風ヲ望ンデ逃レ走ル  
 三浦義澄等ヲシテ追躡セシム頼朝陣岡ニ次ス  
 比企能員宇佐美實政既ニ出羽ヲ定メテ來會ス  
 衆幾ンド二十萬泰衡ノ部將河田次郎泰衡ヲ殺  
 シ其首ヲ持シテ陣岡ニ詣ツテ降ル頼朝責メテ  
 曰ク泰衡ハモトヨリ我掌中ニ在リ今之ヲ誅ス  
 ル豈ニ他人ノ手ヲ假ランヤ汝君ヲ弑シテ以テ  
 功ト爲ス罪八虐ニ在リト命シテ之ヲ斬ラシメ  
 泰衡ノ首ヲ梟ス適泰衡ヲ討ツノ宣旨院宣到ル  
 是ニ於イテ奥羽二國ノ兵ニ遣ツテ流離セル者  
 ナ撫慰シテ各本土ニ還シ特ニ老人ニ衣ヲ給ス  
 進ンデ厨川ニ次ス俊衡及ビ弟季衡諸子ト來リ  
 降ル泰衡ノ弟本吉高衡モ亦降ル奥羽二國悉ク  
 定マル其擒獲スル所ノ者ハ多クコレヲ釋ス是

ニ於テ捷チ京師ニ奏シテ專征ノ罪ヲ謝シ葛西  
 清重ヲ留メテ平泉檢非違使所ノ事ヲ管セシメ  
 家臣ノ陸奥ニ在ル者ヲシテ清重ノ節度ヲ棄ケ  
 シメ將士ノ功ヲ論ジテ二國ノ地ヲ頒チ賜フ國  
 府ニ至ツテ地頭等ヲ諭シテ租稅ヲ平ラカニシ  
 冗費ヲ省キ以テ民力ヲ緩クシ治務ハ一ニ秀衡  
 泰衡ノ舊規ニ遵ツテ變更スル所ナカラシム十  
 月鎌倉ニ還ル十一月院宣シテ泰衡ヲ討ツノ功  
 ナ褒ム十二月院宣シテ頼朝ニ伊豆相摸ヲ賜ヒ  
 永ク子孫ニ傳ヘシメ且ツ召シテ入朝セシム是  
 歲土肥實平ヲ遣ハシテ京師ヲ守護セシム建久  
 元年正月是ヨリサキ泰衡ノ將大河兼任兵ヲ出  
 羽ニ起ス衆數千人ニ至ル轉シテ陸奥ニ至ル由  
 利惟平小鹿島ニ出デ逆ヘ戰ツテ敗死ス兼任ノ  
 兵勢甚ダ熾ンナリ會葛西清重急チ告ク健歩謂



ツテ曰ク兼任亂ヲ煽シテ橘公成等戰死シ由利  
 惟平逃亡スト頼朝之ヲ聞イテ曰ク健歩ノ語謬  
 ル惟平戰死公成逃亡セシナラン吾レソノ平生  
 ナ以テ之ヲ知ルト果シテ其言ノ如シ頼朝信濃  
 上野ノ兵ヲ發シ足利義兼ヲ以テ追討使ト爲シ  
 千葉常胤東海道ヨリ比企能員東山道ヨリ同シ  
 ク兼遠ヲ擊テソノ餘ノ將士ニシテ邑ヲ陸奥食  
 ム者ハミナ軍ニ赴カシメ相模以西ノ兵ハ軍ヲ  
 備ヘテ須ラシ命ヲ鎌倉ニ待タシメ又使テ陸奥  
 ニ遣ハシ壯士ヲ戒メテ同謀協議シテ合軍進戰  
 シ功ヲ貪ボリ輕進シテ散戰以テ敗ヲ取ル勿ラ  
 シム數日ニシテ又使テ遣ハシ陸奥ノ軍ヲ監セ  
 シム一日諸將進ミテ泉田ニ至ル兼遠邀ヘテ粟  
 原一迫ニ戰ヒ大ニ敗ル諸軍奔ルヲ追ツテ累テ  
 テ之ヲ敗ル兼任身ヲ脱シテ走り村民ノ爲メニ

殺サル十月頼朝京師ニ朝ス騎從甚ダ盛シナリ  
 尾張ヲ過ギテ野間莊ニ到リ義朝ノ墓ニ謁シ僧  
 ナ請フテ法會ヲ修ス美濃青墓ニ至ツテ驛長大  
 炊ノ女延壽ヲ存問ス十一月京師ニ入ツテ六波  
 羅第ニ居シ先ツ法皇ニ謁シ後テ帝ニ朝ス救シ  
 テ直ニ權大納言ヲ授ケ尋テ右近衛大將ヲ兼テ  
 シム法皇頼朝ヲ待スル甚ダ渥シ引見スル毎ニ  
 語數刻ニ渉ル或ハ待側シテ日ヲ終フ十二月上  
 表シテ兩職ヲ辭ス故事ニ職ヲ辭スレハ半部車  
 ニ乗ルヲ得ズ院宣特ニ之ヲ許シ大功田百町ヲ  
 賜フ法皇救シテ麾下ニ殊功アル者二十人ヲ舉  
 ゲシム頼朝固辭ス聽カズ遂ニ十人ヲ舉グ衛府  
 官ヲ授ケラル初メ朝廷往往追捕使ヲ諸國ニ遣  
 ハシテ姦盜ヲ糾察ス頼朝モ亦嘗テ家臣ヲ以テ  
 總追捕使ト爲シ近畿諸國ヲ按檢セシム是ニ至

ツテ請フテ天下總追捕使ヲラントス廷議之ヲ  
 許ス是ニ於テ兵馬ノ權悉ク頼朝ニ歸シ而シテ  
 朝廷復々問フヲ得ズ頼朝鎌倉ニ還ル外甥藤原  
 高能ヲ以テ留メテ六波羅ヲ守ラシム二年正月  
 攻所ヲ置キ大江廣元ヲ以テ別當トナス二月敕  
 ナ奉シテ法住願ヲ修ス三年三月法皇崩ズ法皇  
 冬ヨリ不豫頼朝齋戒シテ日ニ法華經ヲ讀ミ又  
 劔馬ヲ石清水ニ奉リテ懇請ス崩ズルニ及ンデ  
 盛ノニ法會ヲ修シマタ漏舎ヲ置キテ行旅居民  
 ナシテ縱ニ浴セシムルコト一百日七月朝廷使  
 ナ遣ハシテ征夷大將軍ニ拜ス初メ鎮守府ニ將  
 軍ヲ置キシモ頼朝征夷大將軍トナツテヨリ朝  
 廷ソノ任ヲ重シ爲メニ鎮守府將軍ヲ罷ム四  
 年四月始メテ家人ノ坐次ヲ定ム四月那須野ニ  
 獵シ五月富士野ニ獵ス關東ノ家人畢ク集ル會

我祐成及ビ弟時致工藤祐經ヲ殺シテ以テ讎ヲ  
 報イ幕府ニ突入ス將士出デ鬪ツテ祐成ヲ殺シ  
 時致ヲ捕ヘテ之ヲ斬ル八月弟範頼ヲ伊豆ノ修  
 禪寺ニ拘ヘテ遂ニ之ヲ殺ス五年八月安田義定  
 子義資ノ事ヲ以テ怨望スト聞キ之ヲ殺ス七年  
 六月平知盛ノ子知忠京師ニ匿レテ兵ヲ聚メ將  
 ニ藤原能保ヲ襲ハントス能保後藤基清等ヲ遣  
 ハシ圍ミテ之ヲ攻ム知忠自殺ス是ヨリサキ平  
 氏ノ遺臣平忠房、盛嗣、盛久、宗助、藤原忠光、  
 藤原景清等或ハ黨ヲ結ビテ兵ヲ起シ或ハ形ヲ  
 毀テ服ヲ變シテ頼朝ヲ狙撃ス事皆成ラズ相繼  
 イテ擒殺セラル是ニ至ツテ與黨悉ク夷ラシ九  
 年十二月稻毛重成橋ヲ相模川ニ造ツテ之ヲ落  
 ス頼朝會ニ臨ミ歸路馬ヨリ墮テ病作ル正治元  
 年正月病革ナルヲ以テ薙髮ス薨ズル年五十二



適後鳥羽上皇將ニ蓮華王院ニ幸セントシ賴朝  
 薨ズト聞イテ罷ム賴朝和歌ヲ好ミ射ヲ善クス  
 屢將士ヲシテ流鏑馬、犬追物、笠懸ヲ講ゼシメ  
 テ親ラ其優劣ヲ試ム常ニ節儉ヲ以テ下ヲ率井  
 藤原俊兼ヲ召ス衣服鮮麗ナリ賴朝命シテソノ  
 刀ヲ取ラシメ自ラソノ裔ヲ截リ之ヲ戒メテ曰  
 ク汝ハ材幹アリ何ツ儉素ヲ守ラザル千葉常胤  
 土肥實平等ノ若キハ介冑ノ武夫ニシテ禮法ヲ  
 曉ラズ然レドモソノ采邑ノ大ナル亦汝ノ比ニ  
 アラザルニ猶ホ能ク蠲薄自ラ持シテ以テ其家  
 ナ富マシ多ク士卒ヲ養フハ功ヲ建ツニ在リ汝  
 何ツ之ヲ思ハザルト賴朝人トナリ面大ニシテ  
 身短カク風度温雅音吐亮朗沈毅ニシテ度量ア  
 リ算前ニ定マラザレハイマダ嘗テ事ヲ舉ゲズ  
 故ニ軍ニ敗劔ナシ將士畏服ス然レドモ猜忌ニ

シテ思寡シ骨肉功臣多ク殺戮ニ遭フ初メ賴朝  
 ノ祖先世世戰功アリ關東ノ士久シク源氏ヲ戴  
 シ賴朝府ヲ鎌倉ニ開キ天下ニ號令スルニ至ッ  
 テハ兵馬ノ權悉ク之ニ歸ス。世鎌倉右大將ト  
 稱ス又鎌倉殿ト曰フ三子賴家、實朝、僧貞曉。  
 而シテ貞曉ハ庶出ナリ。

みなもとのよき 源賴政

賴光ノ玄孫。兵庫頭仲政ノ子。賴政天資穎  
 敏、武畧アリ、射ヲ善クシ、和歌ニ工ミナリ。白  
 河法皇擢ンテテ判官代トナス保延中中藏人ニ  
 補シ從五位下ニ叙ス久壽二年兵庫頭ニ任ゼテ  
 ル保元ノ難ニ後白河帝鳥羽帝ノ遺教ヲ以テ武  
 將十人ヲ召ス賴政部下ノ兵ヲ率井テ王ニ勤ム  
 二條帝即位ノ日狂人アリ禁内ニ入ル賴政捕ヘ  
 テ之ヲ獲タリ功ヲ以テ院ノ昇殿ヲ聽サル平治

元年藤原信賴亂ヲ作ス源義朝信賴ニ勤メテ賴  
 政ヲ招カシム賴政初メ之ヲ許ス然レドモ義朝  
 サキニ其父弟ヲ殺シテ大イニ人望ニ乖クテ慮  
 カリ心ニ危疑ヲ懷ク帝ヒソカニ平清盛ノ六波  
 羅第ニ幸スルニ及ビテ意ヲ決シテ禁旅ニ屬ス  
 賴政久シク禁衛ニ在ツテ昇殿ヲ聽サレズ嘗テ  
 和歌ヲ作ツテ懷ヲ寓シテ之ヲ宮人ニ示ス帝覽  
 テ之ヲ憐ミ仁安元年正五位下ニ叙シ昇殿ヲ聽  
 ス三年從四位上ニ進ム高倉帝ノ時鷄アツテ夜  
 宮屋ノ上ニ鳴ク帝以テ不祥トナス侍臣賴政ヲ  
 推シテ之ヲ射サシム賴政一發ニシテ之ニ中ツ  
 帝及侍臣賞セザルハ莫シ嘉應承安ノ間右京大  
 夫ニ任シ從四位下ニ進ム治承元年延曆寺ノ僧  
 徒群起シテ日吉ノ神輿ヲ奉シテ禁闕ヲ犯ス是  
 ニ於テ諸將ニ命シテ宮城ノ諸門ヲ守ラシム神

輿直ニ賴政ノ守ル所ノ達智門ヲ指ス賴政馬ヨ  
 リ下リ冑ヲ免イテ拜伏シ從士渡邊唱ヲシテ言  
 ハシメテ曰ク守將賴政ハ山王ヲ崇信シテ子孫  
 ノ福ヲ祈ル今敕ヲ奉シテ此ニ在リ神輿ニ向ッ  
 テ弓ヲ彎カン事ヲ懼ル且ツ率井ル所ノ兵寡ニ  
 シテ弱ナリ自ラ大衆ニ向フニ足ラザルヲ知ル  
 願クハ之ヲ諒セヨ若シ聽カレズンハ屍ヲ輿前  
 ニ暴サンノミ然レドモ平重盛精兵ヲ擁シ陽明  
 門ヲ守ル衆徒之ヲ避ケテ我寡弱ヲ凌ガハ恐ラ  
 シハ笑テ京師ニ取ラント是ニ於テ僧徒轉シテ  
 陽明門ニ向フ二年平清盛賴政ノ年老イテ尙ホ  
 下位ニ淹滯セルヲ憐ミ爲メニ奏請ス是ニ於テ  
 從三位ニ叙セラル時人之ヲ異數トス三年剃髮  
 シテ名ヲ眞蓮ト改ム世源三位入道ト稱ス其子  
 仲綱ニ駿馬アリ星鹿毛ト稱シ又木下ト稱ス甚



之ヲ愛ス平宗盛コレヲ觀ント請フ仲綱拒ム  
 ニ和歌「戀ひしくば来ても見よかし身に添ふ  
 るかげをばいかで放ちやるべき」ヲ以テス宗  
 盛仍ホ請フテ止マズ頼政之ヲ聞キ諭シテ之ヲ  
 送ラシム仲綱止ムヲ得ズシテ之ヲ借ス宗盛遠  
 サズ仲綱ノ甚ダ斬メルヲ怒ツテ仲綱ノ二字ヲ  
 印烙シテ之ヲ腕中ニ畜フ一日客アリ觀ント請  
 フ宗盛馭人ヲ呼ソデ曰ク仲綱ヲ牽キ來レト仲  
 綱聞イテ愧忿シ宗盛ヲ刺シテ死ナント欲ス頼  
 政モ亦コレニ不平ナリ因ツテ常ニ隙ヲ伺ツテ  
 平氏ヲ滅サント圖ル時ニ清盛凶暴日ニ甚シ法  
 皇ヲ幽閉シ廷臣四十人ノ官爵ヲ奪フ天下怨讟  
 ス以仁王ハ高倉帝ノ庶兄ニシテ素ヨリ英名アリ  
 頼政謂ヘテク義主トナスベシト夜密ニ王宮  
 ニ造ツテ説ク王入シシ幽居シテ志ヲ得ザルニ

因リ頼政ノ言ヲ聞キ大イニ悦ビテ之ヲ許ス乃  
 チ藏人源行家ヲ遣ハシテ令旨ヲ諸國ニ頒示シ  
 以テ清盛ノ罪ヲ聲ラテ行家嘗テ熊野ニ居リ新  
 宮ノ僧徒ト交結ス是ニ至ツテ兵ヲ起サソコト  
 ナ相約ス僧徒密ニ相告語ス事竟ニ泄ル本宮別  
 當之ヲ平氏ニ告グ清盛頼政ノ首謀タルヲ知ラ  
 ズ因ツテ頼政ノ子兼綱等ヲ遣ハシテ高倉宮ヲ  
 圍マシム兼綱之ヲ頼政ニ告グ頼政乃チ王ニ圍  
 城寺ニ遁レンコトヲ勸メ自ラ仲綱兼綱及ビ渡  
 邊黨五十餘騎ヲ率キテ第ナ火シテ往キ王ニ圍  
 城寺ニ從ヒ僧徒ヲシテ延曆興福二寺ニ匿シテ  
 援ヲ請ハシム二寺之ニ應ズ既ニシテ延曆寺約  
 ナ變シ奈良ノ大衆未ダ至ラズ頼政議シテ曰ク  
 寡ヲ以テ衆ヲ撃ツハ夜戰ニ如クナシ今夜先ツ  
 羸弱一二千ヲシテ如意峯ニ陣セシメ歩卒ヲシ

テ火ヲ法勝寺三條河原ニ放タシメ平氏必ズ  
 出テ禦ガン我兵乃チ敵ヲ誘ツテ岩阪櫻本ニ退  
 キ間ニ乘シテ精銳四五百ヲ遣ハシ六波羅ヲ襲  
 ツテ火ヲ上風ニ放チ勢ニ乗シテ奮撃セハ勝必  
 セリト僧徒皆其議ヲ然リトス獨リ眞海ト云フ  
 モノ清盛ニ黨シ異議シテ時ヲ移ス頼政乃チ僧  
 徒一千餘人ヲシテ如意峯ニ向ハシメ仲綱ニ七  
 百餘騎ヲ率キテ山階ニ抵ラシム既ニシテ天明  
 クテ計策成ラズ軍ミナ引テ還ル衆怒ツテ眞海  
 ナ殺サント欲ス眞海六波羅ニ走ル頼政園城寺  
 ノ恃ムヘカラザルヲ慮ツテ遂ニ王ヲ奉ソテ奈  
 良ニ走ル王途上ニ倦睡シテ馬ヨリ墜ツルコト  
 六タビ乃チ軍ヲ駐メテ宇治平等院ニ憩フ清盛  
 知盛重衡等ヲ遣ハシテ之ヲ追ハシム頼政宇治  
 橋ヲ撤シテ之ヲ待ツ既ニシテ平氏ノ軍至ル頼

政僧兵ヲシテ之ヲ拒ガシム既ニシテ足利忠綱  
 等三百騎流ヲ亂ツテ濟ル大軍踵ギ至ル頼政二  
 子ト連ニ敵軍ヲ射ル以仁王間ヲ得テ南ニ走ル  
 頼政モ亦タ從テ適飛矢アリ頼政ノ膝ニ中ル兼  
 綱モ亦タ戰死ス頼政乃チ王ニ告ケテ曰ク事既  
 ニ此ニ至ル大王宜シク速ニ奈良ニ赴キ衆徒ノ  
 カニ因ツテ以テ事ヲ濟ス可シ臣ハ是ヨリ永ク  
 訣レント王嗚咽シテ去ル頼政轡ヲ廻ラシ敵ヲ  
 射テ之ヲ卻ク矢竭ク乃チ平等院ノ鈎殿ニ入り  
 甲ヲ脱ギ端坐シテ左右ニ謂ツテ曰ク身六朝ニ  
 仕ヘ八十ニ垂ントシ官爵已ニ祖先ニ踰エテ武  
 略等倫ニ耻ズバ今天下ノ爲メニ義ヲ唱ヘ生命  
 ナ顧ミズシテ名ヲ留ムルハ武夫ノ願フ所ナリ  
 汝等能ク捍禦セヨ我將ニ從容トシテ死ニ就カ  
 ントスト言畢ツテ亦ニ伏シテ死ス首ヲ京師ニ



傳ヘテ之ヲ梟ス。

みなもとのよのみつ 源頼光

滿仲ノ子。人ト爲リ、英武驍勇、世ニ冠タリ。射ヲ善シ、將略アルヲ以テ稱セラル。圓融、華山、一條、三條、後一條ノ五朝ニ歴事シ、攝津伊豫美濃等ノ諸國守ヲ累歴シ、内藏頭ヲ兼ヌ。左馬權頭ニ遷リ内昇殿ヲ聽サレ正四位下ニ至ル長保年中春宮大進ト爲リ皇太子ニ侍ス時ニ狐ノ殿上ニ臥スルアリ皇太子頼光ニ命ジテコレヲ射サシメ御弓及ビ猿目矢ヲ賜フ對ヘテ曰ク臣ノ壯ナルヤ嘗テ矢ヲ糜鹿ノ類ニ試ミタリキ然レドモ久シク藝ヲ試ミズ之中ル易カラザルナリ若シソレ中ラザレハ適以テ家聲ヲ墮スニ足ラン敢テ辭スト皇太子之ヲ強ユ乃チ射テソノ胸ニ中ツ狐地ニ墮ツ皇太子及ビ群臣其能

ク弱弓重矢ヲ以テ射テ之ニ中ツルヲ感シ寮馬ヲ賜ヒテ賞セラル頼光辭謝シテ曰ク此レ微臣ガ射藝ノ功ニ非ズ唯々祖先神祐ノ力ニ籍ツテナリト治安元年卒ス頼光嘗テ夜弟頼信ノ宅ニ至ツテ宴飲ス適一人ノ庭中ニ擊ガルルヲ見ル問フ彼ハ何人ツ頼信曰ク鬼同丸ト云フ者ナリト頼光曰ク彼ハ多力何ツ其縛ヲ嚴ニセザルト頼信乃チ鐵鎖ヲ以テ繫ガシム鬼同丸其言ヲ聞イテ大ニ之ヲ怨ム爾夜頼光醉テ頼信ノ第ニ臥ス鬼同丸鎖ヲ脱シテ逃レ出デヒソカニ承塵ニ上ツテ將ニ伺ツテ之ヲ刺サントス頼光從者ヲ召シテ左右ニ警衛セシム鬼同丸發スルヲ得ズコレヲ歸路ニ要セント欲シ乃チ鞍馬ニ赴ク市原ニ至ツテ野牛ヲ殺シ身ヲソノ間ニ匿シ以テ之ヲ待ツ既ニシテ頼光至ル源綱平季武等從フ

頼光牛ノ群遊スルヲ見テ從士ヲシテ之ヲ射サシム綱斃牛ヲ見テ射テ之ニ中ツ牛突然トシテ起ツ俄ニシテ鬼同丸跳出テ刃ヲ揮ツテ頼光ニ逼ル頼光刀ヲ挺イテ之ヲ斬リ遂ニ其首ヲ墜ス人其勇武ニ服ス嘗テ丹波大江山ノ山賊酒頭童子ト云フ者盜群ヲ率井出テテ京都ヲ切カス頼光勅ヲ奉ジテ之ヲ討ス。

みやけ・きつゑん 三宅橘園

儒者。加州ノ人。名ハ邦。字ハ元興。威如齋ト號ス。文化己卯八月病歿。年五十三。著書ハ「孝經解」、「中庸解」、「論語拔萃」、「禮記拔萃」、「論語定書」、「詩學訓和」、「海遊設載」、「鷄林情盟」、「助語審象」、「虛字譯」、「西遊筆騰」、「孝應錄」、「聖學綱」、「左傳發揮」、「左國雪冤」、「莊子辨疑」ナド。

みやけ・きつゑん 三完觀瀾

徳川幕府ノ儒者。通稱九十郎。京師ノ人。享保三年八月廿六日歿。年四十五。著書ハ「中興鑑言」、「觀瀾談餘」、「觀瀾文集」、「列士報讐錄」、「萍水集」、「支機閑談」ナド。

みやこ・いつちゆう 都一中

初メ京都本願寺派ノ寺ノ住。淨瑠璃ヲ好ミ、終ニ山本土佐掾ノ門ニ入り、遂ニ一軸ヲ出シテ名ヲ一時ニ博ス。一代初メ須賀千朴ト號シ、後チ都大夫一中ト稱ス。元祿寶永ノ間其名最モ世ニ著ル。享保年中死。

みやこ・よしか 都良香

父ハ貞繼。弘仁年中兄腹赤ト請フテ姓ヲ都宿禰ト改ム。博聞強記、善ク文ヲ屬ス。時ニ士習矜伐良香之ヲ嫉ンデ「辨薰齋論」ヲ著ス。對



策及第シテ正六位上少内記ニ遷ル。貞觀十四年平季長ト掌渤海客使トナル。尋テ從五位下ニ叙セラレ、大内記文章博士兼越前權介トナル。元慶三年卒。時ニ年三十六。

みやせ・りょうもん 宮瀬龍門

江戸ノ儒者。名ハ維翰、字ハ文翼。三右衛門ト稱ス。紀州ノ人。其先ハ後漢ノ獻帝ノ孫ヨリ出ヅ。世世醫ヲ以テ紀州侯ニ仕フ。物徂徠ノ風ヲ慕ヒ、江戸ニ來ツテ贊ヲ服部南郭ニ執ル。同門ノ士ツノ能ヲ妬ム。怏怏トシテ退イテ六經ヲ修メ古文辭ヲ爲ツテ敢テ世ニ交ラズ。名聲大ニ起コリ交遊海内ニ遍シ。諸侯聘スル者アリト雖モ辭シテ應ゼズ。明和八年正月四日歿。年五十三。著書ハ「古文孝經圖字解」、「東槎餘談」、「鴻臚願蓋集」、「金蘭集」、「李王七

律詩解」、「劉氏無盡藏」、「龍門山人文集」等。

みやもと・むね 宮本武藏

二刀流劔法ノ祖。名ハ政名。二天ト號ス。幼字ヲ七之助ト曰フ。後友次郎ト改メ、最後ニ武藏トス。播磨ノ人。赤松ノ支流。父ハ新免無二齋ト稱シ、十手ノ術ニ達ス。武藏之ヲ學ビテ其奧ニ達ス。自ラ以爲ラク十手ハ常用ノ器ニ非ズニ刀ハ常佩ノ具ナリト遂ニ二刀ヲ以テ十手ノ利ニ換ヘ獨リ自ラ其術ヲ修ム遂ニ其妙ヲ得タリ出テ加藤清正ノ臣宮本武藏衛門ノ養子トナル十三歳ニシテ本國ニ於テ新當流ノ達人有馬喜兵衛ト其術ヲ競ベ之ニ勝ツ十六歳ニシテ但馬ニ行キ大刀ノ劔客秋山某ト勝負ヲ試ミ反掌間ニ之ヲ擊殺ス續テ京都ニ入り累世足利將軍家ノ師範タル吉岡某ニ試合ヲ乞ヒ其

嗣清十郎ト蓮臺野ニ闘ヒ一撃ニ之ヲ仆シ氣息殆ド絶スルニ至ル清十郎深ク其及バザルヲ愧テ髪ヲ削ツテ僧トナル吉岡傳七郎ト云フ者アリ又郊外ニ出テ術ヲ爭フ傳七郎把ル所ノ木刀長サ五尺餘武藏機ニ投ジテ忽チ奪取リ反撃シテ立ドコロニ之ヲ殺ス吉岡ノ門生數百人誘殺シテ以テ師家ノ耻辱ヲ雪ガント欲シ演武ニ託シテ鴨東ノ松崎ニ屯集シ政名ヲ要シ矢石ヲ以テ之ヲ殺サント謀ル武藏些モ恐レズ單身徑ニ其所ニ赴キ二刀ヲ揮ツテ亂撃ス其勢ヒ猛虎ノ羣羊ヲ驅ル如ク皆披靡敗散ス都鄙恟恟相傳ヘテ其神武ニ畏服ス武藏慶長年中關原大坂兩役ニ功アリ寛永中島原ノ亂ニ肥後ノ細川家ニ仕ヘ軍ニ從フ初メ父無二齋有名ノ劔客佐佐木巖流ノ爲メニ殺サル武藏京師ヨリ小倉ニ赴ク

ヤ途之ニ遇ヒ決闘ヲ挑ミテ曰ク子ハ眞劔ヲ執レ我ハ木刀ニテ足レリト乃チ日ヲ約シテ小倉ノ海上船島ニ會合ス巖流ハ物干棹ト銘セル三尺餘ノ眞劔ヲ用シ武藏ハ機ヲ折リ長キハ二尺五寸短キハ一尺八寸トシ二刀ヲ組合セテ立向フ巖流刀ヲ大八相ニ構ヘ拜打ニ打下ス武藏受ケ外ツシテ巖流ノ頭上ヲ撃ツ敵身ヲ側ダテ左肩ニ承ケ留メ勢コソデ横ニ切り拂フヲ武藏兩足ヲ縮メテ飛騰リ電光ノ如ク眞向目ガケテ打下スニツ憐レムベシ巖流ノ頭腦微塵ニ碎ケテ即死ス是ヨリ島ヲ巖流島ト曰フ土人其尸ヲ埋メテ墓ヲ築ケリ武藏生涯刀劔ノ試合凡ソ六十餘場一回モ敗テ取ルコトナク且誓ツテ敵ノ眉間ヲ打ザレハ勝トセズ豪傑ノ名海内ニ轟キ人ハ推シテ二刀流ノ開祖トス傍ラ衆藝ヲ綜ベ物



トシテ涉獵セザルハナシ嘗テ書ヲ海北友雪ニ  
學ビテ頗ル氣韻アリ其書ノ所ハ多ク達磨或ハ  
鐘馗ノ像ニシテ山水ハ稀レナリ遺蹟世ニ多  
カラズ故ニ偶之アル時ハ人ハナハダ之ヲ珍  
重ス又俳諧ヲ嗜メリ。正保二年五月十九日熊  
本城下ニ病死ス。年六十四。法名玄信二天ト  
曰フ。

みよしきよつら 三善清行

字ハ耀、淡路守氏吉ノ子。巨勢文雄ノ門人。  
文雄之ヲ薦メテ曰ク「才學ハ時輩ニ超越ス」  
ト。菅原道真聞イテ之ヲ晒フ貞觀中文童得業  
生トナリ越前權司ニ補セラル元慶五年對策シ  
テ下第ス七年改メテ丁第ニ判ス尋テ大學少允  
トナル仁和年中少内記ニ遷リ從五位下ニ叙セ  
ラレ大納言ニ轉ズ寛平年中備前介トナリ從五

位上ニ進ム昌泰三年刑部大輔文章博士ヲ兼テ  
革命ノ議ヲ上ル是時右大臣菅原道真權寵隆盛  
清行之ニ退避ヲ勸ム道真納レズ乃チ書ヲ以テ  
諫ム其略ニ曰ク離朱ノ明モ睦上ノ塵ヲ視ル能  
ハズ仲尼ノ智モ篋中ノ物ヲ知ル能ハズ聊カ菅  
穴ヲ以テ伏シテ蓑箒ヲ添ヘン伏シテ惟ルニ明  
年辛酉ハ運變革ニ當ル二月卯ニ建ス將ニ干戈  
ヲ動かサントス凶ニ遭ヒ禍ニ衝ルハ未ダ誰カ  
是ナルヲ知ラズト雖モ弩ヲ引キ市ニ射ル亦當  
ニ薄命中ルベシ伏シテ惟ルニ尊閣翰林ヨリ  
挺ンテ超エテ槐位ニ昇ル朝ノ寵榮、道ノ光華、  
吉備公ノ外復タ美ヲ與ニスルモノナシ伏シテ  
冀クハ其止足ヲ知り其榮分ヲ察シ風情ヲ煙霞  
ニ擅ニシ山智ヲ丘壑ニ藏メ後生ヲシテ仰ギ視  
セシムルハ亦美ナラズヤト道真聽カズ遂ニ貶

謫ニ遭フ是時左大臣藤原時平諸司諸生ノ學ヲ  
管門ニ受クル者ヲ放逐セント欲ス清行書ヲ以  
テ諫ム其言ニ曰ク近日京中皆云フ外帥ノ弟  
子ノ諸司ニ在ルモノ左轉セラルベシ其文章生  
學生皆放逐セラルト是ニ由ツテ人人悲哭踴躅  
シテ立ツ伏シテ惟ミルニ此變轉ハ未ダ必シモ  
殿下ノ本心ニ非ルベシ夫レ外帥ハ累代ノ儒家  
其門人弟子ハ諸司ニ半ス若シ皆遷謫セバ恐ラ  
クハ善人ヲ失ハシ惡逆ノ主猶ホ輕科ニ處ス門  
人ニ至ツテハ唯益ヲ請ヒ業ヲ受ルノミ豈ニ其  
謀ヲ知ルアラシヤ方今紛亂擾爭ノ際宜シク其  
陰德ヲ立テ其怨門ヲ塞グベシ若シ咎メ多キニ  
過グレバ則チ怨門亦多シ若シ寬宥大ナレバ則  
チ陰德亦大ナリ伏シテ望ムラシハ衛府供奉關  
戍兵要ノ職家司近親同謀凶黨ノ人ヲ除クノ外

皆轉動スル無ク示スニ仁厚ヲ以テセント時平  
乃チ止ム四年改元ノ議ヲ上ル帝コレヲ嘉納シ  
延喜ト改元ス尋テ大學頭ヲ兼テ式部少輔トナ  
リ從四位下ニ叙セラレ式部大輔ニ遷ル帝マサ  
ニ政治ニ勵精シ詔シテ直言ヲ求ム清行時弊ニ  
關スル意見十二條ヲ上ル其畧ニ曰ク國朝天險  
土壤膏腴人民豐富二韓ヲ臣服ス能ク然ル以所  
ノモノハ國俗敦龐民風忠孝賦斂ヲ輕ク徵發  
ヲ疎ニス上ハ仁ヲ重テ下ヲ牧シ下ハ誠ヲ盡  
クシテ上ヲ戴キ一國ノ政ハ猶ホ一身ノ治ノ如  
キヲ以テナリト自後化漸ク薄ク法マスマス密  
ニ斂増シ役倍ス戸口月ニ減シ田畝日ニ荒ル既  
ニシテ佛法始メテ傳ハリ上下競ツテ貨産ヲ傾  
カテ浮屠ヲ造リ田園ヲ捨テテ佛地トナス降ツ  
テ天平ニ及ンテ多ク大寺ヲ創シ莊嚴美ヲ盡シ



遂ニ七道ヲシテ國毎ニ二佛寺ヲ建テシム名ケテ國分寺ト曰フ其費ヤ各其國ノ正稅ヲ用ヰ天下ノ費ノ十ノ五ニ居ル桓武帝ニ至ツテ宮城ヲ營ミ盡ク庸調ヲ賦シ又五ノ三ヲ費ス仁明帝奢ヲ好ミ後房ノ飾リ帑ヲ竭シ賦ヲ倍ス又二ノ一ヲ費ス貞觀年中宮殿頻ニ災アリコレヲ修覆スルニ又一ノ半ヲ費ス則チ當今國家ノ經入ハ古ノ十ガ一ニ非ルナリ臣嘗テ備中介トナリ試ニ其一郷ヲ閱スルニ皇極ノ晚年二萬ノ兵士アリ神護年中二千丁ニ減シ貞觀年中七十餘人臣ノ時ニ及ンデ僅ニ九人ヲ得今聞クニ一人モ無シト二百五十年來衰弊此如シ此ヲ以テ之ヲ推スニ天下ノ虛耗知ルベキノミ陛下萬古ノ興衰ヲ照シ宵衣旰食惠ヲ民庶ニ降ス興復寧ンゾ期スベキナカラシテ便宜十二事ヲ陳ス(其一)

請フ祭祀ヲ肅シミ豐穰ヲ祈ラン夫レ國ハ民ヲ以テ天トシ民ハ食ヲ以テ天トス民無クンハ何ニカ據ラン食ナクンハ何ニカ資ラン然ラハ民ヲ安ズルノ道食ヲ足ラスノ要唯水旱變ナク年穀登アルニ在リ故ニ朝家毎年神祇ニ禱ツテ豐熟ヲ乞フ然レ共霜星ヲ經ルニ從ヒ式儀漸ク紊レ修僧其人ヲ得ズ徒ニ故事ノ骸面ヲ存スルノミ此ノ如クニシテ神豈饗チ歎ケンヤ(其二)請フ奢侈ヲ禁ゼン貞元ノ間親王公卿筑紫絹ヲ以テ夏衫トス今史生白練ヲ以テ之ヲナス婦女婢妾統綾ニアラザレハ服セズ富者ハ志ヲ逞クスルニ誇リ貧者ハ及バザルヲ耻ヅ一衣產ヲ破リ一饌資ヲ盡クス田疇爲メニ蕪シ盜賊爲メニ滋シ望ムラクハ階級ニ隨テ制限ヲ立テ葬喪ニ至ツテモ亦然クシ以テ其僭忒ヲ紘シ上ヨリ下チ

率ハ源清クシテ流澄マン(其二)請フ口分田ヲ修セン蓋シ口分田ノ制タル租庸調ヲ收メンガ爲メナリ然ルニ今既ニ田ヲ奸シテ貢ヲ闕ク牧宰ハ空シク無用ノ田籍ヲ懷キテ豪富ハ彌併兼ノ地利ヲ收ム須ク見口ヲ閱實シテ其口分田ヲ班給スベシ其遺田ハ收メテ公田トナシ國司ノ活ニ任シ或ハ地子ヲ納メテ以テ無身ノ調租ニ充テ猶遺稻アラハ之ヲ不動ニ納メン此如クセハ其數ヲ概計スルニ當今ノ調庸ニ三倍セン則チ公ノ爲メニハ利アリテ民ノ爲メニハ損無シ(其四)請フ大學ノ學田ヲ復セン夫レ國ヲ治ルハ賢ニ在リ賢ヲ得ルハ學ニ在リ故ニ昔時學田ヲ給シテ諸生ヲ養成ス而シテ年代漸ク久シク事皆廢違シ終ニ今日ニ及ビテ諸生ヲシテ大學ハ坎壇ノ府凍餒ノ郷ト曰ハシムルニ至ル望

ムラクハ學田ヲ復シ又嚴ニ博士ニ敕シテ貢舉ノ法ヲ公ニシ材藝ヲ論シ請託ヲ受クルヲ得ザラシメン(其五)請フ五節ノ選妓員ヲ減シテ前朝内ヲ好ムノ例ヲ襲フナケン(其六)請フ判事ヲ増置セン舊制ニ判事ハ六員ナリ寛平四年詔シテ四人ヲ省キ唯大小判書各一人ヲ置ク而シテ大判事獨リ明法ノモノヲ用ヰ小判事ハ其人ニ非ズ夫レ萬民ノ死生ヲ以テ一人ノ唇吻ニ繫ケ五刑ノ輕重ヲ括リテ獨見ノ讞書ニ決スルハ既ニ閱實ノ理ニ乖ク恐ラクハ濫罰ノ科ヲ貽サシ望ムラクハ舊ニ依リ判事六人ヲ置キ皆法律ニ明ナル者ヲ擇ミ俱ニ科文ヲ議シ條章ヲ詳定セシメン(其七)請フ百官ノ四季祿ヲ均給セン比年官庫乏チ告ケ唯公卿及出納ノ諸司毎年給チ受ク其餘ノ庶官五六年ニ一季ノ料ヲ給シ難



シ閑忙務ヲ殊ニカト雖モ願賜ニ至リテハ宜シク差別ナカルベシ(其八)請フ諸國吏民ノ越訴ヲ停メン夫レ牧宰ノ重キヲ以テ小吏賤民ト肩ヲ比ベテ鞠ヲ受ク事白ナルヲ得ルト雖モ威權己ニ墜ツ耻ヲ知ルノ士誰カ吏タルヲ冀ハン望ムラクハ牧宰ヲ治スルニ寬典ニ從ヒ文法ニ拘スルナク反逆ヲ除クノ外朝使ヲ發セザラン(其九)請フ勘籍ノ人數ヲ定メン三宮以下諸王大失命婦資人諸司衛府式兵ノ二省ハ籍人一歲ニ稍三千人ニ及ブ國朝ノ課丁ハ與羽太宰九國ニ課スルノ外三十萬ニ滿タズ而シテ大半身アル者無キヲ以テ見丁十餘萬人ノミ其中歲歲三千人ヲ除カハ未ダ四十年ニ盈タズシテ天下皆不課ノ民トナラン望ムラクハ每年定額ヲ立テテ大國ハ十八人次ヲ以テ之ヲ差シ以テ獨符ニ載

セン(其十)請フ檢非違使督師ヲ選任セン檢非違使ハモト境内ノ奸濫ヲ糺スヲ掌ル而シテ今此職ニ任ズル者ハ皆是レ當時其贖勞料ヲ納メシ所ノ百姓ナリ徒ニ公俸ヲ費シテ差役ニ堪ヘズ望ムラクハ明法ノ學生ヲ監試シテ任ニ充テ又與羽鎮西及ビ沿海諸國ノ督師ハ皆年俸ヲ給シ又其斥賣ヲ許ス故唯價直ノ高下ヲ論シテ才伎ノ長短ヲ問ハズ望ムラクハ六衛ヲ練習セシメ其才伎ヲ試ミ其功勞ニ隨テ之ニ任ゼン(其十一)請フ僧徒ノ濫惡及宿衛ノ強暴ヲ禁ゼン嚮ニ朝廷權貴ノ山澤ヲ規錮シ田地ヲ侵奪スルヲ禁ズ是ニ於テ吏治ヲ施シ易クシテ民居安キヲ得而シテ猶ホ凶暴邪惡ノ者アリ即チ惡僧ト宿衛ナリ今諸寺ノ僧ノ得度スルモノ年ニ二三百人大半邪濫又課ヲ逃レ租ヲ逋ルルモノナ

リ天下ノ民禿首ノ者三ノ二ニ居リ皆妻ヲ蓄ヘ腥ヲ啖ヒ甚ダシキ者ハ盜ヲナシ或ハ竊ニ錢ヲ鑄ル望ムラクハ痛ク之ヲ禁懲シ度牒ヲ奪ヒ本役ニ返サンコトヲ又六衛府ノ舍人ハ皆須ラシク毎月結番曉夕警備スベシ然ルニ今諸國ニ散落シ或ハ千里ノ外ニ在リ百日行程ノ境豈ニ曉夕分番スルヲ得ンヤコレ皆部内ノ強豪民間ノ凶暴者ナリ國司法ニ依ツテ其事ヲ勘糺スレハ則チ奔ツテ洛ニ入り錢貨ヲ納レ買ツテ宿衛トナリ或ハ徒黨ヲ帥キテ國府ヲ却圍シ或ハ老拳ヲ奮ツテ以テ官長ヲ凌辱ス凡ソ厥ノ蠹害ハ唯疥癬ノミニアラザルナリ夫レ衛卒ヲ選置スルハ警急ニ備ヘンガ爲メナリ然ルニ今遠ク旬服ニ在ツテ京畿ニ居ラズ若シ急アラハ奔赴スルモ何ツ及ハン然ラハ則チ徒ニ諸國ノ豺狼トナツ

テ毫モ六軍ノ猛虎ニ非ルナリ望ムラクハ請フ諸衛府ノ舍人充補ノ後本國ニ歸住スルヲ得ズ若シ寧歸スル者アラハ各賜假ノ日ヲ限リ本府ノ牒ヲ取リテ國衙ニ附送シ限外ニ留連スルヲ得ザラシム若シ猶ホ解緩還ラザル者ハ國宰其職ヲ解キ且事狀ヲ錄シテ本府ニ牒送セン(其十二)魚住泊ヲ修セン夫レ山陽西海南海ノ三道舟船海行ノ程ハ樅生泊ヨリ韓泊ニ至ル韓泊ヨリ魚住泊ニ至ル魚住泊ヨリ大輪田泊ニ至ル大輪田泊ヨリ河尻ニ至ル各一日ノ行ナリ今此泊廢セラレテ韓泊ヨリ直ニ輪田ニ至ル蕩覆年ニ百艘望ムラクハ官司ヲ差シテ此泊ヲ修造シ播備ノ稅ヲ以テ其費ニ給セント。帝嘉納ス。十七年參議ニ任ゼラレ、宮内卿ヲ兼ヌ。明年播磨權守ヲ兼ヌ。十二月卒。年七十二。清行法律ニ



明ニシテ算術ニ精シク、博ク經史子集ニ通ズ。強記洽聞一時ノ宗タリ。嘗テ結眼文ヲ作ツテ其意ヲ寓ス。著書ハ「善家集」アリ。五條堀河ニ凶宅アリ、人敢テ居ラズ。清行之ヲ買ツテ移居ス。親戚皆之ヲ止ム。清行聽カズ。妖亦熄ム。

みよしけんもつ 三好監物

名ハ行房。字ハ顯民。其先ハ阿波ニ出ヅ一世ノ祖義元銃術ヲ善クスルヲ以テ藩祖伊達政宗ニ大坂ニ見ユ祿五百石ヲ賜フ祖ヲ義徧ト曰ヒ父ヲ義明ト曰フ母ハ菅原氏監物文化十一年十二月三日ヲ以テ生ル幼ニシテ其父ヲ喪フ母氏教フルニ義方ヲ以テス舉動詳雅成人ニ異ナラズ維新ノ初メ海内騷然將軍慶喜ノ大政ヲ奉還スルヤ朝廷薩長土等ノ諸藩ヲ召シ大議ニ參セシム尋テ伊達慶邦ヲ召ス而シテ伊達藩僻シ

テ東奥ノ一方ニ在リ上國ノ事情ニ暗シ是ヲ以テ異論紛紛物情恟恟一二ノ執政爲ス所ヲ知ラズ慶邦監物ノ大畧アルヲ知リ擢ンデテ參政ト爲ス監物慨然トシテ曰ク我が藩祖始以來勞チ王家ニ積メリ今日ノ事獨リ關西ノ諸藩ニ委スベケンヤト慶邦ニ勸ムルニ西上ノコトヲ以テス慶邦乃チ先ヅ監物ニ命シ兵ヲ率ヰテ京ニ入リ禁闕ヲ護セシム會伏見變起リ四方ノ義師輩下ニ輻輳スルモノ幾萬人先チ爭ツテ東伐セントス而シテ朝廷伊達藩ノ一方ニ雄タルヲ以テ特ニ詔シテ會津ヲ討タシム九條道孝ニ命シテ奥羽鎮撫使ト爲シ澤爲量コレガ副督タリ醍醐忠敬之ガ參謀タリ海道ヨリ東下ス監物兵ヲシテ三使ヲ護セシメ夜以テ日ニ繼ギ慶邦ニ復命ス是ヨリサキ執政阪英力等江戸ヨリ至リ宣言

シテ曰ク薩長ニ藩聖上ノ幼冲ヲ利シ徳川ノ政權ヲ奪フ其心事測ルベカラズ衆其言ヲ然リトシ一唱百和堅クシテ拔クベカラズ監物頻リニ大義ヲ陳シ百方辨論議遂ニ決シ三使ヲ候迎シテ大牙ヲ藩ニ駐メ慶邦ヲ贊ケテ軍ヲ總ヘ近隣ノ諸藩ヲ督シテ會津ヲ伐ツ士氣大ニ震フ然ルニ英力以下私ニ黨與ヲ結ビ會津庄内ノ二賊ニ通シ爭ツテ訛言ヲ放チ人心ヲ煽動ス而シテ監物ノ固ク正義ヲ執ルヲ惡ミ讒搆至ラザル所無シ監物勢ノ争ヒ難キヲ知リ病ト稱シテ職ヲ辭ス監物己ニ去ル英力等ノ凶徒亦忌憚スル所無ク遂ニ奥羽ノ諸藩ヲ要シ王師ヲ拒ムニ至ル監物國事ノナスベカラザルヲ視退イテ其采邑磐井郡黃梅村ニ屏居ス既ニシテ王師白川磐城ノ諸城ヲ拔キ賊鋒日ニ鈍ナリ衆心疑懼議論區區

是ニ於テ凶徒監物ノ再ビ起ランコトヲ恐レ兵ヲ伏セテ監物ヲ召ス監物其免レザルヲ知リ慨然トシテ歎シテ曰ク事此ニ至ル亦如何ントモスルコト能ハズ斷然引決スルニ若カズト母ヲ視テ訣別ス母氏欣然トシテ曰ク汝王事ニ殉死ス吾復タ何チカ恨マント乃チ醍醐參謀ニ上ル書ヲ作り二子ニ付シテ曰ク六師疆ニ臨マハ汝等宜シク之ヲ持シテ主母ノ爲メニ命ヲ請フベシト是ニ於テ一家掩泣ス監物從容酒ヲ命シ書畫ヲ作り和歌ヲ詠シ談笑自如平生ニ異ナラズ夜半左右ヲ屏ケ端坐シテ自及ス氣息未ダ絶タズ目ヲ瞑ラシ長大息シテ曰ク咄凶賊ノ輩詔勅ノ何物タルヲ知ラズ斯ノ頑鈍ヲ如何セント乃チ絶ス時ニ明治戊辰八月十五日ナリ凶徒之ヲ聞キ猶ホ其僞死ヲ意フ因ツテ尸ヲ輿シテ其黨



チシテ之ヲ檢セシム又政ノ監物ト忠ヲ同シウ  
 スル者ヲ捕ヘ悉ク獄ニ下ス既ニシテ王師疆ニ  
 臨ミ申諭ス慶邦始メテ凶徒ノ罔蔽スル所タル  
 ナ知リ英力以下ヲ逮捕シ罪ヲ闕下ニ謝ス而シ  
 テ監物ノ言ヲ用井ザルヲ悔ユ監物人トナリ勇  
 斷果決議論侃侃苟クモ合フヲ求メズ海内多故  
 以來慨然トシテ身ヲ以テ國ニ許シ苟クモ國家  
 ナ益ニル所ノ者ナサザル所ナク前後職ニ在ル  
 コト二十年君嘗野氏ヲ娶リ七男四女ヲ生ム曰  
 清熙先ツ歿ス曰ク清篤曰ク清高曰ク清徳二子  
 猶ホ幼ナリ女ハ長天ス次ハ小野氏ニ適キ次ハ  
 三浦氏ニ適キ次ハ家ニアツテ歿ス翌月諸子監  
 物ノ遺命ヲ奉シ磐井郡東山黄海松柏山皇徳寺  
 ニ葬ル享年五十四明治己巳某月日朝廷藩ノ攝  
 知事伊達宗敦ニ勅シ監物殉節ノ事狀ヲ上ラシ

ム宗敦狀ヲ具シテ以開ス聖上嘉歎祭資二百金  
 ナ賜フト云フ。

みよし・ちやうけい 三好長慶

長基ノ長子、本名ハ範長。小字ハ千熊丸。更  
 ニ孫二郎ト稱ス。智勇兼チ備ル世世四國ノ細  
 川氏ニ仕フ父戰死ノ秋甫メテ十歳支族宗三及  
 ビ松永久秀等之ヲ輔ク十七歳ノ時兵ヲ率井テ  
 畿内近傍ニ入ル享祿十四年丹人内藤正貞細川  
 氏綱ヲ助ケテ關城ニ據リ亂ヲ起ス七月範長宗  
 三之ヲ伐ツテ其城ヲ拔ク十五年八月範長細井  
 晴元ノ命ヲ受ケ遊佐長教ヲ伐ツ細川氏綱急ニ  
 來ツテ之ヲ襲フ長慶兵微ナルヲ以テ和ヲ乞フ  
 テ罷ム十七年範長名ヲ長慶ト改ム宗三ト干戈  
 ニ及ブ前ニ海雲宗三ト權ヲ争ツテ和セズ界浦  
 ニ死ス實ハ宗三ノナス所ナリ長慶意ニ宗三チ

援ケテ攝河泉ノ兵權ヲ握ラントシ屢晴元ニ請  
 フ聽ズ却ツテ宗三チ援ク長慶悲ツテ曰ク晴元  
 宗三チ援ケテ我又氏綱ヲ立テノ幕府宗三チ棄  
 テズンバ我亦義榮ヲ擁立センノミト十八年二  
 月長慶界浦ニ往キ三月宗三細井晴賢ノ中島城  
 ニ據ル長慶與ニ柴島城西濱ニ戰ツテ之ニ克ツ  
 河原林又兵衛等之ニ死ス此夜柴島城ヲ棄テ去  
 ル晴賢入ツテ之ヲ保ツ宗三複並城ニ入ル又之  
 チ攻ム長慶終ニ細川氏綱ヲ立テ進ミテ晴元チ  
 三宅城ニ攻ム一存謂フ今此城ヲ拔ク甚ダ易シ  
 若シ晴元死セバ君ヲ弑スルノ名ヲ免レズト長  
 慶ニ勸メテ淀川ニ退キ急轉シテ江口ノ陣ヲ襲  
 フ會陣中糧竭キ且内應スル者アリ宗三敗レテ  
 河内ニ走ル歩兵追撃シテ宗三チ獲タリ首ヲ斬  
 ルコト千三百八十級晴元ニ屬スル諸城ヲ攻メ

晴元自ラ將トシテ之ヲ援フ連戰大ニ敗レ單騎  
 ニシテ遁レ義晴義輝ヲ奉シテ近江ニ走ル七月  
 長慶京師ニ入り號令ヲ施シ松永久秀ヲ留メテ  
 鎮後トナシ兵ヲ收ム時ニ長慶久秀ニ命ジテ事  
 ナ執シム苛酷ニシテ衆皆之レニ困ム廿一年正  
 月長慶京師ニ入り將軍義輝ヲ見テ專ラ威權ヲ  
 恣ニス大小ノ事皆長慶ニ決ス弘治二年二月伊  
 勢貞孝請フテ長慶ヲ享ス久秀及ビ岩城左通等  
 陪從ス夜ニ入り酒酣ナル時幕府ノ士進士賢光  
 進ンテ長慶ヲ刺スコト二刀左右起ツテ之ヲ救  
 ヒ大野三郎賢光ヲ斬リ佐野十兵衛前ンテ貞孝  
 チ執フ長慶卒ニ死セザルヲ得是時ニ當リ六角  
 氏大舉シテ既ニ大津ニ入り長慶ガ殺サルト聞  
 キ部伍ヲ亂シテ馳セ來ル松永久秀ノ伏兵ニ逢  
 ヒ忽チ潰散シ或ハ山科巖下ニ走ル兵士追ツテ



之ヲ擊ツ長慶初メ八幡ニ避ケント欲シ鳥羽ニ到リ勝ヲ開イテ歸リ兵三千ヲ大津ニ遣シ之ニ備フ永祿三年義輝長慶ニ命シテ列藩ニ陞リ相伴衆ト爲ス二月義輝朝覲シ長慶扈從ス修理大夫ニ任ズ是時ニ當ツテ畠山高政泮嬖ノ偏ル所トナツテ出デテ亡ク長慶師ヲ帥テ嬖幸ヲ逐ヒ高政ヲ納レ人ヲ擇ミテ之ヲ相ケシム既ニシテ高政其人ヲ黜ケ盡ク舊嬖ヲ復ス長慶恙ツテ曰ク是レ驚才ナリ之ヲ除クニ若カズト是ニ於テ實休ト河内ニ入り轉戦之ヲ破ル高政紀伊ニ奔ル長慶乃チ河内ヲ併テ徙ツテ飯盛城ニ居リ久秀ヲ遣ハシテ大和ヲ徇ヘシム實休岸和田ノ城ヲ修シ高政ト久米田ニ戰ツテ之ニ死ス是日長慶弟冬康及ビ宗養紹巴ト聯歌會ヲ飯盛城ニ開ク長慶徐ロニ曰ク弟實休役ニ死ス我レ此ヨ

リ發セント乃チ辭シ赴キ戰ツテ之ニ克ツ五年三月河泉ノ兵畠山高政ヲ擁シ根來僧徒ヲ率テ飯盛城ヲ圍ム五月冬康久秀ヲシテ先鋒トシ長慶ヲ後援トシテ夾撃シテ大ニ高政ヲ敗リ餘黨降散シ五畿悉ク平ク六年八月子義興暴ニ卒ス蓋久秀之ヲ毒殺スルナリ而シテ長慶知ラズ長慶一存ノ子義繼ヲ養ツテ嗣トス義興ノ死ヲ哀ミ心茫然トシテ務ヲ廢ス由ツテ久秀益横ナリ七年六月久秀冬康ヲ譖シテ之ヲ掩殺ス長慶頓テ其罪無キヲ聞キ病更ニ劇シ七月終ニ卒ス年四十二法名眠室宗進聚光院ト號ス。

みんてう 明兆

畫僧。名ハ吉山。淡路ノ僧。東福寺ノ大道禪師ヲ師トス。資性畫ヲ好ム。永享三年八月廿日歿。遺蹟著名ノ品ハ「十六羅漢之圖」一四十八

祖ノ像「寒山拾得ノ圖」、「聖一國師(左鐵拐右瓊蟻)三幅對」、「達摩正面の像」、「正面白衣觀音ノ像」、「佛殿後門觀音の像」、「法堂蟠龍の圖」ナド。



むさう 無相

僧。名ハ文雄、字ハ谿然。蓮社ト號ス。洛ノ了蓮寺十七世ノ住職。尙綱堂ト稱ス。俗姓ハ中西氏。丹州ノ人。儒學ヲ崇ビ、太宰春臺ト方外ノ交ヲナシ、談話履音韻ノ學ニ及ブ後遂ニ一家韻ヲ發明ス。寶曆年間寂。年六十四。著書ハ「磨光韻鏡」、「磨光餘」、「論翻切伐枝編」、「三音正偽」、「廣韻字府」、「古今韻枯」、「韻鏡律正」、「九弄弁」、「經史莊舌音」、「指要錄」、「字彙

莊舌音「ナド。

むさしほうべんけい 武藏坊辨慶

熊野ノ別當堪增ノ子。初名ハ鬼若丸。幼ニシテ叡山ニ登リ、西塔ニ住シ自ラ武藏坊ト號ス夫ヨリ鰐淵山ニ至リ顯密ノ二教ヲ學ブ人トナリ磊落不羈ニシテ經卷ヲ事トセズ常ニ好ンテ武技ヲ修ム衆僮之ヲ忌ム長シテ志ヲ翻シ學ニ傾ク嘗テ思フ所アリ五條ノ橋ニ出デテ人ノ劍ヲ奪フ一日源義經ノ金裝刀ヲ帶ビテ行ク見之ヲ奪ハント欲ス却ツテ之ニ窘メラレ降ヲ乞フ義經約シテ君臣トナル臂力アリ好ンテ大薙ヲ刀用フ傳ヘ云フ軍陣ノ間常ニ木槌、鋸、鎌、斧、鐵棍、鐵搭ノ七具ヲ擔フト義經平氏ヲ討ツテ鎌倉ニ歸ルヤ腰越驛ニ次ス賴朝使ヲ遣シテ容レズ辨慶爲ニ狀ヲ具シテ其冤ヲ訴フ聽カズ



乃チ已ムヲ得ズシテ京師ニ還ル尋テ追討ノ師  
 至ルニ及ビ腹臣ノ士ト奥ノ藤原秀衡ニ趨キ之  
 ニ寄ラントス辨慶從フ衆裝ヲ變シ修行僧トナ  
 リ安宅ノ關ニ至ル關吏富樫某拒イテ通ゼズ辨  
 慶關ノ守丁數人ヲ擲チ之ヲ過シ遂ニ奥州ニ奔  
 ル頼朝藤原泰衡ニ命ジテ之ヲ討タシム泰衡夜  
 急ニ小衣川ノ邸ヲ襲フ辨慶門ヲ開キ己ノ像ヲ  
 門外ニ樹テ義經等ト舟ニ乗シ竊ニ北ニ奔ル敵  
 其像ヲ以テ眞トナシ敢テ近ヅカズ曉ニ及ビテ  
 始メテ之ヲ知ル衆既ニ遠ク遁ル義經辨慶等蝦  
 夷ヲ征服シ山丹ヨリ進ンテ韃靼ニ入ル蝦夷ニ  
 辨慶岬アリ韃靼地方ニ門戸必ズ辨慶武裝ノ圖  
 ナ描キ貼ルハ其證ナリ。

むらさみ・とつれい 村上冬嶺

京師ノ御醫。平安ノ人。世世啞科ヲ業トス。年

十六。醫名高シ。寶永乙酉歿。年八十二。

むらさみ・ぶつざん 村上佛山

豊前ノ詩人。稗田村ノ人。名ハ剛、字ハ大有。  
 温厚平和、詩ヲ嗜ム。弟子甚々多シ。平生白  
 蘇二集ヲ讀ム。其詩温厚ニシテ奇恣縱横自在  
 凡ソ天地事物巨細詩ニ入ラザルナシ曲ニ其妙  
 ナ盡ス其伊呂波歌ノ如キ尤モ奇構ニシテ前輩  
 蘇子ノ石鼓歌ニ似タリト明治十二年佛山年七  
 十壽筵ヲ其郷ニ開ク期ニ先チ遍ク詩ノ雪月花  
 ニ係ル者ヲ海内詩ノ名流ニ徵ス後幾クナラズ  
 シテ歿ス遺稿若干卷アリ。

むらさみ・よしきよ 村上義清

姓ハ源氏。村上帝ノ裔。信濃ノ人。義清幼名武  
 王丸。右京權亮佐渡守トナル。永正十五年父顯  
 國ニ繼イテ葛尾城ニ居ル大永元年從四位下ニ

叙シ左衛門佐ニ任ズ屢武田信虎ト戰フ二年八  
 月遂ニ之ヲ敗ル七年二月信玄怒ツテ來リ戰フ  
 義清又之ヲ敗ル十一年三月義清自ラ兵萬餘ヲ  
 率井甲ニ入ル小笠原長時木曾義昌諏訪頼重之  
 ト同盟ス信玄邀ヘ戰フ十三年二月信玄頼重ヲ  
 誘ヒ之ヲ降ス十五年三月信玄復テ海尻城ヲ攻  
 ム城中叛ク者アリ城遂ニ陥ル七月信玄香坂内  
 山小田井ノ數寨ヲ攻メテ之ヲ拔ク十一月義清  
 ノ將甲軍ト戰ヒ之ヲ敗ル十二月旗滿氏須田親  
 滿等ト議シ海尻ヲ復ス城將眞田幸隆降ヲ乞フ  
 義清之ヲ許ス義清ノ兵代リ守ル幸隆夜竊ニ城  
 ニ還リ火ヲ放ツテ之ヲ燒キ兵ヲ遣ハシテ之ヲ  
 襲フ義清ノ兵死傷頗ル多シ天文十六年義清連  
 ニ病ム信玄兵ヲ遣ハシテ來リ攻ム滿氏常ニ之  
 ナ敗ル八月信玄騎兵萬餘ヲ率井テ佐久郡ニ入

リ笠原清繁ヲ志賀城ニ圍ム是ヨリサキ小縣ノ  
 城守幸隆若狹及ビ弟宗左衛門ノ辯ニシテ勇ナ  
 ルヲ知リ謀ヲ授ケ伴リ來ツテ降ヲ乞フ約シテ  
 内應ヲ爲ス印書之ヲ盟フ義清之ヲ信シ勇士五  
 百ヲ撰ビ小縣ニ到ル兄弟引イテ城ニ入ル幸隆  
 門ヲ閉ケ悉ク之ヲ殺ス義清憤リ是ニ至ツテ兵  
 ナ遣リ志賀城ヲ救フ然レ共城卒ニ陥ル義清死  
 ナ決シ必ズ信玄ト會戰セント欲ス將士或ハ諫  
 メテ曰ク曩ニ幸隆ノ賣ル所トナリ良士多ク死  
 シ復タ事ニ堪フル者ナシ請フ君輕舉禍ヲ取ル  
 莫レト義清聞カズ兵七千餘騎ヲ將井上田原ニ  
 戰ヒ甲將板垣信形ヲ斬ル十七年四月信玄兵ヲ  
 率井テ木曾義昌小笠原長時ト戰フ二人救ヲ義  
 清ニ乞フ九月義清兵ヲ將井テ之ヲ援ケ信玄ト  
 戰ヒ之ヲ敗リ軍監横田高松等ヲ斬リ進ンデ中



軍ニ迫ル山本晴行計ヲ設ケ義清ノ兵ヲ誘フ義清爲メニ敗走ス二十三年義清謙信ニ從ヒ信玄ト河中島ニ戰フ永祿四年義清信玄ノ弟信繁ト組ミ之ヲ獲タリ八年三月義清越後根知城ニ徙ル。十二年十月髪ヲ剃リ、元龜四年正月卒。年七十三。瀧寺ト號ス。

むらさきよしてゐる 村上義光

彦四郎ト稱ス。信濃ノ人。源頼清ノ後。彌四郎信泰ノ子。左馬權頭トナル元弘ノ亂ニ義光子義隆及ビ赤松則祐平賀三郎等ト護良親王ニ從ツテ十津川ニ逃ル熊野別當定遍之ヲ索ムル事急ナリ護良去ツテ吉野山ニ往ク土人芋瀬莊司兵ヲ以テ路ニ要ス護良計ノ出ヅル所ナシ從者ヲ遣ハシテ説クニ投託ノ意ヲ以テス平賀三郎曰ク徳行ノ士皆大王ノ股肱失フヘカラズ宜

シク旗ヲ以テ授ケラルベシト護良之ニ從ツテ過グルコトヲ得タリ義光適後ル莊司兼ヲ擁シ錦旗ヲ荷ヒテ還ルニ遇フ義光直ニ前ンデ旗ヲ奪フ莊司驚愕顧ズシテ去ル護良大ニ喜ビ吉野ニ至リ城ヲ築キテ之ヲ守ル敵大兵ヲ以テ來リ攻ム外城既ニ陥ル護良親ヲ戰フコト數合退イテ左右ト酒ヲ酌ミテ慨歌ス義光鎧ニ矢ヲ被ルコト蝟毛ノ如シ來リ跪イテ曰ク臣中城ヲ拒グ數時適歌聲ヲ聞ク故ニ來ツテ相會ス賊勢強キコト甚ダシ城支フヘカラズ臣請フ大王ノ鎧裝ヲ賜リ詭ツテ大王トナツテ死セン大王間ニ乗ジテ通り去レト護良曰ク死セバ則同シク死セシテ何グ相棄ツルニ忍ビント義光聲ヲ勵マシテ曰ク大事ヲ圖ル者惡ンツ此言ヲナスト起ツテ自ラ護良ノ鎧ヲ解ク護良顧ミテ曰ク卿ノ忠ハ

生ヲ易フルモ忘レズ我儻シ免ルコトヲ得ハ厚ク冥福ヲ修セン免レザレバ追ツテ地下ニ從ハント遂ニ行ク義光乃チ鎧ヲ被ツテ譙樓ニ登ルニ義隆來ツテ借ニ死セント欲ス義光曰ク亟ニ去ツテ王ノ爲メニ後拒シ徒ニ死スルナカレト義隆泣イテ訣ル義光遙ニ護良ノ去ルコト遠キヲ望ミ大ニ敵軍ニ呼ンデ曰ク今上ノ第三子護良引決ス彼等我ガ自刃スルヲ見テ以テ法トナセト乃チ腹ヲ割シ腸ヲ抽イテ壁ニ擲ツテ斃ル賊四集シ就イテ其首ヲ斬ル。

むらさきよしてゐる 紫式部

式部丞藤原爲時ノ女。右衛門權佐藤原宜孝ニ嫁ス。式部資性敏慧幼ナル時人ノ書ヲ讀ムヲ聞キ輒チ能ク諳記ス爲時甚ダ之ヲ愛シ常ニ之ヲ撫シテ曰ク汝ヲシテ男子ヲラシメザルコト

ナ恨ムト長シテ和歌ヲ能クシ博ク和漢ノ舊記ニ涉リ兼チ朝廷ノ典故ニ通ズ時ニ上東門院方ニ文詞ヲ好ミ婦人ノ才華アル者ヲ擇ンテ左右ニ引置ス式部モ亦々時ニ候ス上東門院白氏文集ヲ讀マント欲ス式部之ニ樂府二卷ヲ授ク上東門院ノ父道長其才色ヲ悅ンデ之ニ私セント欲ス式部拒ミテ從ハズ「源氏物語」五十四帖ヲ著シ醍醐朱雀村上ノ三朝ノ事蹟ニ假託シ空ニ架シ虛ニ憑リ閑富精妙古今ニ度越ス後人箋註ヲ下シテ疑難ヲ解ク詞家ノ宗トナス一條帝讀ミテ大ニ之ヲ賞シテ曰ク是レ好ク日本紀ヲ諳熟スル者ナリト人呼ビテ日本紀局ト曰フ人トナリ婉順淑良ニシテ自ラ所長ニ矜ラズ其謹飾身ヲ持ツノ大略ハ著書ノ日記ニ詳カナリ。

むらさきよしてゐる 村土玉水



福山侯ノ儒官。名ハ宗章、行藏ト稱ス。江戸ノ人。安永五年正月四日歿。年四十四。著書ハ「禮儀略」、「退溪書鈔」、「一齋雄言」、「一齋經說稿」、「玉水文章」ナド。

むらた・かうてい 村瀬栲亭

有名ナ儒者。名ハ之熙、字ハ君績。嘉右衛門ト稱ス。又神州ト號ス。京師ノ人。文政初年歿。年七十餘。詩文ヲ以テ稱セラレ、又書畫ヲ善クス。特ニ草書ニ妙ナリ。書ハ蘭竹ニ長ズ。著書ハ「蕪苑日抄」、「論語集義」、「學庸集義」、「周易拾象稿」、「万象一旨」、「楓樹詩纂」、「栲亭集」ナド。

むらた・たせ 村田多勢

和學者。春海ノ女。歌ヲ善クシ、嘗テ和歌集ヲ著ス。

むらた・はるかぜ 村田春門  
浪花ノ歌人。初名一柳並樹。鈴門ノ人。

むらた・はるまこと 村田春郷

和學者。字ハ君觀、顯義堂ト號ス。姓ハ平、江戸ノ人。本ト商人。加茂直淵ニ學ブ。弟春海ヲシテ家ヲ繼ガシメ、自ラ別居ス。明和五年九月十八日歿。年三十。家集アリ。

むらた・はるみ 村田春海

和學者。字ハ士觀、織綿齋、又琴後翁ト號ス。通稱平四郎。姓ハ平氏。春道ノ二子。兄春郷ト同シク加茂真淵ニ從ツテ本邦古言ノ義ヲ學ビ又和歌ヲ善クス。八年二月十三日歿。年六十六。著書ハ「所詞語」、「假字拾要」、「歌苑古題類抄」、「作文通弊」、「和學大概」、「齋明紀童謠考」、「後案字合稱呼考」、「五十音辯誤」、「椿太

詣記」、「神道志」、「假字大意抄」、「字鏡考證」、「琴後集前後編」、「興稻掛大平書」、「重興稻掛大平書」、「答和泉真國書」、「織錦雜記」、「怜野集」、「同拾遺」、「西土國習考」ナド。

むらた・はるみち 村田春道

和學者。江戸ノ人。尙古堂ト號ス。通稱平四郎。歌、文章ニ長ズ。明和六年七月二十一日歿。「春道家集」ヲ著ス。

むらた・ちんじゆ 村井椿壽

熊本藩ノ醫。名ハ椿。字ハ大年。琴山ト號ス。年五十餘。藩ニ仕へ、上進シテ侍醫トナル。幾クモナクシテ致仕ス。時ニ年八十二。文化十二年三月一日病歿。年八十三。著書「和方一萬方」、「主方考」、「藥量考」、「分量考」、「三千年眼力篇」、「類聚方議」、「醫方量水卒考」、「方極剛

定」、「琴山詩集」、「琴山文集」、「診餘漫錄」。

むら・きつらう 室鳩巢

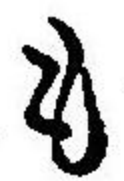
徳川幕府ノ儒官。名ハ直清。字ハ師禮。順祥ト稱ス。小字孫太郎。又滄浪ト號ス。齋ヲ名ツケテ靜俟ト曰フ。江戸ノ人。父玄樸草菴ト號ス。備中英賀郡ノ人。剛直ヲ以テ世ニ遇ハズ。攝津ニ適キ遂ニ武藏ニ徙リ、鳩巢ヲ谷中ニ生ム。鳩巢幼ニシテ聰悟老成ノ風アリ寛文十二年春加賀侯召シテ大學章句ヲ講ゼシム。時ニ年十四侯歎シテ曰ク眞ニ英物ナリト乃チ之ヲ祿シ命シテ學ニ京師ニ就カシム神童ノ稱アリ又木下順菴ノ門ニ遊ブ順菴毎ニ稱シテ曰ク師禮ハ忠信篤敬聖學ニ志アリ吾ガ益友ナリト又羽黒成實ニ從ツテ學ブ成實ノ學山崎闇齋ニ出ツ故ヲ以テ滋經義ニ明ラカナリ貞享三年夏加賀



ニ遷リ稱チ新助ト改ム元祿中加賀ニアリ廢屋  
 チ買ツテ之ニ住ス因ツテ扁シテ鳩巢ト曰フ遂  
 ニ以テ自ラ號トス士庶皆矜式シ奇材偉器往往  
 其門ニ出ヅ「大學新疏」ヲ著シテ章句ノ蘊ヲ發  
 明ス又「義人錄」ヲ著シテ後世ノ人臣タル者ヲ  
 シテ儀則スル所アラシム。享保十九年八月十  
 二日歿。年七十七。著書ハ「大學新疏」、「義人  
 錄」、「五常五倫名義」、「六倫衍義大意」、「駿臺  
 雜話」、「周易新疏」、「中庸新疏」、「西銘詳義」、  
 「太極圖述」、「鳩巢文集前編」、「同後編」、「同補  
 遺」、「朝鮮客館詩文稿」、「士說」、「楠木正成諸  
 士教」、「國喪正義」、「獻可錄」、「不正抄」、「文公  
 家禮通考」、「神儒問答」、「鳩巢小説」ナド。

め

めうせん 妙善  
 \*わかまつ・たいゆ参考。



もちづき・さんえい 望月三英  
 徳川幕府ノ醫官。名ハ乗、字ハ君彦、鹿門ト  
 號ス。明和六年冬十一月四日歿。著書ハ「醫  
 官立稿」、「醫門多疾」、「三世方」、「明醫小史」、  
 「焚餘小集」、「勸醫抄」、「醫學五剛痰瘧神方」。  
 もちづき・ちやうかう 望月長好  
 歌人。名ハ兼友。和歌ヲ貞徳ニ學ブ。晩年ニ京  
 師嵐山ニ隱居シ、延寶九年三月十五日歿。年  
 六十四。著書ハ「廣澤輯」、「藻桂雲集」頻題ナ  
 ド。

もちづき・ちやうかう 以仁王

後白河帝ノ皇子ナリ母ハ宮人藤原成子幼ニシ  
 テ聰慧書ヲ能クシ音律ヲ好ム善ク笛ヲ吹ク才  
 名夙ニ著ル人頗ル望チ屬ス然レ共母ノ賤シキ  
 ナ以テ愛セラレズシテ親王トナルヲ得ズ居常  
 鬱鬱絃歌自ラ遣ル少納言宗綱善ク人ヲ相ス嘗  
 テ王ニ白シテ曰ク大王終ニ當ニ天位ニ升ルベ  
 シ請フ望チ天下ニ絶ツナカレト治承四年四月  
 源賴政平氏ヲ滅ボサンコトヲ謀ル一夕來リ謁  
 シテ大事ヲ舉ゲンコトヲ勸ム以仁之ヲ許シ遂  
 ニ自ラ最勝親王ト稱シ其檄ヲ令旨ト稱シ藏人  
 源行家ヲシテ齋ヲシテ以テ諸國ニ諭サシム幾  
 クモナクシテ事露ル廷議以仁ノ名ヲ改メテ源  
 以光トシ土佐ニ徙サントシ檢非違使源兼綱源  
 光長等ヲ遣ハシ兵ヲ率ヰテ其第ヲ圍マシム王  
 左兵衛尉長谷部信連ノ計ニ從ヒ婦人ノ服ヲ被

リ潛ニ第ヲ出デテ園城寺ニ入り法輪院ニ居ル  
 僧徒力ヲ戮セテ之ヲ守ル賴政尋イデ至リ僧徒  
 ト論シテ延曆興福ノ二寺ニ謀シ援兵ヲ請フ二  
 寺許諾ス既ニシテ延曆寺約ヲ變シタルヲ以テ  
 勢久シク支ヘ難ク賴政王ヲ奉シテ奈良ニ赴ク  
 王金堂ニ入ツテ蟬折笛ヲ吹キ萬秋樂ヲ奏シ笛  
 ナ佛ニ供シ馬ニ乗ツテ去ル素ヨリ騎馬ニ習ハ  
 ズ且ツ倦ミテ睡リ途ニ墮ルコト六次平等院ニ  
 入ツテ憩フ平知盛平重衡等來リ攻ム賴政僧徒  
 ト力戰シテ之ヲ拒ム兵潰ユ王逃レテ井手渡ニ  
 至リ光明山鳥居ノ前ヲ過グ流矢ニ中リ馬ヨリ  
 墮チテ薨ズ從者皆後ル唯ダ僧覺尊舍人黒丸二  
 人相扶持シ馬ニ載セテ去ラント欲ス平景高ノ  
 兵迫ツテ其首ヲ斬ル。時ニ年三十。

もちづき・ちやうかう 本居大平



和學者。伊勢松坂ノ人。稻掛棟隆ノ子。宣長ノ門ニ學ビ、遂ニ其養子トナリ、更ニ三四右衛門ト稱シ、紀州侯ニ仕ヘタ。文政十一年十月歿。年七十六。著書ハ「玉鐙百首解」、「八十浦の玉」、「名草の濱果」、「巳未紀行」、「和屋紀行」、「古記類聚」、「姓氏錄考」、「答村田春海書」、「有馬日記」、「家集稻葉集」ナド。

もとなり・きよしま 本居清島

和學者。大平ノ次子。

もとなり・たてまさ 本居建正

和學者。大平ノ長子。

もとなり・ながひら 本居永平

和學者。大平ノ季子。參河吉田侯ニ仕フ。

もとなり・のりなが 本居宣長

和學者。姓ハ平氏。池大納言頼盛ノ裔。本居

縣判官武秀四世ノ孫。享保十五年六月七日ヲ以テ伊勢國松坂ニ生ル春庵ト稱ス後中衛ト改ム家ニ三十六ノ鈴ヲ懸ケテ往往之ヲ鳴ラシ以テ悶ヲ遣ル故ニ號ヲ鈴屋ト云フ幼ヨリ群童ニ秀拔シテ遊戯ヲサズ好ミテ書ヲ讀ムニ性强記絶倫父母其才ヲ愛シ人ト成ルニ及ンテ京師ニ往キ堀景山ニ師事シテ儒ヲ學ハシム旁ラ醫術ヲ武川法眼ニ受ケ並ニ之ヲ能クス一日同友ト會シ語ツテ曰ク吾レ學ヲ以テ天下ニ冠タラズンハ再ビ足下ト會セズト既ニシテ郷ニ歸リ醫ヲ以テ業トス嘗テ賀茂眞淵著ス所ノ冠辭考ヲ讀ンデ大ニ之ヲ悦ビ奮然トシテ志ヲ立テ遂ニ眞淵ニ名簿ヲ送ツテ道ヲ問フ時ニ眞淵ハ江戸ニアリ宣長頻ニ雁書往來シ遂ニ史律令格式諸家記録歌物語等コトゴトク涉獵セザルトイ

フコト無シ古事記ハ皇朝ノ古傳古語ヲ存シテ絶エテ漢意ヲ交ヘズ故ニ其貴キ他書ノ比ニ非ズ然レ共難語多クシテ讀ミ易カラズ故ニ先輩之ヲ解カズ宣長之ヲ嘆シ大ニ精力ヲ盡シ遂ニ傳五十卷ヲ著シテ天下ニ示ス其考證ノ精密ナルヤ千載ノ疑惑ヲ氷解シ後人ヲ誨誘スルノ功鮮カラス宣長ノ學ヲ勉ムル其證考ノ難義ニ至ツテハ寢食ヲ忘ルルコト數日ニ及ブト云フ又其醫業大ニ行レ治ヲ請フ者甚ダ衆シ其治療ニ出ツルノ間ト雖モ駕中少時モ手ニ卷ヲ釋テズ其名海内ニ震ヒ門ニ入ツテ教ヲ受ル者殆ド五百人ニ及ブ後紀州侯ニ仕ヘ屢書ヲ君前ニ講ズ俸祿若干ヲ賜フテ寵遇最モ厚シ始メ一侯宣長ノ古學ニ絶倫ナルヲ慕ヒ祿三百石ヲ以テ之ヲ招ク紀州侯之ヲ聽イテ亦徵ス宣長之ニ從フ蓋

シ其產地勢州松坂ハ州侯ノ領ナルヲ以テ祿ノ厚薄ヲ顧ミザルナリ宣長ノ學グルヤ荷田、縣居契沖ノ志ヲ嗣ギ而シテ之ヲ大成スルモノナリ故ニ世ノ學徒今ニ至ツテ東滿、眞淵、宣長ノ三人ヲ稱シテ三大人ト曰フ。享保元年秋九月二十九日歿。年七十二。遠近ノ門人集會シ、禮ヲ厚ウシテ松坂妙樂寺ノ山上ニ葬ル。遺命ニヨツテ墓標ニハ松櫻ノ二株ヲ植エ前ニ本居宣長與墓ト石ニ誌スハ宣長ノ自筆ニ係レリ門人私ニ謚シテ秋津彦美豆櫻根大人ト曰フ著書甚ダ多シ皆刊刻シテ世ニ行ハル。「古事記傳」、「直日靈」、「葛花」、「鉗狂人」、「玉匣」、「馭戎慨言」、ノ外ニ「神代正語」、「古訓古事記」、「神代紀警華山蔭」、「歷朝詔詞解」、「大祓詞後釋」、「出雲國造神壽詞後釋」、「天祖都城辨辨」、「佐支



竹辨、「國號考」、「眞曆考」、「漢字三音考」、「字音假名遣」、「初山踏」、「萬葉集玉能小琴」、「萬葉集追考」、「古今集遠鏡」、「後撰集詞のつかねを」、「美濃の家果」、「同折添」、「古今選」、「草庵集玉帚」、「紐鏡」、「詞の玉の緒」、「玉われれ」、「紫文要領」、「源氏年紀考」、「源氏物語玉の小櫛」、「手枕」、「手向草」、「答問錄」、「國歌八論斥非評語」、「石上私淑言」、「地名字音轉用例」、「玉勝間」、「呵刈霞」、「菅笠日記」、「玉鐙百首」、「鈴屋集」、「仰瞻鹵簿長歌」、「紀美能米具微」、「櫻二百首」、「結びすてたる枕の草葉」、「本居系圖」、「家の昔物語」、等アリ其他問答ノ書「小錄校正」ノ類枚舉スルニ違アラズ。

ものゝけはるには 本居春庭

和學者。宣長ノ男。健亭ト稱ス。幼ヨリ父ノ

志ヲ嗣ギテ古學ヲ研究シ殊ニ意ヲ詠歌ニ用井終ニ感能ニイタル其詠歌ニ至ツテハ父翁モ及ハザル所アリト云フ鈴屋ノ跡ヲ嗣ギ門人ニ教授ス世ニ後鈴屋翁ト稱ス特ニ詞ノ道ヲ明キラメ父ノ業ヲ助ク其學大ニ世ニ昌ンニシテ從ヒ學ブ者頗ル夥シ。文政十一年十一月七日歿。年六十六。著書ハ「言葉のやちまた」、「後鈴屋集」、「佐喜草」ナド。

ものはのくらとど 物かはの藏人

徳大寺實定ノ從者。實定養和帝ニ從ツテ福原ニ在リ一日舊都近衛河原大宮ノ舎ニ待宵の小侍從ヲ訪ヒ共ニ月ヲ賞ス更闌ニシテ歸ルニ及ビ實定藏人ナシテ別詞ヲ述ベシム藏人曰ク「物かはと君の言ひけん鳥の音の今朝こそなどか哀しかるらん」ト人其詠ヲ賞シテ「物かは

ノ藏人ト稱ス。

ものゝけのゆげもりや 物部弓削守屋

尾興ノ子。父ニ繼テ大連トナル。敏達ノ朝佛法漸ク世ニ行ハル大臣蘇我馬子首トシテ之ヲ崇信ス守屋心ニ之ヲ喜バズ頗ル規諫スル所アリ十四年人民多ク疫死ス守屋大夫中臣勝海ト俱ニ奏シテ曰ク先朝ヨリ陛下ニ逮ブマデ疫疾流行シ生民將ニ絶エントス是豈ニ蘇我臣首トシテ佛法ヲ唱フルニ由ルニアラズヤ請フ宜シク禁絶スベシト詔シテ之ニ從フ守屋自ラ寺ニ往キ胡牀ニ踞シテ堂宇ヲ毀テ佛像ヲ燔キ餘燼ヲ難波ノ堀江ニ棄テシム是日雲無クシテ雨フル守屋雨衣ヲ被テ馬子及ビ其他ノ信者ヲ責メ佐伯御室ヲ遣ハシテ馬子ノ崇信セル三尼ヲ逮フ馬子啼泣シテ之ヲ出ス吏人其袖衣ヲ奪ツテ

海石榴市ニ捷ツ馬子大ニ耻キ且ツ怨ム守屋嘗テ穴穗部皇子ト相善シ皇子陰ニ異志ヲ抱キ守屋ヲシテ兵ヲ率サテ三輪逆ヲ攻メシム守屋往イテ之ヲ斬ル馬子歎シテ曰ク久シカラズシテ天下亂レント守屋曰ク汝輩ノ知ル所ニ非ズト用明帝不豫ナリ詔シテ佛ニ歸セント欲シ羣臣ヲシテ之ヲ議セシム守屋勝海又奏シテ曰ク國神ニ背イテ蕃神ヲ敬ス臣等ノ未ダ知ラザル所ナリト唯馬子之ヲ贊シ豐國法師ヲ引イテ宮中ニ入ラシム守屋大ニ怒ツテ睨視ス押阪部毛屎密ニ守屋ニ告ゲテ曰ク今群臣君ヲ圖リ將ニ路ヲ要セントスト守屋乃チ阿都ノ別業ニ退居シ兵ヲ聚メテ自ラ衛ル勝海モ亦兵ヲ集メテ之ニ應ズ守屋人ヲシテ馬子ニ謂ハシメテ曰ク窃ニ聞ク群卿我ヲ謀ルト我故ニ退クト馬子益其黨



ヲ集メテ日夜警戒ス帝崩ズルニ及ビテ守屋諸皇子ヲ捨テ穴穂部皇子ヲ立テテ嗣トナサントシ淡路ニ獵スルニ託シテ穴穂部皇子ト相謀ル事泄ル馬子兵ヲ遣ハシテ穴穂部皇子及ビ宅部皇子ヲ殺シ泊瀬部、竹田、豐聰耳、難波、春日ノ諸皇子及ビ紀男麻呂、巨勢比良夫、膳賀大夫、葛城烏那羅ト俱ニ師ヲ率テ守屋ヲ攻ム大伴嚙、阿部ノ人平群神手、坂本糠手、春日臣ヲ遣ハシテ志紀郡ヨリ澁阿家ニ抵ラシム守屋親ヲ子弟及ビ家兵ヲ率テ稻城ヲ築キテ拒ギ戰フ兵勢甚ダ壯ナリ守屋樹ニ登ツテ雨射ス諸皇子ノ軍恐怖シテ三度退ク豐聰耳馬子兵ヲ整ヘテ進ミ攻ム迹見赤擣射テ守屋ヲ墮シ遂ニ守屋并ニ其子ヲ殺ス軍潰ユ其衆舉ツテ皂衣ヲ破リ廣瀬勾原ノ獵ニ擬シテ遁ル。

もみぢやすべゑ 紅葉安兵衛  
延寶天和年中ノ俠客。神祇組ヲ除クコトヲ謀リ、成ラズシテ止ム。

ももとうるん 桃東園

星學者。名ハ道隆、字ハ仲長。其先ハ勢州飯高郡ノ人。量翁ノ第三子。容貌魁偉任俠ヲ以テ聞ユ人皆之ヲ畏避ス東園後チ節ヲ折ツテ書ヲ讀ミ博ク經史ニ涉ル伯兄沒シテ子無シ東園宜シク嗣トナルベシ而シテ季弟ニ讓ツテ後トナシ廻チ福井坊ニト居ス福井坊ノ東ニ小木橋アリ行人動モスレハ歩ヲ失シテ衣帶ヲ濡汚シ身躰ヲ毀傷スル者往往コレアリ東園爲メニ石橋ヲ架ス土人呼ビテ浮葉橋トナス晚ニ商山ノ四皓ヲ慕ヒ自ラ東園居士ト稱ス寶曆庚申病ニ罹リテ歿ス年七十四嘗テ「三百年曆」二十五卷

ヲ撰シ享保年中大岡侯ニ上ル。又「異字同訓」三十卷アリ。家ニ藏ス。

もりかは・きよとく 森川許六

俳諧師。五老井、又菊阿佛ト號ス。江州彦根井伊家ノ給人。俳諧ヲ好ミテ芭蕉ノ門ニ入り上達シテ遂ニ蕉門十哲ノ一ニ居ル又書ヲ嗜ミ狩野安信ノ教ヲ受ケテ頗ル妙手ニ臻リ書ヲ芭蕉翁ニ教ヘテヨリ俳士皆許六ノ書風ヲ慕フ其六藝ニ達スルヲ以テ芭蕉之ニ許六ノ名ヲ與フト云フ晚年癩ヲ病ミテ人ニ面セズ。正徳五年八月廿六日歿。六十歳。著述ハ「風俗文選」。

もりかは・ちくまつ 森川竹窓

浪花ノ書家。名ハ世黃、字ハ離吉、良翁ト號ス。亦南畫ヲ能クシ。天保元年十一月二日歿。年六十八。

もり・げんじゆく 森儼塾

水戸侯ノ儒官。名ハ尙謙、字ハ利涉。不染居士ト號ス。通稱龜之助。攝津ノ人。享保六年三月十三日歿。年六十九。

もり・せせん 森狙仙

著名ノ畫人。名ハ守象。字ハ叔牙。後チ狙仙ト改ム。書ヲ狩野派ノ畫家如春齋ニ學ンテ如寒齋ト云ヒ、又靈明菴ト號シ、大坂ニ住ス。猿ノ畫ニ妙ヲ得テ其形狀眞ニ入り人ヲシテ感歎セシム筆意圓山及ビ四條風ヨリ出ツ應舉ト雖モ動物ハ狙山ノ畫ニ據ルト云フ。門人數多アリ。文政四年七月二十一日歿。年七十五。

もりた・かんや 森田勘彌

江戸ノ俳優兼劇場座主。初ノ名ハ坂東篁助、又四世三津五郎。後チ森田家ノ養子トナリ、嘉



永年中同家ヲ再興シ、晩年號ヲ是好ト曰フ。

もりた・せつさい 森田節齋

儒者。大和五條ノ人。名ハ益、字ハ謙藏。節齋ハ別號。壯歲ノコロ山陽頼翁ニ京師ニ師事シ後チ三備ノ間チ漫遊ス頼翁逝後マタ京師ニ歸リ門戸チ張ルコノ時ニ當リ伊勢ニ齋藤拙堂アリ大坂ニ篠崎小竹アリ福山ニ江木晋才アリ皆文章チ以テ天下ニ鳴ル晋才トキニ山陽行狀チ作り小竹遺稿ノ屬チ作ル節齋書チ二氏ニ與ヘカチ極メ情チ盡シ其非處誤謬チ辨駁ス文戰ニ回殆ド餘蘊ナシ三備ニ三豪傑アリ其老者チ廣江丈兵衛ト云ヒ備中倉子城ニ居リ學校チ開發シ節齋チ招聘ス翁因ツテ倉子城ニ在リ教授スル多年翁ノ門多ク奇男子チ出ス。

もり・ていざん 森徹山

圓山風ノ畫家。名ハ守真。字ハ子玄。狙仙ノ義子圓山應舉ニ學ブ天保十二年歿

もり・まうごん 森東郭

儒者。名ハ鐵、字ハ大年。彦右衛門ト稱ス。上總ノ人。江戸ニ住シ、宋學チ唱ヘ。天明年中歿。著書ハ「辨駁五編」、「非辨直」、「非辨名」、「易道撥亂辨」、「論語徵辨」、「東郭文鈔」ナド。

もりなが・しんせう 護良親王

後醍醐帝ノ第三子。母ハ源親子。天資穎敏、幼ニシテ帝ノ寵異スル所トナリ兵部卿ニ拜セラレ會皇太子邦良薨シテ儲貳未ダ定マラズ帝意チ護良ニ屬ス而シテ北條高時詔ニ違ヒ後伏見帝ノ長子量仁チ以テ太子トナス故チ以テ護良立ツコトチ得ズ遂ニ梨本佛寺ニ投シ承鎮法親王ニ就イテ僧トナリ更ニ名チ尊雲ト更ム嘉曆

二年三品ニ叙セラレ延暦寺座主トナリ大塔ニ居ル時人因ツテ大塔宮ト稱ス帝深ク高時ノ權チ擅ニスルチ惡ミ毎ニコレチ除カント欲ス元徳二年敕シテ延暦寺ノ大講堂チ修シ既ニ成ル親ラ臨ンデ之チ慶シ尊雲チ以テ新堂呪願師トナシ二品ニ進叙ス蓋シ以テ僧徒ノ心チ結ビ其力ニ頼ツテ北條氏チ除カント欲スルナリ尊雲密謀ニ參與シ遂ニ講讀チ廢シ專ラ武事チ習ヒ殺撃精妙趨捷飛ブガ如シ既ニシテ謀泄ル高時大ニ恐レ乃チ廢立チ行ハンコトチ圖ル元弘元年秋二將チ遣ハシ兵三千チ率チテ京師ニ入ラシム尊雲之チ謀知シ即夜使チ馳セ奏シテ曰ク高時兵チ遣ハシ將ニ乘輿チ絶島ニ遷シ臣尊雲チ殺サントスルナリ陛下夜ニ乘ジテ奈良ニ幸シ御衣チ近臣ニ假シテ本寺ニ至ラシメ揚言シ

テ車駕賊チ避クルトセハ賊之チ聞キ必ズ銳チ盡シテ來リ逼ラン則チ本寺ノ僧徒勢ヒ力メ拒ガザルチ得ズ延イテ數日ニ及ビ漸ク畿内ノ官軍チ徵シ夾ミ攻メハ賊チ殲スコト必セリ今禁旅未ダ集ラズ城壁未ダ立タズ而シテ賊兵奄ヒ至ラバ何チ以テ之チ禦カン國家ノ安危此一舉ニ在リ願クハ陛下速ニ臣ガ計チ用井ヨ然ラザレハ則チ大事去ラント帝乃チ近臣數人チ從ヘテ笠置山ニ幸シ大納言藤原師賢チシテ帝服チ被リ延暦寺ノ西塔ニ至ラシム僧徒之チ聞キ戎裝シ統ツテ西塔ニ集ル一夕ノ間ニ衆二三萬ニ至ル尊雲弟尊澄法親王ト別ニ僧兵六千ニ將トシテ八王子ニ陣テ明日敵兵來リ攻ム尊雲僧兵三百チ出ダシ辛崎濱ニ撃ツテ之チ走ラシ賊將海東仲家チ斬ル既ニシテ僧徒ノ西塔ニ集ル者行



幸ノ眞ニアラザルヲ知リ其欺カルルヲ患リ稍引キ去ル尊雲ノ兵亦散シ盡キ留ル者僅ニ數人ノミ乃夜多ク燎火ヲ設ケテ疑兵トナシ潛ニ尊澄ト路ヲ分チ出テ走ツテ奈良ニ至リ般若寺ニ匿レ行在ノ消息ヲ伺フ會行在亦陥リ内侍原好專ノ兵來ツテ般若寺ヲ圍ム時方ニ天明從者皆外ニ出ヅ尊雲爲ス所ヲ知ラズ將ニ刀ヲ引テ死コ就カントス傍ニ三函アリ大般若經ヲ盛ル其一ハ經ヲ出ダスコト過半乃跳ツテ函中ニ入り經ヲ以テ自ラ覆ヒ刀ヲ心ニ伏シテ伏ス好專ノ兵遍ク佛殿ヲ索メ遂ニ經函ニ及ブ而シテ尊雲匿ルル所ノ函ハ蓋ノ開ケタルヲ以テ怪マズシテ去ル尊雲謂ラク彼レ一タビ索メテ得ズ後必ズ復タ來ツテ索メント急ニ移ツテ別函ニ匿ル好專ノ兵果クシテ還リ嚮ノ匿ルル所ノ函ヲ指

シテ曰ク前ニ之ヲ索ルコトヲ忘ルト函ヲ傾ケテ經ヲ出ダシ得ズシテ去ル尊雲遂ニ光林坊玄尊赤松則祐等十餘名ト裝ヒテ修驗者トナリ熊野ニ赴ク旬餘十津川ニ抵リ佛舎ニ憩息シ艱苦備ニ營ム適土豪戸野兵衛ト云フ者勤王ノ志アリ尊雲等之ニ投ズ兵衛乃新館ヲ造ツテ尊雲ヲ奉シ柵ヲ諸要ニ設ケテ守備ノ計ヲ爲ス兵衛ノ具竹原八郎之ヲ開イテ大ニ喜ビ迎ヘテ其家ニ致ス尊雲コレニ於テ髮ヲ蓄ヘ俗ニ還リ名ヲ護良ト更メ八郎ノ女ヲ納レテ寵アリ八郎益喜ビ傍近ノ邑人ヤヤ皆心ヲ歸ス時ニ元弘二年ナリ居ルコト數月熊野別當定遍コレヲ聞キ以爲ク十津川ハ要害ノ地以テ力取スベカラズトシ勝ヲ路傍ニ掲ケ尊雲等ヲ獲ルモノニハ償フニ重賞ヲ以テス十津川熊野間ノ土豪ニ莊司ト稱ス

ルモノハ性皆貪婪無信之ヲ見テ皆異心ヲ生ズ護良之ヲ患ヒ遂ニ衆ト潛ニ吉野ニ赴ク而シテ沿道皆敵地ニシテ輒ク過グベカラズ小原ニ到ル時道ニ樵夫ノ言ヲ得曰ク前路ニ玉置莊司ト云フ者アリ柵ヲ山道ニ布イテ行人ヲ遏絶ス之ヲ誘フニ非ザレハ不可ナリト乃片岡八郎矢田彦七ヲ遣ハシテ之ヲ諭サシム玉置急ニ内ニ入ツテ出デズ二人事ノ諧ハザルヲ知り走り還ル玉置數十騎ヲ馳セテ之ヲ追フ二人返リ戦ヒ立ニ一騎ヲ斬ル餘兵遙ニ射八郎二矢ニ中リ急ニ彦七ヲ匿シテ曰ク去レ速ニ王ニ報シテ賊ヲ避クルノ計ヲ爲セト遂ニ前ニ鬪ツテ之ニ死ス護良彦七ノ言ヲ開キ奮ツテ曰ク事既ニ此ニ至ル之ヲ避クルモ何カセント乃チ進ンテ賊兵ノ嶺ヲ擁スルヲ望見シ笑ツテ左右ニ謂ツテ曰ク子

等唯發射セヨ孤當ニ自盡スベシ子等必ズ孤ノ面皮ヲ剝ギ鼻耳ヲ割キ識別スベカラザラシメヨ賊乃曰ハン孤猶ホ未ダ死セズト然ラザレハ恐ラクハ天下ノ義旅孤ガ死ヲ聞キ氣ヲ喪ツテ賊勢益張ラント衆皆奮激シ争ツテ玉置ノ陣ニ趨ク會紀伊ノ人野長瀬六郎及七郎兵三千ヲ率キテ來リ援ク玉置ノ兵戰ハズシテ潰ユ護良六郎ヲ召シテ曰ク今日ノ事一介ノ使以テ告グルニ違アラズ卿何ヲ以テ之ヲ知ルト六郎曰ク昨一童子臣ノ郷ニ來リ戸毎ニ諭シテ曰ク大王明日十津川ヨリ小原ニ至ル必ズ途ニ在ツテ難ニ遭ハン宜シク速ニ往イテ奉迎スベシト臣等大王ノ使トナスト護良驚駭之ヲ神トシ心私ニ之ヲ負ム遂ニ進ンテ槇野城ニ抵ル尋テ吉野山ニ往キ僧徒ヲ招聚シ寺ニ據ツテ城トナシ兵二千



ナ以テ之ヲ守ル是時帝隱岐ニ在リ護良ママ上書シテ事ヲ言フ又赤松則祐ヲ遣ハシ令旨ヲ齎ラシ播磨ニ至リ其父則村ヲシテ兵ヲ起シテ賊ヲ討セシム又令ヲ諸國ニ下スニ之ニ應ズルモノ多シ明年春高時二階堂貞藤ヲシテ大兵ニ將トシテ來リ攻メシム貞藤吉野ノ執行崑菊丸ヲ以テ嚮導トシ接戰七晝夜死傷算ナシ賤兵大ニ沮ム既ニシテ賊兵我ガ不意ヲ窺ヒ前後急ニ攻ム護良眉尖刀ヲ執リ左右二十餘人ヲ率井縱橫奮戰兵疲靡ス護良甲ニ七矢ヲ着ケ頰腕及ニ中リ流血淋漓タリ村上義光外城既ニ陷ルヲ以テ護良ニ勸メテ問道ヨリ脱去セシム道又敵ノ邀フル所トナリ僅ニシテ免ルルヲ得タリ既ニシテ貞藤護良ガ高野山ニ在ルト聞キ兵ヲ縱ツテ大ニ山中ニ索ム而シテ僧徒之ヲ匿シ得ル能ハ

ズシテ去ル尋テ新田義貞問使ヲ發シ令ヲ奉シテ勤王セント請フ護良乃之ヲ與フ其書一ニ繪旨ノ跡ニ遵フ義貞大ニ喜ブ未ダ幾クナラズシテ帝船上ニ幸ス官軍大ニ振フ護良河内志貴山ニ住シ赤松則村ノ兵賊ヲ京師ニ攻テ利アラズト聞キ更ニ令ヲ延曆寺ノ僧徒ニ下メシテ則村ヲ助ケシム會義貞高時ヲ誅シ足利尊氏等京師ヲ復シ車駕闕ニ還ル而シテ四方ノ兵士尙ホ志貴山ニ雲集ス護良將ニ之ヲ以テ京師ニ觀セントス刻期既ニ定ツテ往クヲ果タサズ初メ尊氏ノ京師ニ克ツヤ護良ノ威名ヲ忌ミ竊ニ激シテ之ヲ除カンコトヲ圖ル會護良ノ候人殿法印良忠ノ部曲都下ヲ剽掠ス尊氏乃二十餘人ヲ捕ヘテ之ヲ梟ス護良聞イテ大ニ怒リ遂ニ尊氏ヲ誅センコトヲ圖リ更ニ士衆ヲ約束シ器械ヲ修繕

ス時ニ勤王將士ノ京師ニ集會スル者其討スル所アラソナリ聞キ各危懼ヲ懷キ羣情洶洶タリ帝參議藤原清忠ヲ遣ハシテ詔シテ曰ク喪亂始メテ定リテ遐邇化ニ嚮フ朕將ニ武ヲ偃セ文ヲ修メ衆ト更始セントス王擅ニ軍旅ヲ集メ更ニ何ヲ討セントスソレ宜シク初服ニ還リ法燈ヲ傳ヘ朕ガ法ヲ興スノ意ニ稱フベシト護良答ヘテ曰ク伏シテ明詔ヲ奉ズルニ臣ヲシテ亟ニ戎備ヲ撤シ退イテ舊業ヲ修メシム臣伏シテ以ミルニ方今大亂殄滅シテ兆民慶賴ス是レ蓋シ皇帝陛下聖神威武ノ致ス所ト雖モ抑亦愚臣與ツテ少シク奔走ノ勞アルナリ然レ共逆賊ノ餘燼未ダ悉ク撲滅ニ就カズ遐陬ニ竄匿シ聲ヲ伺ヒ亂ヲ思フ愚臣竊ニ以フ天下既ニ平グト雖モ兵備未ダ遽ニ弛ムベカラズト纂嚴以テ不虞ヲ警シ

ム若シ明詔ニ應ゼバ閩外ノ寄聖明ソレ將ダ誰ニカコレ任ゼントス臣近頃足利尊氏ヲ見ルニ天威ニ憑籍シテ僅ニ尺寸ノ微勞ヲ効ス而シテ衆功ヲ凌侮シ陰ニ飛揚跋扈ノ志シテ懷ク若シ其勢ノ微ナルニ及ンデ而シテ剗鋤セザレバ即チ是又一ノ高時ヲ生ズルナリ臣之ヲ聞ク佛ニ攝受折伏ノ二門ヲ設ケテ方便濟度スト柔和忍辱慈悲ヲ先トスルハ是レ攝受ナリ威憚怒刑罰ヲ宗トスルハ是レ折伏ナリ在昔天武孝謙ノ二帝伽黎ヲ脱去シテ再ビ衰冕ヲ御ス人主ズラ猶且ツ然リ況ンヤ臣子ヲ望ミ請フ天眷特ニ臣ニ一員ノ戎號ヲ借セ任ズルニ折伏ノ事ヲ以テセバ陛下ノ爲メニ堅子ヲ誅シ禍亂ヲ未萌ニ消サント帝聽カズ特ニ拜シテ征夷大將軍トナス護良入朝シテ命ヲ謝ス帝護良ヲ封ズルニ北



條泰家ノ食邑ヲ以テス尊氏其終ニ己ニ利アラザルヲ知リ帝ノ寵姫三位局藤原氏ニ結ビ誣ユルニ謀反ヲ以テス因ツテ其兵ヲ召スノ書ヲ上リ藤原氏ヲシテ之ヲ徵セシム帝嚮ニ護良ノ違詔ヲ悅ハズ然レ共其勳ヲ建ルコト最モ大ナルヲ以テ勉メテ其請ニ從フ是ニ至ツテ尊氏ノ奏ヲ得ルニ及ビ赫然怒ヲ發シ建武元年冬中殿和歌會ニ託シテ護良ヲ召シ武士ヲシテ之ヲ執ヘシメ馬場殿ニ囚シテ其親臣三十餘人ヲ誅ス護良憂憤能ク自ラ明ニスル無シモト親シキ所ノ宮人ニ憑リ上書シテ曰ク臣負譴ノ身ヲ以テ無罪ノ狀ヲ訴フ涙落チ心暗シ愁結ビテ言短シ只望ムラシハ恩ヲ加ヘテ恤察センコトヲ夫レ承久以來武家權ヲ執リ朝廷政ヲ棄ツ臣坐視スルニ忍ビズ慈悲忍辱ノ法衣ヲ釋イテ降伏怨敵ノ

堅甲ヲ被リ内破戒ノ罪ヲ犯シ外無愆ノ譏ヲ受ケ君ノ爲メニ身ヲ忘レ賊ノ爲メニ死ヲ効ス是時ニ當ツテ朝廷人ニ乏シカラズト雖モ或ハ志ヲ勵サズ或ハ徒ニ時ヲ待ツ臣獨リ尺鐵ノ資無キニ兵ヲ揚ゲテ賊ヲ謀ル是ヲ以テ賊徒臣ヲ指シテ首謀トナシ逐索遍ク至リ贖フニ万戸ヲ以テス四海ノ内身ヲ措ク所ナシ晝ハ山谷ニ臥シテ苔ニ席シ夜ハ村里ヲ遶ツテ霜ヲ履ム龍鬚ヲ曳キ虎尾ヲ踏ミ遂ニ籬ヲ帷幄ノ中ニ運ラシテ賊ヲ鉄鉞ノ下ニ殄シ以テ龍駕ヲシテ再ビ都ニ還ラシムルハ臣ガ忠功ニ非ズシテ何ツ然ルニ今功賞未ダ論ゼズシテ罪責忽チ來ル伏シテ罪科ノ條ヲ聞クニ一ニ皆虛説トス何ツ尋究スルヲ得ザル仰イテ天ニ訴ヘントスレバ日月不孝ノ子ヲ照ラサズ俯シテ地ニ哭セントスレバ山

川無禮ノ臣ヲ載セズ父子義絶チ乾坤共ニ棄ツ儻シ給旨ヲ蒙ツテ死刑ヲ宥メ永ク竹園ノ名ヲ削ツテ速ニ桑門ノ服ニ返ラン抑申生死シテ晉國亂レ扶蘇刑セラレテ秦世傾ク浸潤ノ譖腐受ノ愆事小ニ起リテ禍大ニ延ブ乾臨何ツ古ニ據ツテ今ヲ鑑ミザルト書入ル有司中外ヲ畏憚シ屏ケテ奏ゼズ遂ニ詔シテ護良ヲ鎌倉ニ流ス尊氏ノ弟直義兵ヲ遣ハシテ迎護シ至レバ則チ土牢ヲ二階堂谷ニ鑿ツテ之ヲ幽ス二年秋北條時行兵ヲ起シテ鎌倉ヲ攻ム直義出奔ス時ニ淵邊義博ニ謂ツテ曰ク親王ハ吾家ノ深讐ナリ汝往イテ之ヲ圖レト義博乃チ土牢ニ至ル其中幽暗護良方ニ蠲ヲ照ラシテ佛經ヲ讀ム義博ノ至ルヲ見蹶然奮起シテ曰ク汝我ヲ殺サント欲スル手ト進ンデ其刀ヲ奪フ義博乃チ膝ヲ斫ツテ之

ヲ踏シ將ニ其吭ヲ斷クントス護良頭ヲ縮メテ及チ嚙ミ鋒ヲ折ルコト寸許義博更ニ副刀ヲ抜イテ心ヲ刺ス二次遂ニ害ニ遇フ年二十八義博其首ヲ提ゲテ還リ將ニ直義ニ示サントス其面ヲ視ルニ生ケルガ如シ猶ホ鋒刀ヲ含ム乃チ異トシテ棄テ去ル侍女索メテ之ヲ竹叢ノ中ニ獲其目瞑セズ乃チ屍ヲ收メテ之ヲ火シ骨ヲ齋ラシテ京師ニ歸ル天下聞イテ之ヲ冤トス。

や

やぎふ・むねのり 柳生宗矩

新陰流劍法ノ名家。初字又右衛門。大和柳生ノ人。嘗テ左大臣頼通大和ノ大小柳生、坂原、邑地ノ四莊ヲ以テ春日社ニ寄附シ其神職領ヲ定ム。是ニ於テ大膳亮菅原永家ト云フ者小柳



生ノ莊ヲ領シテ神領ヲ掌ルコト累世後醍醐帝ノ時ニ至リ其邑ヲ失フ時ニ庶子アリ僧トナツテ笠置寺ニ居リ中坊ト號ス元弘元年天皇笠置ニ幸スルヤ瑞夢ヲ以テ楠木正成ヲ薦舉シ其功ヲ以テ舊領柳生ノ莊ヲ賜ハル中坊之ヲ兄永珍ニ讓ル永珍ノ玄孫ヲ光家ト曰フ光家ノ孫家巖宗巖ヲ生ム宗巖ハ即チ宗矩ノ父ナリ文祿三年宗矩始メテ徳川家康ニ謁見ス慶長庚子ノ亂ニ私ニ從ツテ小山ノ行營ニ在リ會上國ノ變報到ル家康宗矩ヲ召シ謂ツテ曰ク汝急ニ馳セテ郷里ニ歸リ父ト謀ツテ義勇ヲ召募シ以テ兵ヲ舉グベシト乃チ書ヲ宗巖ニ賜フ宗矩携ヘテ柳生ニ還リ故舊ヲ促シテ軍ニ從ヒ事平ギテ後チ功ヲ以テ柳生谷正木坂ノ地ヲ賜ハリ一千石ヲ加ヘラル寛永六年三月從五位下ニ叙セラレ但

馬守ト稱ス九年九月使番トナリ五字職ヲ聽サル十月三千石ヲ加フ十二月大目附トナリ其後チ采邑ヲ累賜シ前後併セテ一萬二千五百石ヲ食ミ柳生ニ居ル宗矩父ニ繼ギテ新陰流ノ劍法ヲ能クシ且ツ機智アリ家光幼ヨリ將軍宗矩ヲ召シテ其術ヲ修練シ旦夕心ヲ盡シテ未ダ嘗テ怠ラズ屢心慮ヲ勞ス家光常ニ左右ニ謂ツテ曰ク天下ノ大政孤之ヲ宗矩ニ學ビテ其大要ヲ得タリト。正保三年宗矩疾ミテ日ニ篤シ。家光自ラ駕ヲ在ケテ病苦ヲ訪フ。三月二十六日卒。歳七十六。法名大通示滴。西江院ト號ス。四月從四位下ヲ贈ラル。

やぎふむねみね 柳生宗巖

新陰流劍法ノ祖。其先ハ菅原道真。世世和州柳生莊ニ居ル。但馬守ト稱ス。父チ因幡守重

永ト曰ヒ、兄チ美作守家巖ト曰フ。宗巖少ヨリ武技ヲ好ミ、最モ刀槍ノ術ヲ善クス。十七年病ミテ歿。年八十。

やしろ・しだう 屋代師道

江戸ノ書家。龍岡ト號シ、與左衛門ト稱ス。書法ヲ細井廣澤ニ學ビ、又篆刻ヲ善クス。著書ハ「龍岡詩集」、「龍岡印譜」、「金魚帖」、「詠勝詩帖」、「龍窟記」、「觀瀾八勝帖」、「枯筆家名」、「麻布七勝帖」ナド。

やしろ・しんち 屋代輪池

名ハ弘賢。太郎ト稱ス。後銓文ト改ム。江戸ノ人。世世幕府ニ仕フ。其門ニ入ツテ教ヲ受ケテ法ヲ傳フル者殆ド三千人ニ至ル。天保十二年五月十八日歿。年八十六。

やすゐ・しゆんかい 保井春海

やすゐ・しゆんかい 保井春海

有名ナ曆學者。名ハ都翁、六藏ト稱ス。後チ算哲ト更メ、又順正ト更ム。束髮シテ助左衛門ト稱ス。本姓ハ澁川氏。中頃安井ト稱ス。父名ハ次吉算哲ト名ヅク。園基ヲ善クスルヲ以テ世ニ知ラル。春海天資聰敏明達蚤ク世業ヲ善クシ、慶安四年始メテ府城ニ登ツテ業ヲ勤ム。幼ヨリ天文學ヲ好ミ其京ニ在ル講論少シモ解ルコト無ク最モ九數曆學ニ精シク遂ニ天文ノ理ヲ研究ス初メ山崎闇齋ヲ師トシ神道ヲ學ビ而シテ志シハ專ラ天文曆術ニ在リ偏ク其書ヲ讀ム經傳ヨリ以下小説家乘及ビ國史ニ至ルマデ沈思反復通曉セザル無シ其或ハ疑フ所アレハ研精シテ詳細ヲ致シ或ハ寢食ヲ忘ルルニ至ル而シテ其心ニ得ル者ハ之ヲ天ニ驗シ理ニ察シ旁索人ニ聞イテ質正ス時人之ヲ稱シ其名一



世ニ聞ユ水戸黃門會津中將尤モ春海ヲ愛ス春海嘗テ儀鳳曆ノ世ニ行ハルルコト七十二年而シテ天ト合ハズ大衍曆ノ世ニ行ハルルコト九十八年而シテ又漸ク差アリ是ニ於テ宣明曆ヲ頒行シテ既ニ八百二十三年ニ及ブ豈ニ差無キヲ得ンヤ曆ハ是レ治國ノ要典ニシテ萬民ノ龜鑑ナリ此ニ間然スル所アレバ其弊勝ゲテ言フヘカラズト乃チ中國及ビ四方諸州ニ游歴シテ日晷ヲ測リ刻差ヲ考ヘ或ハ氣候ヲ驗ス寛文十年新ニ渾天儀ヲ制シ實測ヲ以テ星度ヲ定メ新ニ小星ト名ヅクルモノ六十一座ト古名ヅクル所ノ衆星ト並ビニ之ヲ圖書シ名ヅケテ天球ト曰フ又天文分野方圓二圖及ビ日本度數圖地球圖ヲ作ル皆東邦古今ニ未ダ嘗テアラザルトコロナリ十三年曆書ヲ頒行ス十二月丙辰望月食

シテ天食スルコトナシ延寶元年書ヲ上ツテ曆ヲ改メンコトヲ請フ三年五月朔日日食シテ天食スルコトナシ是ニ於テ異論紛紛タリ授時曆ハモトヨリ疎ンゼラル然レドモ大統曆時憲曆ハ節氣定朔授時曆ニ異ナル故ニ衆議決セズ春海之ヲ憂フルノ深キ測候推歩考究精到遂ニ自ラ新曆ヲ作ル是レ本邦ノ土地ニ因ツテ起ル所ノ法ナリ是ヲ以テ舊史載スル所ノ晦朔弦望及ビ交食星行等ノ日時刻分ヲ推スニ一モ密合セザルナシ而シテ舊曆ノ差謬是ニ於テカ著ル春海又左氏曆考及ビ述曆ヲ作り詩書禮記曆考ヲ合シテ三曆考ト曰フ刊シテ世ニ行フ是ニ於テカ經傳曆日ノ跡始メテ昭明ナリ學者之ヲ便トス八年日本長曆ヲ作ル神武帝即位元年辛酉ニ起ツテ靈元帝貞享三年丙午ニ訖ハル因ツテ太

古ノ時日ヲ推考シ以テ伊勢祭奠ノ日ヲ改ム乃チ勅命シテ遵行ス天和三年天球圖ヲ獻ズ是年又表ヲ上ツテ言フ臣累年表ヲ立テ晷ヲ測ツテ正ニ見行ノ宣明曆ハ天ニ後ルル二日ナルコトヲ知ル是レ即チ當ニ曆ヲ改ムベキノ秋ナリ而シテ急ニ之ヲ正サザレバ則チ寒暑候ニ過ギ耕種時ヲ失シテ民事利アラザラン豈ニ管ダ見行曆食ヲ記シテ終ニ食セザルノ比ノミナランヤト禁闕因ツテ改曆ノ議アリ命シテ春海ヲ召シ勅シテ其事ヲ議セシム春海ノ意ハ異國ノ曆ヲ用ヰズ宜シク新曆ヲ以テ頒行スベシトイフニ在リ衆議決セズ貞享三年詔シテ大統曆ヲ行ハシム春海復表ヲ上ツテ備ニ其用ユベカラザルノ故ヲ陳ブ乃チ禁闕ノ西南梅小路ニ八尺ノ鐵表ヲ立テテ天文博士ト共ニ晷影ヲ測リ又星臺

ヲ建テテ渾天儀ヲ以テ七星ノ運行ヲ窺フニ春海造ル所ノ新曆天ト密合シテ毫モ差フコトナシ博士驚歎シテ詳カニ其由ヲ奏ス是ニ於テ始メテ新曆ヲ用ヰルノ命アリ勅シテ名ヲ貞享曆ト賜ヒ明年始メテ天下ニ頒行ス春海欣躍拜謝又別ニ七曜曆ヲ作ツテ之ヲ上ツル爾來曆日其正ヲ得テ天時錯マラズ民事差ハズ十二月天文生ニ補セラル三年勅シテ曆學生ヲシテ新曆ノ術ヲ受ケシム是歲貞享曆十卷並ニ日本長曆三卷ヲ上ツル四年幕府新祿百五十石ヲ賜フ五年命シテ束髮シ名ヲ更メテ助左衛門ト曰フ宅地ヲ駿河臺ニ賜フ諸侯大夫來リ學ブ者益進ム十五年命シテ澁川氏ニ復セシム。正徳五年病ミテ歿。年七十七。著書ハ「貞享曆書」「日本長曆」「三曆考」「貞享曆法」「通言天文瓊統」、



「瓊子拾遺」、「土守文集」各若干卷。

やすの・そげん 安井息軒

名儒。名ハ衡。仲年ト稱ス。日向ノ人。父ハ朝完滄洲ト號ス學行ヲ以テ聞ユ息軒ハ即チ其次子ナリ清武郷中野里ニ生ル長ケ六尺ニ滿タ大面ニ痘痕アリ飢肥ハ西南海隅ニ在リ士樸陋ニ習レテ文事ヲ喜バズ息軒發憤シテ書ヲ讀ミ冠ヲ加ヘテ東大阪ニ遊ビ篠崎小竹ニ見ユ小竹與ニ語ツテ大イニ驚キ詩ヲ賦シテ之ニ贈シル後チ江戸ニ至ツテ昌平癸ニ入り贊チ松崎慊堂ノ門ニ執ル慊堂ハ一世ノ宿儒人ニ於ケル許可ヲ慎シム特リ息軒ヲ奇トシ其徒ニ語ツテ曰ク安井生ハ古人ナリ吾豈ニコレチ弟子視ス可ケンヤト其石經ノ考訂スル多ク之ヲ息軒ニ詢フト云フ飢肥侯之ヲ聞キ召シテ侍讀ト爲ヌ明年

藩校ヲ創建シテ助教ニ遷シ命シテ九州ヲ巡覽セシム息軒「觀風抄」一卷ヲ撰シテ之ヲ上ツル侯其用ユ可キヲ知リ引イテ機務ニ參シ諸弊制ヲ革ム既ニシテ權要ノ爲メニ阻格セラル息軒遂ニ職ヲ辭シテ東行シ再ビ昌平癸ニ入り尋テ増上寺ノ僧寮ニ寓シ戸ヲ閉テ苦學シ禮樂兵制法古今沿革ノ故ヲ考フ其徒ヲ聚メ業ヲ授クルニ及ンデ四方ノ俊秀門下ニ來集ス而シテ曩ニ息軒ヲ忌ム者前後即世シ一藩ノ輿論翕然トシテ息軒ニ歸ス侯乃チ擢ンデテ用人ニ補シ祿百石ヲ給ス嘉永癸丑米艦來ツテ互市ヲ求ム諸侯各邊備ヲ修ス息軒謂ヘラク羊質ニシテ虎皮ヲ蒙ル其敗ヲ取ラザル者ホトンド希レナリト因ツテ「海防私議」一卷ヲ著シ製鐵鑄砲築堡著穀ノ方ヲ論ズ水戸烈公聞イテ之ヲ善ミシ其臣藤

田彪チシテ就イテ時務ヲ詢ハシム他日左右ト兵ヲ談ズレハ輒チ曰ク乃羊質虎皮ナランヤト是ニ於テ息軒ノ名益高シ幕府之ヲ辟シ給スルニ祿二百苞職俸十五口糧ヲ以テテ慶應丁卯詔シテ幕府ヲ廢シ明年六師東下ス府兵往往屯聚シテ命ヲ拒ム息軒門弟子ノ或ハ之ニ黨センコトヲ慮リ地ヲ郊外ニ避ク乃チ彦根侯業ヲ息軒ニ受ク請フテ之ヲ別業ニ館シ二十口糧ヲ餽リ禮待ツプサニ至ル然レドモ息軒舊君ヲ思フテ止マズ籍ヲ飢肥ニ復セント欲ス飢肥侯乃チ引テ世子ノ師ト爲シ二十口糧ヲ餽ル固ク辭ス許サズ遂ニソノ半ヲ受ク或ハ之ヲ朝ニ薦ムル者アリ辭スルニ耆老ヲ以テス某親王召シテ經ヲ講ゼシム亦タ辭シテ往カズ曰ク西方ノ鄙人禮節ニナラハズト明治丙子東京土手三番街ノ僑

居ニ終ハル。年七十八。門人洋教ノ是非ヲ問フ者アリ爲メニ「辨妄」一卷ヲ撰ス然レドモ天文地理工藝算數ニ至ツテハ則チ洋說ヲ參取ス殊ニ圍碁ヲ嗜ム。著書ハ「管子纂話」十二卷、「左傳輯釋」二十一卷、「論語集說」六卷、「靖海問答」一卷、「書說摘要」四卷、其他數十種。

やたべ・さうがく 谷田部東壑

水戸藩ノ儒醫。名ハ牝、字ハ子玄。藤八郎ト稱ス。寛政元年三月十六日歿。年五十七。著書ハ「東壑詩文稿」、「壘蒙編」及ビ「筆記」若干卷。

やつはし・けんげう 八橋檢校

攝津ノ人。初メ城秀ト稱シ、三絃ヲ善クシ、名都鄙ニ鳴ル。

やながは・しんたく 柳川震澤



京師ノ儒者。近江ノ人。木下順菴ノ塾ニ寓スル七年。柳原篁洲、南南山、西山律甫、室鳩巢等皆之ニ兄事ス。元祿三年ニ歿。著書ハ「震溪日録」、「同續」、「平菴漫錄」、「震澤長語」、「韓館酬和集」及ビ「遺文集」ナド。

やながは・せいがん 柳川星巖

詩人。名ハ孟諱、字ハ公圖、一字ハ無象。初名ハ卯、字ハ伯免、新十郎ト稱ス。又天谷、百峯、老龍庵ノ號アリ。美濃ノ人。邑ニ星ガ岡アリ星巖ノ號此ヨリ出ツト云フ年七歲郷ノ花蹊寺ニ入ツテ字句ヲ大隨和尚ニ受ク資性敏慧強記人之ヲ奇トメ十二歳ニシテ父母ヲ亡フ悲哀寢食ヲ忘ルルニ至ル享和三年年甫メテ十五家ヲ弟某ニ付シ笈ヲ負ツテ江戸ニ遊ビ學ヲ古賀精里山本北山等ノ諸子ニ受ク幾バクモナク

シテ歸ル文化七年歳二十二復タヒ江戸ニ出デ又北山ノ門ニ居ル學業大ニ進ミ講見高邁ナリ詩ハ殊ニ星巖ノ得意トスル所ニシテ聞ク所視ル所即チ篇トナリ章トナル人皆以テ天稟ト爲ス當時大窪天民星巖ニ先ツテ詩名ヲ都下ニ擅ニス其探ルトコロ清逸淡泊頗ル國風ニ類ス星巖ノ探ル所ハ温潤濃厚頗ル二雅ノ風アリ星巖ハ則チ唐詩ニ取リ天民ハ廣ク宋元ニ及ブ天民彘ニ詩社ヲ神田柳原ノ北隅於玉ヶ池ニ開キ四方ノ吟客ヲ集メテ相唱和ス名ヅケテ江湖社ト曰フ星巖亦其中ニ在リ天民尋テ没シ後火災ニ遇ヒ亭樹庭園蕩然烏有ニ歸ス是ヨリサキ星巖妻景婉ト共ニ四方ニ歴遊ス優遊殆ド二十年天保五年ヲ以テ江戸ニ還ル居未ダ定ムル所アラズ乃チ天民ノ江湖社ヲ尋テ此ニ居ラント欲

ス而シテ池水假山之ヲ探ルニ絶エテ跡無シ乃チ其近傍ノ地ヲ買ヒ此秋ヲ以テ別ニ一池ヲ開キ竹樹ヲ環植シ屋ヲ其上ニ築キ名ヅケテ玉池吟社ト曰フ以テ居ル名都下ニ鳴リ生徒大ニ集マル家チ京都ノ東北鴨川ノ上ニ占メ鴨浜小隱ト曰フ香ヲ燒キ書ヲ讀ンテ優遊自適シ踪ヲ雲霞ニ托シ影ヲ林壑ニ滅シ世ト相忘レ詩ヲ吟シテ獨リ樂ム其詩古雅清奇高趣ニシテ風骨アリ世人呼ンデ日本ノ李白ト曰フ一詩一篇聲ニ應シテ成ル險韻難題ト雖モ嘗テ思慮ヲ費サザル者ノ如シ而シテ字字皆剗切一句一字備ニ淵源アリ譬喻寄托婉曲深淵ニシテ世道ヲ補ヒ人心ヲ裨クル者多シ賴山陽一世ヲ蔑視シテ名聲ヲ擅ニス而シテ詩ニ於テハ則チ星巖ヲ推ス星巖嘗テ曰ク余ガ名ヲ成ス者ハ子成ナリ子成ガ詩

チ成ス者ハ余功ナシトセズト子成ハ山陽ノ字ナリ當世ノ詩人菅茶山廣瀨淡窓大窪天民菊池五山ノ徒其名皆星巖ノ下ニ出ツ近世ノ評文ニ於テハ則チ山陽ヲ宗トシ詩ニ於テハ則チ星巖ヲ斗トス實ニ偶然ニアラザルナリ嘉永年中米穀屢來ツテ互市ヲ請フ幕府詔ヲ矯メテ政ヲ失フコト多シ星巖モト慷慨ノ志アリ之ヲ憂フル甚マシ安政五年ノ秋閣老間部詮勝幕命ヲ奉シテ京師ニ上リ勤王攘夷ノ論者ヲ捕ヘントス星巖慨嘆詩二十五首ヲ作リ以テ時弊ヲ譏ル。既ニシテ病ニ罹リ、是歲九月二日歿。年七十。後三日尊攘家諸士ノ縛ニ就クニ及ビテ幕吏謂ヘラシ星巖其巨魁タリト妻紅蘭ヲ執ヘテ獄ニ繋グ幾バクモナクシテ釋サル星巖人トナリ澹泊物ニ拘ハラズ嘗テ山本北山ノ塾ニ在ルトキ放



蕩不羈負債數十金償フコト能ハズ債主來ツテ急ニ迫ル星巖策ノ出ツル所ヲ知ラズ乃自カラ醫ヲ剪ツテ之ニ與ヘ僧トナツテ謝スト云フ近世有名ノ詩人其門ニ出ツル者多シ。大沼枕山、遠山雲如、小野湖山、森春濤、岡本黃石、鱸松塘、江馬天江等是ナリ。著書ハ「星巖集」八卷。

やながはらいと 柳川雷斗

江戸ノ浮世繪師。名ハ重信。本所柳川町ニ居ル。故ニ柳川ヲ以テ別氏トス。後根岸大塚村ニ移ル。書ヲ葛飾北齋ノ門ニ學ビ其女ヲ以テ妻トナシ、雷斗ノ名ヲ續ク。板刻ノ密書ニ妙ナリ。能ク師ノ畫風ヲ得後一派ノ風ヲ出メシ、彩色畫ハ大ニ師風ト異ナリ。多ク草雙紙ヲ畫キ讀本ヲモ出メセリ。世ニ之ヲ重信風ト曰フ。馬琴ノ里見八犬傳ノ畫ハ雷斗ト英泉ノ筆ニ掛

カル。天保三年十一月歿。年五十。

やなぎはらきん 柳澤淇園

和州郡山藩ノ老臣。名ハ里恭、字ハ公美、竹溪ト改ム。才文武ヲ兼テ旁ヲ佛典醫藥音律書畫篆刻ニ通シ、凡百ノ技藝精曉セザル無シ。人ト爲リ磊落不羈ニシテ容ヲ好ミ、來ル者アレハ累日去ルヲ許サズ。或ハ野老乞兒ヲ挽イテ飯ヲ與フ。食客常ニ數十百人。其繪具ノ艶麗ナルコト他ノ畫工ノ製ニ異ナリ。亦詩及ヒ發句ヲ能クス。又親戚朋友病苦アレハ製藥シテ以テ之ヲ救フニ往往奇驗アリ。寶曆八年九月五日歿。年五十三。隨筆アリ「比止里年」ト曰フ。

やなだせいがん 梁田蛻巖

赤石藩ノ儒官。寶曆七月十七日歿。年八十六。

著書ハ「清詩選」、「所蛻巖文集」、「蛻巖問答書」、「學範」ナド。

やまがそかう 山鹿素行

兵學者。名ハ高祐、初ノ名ハ義矩、字ハ子敬、一ノ號ハ隱山。甚五右衛門ト稱ス。幼名佐太郎。奥州會津ノ人。其先ハ東肥ノ山鹿ニ居ル。因ツテ氏トス。父玄菴醫ヲ江都ニ業トス素行生レテ穎悟九歳ニシテ林羅山ノ門ニ入ル時ニ文三郎ト稱ス十一ニシテ人ノ爲メニ小學論語貞觀政要等ヲ講説ス論辨殆ト老成ノゴトシ十八ニシテ北條氏長ニ從ツテ韜略ヲ學ブ居ルコト五年諸弟子其上ニ出ヅル者ナシ二十二ニシテ氏長悉ク秘訣ヲ傳授ス是ヨリ文武兼習名教ヲ以テ自カラ任ズ武學ヲ以テ行ハル年未ダ三十ナラズシテ名聲籍甚上諸侯幕府麾下ノ士ヨリ

以下藩國ノ士大夫閭閻ノ處士ニ至ルマテ争ツテ其門ニ入ル其多キ勝ゲテ數フ可カラズ家頗ル富饒妻妾ノ奉奴僕ノ數五六千石ノモノト雖モ之ニ抗スル能ハズ素行性英邁卓犖之ニ加フルニ博覽強記甚ダ著述ヲ好ム。「兵法神武雄備集」、「武教要錄」、「法兵或問」、「武經全書」、「古今戰畧考」、「武類全書」、「手教要錄」、「武經本論」等ノ書ヲ撰シテ大ニ武學ヲ發明ス又老莊浮屠巫祝ノ說ニ至ル迄考究セザル無シ以爲ク皆正道ニ非ズト。退イテ「治教要錄」、「脩教要錄」ヲ述ベテ聖學ノ要ヲ説ク。著書ハ「武教本論」、「武教小學」、「武教要錄」、「武事記」、「武教餘錄」、「治教餘錄」、「治平要錄」、「手教餘錄」、「備教要錄」、「百結字類」、「常用集」、「兵法神武雄備集」ノ如キ「七書諺解」、「古今戰畧考」、



「四書句讀大全」、「神道書」、「山鹿語類」ナド。

やまがた・だいに 山縣大貳

兵學者。名ハ昌貞、柳莊ト號ス。幼字ハ三之助。享保十年甲斐國巨摩郡篠田村ニ生ル。山縣三郎兵衛昌景十一世ノ孫。父ヲ領藏ト稱ス。同邑郷士野澤氏ノ後。改メテ三右衛門ト稱ス。又甲府勤番與力某ノ姓村瀬氏ヲ冒ス大貳モ亦々村瀬氏ヲ冒ス後本姓ニ復ス天資穎敏ニシテ豪邁同國山梨郡山王權現ノ祠祝加加美櫻塙ニ從ツテ學ブ櫻塙業ヲ三宅尙齋ニ受ク是ヲ以テ大貳大義ニ明カナリ皇學儒佛陰陽方技ヨリ諸子百家ニ至ルマテ涉獵セザルハナシ最モ鉛箱ニ濼ナリ常ニ慨然トシテ皇室ヲ復興スルノ意アリ「柳子新論」十三篇ヲ著ス「正名篇」ヲ以テ首トナシ大義名分ノ紊亂ヲ諷ス其餘得一、八

文、大體、文武、天文、編民、勸士、安民、守業、通貨、利害、富強ニナ時勢ヲ譏刺ス議論凱切長沙ノ風アリ寶曆六年江戸ニ來リ四谷坂町ニ居ル十二年八町堀長島町ニ徙ル常ニ紫綬ヲ以テ警ヲ結ブ幕吏咎メテ之ヲ徹ス贊ヲ執ル者恒ニ數百人諸侯或ハ幣ヲ重ウシテ之ヲ徵シ或ハ月糧ヲ給ス小幣侯織田信邦賓師ヲ以テ之ヲ待ツソノ老臣吉田玄蕃、津田頼母及ビ京師ノ人藤井右門、竹内式部ノ輩常ニ相往來シテ文ヲ論シ武ヲ講ズ遂ニ古今ノ兵法攻城野戰ノ得失利害ニ至リ常ニ之ヲ證スルニ江戸城ヲ攻メ南風ニ乘ジテ品港ニ火箭ヲ放ツベシ等ノ語アリ終ニ吏議ニ罹リ論大憲ヲ犯ストナシ中ツルニ大辟ヲ以テス。連坐スル者甚ダ衆シ。實ニ明和四年八月廿二日。享齡四十三。大貳著ス所ノ書數

種アリ散ツテ傳ハラズ。今存スル者「柳子新論」ノ外ニ「醫事揆亂」、「素難評」、「孫子講義」三種アルノミ。明治十二年今上大貳ニ賜フニ祭祀金ヲ以テス。

やまがた・あんの 山崎闇齋

鴻儒。名ハ嘉、字ハ敬義、小字ハ長吉、後ヲ清兵衛ト改ム。又嘉右衛門ト改ム。別號ハ垂加。京師ノ人。其先ハ播磨山崎邑ノ人。因ツテ以テ氏トス父清兵衛木下家ニ仕フ後致仕シテ淨因ト號ス京師ニ來ツテ針醫ヲ業トス母ハ佐久間氏闇齋幼ニシテ狡悍無頼、淨因之ヲ患フ因ツテ妙心寺ニ入レ僧トナシ絶藏主ト號ス天資豪邁一意禪ヲ修シテ解ラズ然レ共性行猶ホ峻メズ嘗テ倫輩ト論議ス闇齋詞理塞ガル即チ其夜竊ニ彼ノ寢ニ就イテ紙帳ニ火ス衆議之ヲ逐

ハント欲ス是時ニ當ツテ土佐ノ公子某妙心寺ニ在ツテ僧アリ聰明ニシテ且ツ藻鑑アリ歎シテ曰ク此兒神姿凡ナラズ當ニ爲スアルベシト乃チ之ヲ遣ハシテ土佐ノ吸江寺ニ學ハシム是時土佐ニ谷時中野中兼山アリ共ニ儒ヲ業トス闇齋ヲ見テ亦タ深ク之ヲ器トス其異端ニ陷ルヲ惜シミ勸メテ經籍ヲ讀マシム闇齋乃チ四書及ビ朱子文集語類等ノ書ヲ讀ム大ニ之ヲ悦ビ盡ク舊學ヲ棄テテ學ブ「關異」一卷ヲ著シ寺門ニ貼着シテ去ル遂ニ髮ヲ蓄ヘテ儒トナル時ニ年二十五土佐侯乃チソノ乞ハズシテ擅ニ還俗スルヲ責ム闇齋恐レテ京師ニ歸リ帷チ下ダシテ道學ヲ講説ス之ニ從ヒ學ブモノ日ニ衆シ闇齋弟子ヲ待ツコト甚ダ嚴貴卿公子ト雖モ過アレハ少シモ假ス所ナシ其書ヲ講ズル音吐鐘ノ



如ク面容怒ルガ如シ弟子震慄敢テ仰ギ視ル無シ會津侯保科正之美作侯加藤泰義亦禮ヲ厚クシテ師事ス。而シテ會津侯最モ厚ク終始一ノ如シ。會津侯卒スル後チ又京師ニ歸ル。ソノ門ニ入ルモノ無慮數千人、閩齊博覽チ喜ハズ、又詩文チ好マズ、片言程朱チ犯ス者アルゴトニ輒チ勃怒咆哮肯テ異同ニ就イテ旨趣チ究ムルチナサズ。其弊往往支離固陋ニ墜ツ。天和二年九月十六日歿。年六十五。著書ハ「朱易衍義」、「孟子要畧」、「文會」、「筆錄」、「大學啓蒙集」、「中和集說」、「孟浩錄」、「孝經刊誤附考」、「冲莫無朕記」、「中臣祓風水鈔」、「神代卷風葉集」、「垂加文集」、「同續」、「同拾遺」、「四書序考」、「小學蒙養集」、「孝經外傳」、「關異」、「孝經詳畧」、「仁說」、「逐錄」、「逐鹿評」、「大家商量

集」、「讀書要」、「夜寐箴」、「刑經」、「武銘」、「張書鈔畧」、「明備錄」、「程書鈔畧」、「朱書抄書」、「本朝改元考」、「垂加草」、「經名考」、「大和小學」、「雲谷記」、「温泉遊草」、「敬齋箴」、「不自棄文」、「江府紀行」、「遠遊紀行」、「再遊紀行」、「會津風土紀」、「責沈文」、「朱子輯要」、「日本書紀註」、「本朝事蹟」、「異稱考」ナド。其他訓點ノ書多シ。

やまぎ・そつかん 山崎宗鑑

和歌連併ノ名家。近江ノ人。本姓ハ支那。彌三郎ト稱シ、範重ト名ツク。佐佐木義清ノ裔。延徳年中六角高頼甲賀山ニ據ツテ命チ拒ム將軍義尙之チ伐チ鉤里ノ陣中ニ薨ズ範重師ニ從ヒ人世ノ無常チ悟リ髮チ截ツテ尼崎ニ隱居ス僧一休宗鑑ノ人トナリチ愛シ薪里ニアリシ時朝

夕召シテ給事セシム宗鑑能ク一休ノ風操チ學ビ終ニ悟道チ得タリ一休ノ寂後草菴チ山崎ニ結ビ或ハ客チ招イテ歌書チ講シ聯歌チ嗜ミ風月チ蓬草ノ中ニ弄ブ是ニ於テ世人山崎チ以テ稱ス最モ滑稽ニ富ミ書法チ善ク支那人或ハ稱シテ金佛チ瑠璃盤ニ載スルガ如シト謂フ居常油筒チ鬻ギテ口チ糊シ日暮錢一十孔チ以テ食ニ換フ居室ハ只一藥籠ノミ篆額チ掲ゲテ云ク上客ハ立チ所ニ歸レ中客ハ一日ニシテ歸レ下客ハ一宿セヨト一日宗鑑宗長ト與ニ内大臣藤原實隆チ訪ヒ烟閣チ截ツテ以テ之チ貽ル實隆之チ見テ曰ク「手に持てるすがたを見ればかきつばた」ト宗長附シテ曰ク「飲まんどすればなつのさは水」ト。宗鑑第三句チ賦シテ曰ク「くちなはに追はれて何時か歸らん」ト。

晚年西國ニ赴キ、歸途ニ讃岐琴平山麓ニ止マリ假居シ、一夜菴ト號ス。天文二十二年十月二日歿。年八十九。

やまた・とらん 山田圖南

徳川幕府ノ醫官。名ハ正珍、字ハ宗俊、姓ハ菅原氏、世世幕府ノ醫官タリ。幼ニシテ逸才アリ、儒學チ山本北山ニ受ク寶曆年中朝鮮ノ使者來聘ス圖南官ニ請フテ屢其書記及ビ醫員ニ接見ス韓醫李聖甫其著ス所ノ「骨度辨誤」ニ序シ極メテ其夙成チ賞ス圖南時ニ年十六平生好ミテ傷寒論チ讀ミ諸家ノ註釋チ聚メ其正要チ摘ミテ之チ節解ス一字ノ義訓モ參五考訂シテソノ確當チ極ム人ト語ツテ言ト本論ニ涉ルアレバ即チ之チ箋記ス家モトヨリ書籍ニ富ム經史諸子ヨリ神史道釋ノ類ニ至ルマデ究搜セザ



ル無シ以テ本論講解ノ資トナス中年「傷寒考」ヲ作ル。尋テ「傷寒論集成」ヲ著ス。未ダ稿ヲ脱セズシテ歿。時ニ天明七年二月八日。年五十七。谷中南泉寺ニ葬ル。著書ハ「骨度辨誤」、「傷寒考」、「傷寒論集成」ノ外「傷寒檢證」、「金匱檢證」、「天命辨」、「新論」、「備用方」、「權量撥亂」、「敗鼓錄」、「桑韓筆語」、「内外經古傳」ナド。

やまだ・ながまさ 山田長政

通稱ハ仁左衛門。或ハ曰フ伊勢祠官ノ孫、或ハ曰フ尾張ノ人ト。自カラ織田右府ノ孫ト稱ス。少ニシテ磊落大志アリ、商賈作農ヲ事トセズ、好シテ兵ヲ談シ、雄傑自カラ喜ブ、流落シテ駿府ニ寓ス。元和ノ初メ天下始メテ定マリ士ノ仕ヲ求ムル者皆侯伯ニ歸ス長政之屑シトセズシテ曰ク此間功名ヲ立ツルノトコロ無

シ唯ダ海外ニ遊ベハ或ハ以テ吾ガ志ヲ展ブ可キノミト時ニ海ニ禁ナシ府ニ行商二人アリ曰ク瀧佐右衛門曰ク太田治右衛門元和中將ニ海ニ航シテ臺灣ニ貿易セントシ舟ヲ大坂ニ熾ス長政附イテ之ニ乗ランコトヲ請フ二人長政ノ商事ニ狎レザルヲ以テ許サズ長政乃チ先ツ大坂ニ到ツテ二人ノ舟ヲ求メ入ツテ匿ル既ニシテ二人至リ帆ヲ揚ゲテ發ス長政乃チ船間ヨリ出デテ前請ヲ申ブ二人大イニ驚キ之ヲ如何トモスル能ハズ遂ニ之ヲ許ス既ニシテ臺灣ニ至リ商事畢ツテ將ニ俱ニ還ラントス長政曰ク某郷國ニ在ツテ殆ド自カラ存スル能ハズ姑ラク此土ニ留ツテ喫飲ノ處ヲ覓メントスト二人方ニ長政ノ狂ヲ患ヒ之ヲ聞イテ心私ニ喜ビ委シテ之ヲ去ル長政時ニ年二十七此時ニ方ツテ支

那ノ姦民日本甲斐ト稱シ我邦ノ邊民ヲ誘ツテ臺地ニ占據ス長政地方ヲ通覽スルニ蕞爾タル一島ニシテ且ツ既ニ主アリ又爲スコト有ルベカラザルナリ又蠻船ニ附シ西ノ方暹羅國ニ遊ブ會邦内騷亂シ四隣交侵ス而シテ六昆最モ強シ暹羅國王師ヲ出シテ之ヲ禦グ長政ソノ行軍ヲ見ルニ軍ニ紀律ナシ私カニ言フソレ必ズ敗レント既ニシテ果シテ然リ人アリ其語ヲ傳ヘテ國王ニ以聞ス國王之ヲ奇トシテ長政ヲ召見シ方略ヲ詢フ長政指畫陳策ス盤鑿用フ可キナリ國王大ニ喜ビ長政ヲ擢ンデテ上將軍ト爲シ往イテ六昆ヲ禦ガシム時ニ本邦人ノ暹羅ニ流落スル者衆シ長政數百人ヲ糾合シ雜フルニ士兵ヲ以テス亡慮萬餘人ミナ日本ノ裝ヲ爲シ日本ノ援兵大ニ至ルト聲言ス六昆ノ軍沮ム因

ツテ兵ヲ縱ツテ奮擊シ大ニ之ヲ破ル六昆王憤ルコト甚ダシク國ヲ傾ケテ來リ寇ス兵數十萬長政曰ク敵ハ衆強盛ナリ與ニ鋒ヲ争ヒ難シ唯謀リゴトヲ以テ之ヲ撓メハ之ヲ破ルハ易易タルノミト乃チ軍ヲ分ツテ三ツト爲シ一チ山陰ニ伏セ一チ海遊ニ艦シ長政親カラ其一チ率井テ海陸ノ間ニ出デ進ンデ戰ヲ挑ミ兵既ニ交ハル長政伴ツテ敗走ス六昆ノ兵之ヲ追ヒ將ニ及ハントシテ海陸ノ二軍吶喊シテ齊シク進ミ火槍亂發ス長政機ヲ視テ軍ヲ反シ敵軍ヲ衷ニシテ前後ヨリ之ヲ撃チ大イニ六昆ノ兵ヲ破ツテ數萬人ヲ殺シ遂ニ北グルヲ追ヒ長驅シテ其都ニ入り六昆王ヲ擒ニシテ歸ル是ヨリ長政ノ威遠近ニ震ヒ四隣争ツテ欵ヲ暹羅ニ送ル是ニ於テ國王大イニ長政ヲ賞シ妻ハスニ其女ヲ以テ



シテ六昆及ビ逸比留ノ地ニ封ズ初メ暹羅ノ法  
國王殂スレバ子ヲシテ嗣ガシメズ先ヅソノ位  
ヲ弟ニ讓ル長政王ニ勸メテ此法ヲ改メ父子相  
續ノ法ニ定メシム王コレヲ嘉納シ諸大臣ニ諭  
シ且ソノ弟ヲシテ僧トナラシメ更ニ太子ヲ立  
ツ國內ノ諸酋皆コソ法ニ遵ハシム會逸比留部  
酋ノ弟地羊別莫將ニ王ノ後ヲ繼ガントシテ新  
令ヲ拒ム嚴命アレドモ聽カズ王長政ヲシテ之  
ヲ伐タシム敵善ク拒グ長政銳ク悉クシ攻メテ  
其城ヲ陷ル功ヲ以テ其地ヲ賜ヒ爵庵普良ヲ賜  
フ庵普良ハ猶ホ諸侯ト曰フガ如シ既ニシテ王  
年老イテ政ニ倦ミ國政ヲ長政及ビ大臣高班ニ  
委ス長政位爵高班ノ下ニアリ而シテ威望遙ニ  
ソノ上ニ出ツ庵普良ノ名印度諸國ニ赫赫タリ  
而シテ本邦ノ地隔遠セルヲ以テ未ダ之ヲ聞知

セズ後チ數歲寛永ノ初メ瀧太田復臺灣ニ貿易  
ス台人告ゲテ曰ク暹羅ノ使告ゲテ言フ倭人來  
ルベシ商賈利アラント因ツテ其界ニ入レハ慰  
勞使遽ニ至ツテ二人ヲ迎ヘ且ツ戒メテ曰ク王  
子等ヲ見ントスト二人初メ其故ヲ知ラズ頗ル  
心ニ懼疑ス既ニシテ入ツテ見ユ王冠服シテ交  
椅上ニ在リ儀衛甚ダ盛ンナリ二人俯伏膝行シ  
テ敢テ仰ギ見ズ退イテ館ニ就クニ及ビテ飲食  
供膳賓客ヲ待スルガ如シ意益安ンゼズ既ニシ  
テ夜復タ吏アリ傳呼シ至ツテ曰ク王來ルト二  
人驚イテ出デ迎フ王便服シテ坐ニ入り笑ツテ  
二人ノ肩ヲ拍ツテ曰ク故人恙ナキカト二人愕  
然トシテ仰ギ視レハ乃チ長政ナリ長政自カラ  
備ニ其發跡ノ由ヲ説ク二人叩頭シテ謝ス長政  
曰ク予ノ今日アルハ實ニ子ノ賜物ニ由ル抑モ

人我ニ徳アリ報イザル可ケンヤト既ニシテ還  
リ厚ク賜フテ之ヲ遣ル本邦ノ商旅之ヲ聞イテ  
多ク暹羅ニ遊ブ長政皆善ク之ヲ遇シ爲メニ買  
易ノ地ヲ授ケ名ヅケテ日本街ト曰フ長政富貴  
ナリト雖モ常ニ桑梓ヲ懷ヒテ措カズ戰ニ臨ム  
ゴトニ遙ニ駿府淺間ノ神ニ禱ル軍スナハチ勝  
ツ是ニ至ツテ工ニ命ヲテ當時戰鬪ノ狀ヲ摹繪  
セシメ扁額ト爲シテ商舶ニ附シ淺間廟ニ獻シ  
テ以テ報賽スト云フ又屢牒シテ政ヲ報シ方物  
ヲ大府ニ納レテ恭順ノ意ヲ失セズ九年五月王  
疾ムニ大臣ヲ召シ遺命シテ曰ク吾歿スルノ後  
卿等一ハ國政ニ任ズ一ハ藩國ヲ治メ隔歲輪休  
以テ幼主ヲ輔翼セヨト王殂ス世子嗣イテ立ツ  
八月長政藩ニ歸ル高班國政ニ當ル高班是ヨリ  
先王母ト私シ新主ノ假父タルヲ以テ王位ヲ篡

ハントシ群言ヲ忌ミテ未ダ發セズ嗣王年十三  
頗ル敏悟ツブサニ其情ヲ知リ力士ヲ伏セテ高  
班ヲ召シ之ヲ誅セントス露ル王母嗣王ヲ召シ  
之ヲ鳩殺シテ政ヲ親カラス高班威權彌高シ或  
ル人事ヲ長政ニ報ズ長政兵ヲ發シ故主ノ弟ヲ  
擁立シ將ニ都ニ入ントス王母使ヲ遣ハシ啗ハ  
スニ利ヲ以テス長政給カルル爲テシテ都ニ入  
ラントス使臣途ニ長政ヲ毒殺ス。時ニ寛永十  
年ナリ。一女阿因屢暹羅ノ兵ヲ撃チ、衆寡敵  
セズシテ遂ニ敗亡ス。

やまだはうこく 山田方谷

備中松山ノ儒者。名ハ球、字琳卿、安五郎ト稱  
ス。備中阿賀郡西方村ノ人。家世世農ヲ業ト  
ス。方谷幼ニシテ聰明三四歲能ク壁窠ノ字ヲ  
作り句讀ヲ解ス九歲丸山松陰ノ塾ニ入り程朱



ノ學ヲ受ケ兼テ詩文ヲ屬ス老輩ト雖モ及ブ者ナシ稱シテ神童ト曰フ藩主之ヲ聞キ二口糧ヲ給シ學資ニ充テシム尋テ八口糧ヲ賜フ班中扈從ニ准シ藩學會頭トナス時ニ年二十五居ルコト二年請フテ京師ニ遊ビ寺島鈴木春日ノ諸儒ニ交リ遂ニ江戸ニ至リ佐藤一齋ニ從ツテ學ヲ受ケ佐久間象山鹽谷宕陰等ト交リ相共ニ研精ス明治九年冬宿痼再ビ發シ明年六月二十六日遂ニ刑部山中ニ歿ス年七十三方谷泐博書ニ於テ讀マザル所ナク讀メハ必ズ精到清詣獨得ノ說多シ又禪理ニ精シ其平生機ニ投シテ勇進理ヲ見テ決行物ニ執滯セザルモノ蓋シ此ニ得ルアラシ其諸文達意ヲ主トス筆ヲ下タセハ千言立ドコロニ成ル隨ツテ散逸シ復タ稿ヲ留メズ獨リ獻策對門國字稿アリ積ンテ身ニ等シカ

ラントス秘シテ人ニ示サズ嘗テ人ニ謂ツテ曰ク吾藩事ヲ論ズル者多ク而シテ天下ノ事ヲ論ズルニ至ツテハ則チ一モ行ハズ他日此稿ヲ親バ之ヲ知ラント。

やまごたげのみこと 日本武尊

景行帝ノ皇子。名ハ小碓、一名ハ日本重男。幼ニシテ雄傑、壯ナルニ及ビ、容貌魁偉身ノ長ケ一丈。力能ク鼎ヲ扛ク二十七年八月熊襲反ス十月日本武尊歿ヲ奉シテ之ヲ討ツ時ニ年十六。十二月熊襲國ニ至リ其形勢地理ヲ察ス賊ノ魁帥石鹿文一ノ名ヲ川上梟帥ト曰フ適ツノ親族ヲ宴ス日本武尊髮ヲ被リ飾ツテ童女ノ狀ヲ爲シ劍ヲ袖中ニ藏メ密ニ入ツテ其婦女ト雜處ス梟帥一見之ヲ悦ビ杯ヲ屢シテ戲狎ス夜闌ニシテ衆散ス梟帥酒ヲ被ル日本武尊劍ヲ抜イ

テ其胸ヲ刺ス梟帥イマダ殊ヘズ曰ク姑ク之ヲ待テ吾レ言フ所アラシ汝誰トカスト曰ク吾ハ是レ大兄彥天皇ノ子ニシテ名ハ日本重男ナリト梟帥曰ク吾ハ國中ノ強力者ナリ人懾服セザルモノナシ吾嘗テ多ク勇武ノ者ニ遇フ未ダ皇子ノ如キモノアラズ吾レ賤陋ナリト雖モ願クハ尊號ヲ上ラント皇子諾ス梟帥乃チ曰ク今ヨリ以後應サニ日本武皇子ト稱スベシト言訖ツテ之ヲ刺殺ス是ニ由ツテ世ニ日本武尊ト稱ス既ニシテ人ヲ分遣シテ醜類ヲ誅殺ス熊襲悉ク平ク乃チ海ニ浮イテ還ル帝其功ヲ嘉シ之ヲ寵異ス四十年東夷多ク叛シテ邊境騷動ス日本武尊自ラ行カンコトヲ請ヒ吉備武彥大伴武日ヲ從ヘ十月京師ヲ發シ道ヲ枉ゲテ伊勢神宮ヲ拜シ倭姫ニ告ゲテ曰ク今敕ヲ奉シテ東征シ以テ

諸叛首ヲ誅ス故ニ來リ辭スト倭姫神劍ヲ取リテ之ヲ授ク日本武尊進ンテ駿河ニ至ル土賊給イテ曰ク野ニ麋鹿多シ狩セハ大ニ獲ント日本武尊其言ヲ信シ遂ニ野ニ獵リス賊風ニ乗ジテ火ヲ縱ツ日本武尊欺カルルヲ知り即チ燧ヲ鑽ツテ火ヲ取り逆ニ燒テ免ルルヲ得タリ賊衆ヲ撃ツテ之ヲ殲ス因ツテ其處ヲ號シテ燒津ト曰フ進ミテ相模ヲ歴將ニ上總ニ往ントス海ヲ望ミ揚言シテ曰ク是レ小海ノミ跳リテ超ユベシト中流暴風忽チ起リ舟漂ヒテ將ニ覆没セントス寵姫橋媛曰ク是レ海神崇チ爲スナリ妾請フ之ニ當ラント言ヒ訖ツテ自ラ海ニ投ズ風止ミ岸ニ着クヲ得タリ上總ヨリ轉テ陸奥ニ入り蝦夷境ニ至ル兵勢甚ダ熾ンナリ虜畏怖シテ服從センコトヲ請フ乃チ酋長ヲ俘ニシ餘ハ皆赦



シテ其所ニ復ス邊境乃チ安シ日本武尊還ツテ  
 碓日嶺ニ至リ東望シテ橘姫ヲ懷ヒ歎クテ曰ク  
 吾孀已矣ト後人因ツテ東陞ヲ號シテ吾孀國ト  
 曰フ是ニ於テ道ヲ分チ北方ノ諸國ヲ巡接ス吉  
 備武彦ヲ越國ニ遣ハシ自ラ信濃ニ入り美濃ニ  
 至リテ武彦ト遇フ遂ニ尾張ニ至リ尾張氏ノ女  
 宮簀媛ノ家ニ宿ス淹留月ヲ踰ユ近江膽吹山ニ  
 暴神アリト聞キ又之ニ赴ク即チ神劍ヲ解キ宮  
 簀媛ニ授ケテ曰ク我レ京師ニ歸ル必ス應ニ汝  
 ナ迎フベシ敬ンデ此劍ヲ持シテ汝ノ牀帷ヲ護  
 レト大伴武日諫メテ曰ク今將ニ暴神ヲ誅セン  
 トス宜シク此劍ニ藉ルベシト日本武尊曰ク我  
 レ徒手之ヲ搏チ足ヲ翹ケテ蹴殺サント遂ニ徒  
 行シテ山ニ至ル大蛇道ニ當ル日本武尊謂ヘラ  
 シ暴神ノ使令ナリ今將ニ其神ヲ殺サントス而

シテ使令豈ニ問フニ足ラシヤト蛇ニ跨ツテ行  
 シ俄ニ雲霧晦冥雨雹大ニ作リ咫尺辨セズ日本  
 武尊之ヲ冒シテ前ニ玉倉部ニ至ル醉ヘルガ如  
 シ因ツテ山下ニ憩ヒ泉ヲ飲ンデ醒ム故ニ其泉  
 ナ號シテ居醒泉ト曰フ是ヨリ身ニ痛アルヲ覺  
 ユ乃チ歎クテ曰ク我意常ニ謂フ天猶翔ルベシ  
 ト而シテ今歩スルヲ得ズト乃チ杖ニ倚ツテ漸  
 シ進ミ尾張ニ歸リ宮簀媛ノ家ニ入ラズ便チ伊  
 勢ニ移リ能褒野ニ至リ疾甚マシ因ツテ俘スル  
 所ノ蝦夷ヲ以テ大神宮ニ獻ク武彦ヲ遣ハシテ  
 京師ニ復命セシノ終ニ能褒野ニ薨ズ時ニ年三  
 十帝大ニ悲悼シ即チ詔シテ葬ルニ天子ノ禮ヲ  
 以テス陵ヲ能褒野ニ造ル忽チ白鳥アリ陵ヨリ  
 出テ飛ンデ大和ニ往ク群臣陵ヲ發イテ之ヲ視  
 レバ唯空棺ノミ因ツテ白鳥ノ止ル所ヲ視陵ヲ

大和ノ彈琴原ニ造ル又去ツテ河内ノ古市ニ至  
 ル亦陵ヲ其處ニ造ル時人三陵ヲ稱シテ皆白鳥  
 陵ト曰フ。

やまなし・たうせん 山梨稻川

韻學者。名ハ憲、字ハ玄度、又ハ叔子。又東  
 平ト號ス。駿州蘆原ノ人。幼ニシテ穎悟、八  
 歳ニシテ字ヲ一乘僧院ニ習ヒ、蹟イテ右手ヲ  
 損シ、習字ヲ外ニス。師叱シテ曰ク汝何ゾ勗メ  
 ザルト。稻川曰ク諾ト。乃チ左手ヲ以テ臨倣ス  
 習練ノ極巧妙ニ至リ篆、隸、行、艸、腕ヲ揮ツ  
 テ飛ブガ如ク皆晉唐ノ勝境ニ入ル又詩及古文  
 ナ好ミ狹山侯ノ儒員陰山ニ就イテ學ブ陰山極  
 メテ矜寵シ神童ト稱ヌ又大岳太仲僧石梁ニ從  
 ツテ遊ブ皆深ク激嘆ス四方名士ノ駿府ヲ過グ  
 ル者往往其廬ニ就イテ交ヲ納ル。文政丙戌七

月歿。稻川短小精悍面方ニシテ眼大聲洪鐘ノ  
 如シ義ヲ見テ奮ヒ又人倫ニ厚シ其東下シテ陰  
 山ノ家ニ寓スルヤ先師ノ妻ニ事フル母ニ事フ  
 ル如ク其子ヲ待ツ其弟ヲ待ツガ如シ。著書ハ  
 「古聲譜考」、「聲微譜」、「聲圖」、「皇水經」、「駿  
 河國志」、「孟浪俚言」ナド。

やまのうち・かまごよ 山内一豐

盛豐ノ第二子。姓ハ藤原氏。尾張ノ人。一豐  
 ハシメ猪右衛門ト稱ス。父戰死ノ時、十三歳  
 織田信長ニ仕ヘ、羽柴秀吉ニ隸屬ス。元龜元  
 年金崎ノ戰ニ一豐敵ノ爲メニ射ラル而シテ其  
 矢ヲ抜カズ進ンデ敵ヲ斬ル信長藥ヲ賜フテ其  
 勇ヲ賞ス天正六年一豐祿五百石ヲ食ミテ安土  
 城下ニ在リ時ニ陸奥ノ人駿馬ヲ牽キ來ル價貴  
 シ衆能ク辨ズルナシ一豐心竊ニ之ヲ欲ス家ニ



遠ツテ憂色アリ室氏其故ヲ問フ一豊曰ク頃日  
 來リテ駿馬ヲ鬻ク者アリ我レ得テ功ヲ樹テシ  
 ト欲スレドモ之ヲ賒フコト能ハズ實ニ貧ハ諸  
 道ノ障リト室氏又問フ價幾許ツ曰ク正ニ黃金  
 十兩ナリ室氏曰ク妾願シハ其價ヲ辨セント乃  
 チ十金ヲ鏡奩ヨリ取ツテ出ダヌ一豊大ニ駭イ  
 テ曰ク財用足ラザル既ニ年アリ料ラザリキ今  
 日金アリ駿馬ヲ得ントハ室氏曰ク妾初メ嫁シ  
 テ三日父母此金ヲ附シ誠メテ曰ク此金ヤ宜シ  
 ク大節ニ臨ンテ用ユヘシト凡ソ貧ハ士ノ常飢  
 寒獨耐ユヘシ妾之ヲ聞ク當年京師ニ馬揃ト云  
 フ物アリト是レ即チ天下ノ壯觀ナリ良人モ亦  
 マ身ヲ立ツルノ途此ニ在リ妾ノ之ヲ願フヤ切  
 ナリ故ニ奉ズト一豊感謝シテ之ヲ受ケ乃チ駿  
 馬ヲ購フ幾クナラズシテ馬揃アリ信長果シテ

之ヲ稱譽シテ曰ク嘗テ聞ク一豊ハ財基ダ乏シ  
 ト歎ズベキカナ其武ヲ嗜ムノ厚キコトナト十  
 一年若狹高濱城ヲ賜フ十三年近江長濱城ニ徙  
 リ改メテ對馬守ト稱シ從五位下ニ叙セラレ十  
 八年遠江掛川城ニ移リ邑五萬石ヲ食ム慶長庚  
 子ノ秋一豊徳川家康ニ從ツテ奥州ヲ征シ先鋒  
 トナツテ宇都宮ニ在リ會上國ノ變報荐ニ至ル  
 是ニ於テ西上シ岐阜川ニ戰ヒ命ヲ受ケテ大垣  
 城ヲ鎮ス後チ土佐ニ封セラレ二十萬石ヲ食ム  
 從四位下ニ進ミ更ニ土佐守ト稱ス。慶長十年  
 九月卒ス。時ニ年六十。法名心峯宗傳大通院ト  
 號ス一豊封ヲ受ケテ以來禮節ヲ重ンテ諸倍臣  
 ト府下或ハ途上ニ於テ遇フ毎ニ必ズ騎ヨリ下  
 リ橋ヲ出テ揖讓シテ過グト云フ一豊子無ク弟  
 康豐ノ子忠義ヲ養ツテ嗣トナス。

やまのちかきよのつま 山内一豊妻

ハシメ一豊ノ織田氏ニ仕フルヤ微ニシテ名ヲ  
 知ル無シ會東買馬ヲ安土ニ鬻ク一豊甚ダ之ヲ  
 得ント欲シ歸リ之ヲ妻某氏ニ語ツテ曰ク世ノ  
 悲シムベキハ貧ヨリ甚ダシキハ莫シ聞ク主公  
 將ニ大ニ馬ヲ閱セントス吾レ是ノ馬ヲ得ルニ  
 非ザレバ何ヲ以テ君ノ願願ヲ得ンヤト某氏曰  
 ク價幾何ツト曰ク十兩曰ク誠ニ斯クノ若キ手  
 妾爲ニ之ヲ買ハント輒チ黃金十兩ヲ鏡奩中ヨ  
 リ出シテ一豊ニ與フ一豊愕然頃ラクアツテ曰  
 ク吾レ汝ト居ルコト幾年未ダ汝ノ藏ムル所此  
 ノ如クナルヲ知ラズ汝吾貧ヲ坐視シテ救ハズ  
 何ツソレ忍ベルヤト對ヘテ曰ク初メ妾ノ來リ  
 嫁スル時妾ノ父之ヲ妾ニ授ケ且ツ戒メテ曰ク  
 夫レ大事アルニ非ザレバ慎ンテ出スコト勿レ

トソレ貧ハ士ノ常事ノミ今日ノ事ハ大ト謂フ  
 ベシト一豊遂ニ其馬ヲ買フ居ルコト幾ハクモ  
 ナク信長馬ヲ京師ニ閱シ之ヲ見テ問フテ曰ク  
 誰ガ馬ツ左右對ヘテ曰ク山内一豊ノ馬ナリト  
 信長曰ク如何シテ之ヲ得ルト對ヘテ曰ク曩ニ  
 與ヨリ來リ鬻クヤ衆價ノ貴キヲ以テ敢テ取ラ  
 ズ將ニ牽キ去ラシトス一豊乃チ家ヲ傾ケテ之  
 チ買フト信長大ニ喜ビテ曰ク彼レ謂ハン天下  
 ノ公ノ家ニ非レバ能ク買フコトナシト是レ徒  
 ニ還サシム可ケンヤ一豊ハ我羞ヲ貽サザル者  
 ナリト一豊ノ知ラルルコトヲ得ル蓋シ此ニ基  
 スト云フ。

やまべのあかひと 山部赤人

歌人。柿本人麻呂ト名チ齊シウシ稱シテ山柿  
 ト曰フ後世稱シテ和歌ノ仙ト爲ス神龜ノ初メ



駕ニ紀伊ニ從テ天平年中吉野離宮ニ陪シ制ニ  
應シテ歌ヲ作ル嘗テ春日ニ詣リ神岳ニ至リ伊  
豫ノ温泉ニ浴シ幸荷島敏馬浦ニ遊ビ又東ニ遊  
ビテ不盡山ヲ望ム作ル所ノ歌世ニ稱セラル曰  
ク「田子の浦ゆうちいでて見ればましろにぞ  
富士のたかねに雪はふりつ」ト。

やまもと・はるゆき 山本晴行

初名ハ貞幸、勘助ト稱ス。參河牛窪ノ人。人  
トナリ短體跛足黒面眇目年甫メテ十二出デテ  
大林氏ニ養ハレ伯父成氏ヲ師トシテ兵法ヲ學  
ブ又鈴木重辰ニ從ツテ兵器ヲ研究ス弱冠ニシ  
テ家ヲ辭シ南海西溟ヲ歷行シテ仕テ求ム遇フ  
所ナクシテ還ル東駿河ニ遊ブ庵原忠房晴行ヲ  
薦メテ今川義元ニ仕ヘシム屢功ヲ施ハス義元  
晴行ヲ輕蔑シテ肯テ大ニ用ヰズ晴行駿河ニ居

ルコト九年去ツテ武田晴信ニ仕フ晴信延見シ  
テ深ク之ヲ奇トシ即日秩二百貫ヲ與ヘ偏諱ヲ  
賜フ是ニ於テ今名ト稱ス長坂頼弘晴信ニ謂ツ  
テ曰ク勘助容貌不揚今俄ニ之ヲ擧用セバ今川  
氏將ニ甲斐ニ人無シト謂ハントス之ヲ如何セ  
ント晴信曰ク我其姿ヲ取ラズシテ其志ヲ取ル  
ノミ今川ノ訕ヲ受クルモ奚ツ顧ル所アラント  
終ニ晴行ノ策ヲ以テ信濃九城ヲ拔ク戸石ノ役  
晴信ノ先鋒村上義清ノ爲メニ破ラレ晴信ノ聲  
下沮ミテ前マズ晴行晴信ニ謂ツテ曰ク敵ヲシ  
テ南ニ嚮ハシメバ必ズ克タント晴信曰ク我兵  
スラ猶且令ニ從ハズ況ンヤ敵ヲヤト晴行曰ク  
臣請フ之ヲ試ミノト後隊ノ兵ヲ假リ左旋シテ  
前ニ義清果タシテ南嚮ス晴信擊ツテ大ニ之ニ  
捷ツ晴行晴行ヲ賞シテ秩八百貫卒七十五人ヲ

領セシム晴行始メ仕ヘシヨリ是ニ至ルマテ屢  
ニ四年世ニ晴信ノ能ク賢才ヲ擢用スルヲ賞ス  
晴行駿河ニ適ク是ヨリサキ駿河ノ人ノ晴行ヲ  
嘲侮スルモノ翕然口ヲ交ヘテ稱譽ス今川義元  
曩日ニ晴行ヲ棄テシテ悔ニ永祿四年上杉輝虎  
侵入シテ河中島ニ到ル晴行晴信ニ戰ヲ勸メ其  
諸將ヲ部署シ陣營ヲ分布スル皆晴行ノ籌策ス  
ル所ナリ既ニシテ越軍一萬三千ノ兵ヲ潜メ曉  
霧ニ乗シテ猝ニ咫尺ニ逼ル晴行長嘆シテ曰ク  
兩國干戈ヲ交ヘシヨリ幾ンド十五年戰ヲ挑ム  
十餘度未ダ一回モ敵ノ軍機ヲ見テ誤ルコトナ  
シ今河霧ノタメニ大軍近ヅキシヲ知ラズ是レ  
我運命ノ盡ル時ナリト部下ヲ一團ニ備ヘテ敵  
陣ニ突進シ縱橫奮闘十三騎ヲ殺シ七騎ニ傷ツ  
ケ竟ニ身ヲ鋒刃ニ倒ス年六十九法名鐵巖道

一初メ晴信晴行ノ善ク兵ヲ用ヰルヲ視歎マテ  
曰ク兵道ノ鬼神ナリト晴行晴信ニ從ヒ削髮シ  
テ號ヲ道鬼ト賜フ甲斐ノ宿將馬場山縣等晴行  
ニ師事シテ兵法ヲ問フ自餘ノ將校從學シテ名  
ヲ著スモノ算ナシ。子信供嗣ク長篠ノ戰節ニ  
死ス。

やまもと・ほくきん 山本北山

江戸ノ儒者。名ハ信有。字ハ天禧、又奚疑翁、  
學半堂逸士、孝經樓主人、竹堤隱逸等ノ號アリ。  
通稱ハ喜六。家世世幕府ニ仕フ。山崎桃  
溪ニ句讀ヲ受ク。是ヨリ常師ナク、漢宋ノ學  
ヲ講究シ又堀川牛門ノ學ヲ修メ後ニ井上金峨  
ガ折衷說ニ服シテ其誨督ヲ受ク北山家素ヨリ  
富饒常ニ奇書ヲ購求シテ其學大ニ進ム年二十  
二孝經集說ヲ著シテソノ名世ニ顯ル北山市川



鶴鳴、豊島豊洲、塚田大峯、龜田鵬齋ト五鬼ノ名ヲ受ク然レドモ斷然持説ヲ主張シテ動カズ人其堅確ヲ稱ス文化九年五月十八日歿。歳六十一。私諡シテ述古先生ト曰フ。

初メ秋田侯禮ヲ厚ウシテ召見シ、屢事ヲ諮フ。高田侯亦問フニ國事ヲ以ス。北山藩政ヲ輔クル其力鮮カラズ是ニ至ツテ高田侯賻弔禮ニ越エタリト云フ。著書ハ「孝經集説」、「作文志殼」、「作詩志殼」ノ外ニ「古文尙書考」、「易象義解」、「春秋孔志」、「論語説」、「學庸正義」、「經義撤説」、「經説」、「程朱異同」、「古今究源」、「三禮古器考」、「王鄭異同辨苑」、「日本外史」、「日本事類集成」、「北辰考」、「文藻行潦」、「詩藻行潦」、「神主考」、「學術淵源考」、「養老考」、「錢帛考」、「衣冠考」、「學派考」、「義士雪冤」、「書畫

談」、「彼我經濟區別」、「官職通解補」、其他三十餘種アリ。

やまききとうやう 山脇東洋

名醫。名ハ尙徳、字ハ玄飛、一ノ字ハ子樹、道作ト稱ス。京師ノ人。本姓清水。風姿俊爽旁ラ聲劔ヲ好ム而シテ雅量アリ永富獨嚙菴東洋ニ謁シ適其愛スル所ノ茶器ヲ見テ觀玩良久シウシテ伴ツテ地ニ墜シテ破裂ス東洋神色恬然從容談論故ノ如シ獨嚙菴其度量ニ服ス。寶曆十二年八月十三日歿。年五十八。著ス所「養壽院醫則」、「臈志」、「濟生餘言」ナド。

やまなかみやうあみ 山岡明阿彌

江戸ノ和學者。名ハ俊明、字ハ子亮、左次右衛門ト稱ス。林道春ノ門人。幕府ニ仕ヘ雜髮シテ明阿彌ト稱ス。六十九歳歿。著書ハ「類

聚名物抄」、「逸著聞集」、「源氏物語逸文考」、「示蒙抄」、「文しばかり」、「筆のさま」、「妬婦傳」、「伊香保の口説」、「嵯峨釋迦立像考」ナド。



ゆあき……ゆあきん 湯淺常山

備前岡山ノ藩士。名ハ元禎、字ハ文祥、新兵衛ト稱ス。子傑ノ子。天明元年四月九日歿。年七十四。著書ハ「常山樓文集」、「常山紀談」、「常山樓筆餘」、「左傳解」、「東行筆記」、「西歸日録」、「備藩典刑」、「文會雜記」、「雨夜燈」、「熊澤先生行狀」、「左傳兵車圖」、「陽土問答」、「幼學指掌」、「焚餘稿」、「烈公遺事」、「君則」ナド。

ゆげ……だうきやう 弓削道鏡

河内ノ人。僧トナリ禪行ヲ以テ聞ユ。孝謙帝

召シテ内道場ニ入レ、禪師トナス。道鏡僧正義淵ニ師トシ事ヘ如意輪法宿曜法ヲ修シテ驗アリ是ニ由ツテ寵遇セラル寶字年中孝謙上皇保良宮ニ幸ス不豫ナリ道鏡常ニ側ニ侍ス帝以テ爲メニ言フ上皇悦ハズ乃チ還ル尋テ使テ山階寺ニ遣ハシテ宣詔シテ少僧都慈訓ヲ罷メ道鏡ヲ以テ之ニ爲ス是ヨリサキ藤原仲麻呂寵ヲ得テ權ヲ擅ニス道鏡ヲ得ルニ及ンテ仲麻呂ヤヤ疎斥セラレ反テ謀ツテ誅ニ伏ス尋テ道鏡ヲ以テ大臣禪師トナシ専ラ政事ヲ參決セシム帝廢セラレテヨリ道鏡寵ヲ特ニテ彌ホシイマヤナリ神護元年道鏡ヲ以テ太政大臣禪師トナシ文武百官ヲシテ拜賀セシム山階寺ノ僧基眞詐ツテ童子ヲ呪縛シ放ヘテ人ノ陰事ヲ説カシメ毘沙門ノ像ヲ作ツテ數顆ノ小珠ヲ前ニ置キ以



テ現佛舍利ト稱ス道鏡衆ヲ眩マシ以テ己ガ瑞  
トナサント欲シ乃チ帝ヲ諷シテ天下ニ大赦シ  
人爵一級ヲ賜ハシム帝大ニ悦ビテ佛舍利ヲ迎  
ヘ諸氏ノ容貌アル者二百人ヲ擇ミ金銀朱紫ヲ  
服シ幡蓋ヲ捧ケテ前後ニ列シ百官主典以上ヲ  
シテ之ヲ拜セシメ道鏡善ク僧徒ヲ教導シテ舍  
利ヲ感得スルト云フヲ以テ詔シテ法王ノ位ヲ  
授ク是ニ於テ道鏡鑿與ニ乘リ服食一ニ供御ニ  
擬シ政巨細トナク取決セザルナシ弟淨人布衣  
ヨリ起ツテ八年間ニ從二位大納言ニ至ル一族  
ノ男女五位ニ叙セラルル者十人太宰ノ主神中  
臣習宜阿曾麻呂宇佐八幡ノ神教ヲ矯メテ曰ク  
道鏡ヲシテ位ニ即カシメバ天下太平ナラント  
道鏡之ヲ聞イテ稍覬覦ヲ懷ク帝之ニ惑ヒ和氣  
清麻呂チシテ神教ヲ受ケシム清麻呂還ツテ神

許スヘカラスト奏ス道鏡大ニ怒ツテ清麻呂チ  
貶竄ス寶龜元年帝由義ニ幸シテ道鏡ト遊處シ  
猥褻至ラザル所ナシ道鏡益帝ノ意ヲ悦バサン  
ト欲シ進ムルニ淫具ヲ以テス是ニ因ツテ疾ヲ  
得平城ニ歸ツテ崩ス道鏡謂ヘラク威福既ニ由  
ル人應ニ推戴スベシト山陵ノ事畢ルモ盧チ陵  
下ニ留ム羣臣白壁王チ立ツ是ヲ光仁帝トナス  
坂上村田麻呂道鏡ノ罪惡ヲ奏ス遂ニ道鏡ヲ遣  
下野藥師寺別當ニ貶シ即日發遣セシム三年道  
鏡貶所ニ死ス庶人ノ禮ヲ以テ之ヲ葬ル。

ゆふきり 夕霧

京師島原ノ遊妓。俳偕ヲ能クシタ。延寶六年  
正月六日歿。法名、花岳芳壽信女。

ゆや 熊野

遠江池田ノ遊女。名ハ待從、驛長湯谷某ノ女。

平宗盛執ヘラレテ鎌倉ニ送ラレタ時、歌チ上  
ツタ。「東路の殖生の小屋のいふせきに故郷い  
かに戀ひしかるらん」。熊野又舞ヲ能クシタ。

ゆのしやうせつ 由井正雪

駿州由井染家傳三郎ノ子。幼名ハ久米。其父  
正雪ヲ僧ト爲サントス。正雪聽カズ。一日太  
閨記ヲ讀ミ奮激スル所アリ去ツテ江戸ニ遊ブ  
適石川主税トイフ者アリ自ラ楠氏ノ後裔ナリ  
ト稱ス兵書ヲ傳フ正雪之ニ從ヒ約シテ父子ト  
ナリ遂ニ楠氏ヲ冒シ興四郎ト稱シ兵法ヲ教授  
ス弟子日ニ進ム嘗テ密ニ楠氏ノ系圖菊水ノ章  
旗ヲ偽造シ之ヲ淺間山ニ埋藏ス是ニ至ツテ之  
ヲ發ス因ツテ自ラ楠氏ノ遺裔ト稱シ竊ニ異圖  
ヲ蓄フ時ニ丸橋忠彌トイフ者アリ槍術ヲ以テ  
名アリ正雪コレト交際日ニ密ナリ一夜衆ヲ道

灌山ニ會シ反期ヲ約ス正雪ハ駿府ニ歸リ忠彌  
ハ江戸ニ留リ期日ヲ待ツテ相發セントス忠彌  
金ヲ田代又左門衛ニ借ラントシ又弓匠藤四郎  
ニ說クニ秘計ヲ以テシ以テ之ヲ吾ガ黨ニ入レ  
ント欲ス二人驚愕シテ即夜馳セテ變チ上言ス  
松平信綱ソノ槍術ヲ善クスルヲ聞キ以テ多ク  
ソノ人ヲ傷フコトヲ恐レ直チニ町奉行神尾元  
勝石谷貞清等ヲ遣シソノ家ヲ圍マシメ連呼シ  
テ曰ク失火アリト忠彌樓ニ登ツテ之ヲ望ム衆  
乃チ突入シテ之ヲ擒ニシ更ニ駒井右京チ駿府  
ニ遣ハシテ正雪ヲ捕フ是日早晨正雪東ニ向ツ  
テ天ヲ眺メ久シウシテ曰ク事濟ラズト既ニシ  
テ右京果シテ至ル城代大久保忠成等ト謀リ吏  
ヲ遣ハシテ之ヲ圍ム正雪及ビ其徒八人皆既ニ  
自殺ス時ニ慶安四年ナリ老中賊黨ヲ藉シテ紀



伊大納言頼宣ノ書ヲ獲テ大ニ驚キ甲士ヲ城中ニ伏シ頼宣ヲ召シテ之ヲ陳ス頼宣徐ニ之ヲ見テ曰クコレ國家ノ福ナリ方今主幼ニシテ國疑懼ス萬一賊諸侯ノ手書ヲ僞作スレハ即チ人心疑懼シテ處置太マ難シ今乃チ吾ガ書ヲ擬スコレ辨シ易キノミ卿等若シ我ヲ釋ザズンハ即チ我レ吾ガ國ヲ納レテ以テ命ヲ待ツベシ天下復タ何ツ憂フル所アラント言終ツテ喜ビ顔色ニ見ハル一坐大ニ歎伏ス是ヨリサキ正雪人ニ因ツテ頼宣ニ請フテ曰ク願クハ賤役ヲ執リ以テ公ニ事ヘシコトヲト老臣加納直恒曰ク兵家ニシテ賤役ヲ執ルモノ有ルハ是レ信シ難シト議即チ止ム衆人其先見ニ服スト云フ。

よ

よるへいしやう 横井平四郎

名ハ時存、字ハ子操、小楠ト號ス。後城東沼山津村ニ退居ス、因ツテ又沼山ト號ス。父ハ大平兄ハ時明家世世肥後細川侯ニ仕フ文化六年八月十三日熊本ニ生ル幼ニシテ穎異年甫メテ十三騎射ヲ習フ上太夫下津氏ノ嗣子久大亦同年同ツク射場ニ赴ク百馬ヲ駢ベテ還ル途ニシテ談偶時事ニ及テ意氣慷慨他日共ニ大ニ治績ヲ舉ゲンコトヲ期ス是ニ於テ始メテ經國ノ志ヲ起セリ長ズルニ及ビテ學問大ニ進ミ能ク其要ヲ明ニス又武事ニ鍊ル侯數之ヲ賞ス二十九歳ニシテ擢ンデラレテ國學學舎ノ長トナル越エテ二年命ヲ奉シテ江戸ニ遊學シ昌平賢ニ入ル俊秀ノ士皆交ヲ結ハザル無ク殊ニ水戸藤田東湖幕士永野清淑等ト肝膽相投テ翌年故アツ

テ國ニ歸ル將ニ程ニ上ラントス水戸烈侯藤田東湖ヲシテ來リ内命ヲ傳ヘ其國ニ遊ハシム辭シテ就カズ家ニ居リ學ヲ講シ經濟安民ノ術ヲ窮メ大ニ格致ノ要ニ達シ痛ク舊來學校ノ習弊ヲ看破シ別ニ道義ノ學ヲ唱ヘ長岡是客下津久大萩昌國元田永孚等ト經議ヲ講明シ實用ニ適スルヲ務ム時人目シテ實學トシ議論協ハズ世ニ容レラレザル久シ然レドモ弟子門ニ進ム者日ニ益衆シ嘉永五年越前侯ノ需ニ應ジ「學校問答錄」ヲ草シ古今學校ノ弊害ヲ辨シ學政一致ノ方ヲ論シ人君率キテ以テ士庶ノ師表タル時ハ學校始メテ有用ノ才ヲ出スベキヲ言ヒ文武一途ノ說ヲ著シ寬猛兼存シテ國力振起ノ基ヲ成スノ意ヲ述ブ安政元年兄時明病歿ス嗣子時治尙幼ニ因ツテ其家ヲ承ケ祿百五拾石ヲ襲

ク此歲「家國論」ヲ著シ貿易ノ說ヲ明ニシ開港ノ說ヲ唱フ文久二年國是十二條ヲ草シ越前侯ニ上ル此歲越前侯總裁職ト爲ル聘セラレテ江戸ニ赴ク侯ニ因ツテ幕政ヲ聽ク事アルニ與ル將軍上洛諸侯ノ室家ヲ封土ニ返ス等ノ事ヲ論ズ事皆行ハル一夜藩士吉田某等ト語ル兎徒アリ直ニ吉田ヲ刺ス暗ニ乘シテ脱ル明年八月國ニ歸ル榊原某等隨行ス後國律難ヲ脱ルルノ事ヲ論シテ其祿ヲ收ム元治元年「海軍問答錄」ヲ著シ皇國四方海ニ邊スルヲ以テ海軍ヲ興スノ最急務タルヲ論シ列藩ノ疲弊ヲ救ヒ貨財ヲ生シ其基礎ヲ立ツルノ方ヲ言フ是歲家姪時治大平ヲシテ米國ニ赴キ海軍ヲ學ハシム明治元年徵士ノ命ヲ奉シ京師ニ赴キ制度局ノ判事ニ任ズ月ヲ經ズシテ從四位ニ叙シ參與ノ職ヲ拜ス



明治二年正月五日退朝ノ途兇徒ノ爲メニ害セラル平四郎人トナリ明達外ハ豪爽不羈ニシテ内ハ小心惕若タリ明快事ヲ斷シ談論風ヲ生ズ時一辯ヲ以テ名アル者皆折服セザル無シ。

よした・やう 横井也也

俳諧師。尾張名古屋ノ重臣。孫左衛門ト稱ス。性淳朴ニシテ文雅ヲ好ム俳諧ニモ長シテ世ニ獨立ス常ニ人ニ語ツテ曰ク我ニ俳諧ノ師無ク又門人モ無シ唯正直ナル小兒ノ舌シドロニ言ヒ出スガ自然ト五七五ニ合ヘリトイフ其句ニ曰ク「松風の里とこまで門飾り」。「生娘の袖誰が引て雉の聲」。「晝貌やとちらの露も間に合す」。「蜘蛛いつまで草にかくれけり」。一年松木淡淡ガ己ヲ高ブリ人ヲ慢ルト傳ヘ聞キ初メテ對面シテ「化物の生體見たり枯を

な」其誠心ナル事大概コノ類ナリ又述スル所ノ「鶉ごころも」「浦の梅」「野文談」「小皮籠」等ノ俳文ソノ實體ニシテ舞鼓自在ナル事比類無シ。天明三年六月六日歿。

よした・たひかせ 吉田追風

相撲行司ノ祖。善左衛門ト稱ス。豊後守家次ト名ヅク。義仲旗下ノ士。後ヲ越前ニ居ル。後鳥羽帝召シテ行司トナシ。五位ニ叙シ、追風ノ名ヲ賜フ。天福二年四月廿日歿。世世行司ノ總首タリ。

よした・じょういん 吉田松陰

長門ノ藩士。其系一條ノ朝臣藤原行成ヨリ出ヅ。行成ノ後ニ松野平助ト云フ者アリ、織田氏ニ仕フ。明智光秀ノ信長ヲ亡ボスマヤ書ヲ以テ平助ヲ招ク平助屈セズシテ死ス子玄蕃重基ヲ

生ム重基始メテ姓ヲ吉田ト改ム慶長年中大坂城ニ戦歿ス重基ノ子ヲ十郎左衛門重賢トナス重賢又星野氏ヲ稱ス其子友之允名ハ重矩初名ヲ重次ト云フ實ハ出雲ノ藩士三島通種ノ第三子和漢ノ兵法ニ通ズ長藩主青雲侯召シテ之ヲ祿シ兵法ノ師トス是ヲ吉田氏ノ始祖トナス重矩四男アリ長男ヲ十郎左衛門矩行ト云フ父ノ後ヲ嗣グ矩行五世ノ孫ヲ賢良ト云フ實ニ松陰ノ父ナリ松陰初名ハ大次郎後重次郎ト改ム名ハ矩方字ハ義卿松陰ハ其處又二十一回猛士ト號ス本姓ハ杉氏出デテ吉田氏ヲ嗣グ松陰ノ實父ヲ常道ト云フ後ヲ韞ト改ム幼名ヲ正一ト稱ス松陰幼ニシテ敏慧頗ル老成ノ風アリ年十一藩侯慶親召シテ武教全書ヲ講ゼシム言辭爽快溢滯ナシ衆頗ル之ヲ奇トス長ズルニ及ビ深

沈ニシテ善ク古今ノ史書ニ通曉ス殊ニ兵法ニ精シ山田頼毅固ヨリ松陰ヲ器トス之ニ告ゲテ曰ク今ヤ世上多事ノ日ニ際ス學ヲ和漢ニ限リ歲月ヲ章句ニ費スベキニ非ズ宜シク活眼ヲ開イテ宇内ノ大勢ヲ察スベシト松陰之ヲ悟リ專ラ心ヲ海外ノ事ニ用フ嘉永二年九州ニ遊ビ多ク奇傑ノ士ヲ訪ヒ平戸ニ往イテ葉山鎧軒ヲ見ル蓋シ平生欣慕スル所ナリ三年藩侯ニ隨ツテ江戸ニ往キ總房ノ海岸ヲ巡視シ慨然トシテ曰ク江戸ノ灣浦賀ノ要衝アリ兵備ヲ浦賀ニ嚴ニセハ洋夷ノ入寇亦恐ルルニ足ラズ而シテ東北諸國ノ如キ地廣ク人少ク戒備亦粗ニシテ屢鄂虜ノ覬フ所トナル是忽諸ニスベカラザルナリ宜シク先ヅ地形ヲ熟察シ預メ之ガ策ヲ爲スベシト會肥後ノ土宮部鼎藏亦タ東游ノ志アリ松陰



則チ約シテ奥羽北越ヨリ佐渡ニ航シ歳ヲ踰テ還ル六年亞米利加ノ兵艦江戸灣ニ入ル天下騒然タリ藩侯固ヨリ松陰ヲ器トス四方ニ遊學シテ以テ其才ヲ成サシム松陰江戸ニ至リ「將及テ攘夷ノ策ヲ論ズ適佐久間象山ノ豪傑タルヲ聞キ往イテ教ヲ乞フ意氣相投ヲ互ニ肺肝ヲ吐ク象山松陰ノ爲スアルノ士タルヲ知り之ヲ愛ス書ヲ贈ツテ曰ク近世西洋ノ學者蒸氣力ヲ假ツテ舟車ヲ行リ甲艦濤ヲ衝イテ日ニ百里ノ海ヲ渡ル我器精銳兵法輕捷海陸共ニ其便ヲ極ム國富ミ兵強キコト天下ニ冠タリ是時ニ當リ男子タル者宜シク奮發以テ万里ノ外ニ歴遊シ海外ノ形勢ヲ察知シ而シテ外國ノ凌侮ヲ禦グヲ謀ルベシト松陰大ニ感ズル所アリ是歲七月魯

國ノ軍艦長崎ニ來ル松陰奮ツテ曰ク彼ヲ知り己ヲ知ルハ兵家ノ第一義ナリ宜シク此機ヲ失ハズシテ彼國ニ航シ以テ外國ノ形勢ヲ察スベシト竊ニ去ツテ長崎ニ遊ブ象山其意ヲ察シ詩ヲ贈ツテ志ヲ述ブ松陰已ニシテ長崎ニ至ル魯艦既ニ歸リ去ル松陰失望シテ歸ル途ニ鼎藏ヲ訪ヒ共ニ江戸ニ遊ブ安政元年正月米艦九隻下田ニ來リ泊スルニ會フ松陰大ニ喜ビ乃別ヲ鼎藏ニ告ゲ伴ツテ曰ク我洋虜ヲ欺イテ其艦ニ入り彼ヲ刺シテ以テ國ニ報セントスト鼎藏固ク止ム松陰聽カズ終ニ別レ去ル松陰其僕金子貞吉ト共ニ俱ニス貞吉初メ松陰ニ見エテ教ヲ乞フ松陰曰ク地ヲ離ルレバ人ナシ人ヲ離ルレバ事ナシ故ニ事ヲ成サント欲スル者ハ應ニ地理ヲ究ムベシト貞吉乃チ地誌ヲ讀ム旬日ニシテ

成ル松陰曰ク已ニ大要ヲ得タリ宜シク其細ニ及ブベシト之ニ禹貢ヲ授ク亦數日ニシテ其要領ヲ得タリ松陰之ヲ奇トス謂ヘラク貞吉卑賤ト雖モ眼光炯炯人ニ屈セザルノ氣アリ以テ用フベシト乃勸メテ共ニ海外ニ遊ハシム三月廿七日下田ニ赴キ夜小艇ニ棹シテ米艦ニ投ズ米人拒ミテ納レズ港内ニ彷徨スル十餘日ニシテ一米人ニ遇ヒ窃ニ書東ヲ托ス是夜又漁舟ニ乗ツテ出ツ舟ニ櫂無シ乃チ揮ヲ解キ二竹竿ヲ縛シテ櫂ニ代ヘ以テ舟ヲ操ル揮絶ツ乃帶ヲ脱シテ之ニ代フ浪高シシテ舟進ムヲ得ズ二人力ヲ極メ腕ヲ奮ツテ艦ニ達ス松陰梯ニ攀チ貞吉纜ヲ執ル願レバ舟本艦ヲ離レテ漂蕩シ之ク所ヲ知ラズ佩刀行李皆舟中ニ在リ己ニシテ艦中ノ人三人ヲ扶ケテ上ラシム邦語ヲ善クスル者

アリ出デテ接シ晝間投ズル所ノ書策ヲ示シ且ツ曰ク船將大ニ二君ノ篤志ヲ嘉ニス唯兩國公議ヲ以テ修好ヲ約ス聞ク貴國私ニ海外ニ出ツル者ヲ禁ズト是事私ニ諾スベカラズ且ツ我が艦拔錨ノ期ヲ緩フスルコト兩三月ナリ君等宜シク一タビ歸リ公裁ヲ得テ來レト貞吉曰ク僕等已ニ國法ヲ犯シテ來ル還ラハ則罰セラレシメ人曰ク暗夜知ル者ナシ竊ニ去ルベシト一舸ヲ裝シテ岸上ニ送ル松陰天ヲ仰イテ嘆シテ曰ク嗚呼天ナリト翌日米人狀ヲ以テ幕吏ニ告グ土人亦二人失フ所ノ行李佩刀ヲ上ツル行李中象山ノ詩アリ吏固ヨリ象山ノ名望ヲ嫉ミ且二人ノナス所其勸ニ出ルヲ疑フ象山時ニ藩命ヲ以テ神奈川ノ戎衛中ニ在リ三人共ニ捕ヘラレテ傳馬坊ノ獄ニ繋ガル象山ハ免サレ二人ハ其



藩ニ擢致セラル權重甚マ狭ク四方僅ニ二三尺  
 松陰貞吉ト膝ヲ交エテ坐ス己ニ萩城ニ入ル貞  
 吉獄ニ在ツテ瘡ヲ患ヒ死ニ瀕ス憤恚シテ曰ク  
 僕先生ト策ヲ決シ事ヲ成サントス航海シテ屍  
 ナリ唯マ辱ヲ受ケテ此ニ至ル何ノ面目アツテ  
 カ此世ニ存セン若シ一度父母ヲ拜スルヲ得テ  
 後死セハ萬遺憾ナシト藩侯之ヲ憐ミ特ニ之ヲ  
 赦ス遂ニ父母ヲ見テ死ス年二十五松陰獄ニ在  
 リ歳ヲ閱シ其家ニ禁錮セラル己ニシテ赦サル  
 五年六月藩侯江戸ヨリ歸リ松陰ノ著「狂夫之  
 言」ヲ覽テ大ニ喜ビ更ニ懷フ所ヲ書シテ上ラ  
 シム松陰感激益力々時ニ幕府朝旨ヲ矯メテ米  
 使ト條約ヲ結ビ五港ヲ開キ交易ヲ行ハントス  
 勤王ノ志士大ニ憤リ朝紳ニ説イテ討幕ノ議ヲ

上ル松陰亦大原宰相ニ頼ツテ時勢論一篇ヲ上  
 ル老中間部詮勝幕府ノ命ヲ奉シ京ニ上ツテ志  
 士ヲ捕ヘシム中外洵洵アリ松陰大ニ幕府ノ非  
 舉ヲ憤リ問部詮勝ヲ刺サント謀リ同志ヲ糾合  
 シ將ニ京ニ登ラントス松陰ノ父常道固ヨリ氣  
 節ノ士ナリ敢テ之ヲ止メズ乃チ密ニ國老益田  
 ノ親施ニ告シ親施之ヲ危ム藩侯亦東觀シテ幕府  
 ノ疑ヲ解カントス松陰其不可ヲ論ズ言辭激烈  
 ナリ十二月命アリ松陰ヲ獄ニ繫ク松陰曰ク罪  
 アツテ獄ニ下ル固ヨリ辭セズ今罪名ヲ得ズシ  
 テ獄ニ繫ガレントス我死ストモ往カント門生  
 吉良良明等八人皆之ヲ聞イテ馳セ至ル曰ク先  
 生罪無クシテ囚ニ就ク我輩默止スベカラズト  
 八人吏ニ詣リ其理由ヲ問ハント請フ吏皆病ト  
 稱シテ謝ス衆幕前ニ至ツテ事ヲ論ゼント請フ

吏大ニ懼レテ潛匿ス明日吏八人ヲ幽ス松陰亦  
 遂ニ門生ヲ教唆ストナリ將ニ獄ニ下サントス  
 時ニ常道病ニ臥ス松陰吏ニ哀訴シテ父ノ病狀  
 ナ告グ數日ヲ緩ウシテ其湯藥ニ侍シ少シク病  
 ノ癒ニルヲ待ツテ獄ニ就カント請フ許サル數  
 日ニシテ常道病少シク癒ユ是ニ於テ門生ヲ會  
 シ宴ヲ設ケテ訣ヲ告グ常道松陰ヲ勵マシテ曰  
 ク往ケ兒經ヒ身ヲ一時ニ屈スル共名ヲ萬世ニ  
 伸ブルヲカメヨ兒傷ム莫レト松陰既ニ獄ニ就  
 キ猶ホ東觀ノ非計ヲ論ジテ己マズ六年正月播  
 磨ノ人大高又治備中ノ人平島武次郎萩ニ來リ  
 意ヲ得ズシテ去ル松陰人ヲシテ其志ヲ問ハシ  
 ム二人曰ク三條大原ノ二卿將ニ長侯ノ東下ヲ  
 途ニ要シテ事ヲ謀ラントス我輩同志三十人ト  
 公ヲ伏見ニ迎ヘ周旋シテ朝紳ト謀リ四方ノ有

志ニ説イテ共ニ幕府ヲ討セントス長藩ノ志士  
 多キヲ聞キ來リ謀ルナリト松陰感嘆乃門生ニ  
 獎メテ曰ク卿等籍ヲ脱シテ義ニ赴キ以テ藩人  
 ノ名ヲ成スベシ事若シ成ラハ功ヲ我が公ニ歸  
 セヨ若シ成ラズンハ死シテ後チ止メト門生遲  
 疑決セズ松陰嘆ジテ曰ク天カ命カ我が黨ノ士  
 唯時勢ヲ觀テ向背ヲ爲シ我が公ヲ不義ニ陷レ  
 テ恬然省ミズ他日時勢ノ爲メニ逼マラレハ將  
 ニ我が公ヲ何ノ地ニ置カントスルカト食ハザ  
 ルコト數日門生入江弘毅弟和作ト慨然トシテ  
 曰ク我將ニ往イテ試ミント松陰大ニ喜ビ爲ニ  
 策ヲ授ク既ニシテ事洩レ弘毅和作共ニ逮捕セ  
 ラル是歲幕府若狹ノ志士梅田定明小林民部等  
 ナ捕フ事松陰ニ係ル乃長藩ニ命ヲテ松陰ヲ江  
 戸ニ擢致セシム權重將ニ發セントス久阪通武



高杉晋作等門下ノ士出テ送ツテ別ヲ惜ム乃チ  
共ニ謀リ浦無窮ヲシテ松陰ノ肖像ヲ畫カシム  
松陰自カラ其上ニ賛シテ曰ク「三顧出處兮、  
諸葛已矣夫、一身入洛兮、賈彪安在哉、心師  
貫高兮、而無索立名、志仰魯連兮、遂乏釋難  
才、讀書無功兮、樸學三十年、滅賊失計兮、  
狂氣廿一回、人蹟在頑兮、鄉黨衆不容、身許  
家國兮、生死吾奚疑、至誠不動兮、自古未之  
有、古人難及兮、聖賢敢追陪」ト是ニ於テ復  
々獄ニ下ル然レドモ松陰憂國慨世ノ念益已マ  
メ獄中ニ在ツテ正氣歌ヲ作り以テ文天祥ノ韻  
ニ次ス「正氣塞天地、聖人唯踐形、其次不朽  
者、亦爭光日星、嗟吾小丈夫、一粟點蒼溟、  
才疎身側陋、雲路遙天廷、然當其送東、眼與  
山水青、周海泊舟處、敬慕文臣筆、嚴島塵賊

地、仰想武臣節、赤水傳佳談、櫻留義士血、  
和氣存節名、孰捫清九舌、壯士一谷笛、義妾  
芳野雪、墓悲楠子志、城仰豐公烈、倭武經蝦  
夷、田村威棘羯、嗟此數君子、大道補分裂、  
尾張連伊勢、神器萬古存、琵琶映芙蓉、嵩華  
何足論、最是平安城、仰見天子尊、神州臨萬  
國、乃是大道根、從墨夷事起、諸公實不力、  
已破妖教禁、讓港州南北、天子荐軫念、四海  
妖氣黑、奉勅三名侯、鷄栖鳳凰食、其他憂國  
者、亦皆溝中瘠、歎忽五六歲、世事幾變易、  
幸有聖皇在、足以興神國、如何將軍忠、曾不  
拂洋賊、大義自炳明、孰感辨黑白、人生轉瞬  
耳、天地何有極、聖賢雖難企、吾志在平昔、  
願留正氣得、聊添山水色、又和歌ヲ詠シテ曰  
ク「身はたどひ武藏の野邊に朽つるとも留め

置かまし日本魂」幕府松陰ヲ詰問シテ曰ク汝  
嚮ニ匿名ノ書ヲ作ツテ朝廷ニ獻リ以テ幕府ヲ  
倒サント議ス且梅田雲濱ト長州ニ密謀ヲ企テ  
シノ風説アリ果シテ信カト松陰笑ツテ曰ク我  
焉シテ之ヲ知ラン且ヤ書ヲ上ルニ匿名ヲ以テ  
スルガ如キハ鄙劣ノ所爲ニシテ丈夫ノ屑シト  
セザル所ナリ吾何ツ鄙劣ノ事ヲ爲サン而シテ  
梅田氏ノ我が國ニ來ルヤ我罪ニ處シテ獄中ニ  
在リ何ツ之ト相謀ルヲ得シ公等ノ糾問スル所  
毫モ其實無シ但我變ニ幕府ノ專横ヲ疾ミ著ス  
所ノ時勢論ヲ參議大原重德卿ニ上リ又間部詮  
勝ノ暗殺ヲ謀レリ我が以テ罪セラルベキモノ  
此ノ二件ノ外無キナリト自ラ其罪ヲ陳ベテ從  
容憚ル色ナシ幕更大ニ驚キ之ヲ斬ニ處ス。時  
ニ安政六年十月二十七日。年二十九。刑ニ臨

シテ歌ヲ詠ク「親を思ふ心に勝るる親心今日  
のあとづれ何と聞くらん」。  
よしだながよし 吉田長叔  
聞醫。徳川幕府ノ先手同心馬場兵右衛門第三  
子。名ハ成徳、字ハ直心。駒谷、又聞馨ト號  
ス。叔父吉田長庸ノ嗣トナリ、其氏ヲ冒ス。  
人トナリ沈靜深慮、學ヲ好ミ、幕府ノ醫官ト  
岐長元ノ門ニ入ツテ漢方ヲ學ビ、後チ桂川甫  
周ニ從ツテ蘭學ヲ受ケ、專意研究シテ一理モ  
通セザルアレハ則チ寢食ヲ廢シテ以テ之ヲ究  
ム。嘗テ「内科選要」ヲ讀シテ感ヲ起シ之ヲ實  
地ニ試シテ欲シ乃チ之ヲ原書ニ徵シ研駁茲ニ  
年アリ當時蘭科ト稱スルモノハ皆專ラ外治ヲ  
主ツテ傍ラ内治ニ及ブノミ然ルニ長叔獨リ和  
蘭内科ヲ以テ業ヲ中橋上榎防ニ開キ物議ノ爲



メニ搖セズ益力チ其業ニ盡ス已ニシテ果シテ治チ乞フモノ門ニ滿チ名聲大ニ起レリ適金澤侯疾アリ衆醫之ヲ治シテ未ダ驗アラズ乃チ治チ宇田川玄眞ニ請フ時ニ玄眞ハ津山侯ノ世臣タルヲ以テ之ヲ辭ス侯終ニ長叔ヲ聘シ俸二十口ヲ賜フ時ニ文化七年ナリ明年侯又定メテ歳ニ二十兩ヲ賜フテ翻譯ノ資金トナス是ヨリ長叔益譯述ヲ勉メテ「泰西熱病論」七卷ヲ撰ミ後チ又其「後篇」五卷ヲ撰ミ並ニ當時ニ行ハル心チ西洋ノ醫書ニ潛メ焦思苦慮十餘年ヲ經テ「内科解環」十五卷ヲ著ス後チ文政七年夏金澤侯國ニ在ツテ病ニ罹リ急ニ長叔ヲ召ス即日途ニ上リ程ヲ兼チテ之ニ赴キ行イテ越後ノ高田ニ至リ病ニ罹リ尙強テ金澤ニ到リ竟ニ八月十日ヲ以テ歿ス歳四十六金澤棟岳寺ニ葬ル性恢

廓ニシテ城府無ク其人ト交ルヤ一見忽チ舊ノ如シ談若シ蘭學ニ及ヘハ秘惜スル事ナク惘歎能ク物ヲ容レテ曾テ貴賤長幼ヲ問ハズ又疑チ質スモノアレハ則チ是非異同ヲ剖折シ其兩端ヲ叩イテコレヲ竭ス妻由井氏子無ク門人中條言善チ以テ嗣ト爲ス。著書ハ「蘭藥鏡原」五十卷。  
よしの。きんりよう。芳野金陵  
儒者。名ハ世育、字ハ叔果、又宛字ト號ス。通稱愿三郎。後チ立藏ト更ム。下總葛飾郡松崎村ノ人。父名ハ舜倫、字ハ叙卿、南山ト號ス母齊藤氏享和三年十二月二十日金陵ヲ相馬郡小文間村ノ外家ニ生ム幼ニシテ温良能ク父母ニ事フ乙亥ノ年父醫チ業トシ四月江戸豊島町ニ僑居ス金陵從ヒ移ル時ニ年十四自ラ薪水

ノ勞ヲ執リ暇アレハ則チ論語ノ句讀ヲ受ケ日夕朗誦凡ソ聲三ツビ嘸ス後蒙求ノ講義ヲ聽シコト半卷ニシテ既ニ讀書ヲ解シ復タ講義ヲ聽カズ而シテ左國史漢ニ涉獵ス作文賦詩之ヲ父ニ受ケ學稍進ム初メ父文學ヲ以テ家ヲ興サント欲シ研鑽年アリ既ニシテ謂ヘラフ方今郷里醫ニ乏シ急ニスル所ハ醫ニ在ツテ儒ニ在ラズト遂ニ醫術ニ從事ス是ニ至ツテ大ニ喜ンテ曰ク我志汝ニ因ツテ以テ達セリト父ニ從ツテ郷里ニ歸ル文政癸未年二十二請フテ江戸ニ游學ス父曰ク師ハ其徳ヲ師トスルナリ其人ヲ選マザルベカラズ聞ク方今ノ儒者人品ノ高キ學術ノ正シキ龜井鵬齋ニ如クナシ宜シク從ヒ學ブベシト時ニ鵬齋既ニ老ス因ツテ其子綾瀨ニ學ブ未ダ幾クナラズ綾瀨己ニ代ツテ子弟ノ詩文

チ添削セシム丙戌居チ淺草福井町ニトシ帷チ下ダシテ生徒ニ教授ス時ニ年二十五弘化丁未田中藩本多侯ニ仕ヘテ儒官トナリ俸十五口ヲ賜ハリ班士格タリ是ヨリサキ金陵家モト貧且ツ數火災ニ罹リ衣物蕩盡シ窮乏特ニ甚ダシ知交之ヲ憫レニ薦舉スルモノアリ又諸侯聘招スル者アレドモ皆謝シテ應ゼズ本多侯召ズニ及ビ悦ンテ曰ク吾ガ桑梓ノ君ナリ以テ仕フ可シト是ニ於テ始メテ禍ヲ解ク嘉永三年九月侯封ニ就ク金陵扈從シ監察ノ事ヲ攝シ未ダ幾クナラズシテ江戸ニ還ル癸未年五十二正月班謁者ニ進ム是歳米艦浦賀ニ入り國書ヲ呈シ和親ヲ要シ互市ヲ請フ是ヨリサキ洋舶屢邊海ニ出沒ス金陵深ク之ヲ愛ヒ支那新報和蘭口單等ヲ索シテ之ヲ讀ミ以テ海外ノ事情ヲ察シ又同志ト



俱ニ海防ヲ論シ兵制ヲ講シ以テ他日ノ用ニ供  
 セント欲ス是ニ於テ見ル所ヲ書シテ密ニ閣老  
 久世侯ニ上ル既ニシテ幕府米人ニ還ルヲ諫ス  
 金陵謂ヘテク明年彼再ヒ來ルヤ必セリ之ヲ待  
 ツノ計ヲ前定セザルベカラズト乃國是ヲ定メ  
 外人ヲ待ツノ議ヲ策シテ久世侯ニ上ル侯ノ臣  
 寺田某金陵ノ門ニ學ブ故ニ屢之ヲシテ時務ヲ  
 諮問セシム金陵意ヲ竭クシテ啓沃ス當時愛國  
 ノ士往往金陵ニ因ツテ其志ヲ通ズルヲ得ルト  
 云フ安政五年中大老井伊直弼擅ニ國權ヲ弄シ  
 宸勅ニ違ツテ洋人ト和ス天下洶洶切齒セザル  
 ナシ金陵竊ニ同志ト謀リ經畫周旋爲ス所アラ  
 ント欲ス既ニシテ事漏レ捕縛サルルモノ先後  
 相踵ク一日或人金陵ヲ訪フテ曰ク禍已ニ門結  
 ニ迫ル盍フ潛匿シテ後圖ヲ爲サザルト金陵曰

ク吾君主ノ在ルアリ進退得テ私スベカラズ唯  
 安シクテ命ヲ埃ツノミト而シテ心竊ニ後事ヲ  
 規畫ス金陵平生危言激論ヲ爲サズ故ニ竟ニ免  
 ルルヲ得タリ万延元年藩主祿百石ヲ賜ヒ班ヲ  
 本正ニ進ム是ヨリ先本多侯敬得年已ニ老イテ  
 嫡嗣ナシ闔藩之ヲ憂フ介弟正訥賢ニシテ學ヲ  
 好ミ輿望之ニ歸ス而シテ小人或ハ其聰明ヲ忌  
 ミ家子ヲ養ツテ公主ニ配シ以テ嗣トナサント  
 欲シ物情騷然タリ金陵志士ト謀リ上疏規諫ス  
 然レ共沮格シテ達セズ金陵乃侯ノ親戚ニ迫リ  
 幕府ノ顯要ニ託シ多方拮据以テ儲貳ヲ定ム未  
 ズ幾クナラズシテ侯敬得歿ス正訥封ヲ襲フ是  
 ニ於テカ此命アリ侯ノ新ニ立ツヤ金陵ニ命ジ  
 テ司計ノ事ヲ攝シ專ラ財政ヲ更革セシム時ニ  
 昌平久シク奢侈風ヲ成シ舊用常ニ足ラズ負債

數万金ニ至ル金陵謂ヘテ入ルヲ計ツテ出ツ  
 ルヲ爲サバ足ラザルノ理ナシト乃計簿ヲ點檢  
 シテ其項目ヲ定メ冗費ヲ省キ不急ヲ廢シ縱橫  
 ノ野表ヲ製ス出納對點一覽瞭然ナリ又出納毎  
 ニ歲増減アルヲ以テ乘除相償フ法ヲ立テ其負  
 債ヲ處スルヤ先ツ債主ヲ招キ懇ニ更革ノ旨趣  
 ヲ告グ而シテ後キ年賦返償ノ方ヲ論ズ皆其理  
 ニ服シ稽首シテ去ル是ニ於テカ財政稍整ヒ一  
 藩澤ヲ蒙ル是ヨリ先藩士卒ノ祿ヲ減シ以テ會  
 計ノ缺ヲ補フ金陵謂ヘテ士卒ノ文武ヲ獎勵  
 スルヤ一ニ其祿ヲ復セザルベカラズト更革ノ  
 日其半ヲ復ス藩邸嚮ニ文武校ノ設ナシ金陵議  
 ヲ進メテ之ヲ築キ且資ヲ藩士ノ遊學者ニ給ス  
 又議ヲ建テテ養老ノ典ヲ行ヒ孝悌力田ヲ賞ス  
 是ニ於テ上下翕然トシテ治ニ向フ其他舊弊ヲ

除キ新政ヲ布クモノ一ニシテ足ラズ文久二年  
 年六十一摺ニ井伊大老櫻田ニ戕ハレ安藤閣老  
 阪下ニ傷ツク是ニ於テ幕議一變シ一橋中納言  
 ナ起シテ輔佐ニ充テ越前中將ヲ舉ゲテ政事總  
 裁ニ任ズ金陵嘗テ知チ中將ニ受クルヲ以テ屢  
 書ヲ贈ツテ可否ヲ獻替ス且往往人才ヲ舉ケ閣  
 老參政ニ至ル者アリ將軍上洛ノ令アルヤ金陵  
 曰ク大義ヲ明ニシ名分ヲ正スハ此時ニ在リ山  
 陵ヲ修シ供御ヲ増シ皇族雍髮ヲ停ムルノ數事  
 ナ建議ス十二月幕府金陵ヲ辟シテ昌平賢ノ儒  
 員ニ補シ稟米二百石ヲ賜フ癸亥ノ年支俸十五  
 口ヲ加ヘ兩番上次ニ班ス是歲島津氏ノ士英人  
 ナ生麥村ニ戕フ英人幕府ニ迫リ償金ヲ求ム閣  
 老小笠原某外國ノ事ニ任ズ五月償金ヲ與フ時  
 ニ金陵癡ヲ患ヒテ暮ニ在リ之ヲ聞キ起ツテ曰



ク是亦違勅ノ者ナリ罪脱ルベカラズト乃書ヲ贈ツテ其非ヲ責ム且前後ノ策ヲ陳ズ八月湯島中阪ニ徙ル初メ幕府ノ金陵及び安井鹽谷二老ヲ辟スヤ將ニ以テ侍講及び顧問ニ充テ大政ニ參セシメントス而シテ議變シ事止ム既ニシテ學政更張ノ議アリ金陵建白シテ小學ヲ府下數十所ニ設ケントス已ニ命ヲ發スルニ及ゾテ止ム後校議シテ本邦學者ノ文集ヲ編纂セントス金陵建議シテ曰ク先儒ノ經書ヲ釋クヤ充棟晉ナラズ其萃ヲ拔キ其要ヲ撮ミ一部ノ經解ヲ作ラハ則チ以テ文物ノ美ヲ異域ニ揚グルニ足ラシ余允サルルヲ得バ則チ其任ニ當ラント聽カレズ講者之ヲ惜シム後昌平費ノ官舎ニ移ツテ書生寮ヲ監督ス明治元年老ヲ幕府ニ乞フ九月允サル十二月又擢ンテレテ昌平費ノ二等放

授トナル己巳ノ年奥羽亂漸ク平ギ諸藩ノ子弟賢ニ富ナル者無慮數百人金陵循循誨ヘテ倦マズ疑ヲ質ス者常ニ席前ニ滿ツ三月百官ニ詔シテ施政ノ方ヲ諮フ金陵外交ヲ固クシ條約ヲ改ムルノ議ヲ奏シ且楮幣ノ利害ヲ論ズ十月二日少博士ニ任シ正七位ニ叙ス廿三日中博士ニ進ム庚午三月從六位ニ叙セラレ既ニシテ官大學ヲ廢テ因テ職ヲ免ザラル癸酉ノ年金陵謂ヘテ少時事一變シテ士常職ヲ解シ是ヲ歸耕ノ時トスト乃大塚ノ地ヲ購ヒ以テ墾田ニ從事シ尋テ大塚ニ移ル是ニ於テ備丁ヲ課シ生徒ヲ教ヘ或ハ著作シ或ハ郊遊シ以テ樂トス戊寅八月五日病歿。年七十七。金陵天資孝敬親師ニ事フル甚マ篤シ平素泛交ヲ務メズ終始相親シキモノハ安井息軒藤森弘菴鹽谷岩陰藤田東湖諸老ノ數

人ニ過ギズ而シテ交ヲ納ルル者アレハ亦敢テ津涯ヲ設ケズ然レドモ其人ニ非レハ肯テ之ト交ラズ又朋友ニ交リ舊故ニ接スル情誼極メテ厚シ窮乏ヲ救ヒ災難ヲ恤ミ或ハ遺孤ヲ惠恤シ或ハ墓碑ヲ建ツ此ノ如キ類枚舉スベカラズ其子弟ヲ教フル嚴ニシテ惇德行ヲ先ニシ實踐ヲ宗トス要ハ英傑ヲ育シテ國家ノ用ニ供スルニ在リ金陵夙ニ著書ニ志シ多ク群籍ヲ鈔シママ編輯スル所アリ而シテ屢火災ニ罹ツテ烏有ニ歸ス後公私多事操觚ニ遑アラズ大塚里ニ徙ルニ及ビ經義ノ述作ニ從事シ將ニ四書ヨリ五經ニ及ハントス而シテ僅ニ學庸二卷ヲ畢ヘテ篋ヲ易ヘタリ。

よしまさ・あけい 吉益東洞

名醫。名ハ爲則、字ハ公言、周介ト稱ス。モト島

山氏。室町管領政長ノ裔。曾祖政慶紀伊ニ居リ、豐臣氏ニ滅ボサレテ其族吉益半笑齋ニ依ル。吉益世世金瘡産科ヲ業トス。安永二年九月廿二日歿。年七十二。東洞人ト爲リ剛強篤傳浮華ヲ好マズ容貌卓絶、黃髮鬚毛ノ如シ。威風凜凜眼光人ヲ射ル。其治療ヲ爲スヤ唯古法ヲコレ用キ運用變ニ應ジ治驗卓絶世人或ハ信シ或ハ疑フモ敢テ意トセズ諸侯招請スレハ親ヲ送迎ヲ爲シ或ハ談政事ニ及ブコトアリト云フ著書ハ「類聚方」、「藥徵」、「方極」ノ外ニ「醫事古言」、「醫事或問」、「醫方分量考」、「方選」、「丸散方」、「建殊錄」、「醫斷」、「古方便覽」、「藥徵續編」、「東洞遺稿」ナド。

よしまさ・なんがい 吉益南涯

京師ノ醫。名ハ猷、字ハ修夫、周介ト稱ス。東



洞ノ長子。人トナリ淳厚ニシテ志業甚懿ナリ。弟子三千餘人。文化十年六月十三日歿。年六十九。著書ハ「氣血水藥徵」ノ外ニ「傷寒論精義」、「醫範」、「方庸」、「方機」、「觀證翁疑」等。

よみたいけん 吉見泰軒

國學者。名ハ幸和、風水翁ト稱ス。尾張名古屋東照宮廟ノ祠官。正四位下ニ叙シ、左京大夫ニ任ズ。其學和漢ヲ錯綜シテ我邦ノ典故ニ精シ、又和歌ニ妙ナリ。明和年間卒ス。著書ハ「五部書說辨」、「兩宮辨」、「増益辨ト鈔俗解」、「國字辨」、「難雜事記」、「社稷問答」、「温泉紀行」、「風水集」ナド。

よしをか・けんたふ 吉岡拳法

吉岡流劍術ノ祖。仁右衛門ト稱ス。京都四條ノ染戸ナリ始メテ黒茶色ヲ染ム。世ニ吉岡染、

又憲法染ト曰フ。祇園藤次ニ從ツテ劍ヲ學ビ、善ク小劍ヲ用フ。室町氏兵法所ノ師範タリ。宮本武藏ト枝ヲ幕庭ニ試ミ勝敗ヲ別タズ。

よた・へんむ 依田徧無

和學者。名ハ伊織ト稱ス。武州府中ノ人。モト五十嵐定右衛門ト稱ス。故アツテ依田氏ヲ冒ス。著書ハ「本紀箋」三十三卷、「諸神鎮坐記」三十一卷、「秘傳錄」十八卷、「空幸集」十七卷、「灌傳深秘」ノ書ニ至ル迄總計百三十有餘卷。明和元年三月十七日歿。年八十四。終世無妻。

よちち・たつごろう 淀屋辰五郎

本姓ハ岡本。其先、三郎右衛門。大坂北濱材木商。三郎右衛門嘗テ徳川氏ニ恩顧アリ、故テ以テ八幡ニ山田三百石及ビ其請ヒニ依ツテ大坂并ニ境ニ入港ノ干納運上ヲ賜フ辰五郎ハ其

數世ノ孫ナリ父ヲ吉安ト云フ最モ奢侈ヲ極メ吉安死シテ家漸ク衰フ時ノ公法ニ商賈白無垢ノ衣ヲ着ヌルヲ禁ズ辰五郎禁ヲ犯シ又將軍賜フ所ノ紋衣ヲ着テ遊廓ニ遊ブ是ニ因ツテ罪ヲ得又謀書謀判ヲ以テ死刑ニ該ル其名族ニ係ルヲ以テ江戸ノ裁ヲ請フ大老柳澤保明罪ヲ宥シ

家産ヲ沒收シ三都ヲ追放ス其沒收ノ品目黃金鶏一對、珊瑚簾一片、咸陽宮ノ棟瓦四個、千枚分銅一個、金銀雀十六、黃金藥罐一個、黃金茶碗三個、大枝珊瑚十枝、伽羅製ノ膳二十、書畫幅三千四百、未央宮棟瓦一個、定家卿色紙三、黃金佛三十、名茶器數百、珊瑚百万遍殊數一連、白銀碗十五、碁盤碁石金銀ヲ以テ製シ黒檀ノ匣ニ盛ル物一對、硝子障廿八、純金棍百本、毛氈長サ廿間巾四間ナル物四十八、其小ナル

者百五十枚、刀劍七百、槍長刀三十七、金百十二萬兩、白銀八千五百貫、地所金券數十萬兩其他數多アリ時ニ年十七。後江戸ニ來リ上野立光院ニ就イテ宛テ幕府ニ訴ヌ。幕府情ヲ酌シ其八幡領ヲ復ス。享保年中歿。

ら

らいがう 頼蒙

延曆寺ノ僧。實相坊ト號ス。伊賀守藤原有家ノ子。從五位下光輔ノ孫。碩學ニ名アリ。白河帝皇子ヲ得ント欲シ、頼蒙ヲシテ之ヲ祈ラシム。因ツテ酬イルニ望ム所ヲ以テセント約ス。中宮賢子身ムアリ、承德元年十二月廿六日ヲ以テ敦久親王ヲ生ズ。帝大ニ喜ビ約スル所ヲ行ハント。頼蒙乃寺ニ戒壇ヲ築カンコトヲ請



フ。帝山徒ノ憤ヲ恐レ、之ヲ允サズ。賴豪憤懣、寺ニ歸ツテ食ハザルコト數日。帝大江匡房ヲシテ諭サシム面セズ。應徳元年飢エテ死ス。皇子尋テ薨ズ。世ニ傳フ賴豪ノ魂靈鼠トナリテ祟チナスト。

らいさやうへい 賴杏坪

藝藩ノ儒者。名ハ惟柔、字ハ千祺、万四郎ト稱ス。春水ノ弟。賴山陽ノ叔父。經術ニ長シ、書及ビ詩ヲ善クス。春水ニ後ルコト五年擢シテラレテ藩ノ儒員ト爲リ。天保五年致仕ス。同年歿。年七十九。

らいさやうへい 賴山陽

京師ノ儒者。安藝ノ人。名ハ襄、字ハ子成。久太郎ト稱ス。京ニ入ッテ又三十六峯ト號ス。父春水藝侯ニ仕フ初メ大阪ニ寓シ飯岡氏ヲ娶

ツテ山陽ヲ江戸港ニ生ム山陽幼ニシテ銳敏竦然頭角ヲ見ハス年甫メテ十三春水祇役シテ江戸邸ニ在リ山陽詩ヲ作ツテ之ニ寄ス柴野栗山コレヲ見テ大ニ歎賞シテ曰ク春水子アリ之ニ教ヘテ實材トナサズ乃チ詞人タラシメント欲スル手宜シク彼レヲシテ史ヲ讀ミテ古今ノ事ヲ知ラシムヘシ而シテ史ハ通鑑綱目ヨリ始メヨト山陽之ヲ聞キ奮感シテ日ニ綱目ヲ讀ム然レ共治亂ノ大勢ヲ記スルソミ書法發明等ハ讀ムチ屑トセズ栗山聞イテ益之ヲ奇トス年十八叔父杏坪ニ從ツテ東遊シ尾藤二州ノ塾ニ在ルコト一年ニシテ歸ル才學日ニ進ム文化七年菅茶山其塾生ヲ督センヨトヲ請フ乃備後ニ遊ブ明年去ツテ京師ニ遊ビ遂ニ止マル時ニ年三十三文化十三年春水ノ病篤ナリト聞ク時ニ徒チ

聚メテ莊子ヲ講ズ卷ヲ投マテ即チ發シ晨夜之ニ赴ク京ヨリ廣島ニ及ブ殆ド百里五晝夜ニシテ至ル至レバ則チ及ブコトナシ遺憾自カラ置ク能ハズ是ヨリ終身復タ莊子ヲ講セズ文政元年二月春水ノ大祥忌ニ廣島ニ歸省シ喪除イテ遂ニ鎮西ニ遊ビ豐筑ヨリ肥ニ入リ長崎ニ留マルコト二月餘南薩隅ヲ窮ム明年春廣島ニ歸リ母ヲ奉シテ京ニ入リ尋イテ廣島ニ送ル爾後西省虛歲ナシ後チ數之ヲ迎フ山陽既ニ客寓シ家ヲ治メテ儉素安ニ一錢ヲ費ヤサズ然レドモ其母ヲ迎フルヤ有無ヲ問ハズ務メテ懽心ヲ奉ズ一日島原ニ侍遊シテ一大酒樓ニ登リ妓樂ヲ召シテ酒ヲ侑ム朱觥銀盤ソノ豐美ヲ盡クス從行ノ婢之ヲ見テ愕然トシ竊ニ山陽ノ袖ヲ引イテ曰ク阿主囊中ノ物以テ之ヲ償フニ足ル手ト

蓋シ山陽國ヲ去リ定省チ欠クヲ以テ深ク自ラ悔恨シ罔極ノ萬一ヲ報イント欲スルニ春水既ニ逝ス故ニ之ヲ母ニ報セント欲スルナリ六年家チ三本木ニ移ス山青水明ノ處ト稱ス春花秋葉ノ候皆坐シテ之ヲ知ル候至レバ輒チ童ヲ携ヘ飄然トシテ出デテ遊ブ其他近畿ノ名勝古跡ハ運履殆ド遍チシ其遊ブヤ豫メ期セズ興至レバ即チ往ク天保三年六月忽チ咳嗽ヲ發シテ血ヲ吐ク醫曰ク是レ積年神ヲ勞スルノ致ストコト所謂肺血疾ナリ治スベカラズ先生豪邁死チ怖レズ故ニ敢テ實ヲ以テ告グ一醫曰ク猶ホ治ス可シト山陽曰ク死生命アリ然レドモ我レ上ニ老母アリ且志業未ダ成ラズ假令ヒ一ノ生理ナキモ宜シク醫療ヲ加フヘシ我慎シテ藥ヲ服シ傍ラ死計ヲ爲サンノミト時方ニ「日本政記」



ニ若手ス乃ナ日夜勇勵シテ稿ヲ撰フ曰ク吾必  
 次之ヲ成シテ地ニ入ラント欲スト秋ニ及シテ  
 疾益劇ケシ然レドモ客至レハ爲メニ筵ヲ設ケ  
 テ談笑自若タリ病革ニシテ曰ク我が死方ニ逼  
 レト猶ホ眼鏡ヲ着テ政記ヲ手ニシテ剛潤シテ  
 止マズ忽チ左右ヲ顧ミテ曰ク且ラク喧ク勿レ  
 我ヲ將チニ假寐セシトスレ乃チ筆ヲ閣リ眼  
 鏡ヲ脱セズシテ瞑ス就イテ之ヲ撫スレハ則チ  
 己ニ逝ス。時ニ九月二十三日。年五十二。東  
 山長樂寺ニ葬ル。著書ハ「日本外史」三十二卷、  
 「日本政記」十五卷、「通義」三卷、「春秋講義」若  
 干卷、「先友錄」二卷、「文集」十卷、「書後題跋」  
 四卷、「日本樂府」一卷、「詩鈔」八卷、「同遺稿」  
 八卷。外史ハ凡ソ廿年ヲ經ル既ニ成ツテ猶ホ  
 之ヲ家ニ秘ス白河樂翁之ヲ聞キ禮ヲ卑シシ幣

ヲ厚ウシテ以テ之ヲ請フ是ヨリ遂ニ世ニ行ハ  
 ル「政記」ハ最モ晩年ノ作記中多ク病中ニ成ル  
 而シテ終ニ全ク稿ヲ脱スルヲ得ズ山陽人ト爲  
 リ瘦軀高頬眼光炯炯之ヲ望ミテ威アリ性峻峭  
 ニシテ尋常ノ人ヲ包容スル能ハズ常ニ昇平日  
 久シク士氣振ハザルヲ慨ス故ニ氣節ヲ以テ自  
 ラ持シ亦以テ人ヲ導キ未ダ嘗テ己ヲ屈シ人  
 ニ随ツテ浮沈容ルルヲ求メズ其國ヲ去ルヤ嘗  
 ツテ曰ク己ニ父母ノ國ニ仕フル能ハズ復朝服  
 ナ着テ貴人ニ見エズト備後ニ在ルヤ茶山嘗テ  
 之ヲ藩侯ニ薦ム山陽書ヲ作ツテ之ヲ辭ス入京  
 後國侯江戸ニ朝シ往來伏見ヲ過クル毎ニ山陽  
 必ズ袴ヲ着ケ南嚮シテ望待ス諸藩多ク之ヲ聘  
 ス皆固辭シテ應ゼズ日野大納言資愛文辭ヲ好  
 ミ時ニ都下ノ諸儒ヲ延イテ文字ヲ飲チ爲ス其

名ヲ聞イテ之ヲ招ク往カズ其請數四ニ至ル乃  
 チ陳ブルニ野人禮節ニ習ハズ若シ野服ノ出入  
 ナ許シ賜予ノ際臣禮ニ類スル者無ケレバ則チ  
 敢テ命ヲ奉セント資愛之ヲ許ス乃チ往ク諸儒  
 中其傲慢ヲ議スル者アリ山陽書ヲ作ツテ宴ニ  
 赴クチ辭ス詞頗ル不遜資愛益其屈セザルヲ敬  
 シ爾後獨リ召シテ宴ヲ賜フ嘗テ醉後戯レニ書  
 ナ爲クル一藩侯見テ之ヲ喜ビ人ヲ介シ朝鮮布  
 三幅ヲ寄セテ書ヲ請フ山陽怒ツテ曰ク我ヲ以  
 テ書師ト爲ス乎ト乃チ二絶句ヲ作り其布ニ大  
 書シテ之ヲ送ル一生アリ「外史」ヲ請フ山陽之  
 ナ領ス後チ又々來リ促シテ曰ク一權貴ニ獻セ  
 ント欲スト山陽色チ正シウシテ曰ク我史ハ權  
 門納媚ノ具ニ非ズト竟ニ與ヘズ山陽才識天授  
 之ニ加フルニ勵精倦マズ甫メテ六歲忽チ母ニ

問フテ曰ク天ハ如何ナル物ツト母曰ク旋轉シ  
 テ止マザル彼ガ如キノミト山陽遽ニ庭ニ下リ  
 天ヲ仰イテ嘆ジテ曰ク不思議ナルカナト啼泣  
 半時ハカリ八九歳ヨリ専ラ國字本古今軍記ヲ  
 讀ミテ寢食ヲ忘ルルニ至ル嬉戯又土ヲ搏ツテ  
 城郭軍營ノ狀ヲ作ス既ニシテ句讀ヲ受ケテ晝  
 夜懈ラズ嘗テ眼ヲ患フ父固クコレヲ禁ズルモ  
 陰ニ讀ミテ止マズ年十四五ニシテ家學ヲ受ケ  
 「小學近思錄」皆已ニ誦習ス一日家ニ書ヲ曝ラ  
 スニ因リ「東坡史論」ヲ見テ曰ク天地間此ノ如  
 ク嘉スベキノ文アルカト遂ニ力チ文章ニ肆ニ  
 シ最モ史學ニ精通スルニ至ル家ニ藏書無ク四  
 子五經白文東坡集唐宋八大家文數品本朝史ハ  
 唯烈祖成績藩翰譜ノミ而シテ古今ノ史籍制度  
 兵法及ヒ家譜野乘涉獵セザル無ク終ニ能ク



「外史」政記」ヲ成ス詩ハ務メテ實際ヲ叙シテ  
 虛設ヲ事トセズ最モ歌行ニ長ク喜ンデ史ヲ咏  
 ズ書名亦藉ク四方争ヒ索ム然レドモ是レ皆緒  
 餘ノニ常ニ心ヲ用ケル者ハ經濟ノ學ナリ弱冠  
 ノ後チ蘇氏ノ策論ニ擬シテ新策十餘篇ヲ作ル  
 晩歲頗ル之ヲ刪潤ス即チ通議ナリ死スルニ先  
 ダツ三日忽チニシテ曰ク猶ホ言ハザルベカラ  
 ザルモノアルアリト即日之ヲ卿ス「内廷篇」是  
 ナリ平生讀書ニ耽リ著述ヲ勤ム常ニ曰ク我チ  
 才子ト謂フハ未ダ我チ悉サザルナリ我チ能ク  
 刻苦スト謂フハ眞ニ我チ知ルナリト日夕卿堂  
 ニ置酒スルニ必ズ門生ヲ呼ンデ對飲ス飲ムニ  
 限アリ限既ニ盈ツレハ一杯ヲ過グサズ酒ハ皆  
 伊丹ノ釀最モ劍菱ト號スルモノヲ愛ス酒醒ム  
 レハ則チ燈ヲ挑グテ書ヲ讀ミ五更ニ至ツテ後

チ寝ニ就ク晝ハ則チ已牌前ニ起キ自ラ衾褥ヲ  
 收メ戸牖ヲ掃クヲ以テ常ト爲ス性古書畫ヲ好  
 ミテ頗ル賞鑑ヲ善ク酒間多ク歴史文章ヲ談  
 ズルヲ樂シミト爲ス其病々ヤ猪飼敬所來リ訪  
 フ談南北正統ノ事ニ及ンデ議大ニ合ハズ敬所  
 既ニシテ去ル山陽曰ク苟クモ北朝ヲ以テ正統  
 ト爲サバ豈ニ新田補諸公ヲ以テ亂臣賊子ト爲  
 サンヤト之ヲ言フ時ニ方ツテ目張リ眉軒ス  
 其慷慨激烈ナル病ムト雖モ衰ヘズ遂ニ更ニ正  
 統論ヲ著ハシ之ヲ政記中ニ置ク人ニ接スルニ  
 城府ヲ設ケズ直チニ肝膈ヲ吐ク人苟クモ其意  
 ニ違ヘバ面リ對シテ詰責シ少シモ假借セズ改  
 ムレハ則チ止ム未ダ嘗テ毫モ意ニ介セズ門生  
 ナ敬フルニ甚ダ意ヲ用キ書ヲ講シテ抗聲飾辯  
 セズ恂恂談話スルガ如シ倦メハ則チ烟ヲ吹ヒ

茶ヲ喫シテ必ズ蘊奧ヲ摘發シ妙旨ヲ剖析シ人  
 ナシテ了然ヲラシメテ後チ止ム講經ノ席ニハ  
 緇徒ヲ列セズ門生詩文少シク見ルベキ者アレ  
 ハ嗟賞置カズシテ曰ク我チシテ之ヲ爲クヲシ  
 ムルモ亦ク此ノ如キニ過ギズト甚拙ノ文ト雖  
 モ改刪數四其意ノ如クニシテ止ム死ニ先ダツ  
 數日門人書ヲ善クスル者大雅堂義寬至リ請フ  
 テ山陽ノ像ヲ寫ス山陽其上ニ題シテ曰ク「身  
 偃仰一室而心關百姓之得失不恤己鹽壘而愛人  
 家國嗟是何物迂拙男兒耶雖然焉知無念此迂拙  
 者之時乎」ト其自任スル此ノ如シ。

さいしゆんすゐ 頼春水

藝州侯ノ學職。名ハ惟寬、字ハ千秋、一ノ字ハ  
 伯栗、又霞崖、拙榮、和亭ノ號アリ。彌太郎ト  
 稱ス。藝州竹原ノ人。父チ亭翁ト云フ。幼ニシ

テ學ヲ好ム郡村良師ニ乏シ然レ共資性敏悟能  
 シ詩ヲ賦ス。年十七。京師ニ遊シテ諸名士ノ間  
 ニ周旋ス既ニ歸ツテ又大坂ニ至リ遂ニ留リ徒  
 ニ授ケテ生チ爲ス時ニ年十九是時ニ當ツテ片  
 山孝秩、高子琴、岡公翼等ノ諸名士詩社ヲ府下  
 ニ結ビ號シテ混沌社ト曰フ春水之ニ入り詩豪  
 ナ以テ稱セラル既ニシテ洛閩ノ書ヲ得テ之ヲ  
 悅ブ乃チ奮然其故ト習フ所ヲ棄テテ尾藤三洲  
 古賀精里ト相與ニ程朱ノ學ヲ講究ス又中井竹  
 山兄弟、西山拙齋、菅茶山ト互ニ往來シテ益切  
 瑳業ヲ攻ム天明辛丑ノ冬本藩辟シテ儒員トス  
 是時藝藩初メテ學校ヲ建ツ春水爲メニ學制ヲ  
 定ム癸卯ノ秋江都ニ赴キテ世子ノ伴讀トナル  
 訓迪方チ得世子封ヲ襲グニ及ンテ東觀往來必  
 ズ從フ春水ハシメ仕ヘシ時俸三十口ナリ後累



増シテ三百石ニ至ル文化十三年二月十九日歿  
 年七十一春水風格峻整妻子ト雖モ未ダ嘗テ  
 其情容アルヲ見ズ其人ニ於ケル邪ヲ憎ミ惡ヲ  
 嫉ム往往其非ヲ面斥ス而シテ恩義自カラ能ク  
 人ニ結ブ始メ柴栗山、尾藤二洲、古賀精里ノ三  
 博士相踵メテ登庸セラレ業ヲ東都ニ倡フ而シ  
 テ春水中井竹山、西山拙齋ノ諸子ト聲氣相應  
 シテ異ヲ攘ヒ正ヲ衛ル是ニ於テ儒風一新シテ  
 世ヤヤ程朱ヲ崇ブヲ知ルソノ東都ニ在ルヤ嘗  
 テ幕命ヲ受ケ薩藩赤崎玄齡ト同シク書ヲ昌平  
 齋ニ講シ程朱ノ旨ヲ發揮シテ一時ヲ醒目ス傍  
 ラ詩ヲ嗜シム書ニ工ナリ子襄多病ヲ以テ孫元  
 協家ヲ繼グ。著書ハ「負劍志」、「師友志」、「一得  
 錄」、「在津紀事」、「在江紀事」、「竹原文集」、「春  
 水遺稿」ナド。

らみか  
 三樹三郎  
 京師ノ儒者。名ハ醇、字ハ子春、鴨尾ト號シ、  
 又ハ古狂生ト號ス。頼山陽ノ第三子。文政八  
 年京師三本木街ニ生ル。故ニ此ヲ稱アリ。マ  
 タ三樹ト號ス。幼ニシテ才藻穎悟骨相奇峻深  
 シ山陽ノ鍾愛ヲ受ク年甫メテ十七浪華ニ遊ビ  
 儒者後藤松蔭ノ門ニ入ル翌年江戸ニ遊ビ昌平  
 齋ニテ學術ヲ講究シ傍ラ佐藤一齋菊池五山梁  
 川星巖等ト交ヲ結ビ詩文ヲ精研ス居ルコト二  
 年去ツテ常野房總ノ間ニ游ブ初メ江戸ニ在ル  
 ヤ二三ノ生徒ト共ニ東台寛永寺ニ至ル其壯麗  
 ナ觀テ歎シテ曰ク寛永寺ハ徳川氏ノ創スル所  
 ニシテ壯麗觀ルベシト雖モ徳川氏ノ業タル朝  
 廷ヲ輕蔑シ列藩ノ膏血ヲ絞リ恣ニ華奢ヲ極ム  
 實ニ國家ノ奸賊ニシテ滔天ノ罪惡志士仁人ノ

惡ム所ナリト歸路醉ニ乗シ寺門ノ石燈籠ヲ蹴  
 倒ス燈籠ノ前面ニ葵章ヲ彫セリ乃チ曰ク葵章  
 ハ徳川氏ノ徽號ナレバ之ヲ蹂躪スルモ亦以テ  
 一時ノ快ヲ取ルニ足レリト傲然罵詈ス生徒等  
 之ヲ止ムルトモ肯ンゼズ終ニ劍ヲ抜イテ生徒  
 ナ逐フ幕吏之ヲ聞キ三樹ヲ追捕シ其妄狀ヲ責  
 メ三樹罪ヲ謝シ事轍ヲ解ク已ニシテ京師ニ歸  
 リ能越甲信ニ游ビ書畫會ヲ觀ル時ニ都下文墨  
 フ諸家モ亦タ多少來集ス即チ宴ヲ開キ共ニ酒  
 ナ酌ム宴酣ニシテ池内陶所ト韓愈藍關ノ詩ヲ  
 論ズ陶所ノ説シ處三樹ト合ハズ三樹之ヲ嘗リ  
 起ツテ陶所ノ面ニ唾ス陶所怒ツテ三樹ヲ仆サ  
 シトス三樹刀ヲ拔イテ之ヲ邀フ陶所亦刀ヲ拔  
 キ爭鬪數合座客狼狽或ハ之ヲ止メテ罷ム三樹  
 屢拔刀ス然レドモ未ダ嘗テ人ヲ傷ツケズ世ニ

之ヲ猫ノ尾ト云フ其輕佻ニシテ爲スコト無キ  
 ナ譏ルナリ此時ニ當リ米國ノ使節相州浦賀ニ  
 來リ書ヲ幕府ニ呈シ和親貿易ヲ請フ幕府其措  
 置ヲ失ヒ殆ド國家ノ大典ヲ破ル三樹乃チ尊攘  
 ノ大志ヲ抱キ翕然トシテ醉罵劍戲ノ陋習ヲ改  
 メ深沈若實恰モ身ヲ換ヘ人ヲ異ニスルガ如シ  
 時ニ梁川星巖江戸ヨリ移ツテ京師ニ住ス乃チ  
 之ト密ニ尊攘ノ大策ヲ議シ交リテ諸藩ノ壯士  
 ニ結ブ梅田雲濱之ヲ聞キ三樹ヲ迎ヘテ共ニソ  
 ノ謀畧ヲ策シ終ニ攘夷ノ詔令ヲ水戸ニ賜フノ  
 議ヲ起ス三樹與ツテ力ヲ盡クシ周旋百方大計  
 殆ド成ル是ヨリサキ彦根ノ藩士長野主膳京師  
 ニ在リ三樹ノ密議ヲ牒知シ竊ニ之ヲ藩主井伊  
 氏ニ告ク井伊氏時ニ幕府ノ元老タリ乃チ閭老  
 間部詮勝ヲ京師ニ差シ三樹等三十人ヲ捕縛シ



青蓮院宮及ヒ近衛左大臣以下公卿數人ヲ幽セシム時ニ安政五年五月ナリ三樹京師ノ獄ニ在ルコト數月是年十二月幕府命チ下マシ三樹等二十餘人ヲ江戸ニ檻送セシム三樹已ニ江戸ニ到ル幕府命シテ松山藩邸ノ獄舎ニ幽シ屢ハ評定所ニ召シテ其罪狀ヲ糾問ス三樹答ヘテ曰ク吾嘗テ尊攘ノ大志ヲ抱キ一ニ同志トソノ策ヲ議ス今ニシテ尊攘ノ策ヲ議セザルモノハ國家ノ奸賊夷狄ノ醜奴ノニ吾レ少小ニシテ父母ノ教ヲ受ク豈ニ國賊夷狄ト爲ルヲ欲セシヤ其他毫モ與リ知ルコトナシト幕吏乃チ一橋刑部卿ヲ西城ニ納レント謀ルノ事由ヲ問フ三樹之ヲ知ラズト答フ幕吏モ強ヒテ責問セズ三樹久シク獄ニ在ツテ積鬱無聊乃チ同獄ノ高橋兵部權大輔伊丹藏人山田勘解由ト共ニ日ニ詩歌ヲ

話ス獄舎ノ番士等其話ヲ筆記シ名ヅケテ「骨董集」ト云フ已ニシテ幕議漸ク決シ三樹ヲ死刑ニ處ス其刑ニ臨ムヤ從容トシテ詩歌各一首ヲ賦ス其詩ニ曰ク「排雲手欲掃妖氛失脚墜來江戶城井底痴蛙過憂慮海邊大月欠高明身臨湯鑊家無信夢破鯨濤劍有聲風雨他年苔石面誰題日本古狂生」ソノ歌ニ曰ク「まかる身の君が代おきふ真心の深からざりしなるらゝん」ト。終ニ刑ニ就イテ江戸ニ死ス。時ニ安政六年十月七日。

りうさる 龍草廬  
平安ノ儒者。名ハ公美、字ハ君玉、中頃名ヲ元亮字ヲ子明ト更ム後再ビ舊號ニ復ス草廬ハ其

號又竹隱、松菊、吳竹翁、明明窓、綠蘿洞等ノ號アリ。彦二郎ト稱ス。後衛門ト更ム。山城伏水ノ人。寛政四年二月二日歿。年七十九。著書ハ「毛詩證」、「論語詮」、「名詮」、「曲詮」、「貴貞志」、「日本詩剛」、「仄韻礎」、「唐詩材」、「辭略」、「伏水志」、「舊葉」、「吳竹翁談」、「海人棄草」、「南遊草」、「龍氏筆乘」、「草廬詩集」、「同文集」、「同尺牘集」、「同和歌集」、「同和文集」、「生駒山人傳」、「大塔王傳」、「節儉論」、「大和河内道之記」、「毛詩徵」、「論語闕」、「峰のまゝかま」、「木ここの花」、「帝京編」、「金蘭詩集」等。

りうさる 隆達  
文祿年中ノ人。今ノ隆達節ヲ謳ヒ出シタ人。

る

るり 瑠璃

湯淺英ノ妻。本姓瀧氏。備前ノ人。祖父如次、父陳良、皆國守ニ仕ヘテ吏事ニ任ズ。瑠璃生レテ後チ父陳良妻孥ヲ携ヘテ江戸ニ來リ居ルコト數歲ニシテ國ニ歸ル瑠璃時ニ八歳經歷スル所ノ山川名地一トシテ聞カザルハナシ頗ル能ク之ヲ諳記ス年二十八湯淺英ニ適ス敬事スル事君ニ事フルガ如シ英モ亦待ツコト賓ノ如シ英目附トナルニ迄ンテ數江戸ニ往ク瑠璃其室ニ留ツテ門内ノ事大小皆法度アリ英老免シテ後チ疾ニ寢ヌ瑠璃衣帶ヲ解カズ扶持抑搔唯ダ其欲スル所心ヲ盡サザルナシ凡ソ六年ニ日ノ如シ英死シテ瑠璃モ亦老ス子アリ元禎ト曰フ未ダ娶ラズ瑠璃事ヲ視ルコト故ノ如シ暇アレハ則チ女史ヲ讀ミ和歌ヲ誦シ或時ハ箏ヲ鼓



シテ以テ自ラ娛シム淫樂ヲ好マズ佛事ニ詣ラズ僧尼巫祝ヲ近ツケズ人ノ窮スルヲ聞ケハ親疎トナシ之ヲ恤ム其弟ニ出デテ中村氏ヲ繼グ者アリ家貧ニ妻死シテ三子少ナリ瑠璃コレヲ懸レミ取ツテ之ヲ養フ皆成立ニ至ル元順ヲ愛スト雖モ未ダ嘗テ姑息ヲ以テセズ其過アルニ及ビテハ即チ少シモ假貸セズ性圖書ヲ好ミ病中モ猶ホ貞原益軒ノ岐祖紀行ヲ床上ニ置ク其少時經ル所ナルヲ以テナリ寛保元年歿。時二年七十二。

れ

れいせい・ためみつ 冷泉爲滿

和歌ヲ能クセリ右近衛中將從四位上ニ叙セラレ同七年違勅ノ罪ニヨツテ黜ケラレ後チ赦シ

遇ツテ參議ヲ歷中納言正三位ニ至ル慶長十九年駿府ニ赴キ徳川家康ニ謁見シタル時家康就イテ「古今和歌集」ヲ秘説ヲ聞キシコトアリ。後チ權大納言ニ任セラレ。元和五年卒。年六十一歳。

わ

とかのまへ 和歌前

京都ノ白拍子。京極宗輔ノ女。鳥羽帝ノ時、島千載ト共ニ始メテ白拍子ノ舞ヲ制ス。又箏ノ巧手ナリ。

とまろ・よききけ 脇屋義助

次郎ト稱ス。新田義貞ノ弟。北條高時ノ兵ヲ發シテ義貞ヲ撃ツヤ衆皆拒計ヲ持シテ紛紜一ナラズ義助ノ言ニ從ヒ遂ニ功ヲ濟スコトヲ得タ

リ兵庫助トナル建武元年義貞ト京師入ツテ武者所トナリ駿河ノ守護ヲ領ス義貞東足利尊氏ヲ討ツ義助別ニ尊良親王ヲ奉シ兵七千ニ將トシテ尊氏ト竹下ニ戰フ前鋒利ヲ失ヒ敵勝ニ乗ラテ直ニ中堅ヲ衝ク義助乃チ兵ヲ進メテ之ニ當リ戰酣ニシテ退ク子義治適敵中ニ陥ル義助復馳セ入ツテ之ヲ取ル奮戰愈勵ム殺ス所算無し既ニシテ大友貞載鹽冶高貞出デテ敵ニ降リ敵勢益振フ義助支フルコト能ハズ親王ヲ奉シテ西ス敵兵之ヲ追ヒ且ツ走リ義貞ニ會シテ京師ニ還ル明年尊氏京師ヲ犯ス義助兵七千ヲ率ヒテ山崎ニ拒ク戰ツテ利アラズ乃義貞ト引イテ還リ駕ニ延曆寺ニ從フ既ニシテ義貞ト園城寺ヲ攻メテ之ヲ破リ京師ニ入ツテ諸將ト將軍塚ニ陣ス敵將高師泰之ヲ攻ム義助弓手ヲ出シ

林ヲ蔽ヒテ亂射セシム敵遂巡シテ進マズ乃チ兵ヲ縱テ衝イテ之ヲ破ル因ツテ諸軍ト合撃シテ尊氏ヲ敗ル尊氏遂ニ西ニ奔ル功ヲ以テ右衛門佐ニ拜シ昇殿ヲ聽サル又義貞ニ從ツテ赤松則村ヲ白旗城ニ圍ム之ヲ久シウシテ拔ク能ハズ義助義貞ヲ諫メ兵二万ヲ遣ハシ往イテ船阪ヲ攻ム然レドモ山險ニシテ守備嚴ナリ仰イテ日ヲ終フ會見島高德兵ヲ熊山ニ揚ケ期ヲ約シテ夾ミ攻ム義助軍ヲ梨原ニ出ダシテ諸將ヲ部分ス畑時能等潛行シテ險ヲ過ギ徑ニ三石ノ西ニ出デ火ヲ放ツテ進ム三石城兵寡ク出デテ拒クコト能ハズ宇都宮公綱等兵五千ヲ以テ船阪ヲ攻ム船阪腹背ニ敵ヲ受ケテ計ノ出ヅル所ナシ時能公綱ト夾ミテ之ヲ攻メ遂ニ其城ヲ拔ク江田行經入ツテ美作ヲ畧シ大井田氏經進ミテ



福山城ニ據リ義助留ツテ三石城ヲ攻ム尊氏水陸ヨリ並ビ進ミ攻メテ福山城ヲ陷ル義貞乃チ義助ヲ招キ與ニ俱ニ還ツテ兵庫ニ軍ス軍敗ル車駕再ビ延曆寺ニ幸ス義助東阪ヲ守ル敵城ニ薄リ多ク草ヲ掘ビテ壕ヲ填メ以テ城ヲ焚カント欲ス城中弓矢齊シク發シテ三千餘人ヲ射殺ス敵陣擾亂シ楯ヲ蔽ヒテ矢ヲ避ク義助之ヲ瞰テ諸將ト門ヲ開イテ突出ス白鳥ノ陸軍ソノ左ヲ衝キ潮上ノ舟軍其右ヲ射ル敵大ニ敗退シ營ヲ守ツテ復タ出デズ東西阪ノ軍並ビ出デテ敵ヲ擊ツニ及ンテ義助兵五千ニ將トシテ五百營ヲ焚イテ奮戰ス敵兵大ニ敗ラル又兵二千ヲ率テ佐佐木高氏ヲ志那渡ニ攻メ利アラズシテ還ル義貞ノ北行スルヤ義助ヲシテ兵千餘人ニ將トシ杣山ニ據ツテ兵ヲ招キ後援ヲ爲サシム

瓜生保領並ニ出迎フ稿供豐厚ナリ既ニシテ叛シテ敵ニ附キ門ヲ閉テテ納レズ保ノ弟僧義鑑夜義助ニ見エテ曰ク請フ貴息ヲ留メヨ奉シテ金崎ノ援ヲ爲サント義助乃チ子義治ヲ以テ之ニ屬シテ曰ク死生ハ唯子ノ爲ス所ナリト明日金崎ニ返ル士卒道ヨリ亡ゲテ略略盡ク從フ者僅ニ十六人夜深更ニ山寺ニ抵ル行行樵人ニ問ヒ敵兵大ニ集リテ輒ク入ルヘカラザルヲ知リ乃チ各帶テ解キ樹ニ繫ギテ疑兵ト爲シ曉ニ乗シ馳セテ敵ノ圍ミヲ犯シ大ニ呼ンテ曰ク援兵二萬騎至ルト敵兵山中ノ旗幟ヲ顧視シテ大ニ驚キ以テ援兵至ルト爲シ圍ヲ釋テ潰エ走ル乃チ城ニ入ルヲ得タリ既ニシテ復タ來リ圍ム義助義貞ニ從ツテ潛ニ杣山ニ還ル金崎尋テ陷ル義貞ノ再ビ杣山城ニ起ル平泉寺ノ衆徒三峰ニ

據ツテ之ニ應シ將領ヲ置カント請フ因ツテ義助ヲ遣ハシ往イテ其衆ヲ統ヘシム義助將士百餘人ヲ從ヘテ營城ヲ鯖江ニ視ル足利高經ノ將細川某等覘ツテ之ヲ知リ兵五百ヲ以テ奄テ至ツテ之ヲ圍ム義助奮擊ス敵軍水ヲ濟ツテ卻ク諸將之ヲ追ハント欲ス義助聽カズ火ヲ舉ゲテ敵ヲ諸營ニ求ム是ニ於テ官軍煙ヲ望ミテ馳セテ遂ニ進ンテ府城ヲ取ル帝義貞ニ詔シテ男山ヲ救ハシム義貞乃チ義助ヲシテ二萬人ニ將トシテ之ニ赴カシム敦賀ニ至ツテ男山陷ルト聞キ乃引キ還ル是歲義貞高經ヲ足羽城ニ攻メテ戰歿ス義助乃チ兵ヲ引イテ石丸城ニ還ル城中ニアル者僅ニ二千人ハカリ乃チ府ニ還ル明年秋諸軍ヲ召集シテ足羽ヲ取ラント圍ル畑時能等攻メテ敵壘ヲ拔ク數十義助躬ヲ兵二千ヲ

率テ敵ヲ攻ムルコト三日夜間ニ壘十七ヲ下シ將七人ヲ虜ニシ卒五百餘人ヲ斬リ遂ニ足羽ニ薄ル高經懼レ城ヲ焚イテ夜遁ル後村上帝登極シ義助ニ詔シテ曰ク軍國ノ事ハ便宜施行シ先決後奏一ニ義貞ノ故事ノ如クヌ可シ……ト足利尊氏兵ヲ遣ハシテ來リ攻ム義助敗レテ美濃ニ奔リ根尾城ヲ保ツ土岐頼遠等ノ爲メニ攻メラル又敗ル乃チ衆七十三人ト微服シテ尾張熱田ニ往キ藤原昌能ニ依ツテ波津碕城ニ留マラルコト十餘日稍散亡ヲ集メテ潛ニ吉野ニ詣ル帝爲メニ涙ヲ掩ツテ勞獎之ヲ久シウス翌日義助ニ一級ヲ加ヘテ刑部卿ニ拜ス興國元年春伊豫ノ人兵ヲ起シテ統帥ヲ奏請ス廷讓義助ヲシテ往カシム乃チ義助ニ命ヲ將トナシ之ヲ四國ニ遣ハス西國ノ軍事ハ悉ク其節制ニ出ツ綠



道ノ官軍多シ戰艦資糧器械ヲ具ヘ送ツテ今張  
浦ニ抵ル伊豫國司藤原有資、守護大館氏明、土  
居、得能、土肥、河田、武市、日吉氏等大ニ聲勢  
ヲ得官軍復々振フ敵風ヲ望ミ十餘城ヲ棄テ逃  
ル義助入ッテ國府ニ居ル。五月病歿。

わけのきまゝ 和氣清麻呂

備前藤野郡ノ人。其先ハ鐸石別命ヨリ出ツ。鐸  
石別命ノ曾孫弟彦王應神帝ノ時軍功ヲ以テ吉  
備磐梨縣ヲ賜フ因ツテ焉ニ家ス清麻呂舊姓ハ  
磐梨別公後ヲ藤野別真人ト改ム從六位上ニ叙  
セラレ右兵衛少尉ヲリ神護中勳六等ヲ授ラレ  
改メテ吉備野別真人ト賜ヒ從五位下ニ進ミ近  
衛將監ニ遷リ封五十戸ヲ賜フ景雲二年改メテ  
姓ヲ輔治真人ト賜ヒ因幡員外介ト爲ル清麻呂  
性抗直帝モト宇佐神ヲ敬スル生ニ事フルガ如

ク其憑語スル所事トシテ從ハザルハ無シ僧道  
鏡ヲ寵シテ法王ト爲スニ及ビテ太宰ノ主神中  
臣習宜阿曾麻呂旨ヲ希ヒ奏シテ曰ク八幡神ノ  
教言ニ道鏡ヲシテ皇位ニ即カシメハ則チ天下  
太平ナラント是ニ於テ帝清麻呂ヲ御牀下ニ召  
シテ曰ク昨夜ノ夢ニ八幡ノ神使來ッテ曰ク大  
神汝ノ姉尼法均ニ憑ッテ言フ所アラント欲ス  
汝宜シク法均ニ代ツテ往クベシト發スルニ臨  
ミ道鏡目ヲ噴ラシ劍ヲ接シテ清麻呂ニ謂ツテ  
曰ク太神我ヲシテ位ニ即カシメントス使ヲ請  
フ所以ハ蓋シ此ガ爲メナラン汝宇佐ニ詣ツテ  
神教ヲ奉リ我ヲシテ欲スル所ヲ得セシメハ則  
チ汝ニ太政大臣ヲ授ケ委ヌルニ國政ヲ以テセ  
ン若シ我言ニ違ハハ則チ重刑ニ處セント時ニ  
路豐永ト云フ者アリ清麻呂ニ謂ツテ曰ク道鏡

天位ニ登ラハ吾何ノ面目アツテ之ニ事ヘンヤ  
吾將ニ二三子ト伯夷ニ從ツテ游ハント清麻呂  
死ヲ誓ツテ往ク神宮ニ詣ツテ教ヲ請フ神憑語  
シテ曰ク我國家ハ開闢以來君臣ノ分定マレリ  
臣ヲ以テ君ト爲ス未ダ之アラザルナリ天日嗣  
ハ必ズ皇胤ヲ立テテ無道ノ人ハ宜シク迅ニ掃  
蕩スベシト清麻呂還ツテ其言ノ如ク奏ス道鏡  
大ニ怒ツテ清麻呂ノ本官ヲ解キ出シテ因幡員  
外介ト爲ス未ダ任ニ赴カザルニツノ姉法均ト  
神教ヲ矯メ朝廷ヲ欺罔スト追咎シテ姓名ヲ別  
部穰麻呂ト改メ大隅ニ流ス道鏡人ヲシテ清麻  
呂ヲ道ニ殺サシム俄ニ雷雨晦冥シテ命ヲ受ク  
ル者猶豫ス會敕使來リ赦ス參議藤原百川其忠  
烈ヲ愍シテ備後ノ封二十戸ヲ割イテ之ニ與フ  
明年三月清麻呂謫所ヨリ上書シテ再ビ太神ノ

憑語大小三條ヲ奏ス是歲光仁帝踐祚シ道鏡  
下野ニ竄シ清麻呂ノ姓名ヲ復シ之ヲ召還ス明  
年本位ヲ復シ播磨員外介ト爲シ豐前守ニ遷ス  
是ヨリサキ宇佐八幡ノ宮司等屢神語ニ託シテ  
妖言ヲ造爲ス前後ノ國司一トシテ問フ所ナシ  
清麻呂太宰府ノ監典主典各一人ト部三人ト神  
宮ニ詣リ龜ヲ灼イテ神語ノ實否ヲトヒ府ニ請  
フテ黜陟ヲ行ハシム既ニシテ清麻呂廣蟲ニ並  
ニ姓ヲ和氣朝臣ト賜フ清麻呂ノ先塋ハ備前ニ  
在リ貶竄ニ遭フノ後チ人其木ヲ伐ル敕還セラ  
ルルニ及ンテ上疑シテ狀ヲ陳ズ詔シテ清麻呂  
ヲ以テ美作備前兩國造ト爲ス天應元年從四位  
下ニ進ム延曆中攝津大夫ト爲リ從四位上ニ叙  
セラレ民部大輔中宮大夫ヲ兼ヌ尋イデ正四位  
下ニ進ム時ニ長岡ノ新都ヲ營ス十歳ニシテ成



ラズ費ス所賞カラズ清麻呂密ニ奏請シ遊獵ニ  
託シテ葛野ノ地ヲ相シ以テ都ヲ遷ス十五年從  
三位ニ進ム未ダ幾クナラズ骸骨ヲ乞フ許サレ  
大功田二十町ヲ賜ヒ以テ子孫ニ傳ヘシム。十  
八年卒。年六十七。正三位ヲ贈ラル。

清麻呂通曉スル所多ク故事ニ明ギラカナリ  
民部省例二十卷ヲ撰ス。又中宮ノ教ヲ奉シ、  
「和氏譜」ヲ撰シテ之上ル。帝甚マ之ヲ善ト  
ス。嘗テ田一百町ヲ備前ニ墾シ、永ク賑給ノ  
資ト爲ス。郷民之ニ頼ル。

つねはる 鷲尾經春

三郎ト稱ス。義經ノ臣。初メ義經ノ鶴越ニ向  
フヤ路險ニ夜黒ク辨慶ヲシテ郷導ヲ索メシム  
辨慶火光ヲ認メ一ノ人家ヲ得テ翁媪ノ對坐ス  
ルヲ見告グルニ故ヲ以テ翁曰ク小人獵ヲ以

テ業トシ山路ヲ諳知ス而シテ今老イタリ一兒  
アリ膽氣用ユベシト呼ビ起シテ辨慶ニ附シ義  
經ニ謁セシム義經火ヲ執ツテ之ヲ視ルニ長身  
高顔獵弓矢ヲ持ス其齡ヲ問フ曰ク十七ト義經  
爲メニ之ニ冠シ姓名ヲ命シテ鷲尾經春ト曰フ  
鎧仗ヲ給シテ以テ嚮導トス經春人ト爲リ勇猛  
一谷、矢島、壇浦ノ諸戰ニ皆功アリ後ヲ義經ニ  
從ツテ奥州ニ走リ藤原秀衡ニ依ル衣川ノ役ニ  
奮闘激戰數人ヲ斃シテ死ス。時ニ年二十二。  
或ハ云フ義經ト俱ニ蝦夷ニ遁ルト。

おたけんしう 和田賢秀

幼ニシテ髮ヲ薙ギ、新發意ト稱ス。正平中楠木  
正行ニ從ヒ細川顯氏等ト住吉ニ戰フ賢秀力戰  
シテ追ヒ山名兼義ヲ斬ル高師直來リ攻ムルニ  
及ビ賢秀弟正朝等ト正行ニ從ヒ吉野行宮ニ詣

ツテ拜辭シ同志ノ士百四十餘人ト俱ニ死ヲ誓  
ツテ進ミ大ニ四條畷ニ戰フ正行ノ部下湯淺太  
郎左衛門衛ニ降ツテ師直ノ軍ニ在リ賢秀ヲ視  
テ後ヨリ其足ヲ斬ツテ之ヲ踏シ就イテ其首ヲ  
斬ル賢秀怒ツテ湯淺ヲ視ル眼光炬ノ如シ死シ  
テ猶瞑セズ湯淺疾ヲ得俯仰スルニ賢秀眼ヲ張  
リテ己ヲ瞋ルヲ視ル七日ヲ間テテ死ス。

おたなべんさん 渡邊華山

名定靜、字子安、又伯登、通稱ハ登。全樂堂、昨  
非居士、金毘居、隨安居士等ノ號アリ。世世三  
宅土佐守ニ仕ヘテ微祿ヲ食ム。華山寛政五年  
江戸邸ニ生ル少ニシテ大志アリ藩儒鷹見爽鳩  
ニ就學ス頗ル書史ニ涉獵ス兼テ洋學ニ通ジ  
又書ヲ善ク一日友人某來談シテ曰ク子儒ヲ  
ラント欲ス誠ニ善シ然リト雖モ今ヤ子貧ナリ

儒ヲ學バンヨリハ寧ロ書ヲ學ンダ早ク黄金ヲ  
得ルノ勝ルニ如カズト華山性至孝父母ニ事フ  
ル甚努ム友人ノ言ヲ聞キ感シテ曰ク儒ヲ學ン  
ダ天下ニ爲スアラントス父母ノ飢寒ヲ如何セ  
ン姑ク憾ヲ飲ンテ畫ニ從事セント乃宋紫山金  
子金陵谷文晁ノ諸家ニ從ツテ書法ヲ學ブ家貧  
ニシテ良紙ヲ贖フ能ハズ日ニ錢十六文乃至廿  
四文ヲ投ジテ美濃紙ヲ買ヒ以テ書ヲ寫ス晚ニ  
諸派ヲ打衷シテ古法ニ法ツテ一家ヲ成ス精巧  
人ニ冠タリ世大ニ之ヲ珍重ス華山好ミテ墨竹  
ヲ作ル詩ヲ題シテ曰ク「鄭老書蘭不畫土、有爲  
者必有不爲、醉來寫竹似蘆葉、不作鴨波無節  
枝」ト。常ニ曰ク書ヲ賣ツテ自ラ給ス是レ止  
ムヲ得ザルナリ一日書ヲ作ラザレバ一日ノ窮  
ヲ益ス一身ノ窮ハ亦忍ブヘシ父母妻弟ノ困窮



ナ奈何セント又佐藤一齋ニ就キ文學ヲ修ム天  
保三年ノ夏祿百石ヲ加ヘ年寄格ニ進ム華山心  
ヲ民政ニ用ユ是ニ至ツテ治救スル所多シ又田  
原沿海ノ地方ヲ經歷シ海防ノ忽ニスベカラザ  
ルヲ察シ海外諸國ノ旗章及軍艦ノ圖ヲ作ツテ  
之ヲ沿海ノ戍吏ニ示ス蓋シ緩急ニ備ヘシメン  
トスルナリ既ニシテ江戸ニ歸リ益蘭學ヲ修メ  
西洋ノ事情ヲ講究スルヲ力ム而シテ事務執掌  
力ヲ洋學ニ專ニスル能ハザルヲ憂フ時ニ都下  
ノ名士尙齒會ノ舉アリ天保九年十月十五日ヲ  
期トナス華山又約ス華山ノ友高野瑞阜ノ門人  
内田彌太郎與村喜三郎ト云フ者アリ共ニ幕府  
ノ小吏ナリ才學アリ算數ニ通ズ喜三郎我が國  
ノ航海術未ダ開ケズ往住往船ヲ覆ヘシ人ヲ傷フ  
コトアルヲ憂ヒ泰西ノ航海術ヲ攻メント欲ス

新ニ經緯器ヲ製ス將ニ尙齒會ニ出シ衆評ヲ博  
シテ而シテ幕府ニ獻セントス是日齋ヲシテ瑞  
阜ヲ訪ヒ與ニ俱ニ抵ル會中幕吏芳賀市三郎ト  
云フ者アリ近ゴロ巡見使トナリ上野下野信濃  
ノ諸州ヲ歴テ歸ル夜ニ及ンデ衆談時事ニ及テ  
聞人事ヲ長崎ニ訴フ市三郎密ニ其書ヲ寫シテ  
懷ニス乃チ之ヲ出シテ坐ニ示シ且ツ語ツテ曰  
ク其書ノ畧ニ曰フ長崎ニ在ル蘭國ノ甲比丹謹  
ンテ鎮臺久世加賀守公ノ執事ニ白ス今英船  
「モリソン」日本ノ漂民七名ヲ護送シテ日本ニ  
至ル長崎ヲ經ズシテ直ニ浦賀ニ至ル實ハ事ニ  
託シテ互市ヲ請フナリト鎮臺之ヲ幕府ニ呈ス  
聞老水野越前守忠邦謂フ宜シク文化年中魯使  
「レザ」ノツラヒヲ逐フノ例ニ倣フベシト評定所  
亦議シテ曰ク英人勢猖獗妄ニ互市ヲ爲スニ托

シテ妖教ヲ播傳セント謀ル宜シク之ヲ遠ザク  
ヘシ今又漂民ヲ送ルト稱シテ都城接近ノ地ニ  
來ラントス其意測ルベカラズ小蟲ヲ濟ハント  
欲シテ大蟲ヲ殺スハ策ノ得タルモノニアラズ  
漂民ヲ救ハント欲シテ億兆ヲ傷フ勿レ宜シク  
一舉シテ之ヲ驅逐センノミト華山之ヲ聞イテ  
曰ク吾少ニシテ長崎ニ在リ蘭人ニ聞ク所アリ  
聞クガ如クンバ今回英國ノ使「モリソン」ハ彼  
ノ國有名ノ士ナリ其著書已ニ我が國ニ舶來シ  
現ニ官庫ニ藏ム今彼來ル其人ト爲リ「レザ」ノ  
ツラヒノ比ニアラズ而シテ幕府外國ノ事情ヲ  
詳カニセズ英人ヲ海寇視ス彼萬里ノ風波ヲ冒  
シテ來ル之ヲ攘ハハ怨ヲ結ブコト必セリ吾輩  
外國ノ書ヲ講ズル者ハ今日ノ爲ナリ當ニ書ヲ  
著シテ世人ノ迷夢ヲ覺マヌベシト乃チ「鸞舌

小記「慎機論」「善論私記」等ヲ作ル而シテ  
未ダ人ニ示サザルナリ瑞阜亦市三郎ノ言ニ據  
リ「夢物語」ヲ著シ甲乙ノ問答ヲ設ケ夢ニ託シ  
テ所見ヲ述ベ專ラ攘夷ノ得策ニ非ザルヲ論ズ  
亦世ニ公ニセザルナリ嘗テ竊ニ同志ニ示ス而  
シテニ狗虛ヲ吠ヘテ萬犬實ヲ傳ヘ其書傳播シ  
テ之ヲ續成スル者アルニ至ル時ニ佐渡奉行川  
路左衛門將聖謨伊豆ノ代官江川太郎左衛門等  
幕府ニ上書シテ攘夷ヲ諫ム會幕府監察鳥井耀  
藏ニ命ジテ近海ノ船舶砲臺ヲ巡視セシム太郎  
左衛門事ニ熟スルヲ以テ之ニ副タラシム耀藏  
平生洋學ヲ惡ンテ曰ク彼輩妄ニ西洋ヲ尊信シ  
彼ノ強ヲ唱ヘ幕府ヲ恐喝ス今ニ於テ「夢物語」  
ノ著者ヲ誅シ以テ後ヲ懲スニ如カズト太郎左  
衛門華山等ト交リ洋學ヲ善クス亦慷慨ノ士ナ



リ故ニ權藏ト合ハズ病ト稱シテ出デ幕府ノ  
 吏小笠原貢藏ト云フ者アリ嘗テ蝦夷ノ戌中ニ  
 アリ粗外國ノ事ヲ知ル權藏乃チ召シテ房總ノ  
 海岸ヲ測量セシム其術鹵莽誤多シ太郎左衛門  
 乃チ彌太郎喜三郎ヲ召シ己ニ代ツテ之ヲ測ラ  
 シム貢藏之ヲ怒リ喜三郎ヲ權藏ニ讒ス權藏乃  
 之ヲ斥ク彌太郎獨リ猶ホ事ヲ執ル其數術ニ精  
 シキヲ以テ測量ニ練レズト雖電勉從事シ二月  
 ナリテ業ヲ竣フ後數歲洋學ノ徒小笠原島ヲ拓  
 キ物産ヲ殖シテ以テ國用ニ供セント欲シ將ニ  
 之ヲ幕府ニ請ハントスル者アリ花井虎一ト云  
 フ者ハ嘗テ貢藏ト同僚タリ貢藏是ヲ以テ相善  
 シ乃虎一ヲ誘ヒテ曰ク子養學ノ徒ヲ劾セハ重  
 ク用キラレント虎一大ニ喜ビ權藏ニ告ゲテ曰  
 ク近年養學漸盛シ島津黒田三宅兩松平ノ諸侯

下曾根金三郎江川太郎衛門羽倉外記ノ諸旗士  
 古賀小太郎遠藤勝助立原甚太郎大内五左衛門  
 望月毛莊司郡平渡邊華山齋藤八郎兵衛本木道  
 平ノ諸儒ヨリ浮屠ニ於テハ常陸ノ無量壽寺市  
 人ニ於テハ本石町ノ驛舎彦兵衛及ビ樺工秀三  
 等ニ至ルマデ相屬シテ奥村喜三郎之ガ村保  
 リ無人島ヲ開クト稱シテ竊ニ外國ニ通セント  
 謀ル其舉近キニ在リ事遷延セハ禍害測ラレズ  
 宜シク今ニ及ンデ之ヲ誅シ以テ禍原ヲ絶タシ  
 ト權藏之ヲ水野忠邦ニ白ス忠邦聞イテ大ニ驚  
 キ吏ニ命ジテ此輩ヲ逮捕セシム華山亦執ヘラ  
 レテ獄ニ繋ガル幕府反逆ヲ以テ之ヲ鞠問ス瑞  
 阜華山實ニ彦兵衛等ヲ誹ラズ江川羽倉奥村モ  
 亦開島ノ議ニ關セズ吏夢物語ノ事ヲ瑞阜ニ責  
 ム瑞阜答フルニ道路ノ説ニ據ルヲ以テ市三

郎ノ事ヲ言ハズ天保十年十二月幕府瑞阜ヲ處  
 スルニ終身禁獄ヲ以テス華山ハ書ヲ著シ時政  
 ナ誹謗スルニ坐シ處スルニ死罪ヲ以テス而シ  
 テ其款歲民ヲ恤賑スルヲ以テ死一等ヲ減ズ喜  
 三郎太郎左衛門外記ハ則免サルヲ得タリ而  
 シテ花井虎一ハ浮言ヲ皇張スルニ坐シテ禁錮  
 セラル華山後宥サレテ國ニ幽セラル世人皆以  
 テ冤トナス華山幽中ニ在ツテ怨色無シ嘗テ和  
 歌ヲ詠シテ曰ク「とり積みて世を炭竈の煙た  
 きは己が焚き添ふ薪なりけり」ト數書ヲ裁シ  
 テ朋友ト贈答ス幕府幽囚ノ妄ニ書翰ヲ往復ス  
 ルヲ藩侯ニ讓ム侯怠弛ヲ以テ譴ヲ得華山曰ク  
 侯吾ヲ以テ罪ヲ幕府ニ得吾何ツ生ヲ偷ムヲセ  
 ント即チ自殺ス。年四十九。時ニ天保十二年  
 十月十一日。

源頼光四天王ノ一ナリ驍勇ヲ以テ名アリ祖仕  
 ハ武藏守ニ任セラレ父宛ハ箕田源次ト稱ス綱  
 源敦ノ爲メニ子トシ養ハル敦ハ滿仲ノ婿ナリ  
 綱ノ養母攝津渡邊ニ居ル因ツテ渡邊ヲ以テ氏  
 トス鬼同丸ト云フ者アリ嘗テ事ヲ以テ頼光ヲ  
 怨ム野牛ヲ殺シ身ヲ其間ニ匿シ以テ之ヲ路ニ  
 要ス既ニシテ頼光至ル。綱等從フ頼光牛ノ羣  
 游スルヲ見、從士ヲシテ射サシム。綱斃牛ヲ射  
 テ之ニ中ツ。牛俄ニ起キ、鬼同丸現ル。頼光  
 之ヲ斬ル。

とだまきだけ 和田正武  
 和泉守。後醍醐帝崩ズルニ及ンテ族楠木正行  
 ト俱ニ入ツテ宿衛ス。正平十五年尼利義詮ノ  
 兵天野行宮ヲ犯ス正武正儀ト赤阪城ニ據ツテ



之ヲ拒ク敵來ツテ圍ム事數重正儀城ヲ棄テテ  
 金剛山ニ退カント欲ス正武肯ンゼズシテ曰ク  
 勝敗ハ戰ノ常ナリ戰ニ當ツテ退クハ勇士ノナ  
 サザル所我請フ兵ヲ率キテ之ヲ試ミン克クザ  
 レハ則チ退ク亦タ未ダ晩カラザルナリト乃チ  
 夜ニ乘シテ敵營ヲ襲フ克クテ兵ヲ斂メテ退ク  
 敵卒二人混シテ城中ニ入ル正武還ツテ衆ヲシ  
 テ軍號ヲ唱ヘテ坐作セシム敵卒應ゼズ乃チ執  
 ヘテ之ヲ殺ス夜正儀ト走ツテ金剛山ニ入り又  
 從ツテ佐木秀詮等ヲ攻メテ之ヲ斬ル十七年  
 又正儀ト攝津ノ守護代箕浦俊定ヲ撃ツテ之ヲ  
 走ラシ尋テ石塔頼房及ビ正儀ト赤松光範ヲ攻  
 メ進メテ湊川ニ至リ兵庫ノ民家ヲ燒ク光範多  
 部田城ニ據ツテ固ク守ル乃チ兵ヲ引イテ還ル  
 正儀後チ出テ足利義滿ニ降ル正武宗族ヲ率

キテ屢之ヲ攻ム敵天野行宮ニ迫ルニ及ンテ前  
 内大臣藤原隆俊ト之ヲ拒ク官軍終ニ利無シ帝  
 吉野ニ還幸ス。正武後ニ終ル所ヲ知ラズ。  
 わたやよきみ 和田泰純 附哲  
 御醫。名ハ璞、字ハ韞卿。享保三年歿。年六  
 十。著書ハ「導水鎖言」、「養嬰鎖言」、「方意  
 解」、「傷寒正文解」、「醫則」等。其子哲字ハ哲  
 郎、泰冲ト稱シ、默所ト號ス。本姓ハ中村氏。泰  
 純子無シ、養ツテ嗣ト爲ス。典藥寮ノ醫師ニ補  
 シ、能登介ニ叙セラル。著書ハ「醫學說」、「膜原  
 說」。載セテ名醫彙講ニ在リ。  
 わたよしもり 和田義盛  
 三浦義明ノ孫。父ハ義宗。長寛二年長狹城ヲ  
 攻メテ戰死ス。義盛和田ニ居ル。因ツテ氏ト  
 ス。小太郎ト稱ス。人トナリ豪勇多力善ク射ル

源頼朝石橋山ニ軍スルニ及ビ叔父義澄等ト之  
 ニ赴ク途ニ頼朝敗死スト聞キ軍ヲ回ス衆島山  
 重忠路ニ在ルヲ以テ問道ニ從ツテ之ヲ避ケン  
 ト欲ス義盛聽カズ徑チニ重忠ノ陣ヲ過ギリ大  
 イニ呼ンテ曰ク我レハ是レ和田小太郎義盛ナ  
 リ佐殿敗ルト聞イテ軍ヲ回ス子等能ク過メハ  
 則チ之ヲ過メヨト重忠大イニ怒リ追ツテ小坪  
 阪ニ及ブ義盛義澄ニ謂ツテ曰ク叔當ニ兵ヲ分  
 ツテ鎧磨ニ據リ陣ヲ結ビテ待ツベシ義盛阪ヲ  
 下リ敵ヲ逆ヘ敵兵少シク退カハ夾撃シテ之ヲ  
 破ラン利アラザレハ則チ退イテ叔ノ軍ト合セ  
 ン進退兩ナガラ利アリト義澄之ニ從フ重忠使  
 チ遣ハシテ戰ハントコトヲ請フ重忠ノ部將榛澤  
 成清義盛ニ和解ヲ説ク義盛之ヲ許シ將ニ兵ヲ  
 罷メテ歸ラントス是ヨリサキ義盛ノ弟義茂和

成ルヲ知ラズ直チニ重忠ノ軍ヲ衝ク義盛命シ  
 チ之ヲ招カシム義茂晩ラズ奮戰愈力ム義盛已  
 ムヲ得ズ兵ヲ帥キ馳セテ之ヲ援ク重忠ノ部將  
 本田親恒榛澤成清又前議ヲ申ブ義盛乃チ兵ヲ  
 罷メテ還リ衣笠城ニ入ル一日チ間テテ重忠江  
 戸葛西ノ族ト來リ攻ム三浦黨拒ギ戰ツテ利ア  
 ラズ夜ニ乘シテ安房ニ走ル海上ニ頼朝ニ遇ヒ  
 相見テ歡ブコト甚ダシ義盛頼朝ニ謂ツテ曰ク  
 鄙語ニ云フ食チ願フ者ハ器ヲ先ニスト往歲上  
 總介藤原忠清東國侍奉行ヲ領ス諸士日夜其門  
 ニ伺候シ承色拜趨シテ威權甚ダ重シ義盛常ニ  
 之ヲ歎羨ス異日君大功ヲ成サハ願クハ此職ニ  
 補セララルコトヲ得ント頼朝笑ツテ諾ス東國  
 漸ク平ラクニ及ビ功ヲ論フ賞ヲ行フ舊約ニ違  
 ツテ義盛ヲ擢シテ侍所別當ニ補ス故チ以テ



征討ノ密議ハ預リ知ラザルコトナシ後チ源義經ニ從ツテ源義仲チ撃チ又平氏チ一谷ニ攻ム壽永三年源範頼ニ從ツテ西海ニ赴キ軍事ニ參畫ス檀浦ノ戰ニ又義經ニ隸シ部下ノ兵チ率キテ陣チ離レ獨リ進ミ親ヲ弓矢チ執ツテ遙ニ海上ノ船チ射ル一矢二百餘歩ニ及ビテ平知盛ノ船舷ニ着ク箭幹甚ダ偉ナリ知盛見テ大ニ駭ク義盛頗ル其能ニ誇リ扇チ揚ゲテ海上チ麾ク知盛仁井親清ニ命ヲテ之チ射サシム矢義盛ノ兜蓋チ汰シテ後騎チ傷ク軍中其卻イテ敵ノ爲メニ射ラルルチ笑フ義盛コレチ耻チ輕舸ニ乗シテ進ミ射ル殺傷スル所多シ文治五年頼朝ニ從ツテ藤原泰衡チ攻メテ熱借山ノ軍チ破ル泰衡ノ庶兄西木戸國衡退キ走ル義盛追ツテ之ニ及ブ國衡騎チ旋ラシ弓チ控ヘテ將ニ射シトス義

盛先ヅ注射シテ其左膊ニ中ツ國衡創チ被ツテ走ル畠山重忠ノ部下其首チ獲テ之チ獻ズ頼朝甚ダ悦ブ義盛進メテ曰ク臣實ニ射テ之チ殺スト重忠服セズ頼朝命シテ國衡ノ鎧チ取ツテ之チ檢セシム鏃孔甚大ナリ他人ノ及ブ所ニアラズト重忠敢テ争ハズ建久元年頼朝京師ニ朝シ奏シテ功臣十人チ官ス義盛左衛門尉ニ任セラシル數年ニシテ又食邑チ増加セラル結城朝光梶原景時ノ爲ニ讒セラル義盛等勳舊六十六人連名書チ作ツテ其冤枉チ辨ズ景時罪狀シ大江廣元ニ就イテ頼家ニ啓サンコトチ請フ廣元意和解セント欲シ退メテ通ゼズ義盛其遲滞チ詰ル廣元實チ以テ對ラ義盛讓メテ曰ク卿關東ノ耳目ト爲リ景時チ畏レテ衆怒チ抑ス豈ニ理ナラシヤト聲色俱ニ厲シ廣元許諾シテ遂ニ書チ上

ル景時之ニ由ツテ罪チ獲ル初メ景時侍所別當ニ補セラレント欲ス義盛職ニ居ルチ以テ未ダ便チ得ズ時ニ其喪ニ遭ツテ數日出デザルコトアリ暫ラク其職チ假ラント請フ之チ言フ甚ダ切ナリ頼朝其意ニ違ヒ難ク遂ニ之チ許シ義盛ノ出ヅルチ待ツテ之チ解ク景時巧詐百端職チ解クチ肯ンゼズ是ニ至ツテ職ニ復ス後チ上總國司ニ任セラレントチ請フ實朝政子ニ稟ス政子曰ク故將軍ニ制アリ諸士ニシテ牧守ニ任ズルチ得ズ今之ニ任ズル我ノ知ル所ニアラズト實朝猶豫シテ決セズ義盛再ビ裁書シ大江廣元ニ就イテ之チ請フ詞甚ダ激切實朝報シテ曰ク我ニ思フ所アリ姑ク之チ俟テト義盛喜ンデ曰ク必ズ望ム所チ得ント而シテ三年得ズ義盛子義直チシテ廣元ニ謂ハシメテ曰ク請フ所獲

ザレハ願シハ前書チ還セト廣元以テ告ク實朝其輕慢チ怒ル然レドモ其宿老タルチ以テ之チ優容ス實朝嘗テ戎事ニ老練ナル者チ擇ンテ以テ顧問ニ備ヘント欲シ特ニ義盛及ビ伊賀朝光ニ命シテ同シシ番セシム建保元年泉親衡北條氏チ滅ボサント謀ル義盛ノ子義直義重姪胤長之ニ黨ス事覺ハレテ收ヘラル義盛時ニ上總ニ在リ變チ聞キ馳セ歸ツテ直ニ幕府ニ上謁シ自ラ己ノ家ノ功勞チ叙シテ二子ノ罪チ贖フ實朝之チ釋ス義盛大ニ悦ンデ出ヅ明日又宗族九十八人チ率キ幕府ニ詣ツテ南庭ニ列シ廣元ニ就イテ切ニ胤長チ赦サンコトチ請フ實朝其首謀タルチ以テ聽カズ北條義時金窪行親等ニ命シテ胤長チ縛シテ法吏ニ屬セシム三浦ノ族コトゴトク之チ觀ル義盛深ク之チ愧ヂ門チ杜チテ



出テズ胤長遂ニ陸奥ニ請セラル其第在柄ニ在  
 リ幕府ニ近クシテ出入ニ便ナリ近臣多ク之ヲ  
 得ント欲ス故事第宅ヲ没入スレバ皆其同族ニ  
 賜フ故ニ義盛五條局ニ就イテ之ヲ請フ實朝聽  
 ス義盛大ニ喜ビ人ヲ遣ハシテ其家ヲ守ラシム  
 未ダ幾ハクナラズ北條義時ニ賜フ義時割イテ  
 行親忠家ニ與ヘ守者ヲ逐フ義盛聞イテ怒ル是  
 ニ由ツテ忿怒日ニ深ク潜ニ北條氏ヲ滅サン事  
 ナ圖リ親戚朋友ヲ聚メテ日夜會議ス歲餘ニシ  
 テ土屋義清横山時兼古郡保忠等ト相結ビ時ヲ  
 待ツテ發セント欲ス會義盛崇信スル所ノ僧ヲ  
 逐フ人皆之ヲ異トス時ニ流言嗷嗷トシテ内外  
 疑懼ス實朝橋公氏ヲ其第ニ遣ハシテ之ヲ廉察  
 セシム義盛出デテ之ニ接ス誤ツテ烏帽ヲ落ス  
 ソノ狀首ヲ限スニ似タリ公氏凶兆ト爲ス義盛

公氏ニ謂ツテ曰ク吾家ハ故將軍ノ元從ヲ以テ  
 恩遇優渥言聽カレザル無ク請フテ許サレザル  
 無シ故將軍世ヲ棄テテ未ダ二十年ナラズ言フ  
 所從ハレズ請フ所許サレズ復々世ニ立ツニ面  
 目ナシ是ヲ以テ出デズ豈ニ反テ謀ラシヤト時  
 ニ保忠義秀等内ニ在ツテ器仗ヲ檢閱ス公氏粗  
 粗コレヲ察シ還ツテ狀ヲ告ク是ニ於テ幕府令  
 ナ下シテ將士ヲ召集シ再ビ藤原忠季ヲ遣ハシ  
 義盛ヲ諭シテ兵ヲ罷メシム義盛報シテ曰ク臣  
 幕府ニ怨アルニアラズ義時故舊ヲ蔑視スル傍  
 若無人子弟輩之ヲ悲リ往イテ狀ヲ問ハント欲  
 ス臣數之ヲ論ス聽カズ衆議既ニ決ス臣ガ力ノ  
 能ク制スル所ニ非ズト後チ數日遂ニ兵ヲ舉グ  
 義時之ヲ聞イテ幕府ニ入り幕府ノ南門ヲ攻メ  
 分ツテ義時廣元ノ家ヲ攻ム既ニシテ幕府ノ四

面ヲ圍ム義秀門ヲ排シテ入ル其鋒甚ダ鋭ナリ  
 衆支フル能ハズ俄ニ府中火起リ炎焰天ニ漲ル  
 義時實朝ヲ奉シテ出デテ之ヲ避ケ子泰時ヲシ  
 テ之ヲ拒ガシム義盛ノ兵殊死シテ戰フ昏ヨリ  
 曉ニ至ツテ勝敗決セズ泰時衆ヲ勵マシテ力戰  
 ス義盛兵疲レ矢盡キテ軍ヲ前濱ニ退シ府兵勝  
 ニ乘ジテ追撃シ其糧道ヲ絶ツ義盛飢困ス會橫  
 山時兼兵ヲ率キテ來リ援フ義盛ノ兵又震ヒ擊  
 ツテ府兵ヲ走ラシ復々幕府ヲ攻メント欲ス泰  
 時時房等分ツテ諸路ヲ扼ス義盛進ムコト能ハ  
 ズ會義直戰死ス義盛慟シテ曰ク吾事已マン戰  
 勝ツモ亦ヲ笑フ爲サント。神思昏迷シ、江戸能  
 範ノ從兵ノ爲メニ殺サル。時ニ年六十七。軍  
 遂ニ潰散シ闔族死亡ス。唯ダ義村兄弟ノミ幕  
 府ニ歸スルヲ以テ免ルルコトヲ得タリ。

仁王

百濟ノ人。其祖ヲ狗ト曰ヒ、狗ノ先チ獵ト曰  
 フ。漢高祖ヨリ出ツ。狗始メテ百濟ニ至ル因ツ  
 テ焉ニ家ス王仁博ク經籍ニ通ズ應神帝十五年  
 百濟使阿直岐來ツテ良馬ヲ貢ス帝即チ之ニ命  
 シテ養ハシム阿直岐能ク經傳ニ通ズ皇太子之  
 チ師トス帝嘗テ阿直岐ニ問フテ曰ク汝ノ國ノ  
 博士ニ汝ヨリ賢ナル者アル乎對ヘテ曰ク王仁  
 ト云フ者アリ是レ國ノ秀ナリト帝即チ荒田別  
 巫別ヲ遣ハシテ之ヲ徵サシム王仁遂ニ從ツテ  
 來リ論語十卷千字文一卷ヲ獻ズ是ニ於テ皇太  
 子從ツテ學ブ王仁能ク和語ニ通ズ仁德帝位ニ  
 即クニ及ビ和歌ヲ作ツテ之ヲ賀シテ曰ク「な  
 にはづに咲くやこのはなふゆこもり今をはる  
 べと咲くやこのはな」ト世陸奥采女ノ安積山